

秋田県文化財調査報告書第101集

平 鹿 遺 跡

発掘調査報告書

1983・3

秋田県教育委員会

秋田県文化財調査報告書
第101集

卷頭図版 秋田県平鹿郡増田町平鹿溝路付近地形図 (国土地理院五万分の1「標準」使用)



(

(

(

(

ひらか
平鹿遺跡

発掘調査報告書

……秋田県増田町に於ける遺跡の調査——

秋田県教育委員会

序

平鹿遺跡は、平鹿郡増田町にあり、この地域のカドミウムによる土壤汚染対策事業に伴って、昭和57年度に 7,650m²の発掘調査を実施しました。

その結果、縄文時代晩期の墓跡や、弥生土器、平安時代の住居跡、中世陶器などが発見されました。殊に縄文時代晩期後半期の土壙墓・土器棺墓、それに伴う祭祀遺構や多くの出土遺物は、縄文時代の墓制とその背景にある社会構造を解明する上で極めて貴重な資料であると考えられます。

ここに本書を刊行するにあたり、秋田県農政部農地開発課、平鹿農林事務所土地改良課、増田町教育委員会、同産業建設課の御協力に対し厚く感謝の意を表するとともに、本書が学術上は勿論のこと、埋蔵文化財に対する御理解の一助として役立つことを願ってやみません。

昭和58年3月

秋田県教育委員会

教育長 畠山芳郎

平鹿遺跡発掘調査報告書

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 発掘調査に至るまで	1
第2節 調査の組織と構成	1
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 自然的環境	4
第2節 歴史的環境	13
第3章 調査の方法と経過	16
第1節 グリッドの設定	16
第2節 調査経過	16
第4章 発見された遺構と遺物	18
第1節 遺跡の土層	18
第2節 検出遺構と遺物	24
第5章 まとめ	220
第1節 検出された遺構・遺物の検討	220
第2節 結語	239
別編 I 秋田県はりま館、大岱Ⅱ、案内V、払田柵および平鹿の 各古代遺跡中の火山灰の鉱物化学的分析	243

図 版 目 次

第1図版 遺跡	垂直方向から見た平廐遺跡	3. SK050土壤	
第2図版 遺跡	1. 南東方向から見た平廐遺跡 2. 西方裏入山頂より見た平廐遺跡	第13図版 遺跡	1. SK051土壤 2. SK053土壤 3. SK057土壤
第3図版 遺跡	1. SK030~037・073・075 土壤 2. SK039~037・073・075 七塚	第14図版 遺跡	1. SK058・059土壤 2. SK062土壤 3. SK063土壤
第4図版 遺跡	1. SR001土器棺 2. SR019土器棺	第15図版 遺跡	1. SK071土壤 2. SK076土壤 3. SK076土壤
第5図版 遺跡	1. SN025石圓炉 2. SQ001配石	第16図版 遺跡	1. SK079土壤 2. SK080土壤 3. SK081七塚
第6図版 遺跡	1. SN024石圓炉 SQ006配石 2. SQ014配石	第17図版 遺跡	1. SK084・085土壤 2. SK084・085土壤 3. SK086土壤
第7図版 遺跡	1. SX006大洞A式土器 括出土状態 2. 第IV層の遺物出土状態	第18図版 遺跡	1. SK087土壤 2. SK087土壤 3. SK083~088~090土壤
第8図版 遺跡	1. 石製小玉出土状態 2. 装身具類	第19図版 遺跡	1. SK092土壤 2. SK097・100・101土壤 3. SK098土壤
第9図版 遺跡	1. 土壙群 2. 配石を伴う土壙群	第20図版 遺跡	1. SK102・115土壤 2. SK105土壤 3. SK110土壤
第10図版 遺跡	1. SK013・019土壤 2. SK024土壤 3. SK026土壤	第21図版 遺跡	1. SK112土壤 2. SK116土壤 3. SK116土壤
第11図版 遺跡	1. SK027・028土壤 2. SK027土壤 3. SK029土壤	第22図版 遺跡	1. SK117土壤 2. SK122土壤 3. SK126土壤
第12図版 遺跡	1. SK030土壤 2. SK038~041土壤		

第23回版	遺跡	1. S K127~129土壤 2. S K130土壤 3. S K131・134・135土壤	2. S N005石圓炉 3. S N007石圓炉
第24回版	遺跡	1. S K132土壤 2. S K133土壤 3. S K136土壤	1. S N007石圓炉 2. S N012石圓炉 3. S N014・016石圓炉
第25回版	遺跡	1. S K137土壤 2. S K138~141土壤 3. S K142土壤	1. S N014・016石圓炉 S Q002配石 2. S N014石圓炉 S Q002配石
第26回版	遺跡	1. S K143土壤 2. S K146土壤 3. S K147土壤	3. S N017石圓炉
第27回版	遺跡	1. S K148土壤 2. S K150~152土壤 3. S R001土器棺と土層	第37回版 遺跡 1. S N018・019石圓炉 2. S N018・019石圓炉 3. S N020石圓炉
第28回版	遺跡	1. S R004土器棺 2. S R005土器棺 3. S R009土器棺	第38回版 遺跡 1. S N021石圓炉 2. S N022石圓炉 3. S N023石圓炉
第29回版	遺跡	1. S R009土器棺 2. S R010土器棺 3. S R012土器棺	第39回版 遺跡 1. S N024石圓炉 2. S N025石圓炉 3. S N025石圓炉
第30回版	遺跡	1. S R015土器棺 2. S R016土器棺 3. S R016土器棺	第40回版 遺跡 1. S N026石圓炉 2. S N027石圓炉 3. S N028石圓炉
第31回版	遺跡	1. S R017土器棺 2. S R017土器棺 3. S R018土器棺	第41回版 遺跡 1. S N029石圓炉 2. S N030石圓炉 3. S N031・032石圓炉
第32回版	遺跡	1. S R020土器棺 2. S R021土器棺 3. S R022土器棺	第42回版 遺跡 1. S N033石圓炉 S Q003配石 2. S N033石圓炉 3. S N034石圓炉
第33回版	遺跡	1. S R028土器棺 2. S R030土器棺 3. S R031土器棺	第43回版 遺跡 1. S N037石圓炉 2. S N037石圓炉 3. R N039石圓炉
第34回版	遺跡	1. S R034土器棺	第44回版 遺跡 1. S N040石圓炉 2. S N042石圓炉

	3. S N 044石圓軸	3. S X 009捨て場
第45図版 遺跡	1. S N 047石圓軸 2. S N 048石圓軸 3. S Q 002配石	遺物出土状態
第46図版 遺跡	1. S Q 002配石 2. S Q 002配石 3. S Q 006配石	第54図版 遺跡
第47図版 遺跡	1. S Q 006配石 S N 024石圓軸 2. S Q 007配石 3. S Q 007配石	2. S X 009捨て場 遺物出土状態
第48図版 遺跡	1. S Q 007配石 2. S Q 007配石 3. S Q 007配石	3. S X 009捨て場 遺物出土状態
第49図版 遺跡	1. S Q 007配石 2. S Q 009配石 3. S Q 015配石	第55図版 滲跡
第50図版 遺跡	1. S Q 015配石 2. S Q 016配石 3. M D 59IV層上面の配石	1. 第IV層上面の状態 2. 第IV層上面の状態 3. 土器出土状態
第51図版 遺跡	1. M B 59地山面の配石 2. S X 001大洞C ₂ 式土器 一括出土状態 3. S X 002大洞C ₂ 式土器 一括出土状態	第56図版 遺跡
第52図版 遺跡	1. S X 005大洞C ₂ 式土器 一括出土状態 2. S X 005大洞C ₂ 式土器 一括出土状態 3. S X 006大洞A式土器 一括出土状態	1. 土器出土状態 2. 土器出土状態 3. 土器出土状態
第53図版 遺跡	1. S X 006大洞A式土器 一括出土状態 2. S X 008包含層	第57図版 遺跡
		1. 土器出土状態 2. 土器出土状態 3. 土器出土状態
		第58図版 遺跡
		1. 土器出土状態 2. 土器出土状態 3. 土器出土状態
		第59図版 遺跡
		1. 土器出土状態 2. 土器出土状態 3. 石器出土状態
		第60図版 遺跡
		1. 石器出土状態 2. 石器出土状態 3. 石器出土状態
		第61図版 遺跡
		1. 石器出土状態 2. 石器出土状態 3. 石器出土状態
		第62図版 遺跡
		1. 石器出土状態 2. 石器出土状態 3. S I 001竪穴住居跡
		第63図版 遺跡
		1. S I 002竪穴住居跡 2. S I 002竪穴住居跡

	3. S I 003 竪穴住居跡	2. S K(I) 001~003 竪穴状遺構	
第64図版 遺跡	1. S I 003 竪穴住居跡	遺構	
	2. S I 003 竪穴住居跡	2. S N 001 焼土遺構	
	3. S I 003 竪穴住居跡	3. S N 002 焼土遺構	
第65図版 遺跡	1. S I 003 竪穴住居跡	第67図版 遺跡	1. 調査風景
	2. S K(I) 001 竪穴状遺構		2. 調査風景
	3. S K(I) 002 竪穴状遺構		3. 調査風景
	3. S K(I) 003 竪穴状遺構	第68~94図版	
第66図版 遺跡	1. S I 003 竪穴住居跡	遺物	

図 目 次

巻頭図版 秋田県平鹿郡増田町平鹿遺跡付近地 形図		第17図 S K013・019・020 土壌実測図 27
第1図 遺跡の位置 4		第18図 S K013・020 出土遺物 28
第2図 土地利用現状図 5		第19図 S K024 土壌実測図 29
第3図 地形区分図 6		第20図 S K026~028 土壌・S N048 石闕炉実 測図 30
第4図 地形分類図 7		第21図 S K027・028 出土遺物 31
第5図 表層地質図 8		第22図 S K029~032・074 土壌実測図 32
第6図 地質柱状断面図 9		第23図 S K033・034・036・037 土壌実測図 33
第7図 傾斜区分図 9		第24図 S K035・015 土壌実測図 34
第8図 谷・水系密度図 10		第25図 S K035 出土遺物 34
第9図 大曲・横手・湯沢3市のクライモグラ フ 12		第26図 S K038~040 土壌実測図 35~36
第10図 グリッド設定図 16		第27図 S K040 出土遺物 37
第11図 土層断面図 (1) 19~20		第28図 S K041~S K046 土壌実測図 38
第12図 土層断面図 (2) 21~22		第29図 S K041 出土遺物 39
第13図 遺構と土層の関係模式図 23		第30図 S K047~048・050・051・053・055 土 壌実測図 40
第14図 S K001~003・005・010~012 土壌実 測図 25		第31図 S K051 出土遺物 41
第15図 S K004 土壌・S D003溝・S N001~ 004 焼土遺構実測図 26		第32図 S K057~059・061~063・065・067~ 068 土壌実測図 43
第16図 S K011 出土遺物 27		第33図 S K069~073・076・078 土壌実測図 44
		第34図 S K071~073・076 出土遺物 45

第35図	S K079~081・083~085・088土壤実 測圖	47	第66図	S R031~034土器棺実測圖	84
第36図	S K083・085・088出土遺物	48	第67図	S R001・004~007土器棺	85
第37図	S K086・087・090~092土壤実測圖	50	第68図	S R009・010・015・018土器棺	86
第38図	S K087出土遺物	51	第69図	S R019・021・022・024・028・029土 器棺	87
第39図	S K091出土遺物	53	第70図	S R030~032・034土器棺	88
第40図	S K093~099土壤実測圖	53	第71図	S N005出土遺物	89
第41図	S K110出土遺物	55	第72図	S N005・007・008・012・018石窯炉・ 燒土遺構実測圖	90
第42図	S K100~102・104・105・115土壤実 測圖	56	第73図	S N014・016・017石窯炉実測圖	91
第43図	S K106~112土壤実測圖	57	第74図	S N014・016出土遺物	92
第44図	S K113・114・116~119土壤実測圖	59	第75図	S N018~022石窯炉実測圖	93
第45図	S K116出土遺物	60	第76図	S N023石窯炉実測圖	94
第46図	S K117・119出土遺物	61	第77図	S N024石窯炉・S Q006配石遺構実測 圖	94
第47図	S K120~125土壤実測圖	62	第78図	S N024出土遺物	95
第48図	S K122・125出土遺物	63	第79図	S N025石窯炉実測圖	95
第49図	S K126~131土壤実測圖	64	第80図	S N025出土遺物	96
第50図	S K130・131出土遺物	65	第81図	S N030出土遺物	97
第51図	S K132~138土壤実測圖	66	第82図	S N026~030石窯炉実測圖	98
第52図	S K133出土遺物	67	第83図	S N031・033・034・036石窯炉・燒土 遺構実測圖	99
第53図	S K139・141出土遺物	67	第84図	S N034埋設土器	100
第54図	S K139~145土壤・S X005土器一括 廐棄遺構実測圖	68	第85図	S N037~039石窯炉・燒土遺構実測圖	101
第55図	S K146~148土壤実測圖	70	第86図	S N040~044・046石窯炉・燒土遺構 実測圖	102
第56図	S K149出土遺物	70	第87図	S N047石窯炉実測圖	103
第57図	S K150~152土壤実測圖	71	第88図	S Q001配石遺構実測圖	104
第58図	S K150~152出土遺物	72	第89図	S Q002・003配石遺構実測圖	105
第59図	S R007棺身内埋納土器	73	第90図	S Q007配石遺構実測圖	107
第60図	S R001・002・004~006土器棺実測圖	78	第91図	S Q008~010・016配石遺構実測圖	108
第61図	S R007~010土器棺実測圖	79	第92図	S Q014配石遺構実測圖	109
第62図	S R012・015~017土器棺実測圖	80	第93図	S Q014出土遺物	110
第63図	S R018~022土器棺実測圖	81	第94図	S Q015配石遺構実測圖	111~112
第64図	S R023~026土器棺実測圖	82			
第65図	S R027~030土器棺実測圖	83			

第 95 図	S Q015出土遺物 (1)	113	第 183 図	S I 003竪穴住居跡カマド実測図	208
第 96 図	S Q015出土遺物 (2)	114	第 184 図	S I 003出土遺物 (1)	209
第 97 図	S X001実測図	115	第 185 図	S I 003出土遺物 (2)	210
第 98 図	S X001出土遺物 (1)	116	第 186 図	S K (I)001竪穴状遺構実測図	211
第 99 図	S X001出土遺物 (2)	117	第 187 図	S K (I)001出土遺物 (1)	212
第 100 図	S X002・006土器一括廻棄遺構実測 図	118	第 188 図	S K (I)001出土遺物 (2)	213
第 101 図	S X005出土遺物 (1)	119	第 189 図	S K (I)竪穴状遺構・S K149土壤 実測図	214
第 102 図	S X005出土遺物 (2)	120	第 190 図	S K (I)003実測図	215
第 103 図	S X005出土遺物 (3)	121	第 191 図	S K (I)003出土遺物	215
第 104 図	S X006出土遺物 (1)	122	第 192 図	S N009・032・035焼土遺構実測図	216
第 105 図	S X006出土遺物 (2)	123	第 193 図	S N032出土遺物	217
第 106 図	S X009出土遺物 (1)	124	第 194 図	遺構外出土遺物 (平安)	218
			第 195 図	遺構外出土遺物 (中世)	219
第 114 図	S X009出土遺物 (9)	132	第 196 図	時代別遺物の分布状態 (1)	222
第 115 図	遺構外出土遺物 (縄文 1)	136	第 197 図	時代別遺物の分布状態 (2)	223
			第 198 図	土壤 (特円形) における長軸と短軸 との相関グラフ	227
第 172 図	遺構外出土遺物 (縄文 58)	196	第 199 図	土壤 (円形) における長軸と短軸と の相関グラフ	227
第 173 図	S K077土壤実測図	197	第 200 図	土壤長軸方位	228
第 174 図	S K077出土遺物 (1)	198	第 201 図	土器棺における口径と器高との相関 グラフ	230
第 175 図	S K077出土遺物 (2)	199	第 202 図	5 遺跡における石圓炉の規模	232
第 176 図	遺構外出土遺物 (弥生 1)	200	第 203 図	石棒・石刀・独鉛石の分布状態	236
第 177 図	遺構外出土遺物 (弥生 2)	201	第 204 図	石錐状石冠・装飾品の分布状態	237
第 178 図	S I 001竪穴住居跡実測図	203	第 205 図	土偶・土版・岩版の分布状態	238
第 179 図	S I 001出土遺物	203	付図 1	遺構配置図	
第 180 図	S I 002竪穴住居跡実測図	205	付図 2	遺構配置図	
第 181 図	S I 002出土遺物	206			
第 182 図	S I 003竪穴住居跡実測図	207			

表 目 次

第1表 SX001出土土器計測値	118	第9表 遺構外出土土器計測値	219
第2表 SX005出土土器計測値	121	第10表 遺構外出土土器計測値	219
第3表 SX006出土土器計測値	121	第11表 土壙の型式分類	224
第4表 SX009出土土器計測値	133	第12表 配石の型式分類	225
第5表 SX009出土装飾品類グリッド別出土 数一覧表	133	第13表 土壙と配石の関連	226
第6表 遺構外出土土器計測値	160	第14表 上器棺の型式分類とその頻度率	230
第7表 SI003出土土器計測値	210	第15表 石圍炉・焼土遺構の型式分類とその頻 度率	232
第8表 SK(I)001出土土器計測値	213		

例　　言

1. 本書は秋田県教育委員会が、昭和57年4月13日から同年8月30日に渡って実施した、秋田県平鹿郡増田町平鹿遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の主たる執筆、編集は小玉　準が行ったが、本文中各遺構ごとの説明は調査補佐員の池田洋一、佐藤雅子から提出された原稿を小玉が検討し、加筆、補訂した。
3. 遺物の実測・採拓・トレイスは調査補佐員、整理作業員があたった。
4. 遺構は調査時の発見順に一連番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものがあり欠番がある。各遺構ごとの総数は第5章に記してある。
5. 土層図中のレベル数値は標高である。
6. 土色の表記は農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』によった。
7. 勾玉・小玉などの石製装飾品類の石質鑑定は秋田県立博物館学芸主事、嵯峨二郎氏にお願いした。
8. サメ歯垂飾品の魚種鑑定は秋田県立男鹿水族館長、竹内　健氏にお願いした。
9. 骨片の鑑定は国立科学博物館人類研究部長、山口　敏氏にお願いし、同館地学研究部古生物第三研究室、小野慶一氏に依った。
10. 別編Ⅰの平安時代遺構中火山灰の鉱物化学的分析は、東北大学農学部、庄子貞雄教授、山田一郎助手にお願いした。
11. 遺構に使用した略記号は下記のとおりである。

S I ……豎穴住居跡 S K(I)……豎穴状遺構 SK……土壤 SR……土器棺
SN……石圍炉・焼土遺構 SQ……配石 SD……溝 SX……その他の遺構

平鹿遺跡発掘調査報告書

本文

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

秋田県は古くから全国有数の鉱山県である。現在稼行鉱山、休廃止鉱山は240余りの多くを数えるが、そのため鉱山廃水中に含まれるカドミウムによる農用地、産米の汚染もまた少なくない。

昭和46年には鹿角郡小坂町、仙北郡西仙北町で、また48年には米代川沿岸で高濃度の汚染米が検出され、県内各地にカドミウムによる汚染が浸透していることをうかがわせたのである。

平鹿郡内の増田町、十文字町、平鹿町も例外ではなく、玄米中のカドミウム濃度が $1 \mu\text{m}$ 以上の汚染米、 $0.4 \mu\text{m}$ 以上の準汚染米が検出され問題化したのは49年のことである。

この地方には東成瀬村田子内鉱山、鶴川町大倉鉱山や県南部最大の銅鉱山である吉乃鉱山が分布して、県南地方鉱山地帯の中心となっており、この際の原因者は吉乃鉱山と目される一方、その北北西 1.5 km の倉狩沢上流に位置し、岡山の支山である増田鉱床北部の黒鉱である可能性も少ないとされている。

県農政部ではこうした事態に対し、県内水田のカドミウム汚染面積 $1,315\text{ha}$ のうち 63% の 898ha を土壤汚染対策地に指定し、公害防除特別土地改良事業を実施、耕土、客土、反転工法などにより、これら汚染された農用地の復元にあたるとともに水路転換のための用水施設の設置、水路舗装による土壤の酸化抑制などをを行い、そのうち 491ha ではすでに工事を完了させている。その結果、57年度産米のカドミウム汚染ロット調査（汚染地での無作為抜きとり調査）における濃度 $0.4 \mu\text{m}$ 以上のカドミウムの検出は49年度以降の最少値を記録している。

増田町増田字平鹿に所在する平鹿遺跡は周知の遺跡であり、この付近一帯の公害防除特別土地改良事業により遺跡の破壊が予想されたため、県農政部と文化課が協議の上発掘調査を実施することとしたのである。なお、53年度に調査された梨の木塚遺跡も同じ原因に基づくものであった。

第2節 調査の組織と構成

遺跡名稱：平鹿遺跡（秋田県遺跡地図登録番号730－全国遺跡地図秋田県32-46）

遺跡所在地：秋田県平鹿郡増田町増田字平鹿58番地他

第1章 はじめに

遺跡状況：水田・畑・樹園地等20,000m²

土地所有者：高橋文太郎他

遺跡時代：绳文時代晚期・弥生時代・平安時代・中世

調査原因：公害防除特別土地改良事業

調査期間：昭和57年4月13日～8月30日

調査対象面積：8,000m²

調査面積：7,650m²

調査主体者：秋田県教育委員会

調査担当者：小玉 準 秋田県埋蔵文化財センター文化財主事

調査補佐員：池田 洋一・高橋 條・小林 弘・村田 嘉一・佐藤 雅子

調査参加者：阿部 雄亮・石川 栄治・石川 隆・石沢 政雄・石田 忠雄

奥山菊之助・奥山 政美・小国 淳治・加藤 功・龟沢 覚

川村竹治郎・園安久太郎・佐々木吉之助・佐々木儀三郎・佐々木成夫

佐々木浩美・笠山 洋希・佐藤 晴治・佐藤 富松・佐藤 誠

佐藤 政一・佐藤弥一郎・柴田 大・高垣 升松・高橋 市治

高橋 一正・高橋朋二郎・高橋 弥一・楢田 宗男・内藤伊一郎

内藤 永治・内藤喜一郎・内藤貞二郎・楢田 和夫・本田 嘉之

松浦 利満・山田 一・山谷 良助・赤津 美弥・浅野 齐子

阿部 勝子・阿部サタ子・石井貴美子・石川テル子・石川 宏子

石川 マサ・石川美紀子・石田由美子・和泉 登美・遠藤 俊子

遠藤ハルエ・大山 ユキ・鐵田八重子・小原モリ子・片倉 幸子

川村 ヨシ・小暮起世了・後藤 昭子・佐々木きみ子・佐々木吉や子

佐々木静子・佐々木千代子・佐々木ソヤ・佐々木ティ子・佐々木宮子

佐々木よう子・並原 弘子・佐藤 カヨ・佐藤 サツ・佐藤ハツ子

佐藤 齊子・佐藤 礼子・諏岐真輝子・皆原ケイ子・高橋 アイ

高橋 爰子・高橋恵美子・高橋 和子・高橋クニ子・高橋 静子

高橋登美子・高橋チエ子・高橋 儀子・高橋 政子・高橋 札子

高橋ユリ子・田中 琴子・寺立 敏子・千田タカ子・千葉 玲子

内藤キワ子・長坂 妙子・福田 ノブ・松川さち子・見田 康子

矢野 幸子・山本 陽子

整理作業員：越後谷晴美・大西 美子・大野 甲子・岡本ヒロ子・岡本 龍子

加藤 正子・草彅 弘子・熊谷 恵子・熊谷 安・小松 郁子

第2章 遺跡の立地と環境

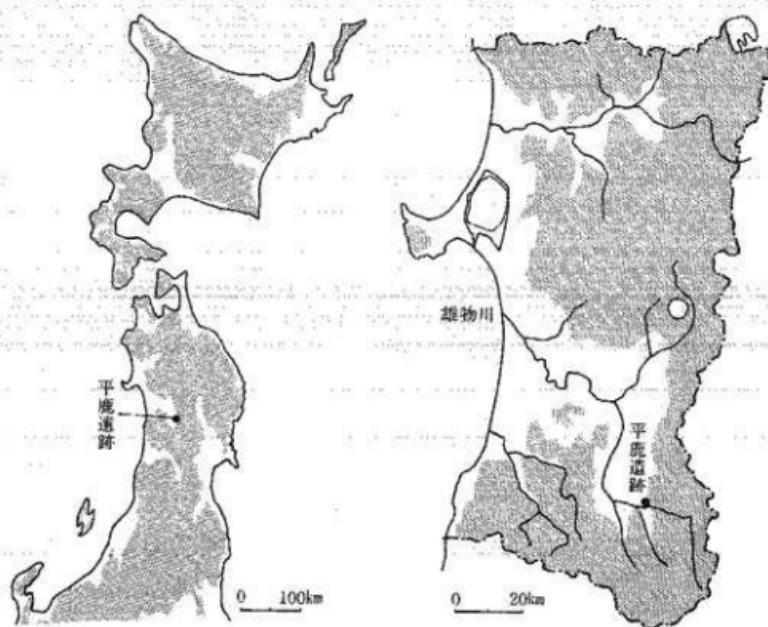
第1節 自然的環境

1. 地理的位置

増田町は秋田県南部の内陸部に位置する。北を平鹿町・十文字町・山内村、東を東成瀬村、南を福川町・皆瀬村、西を湯沢市と接し、面積73.8km²、人口1万1千余の町である。

平鹿遺跡は増田町増田字平鹿地内に所在する。おおよそ北緯39°12'、東経140°34'の位置にあり、国鉄奥羽本線十文字駅から直線距離にして南東3.5kmの地点にある。

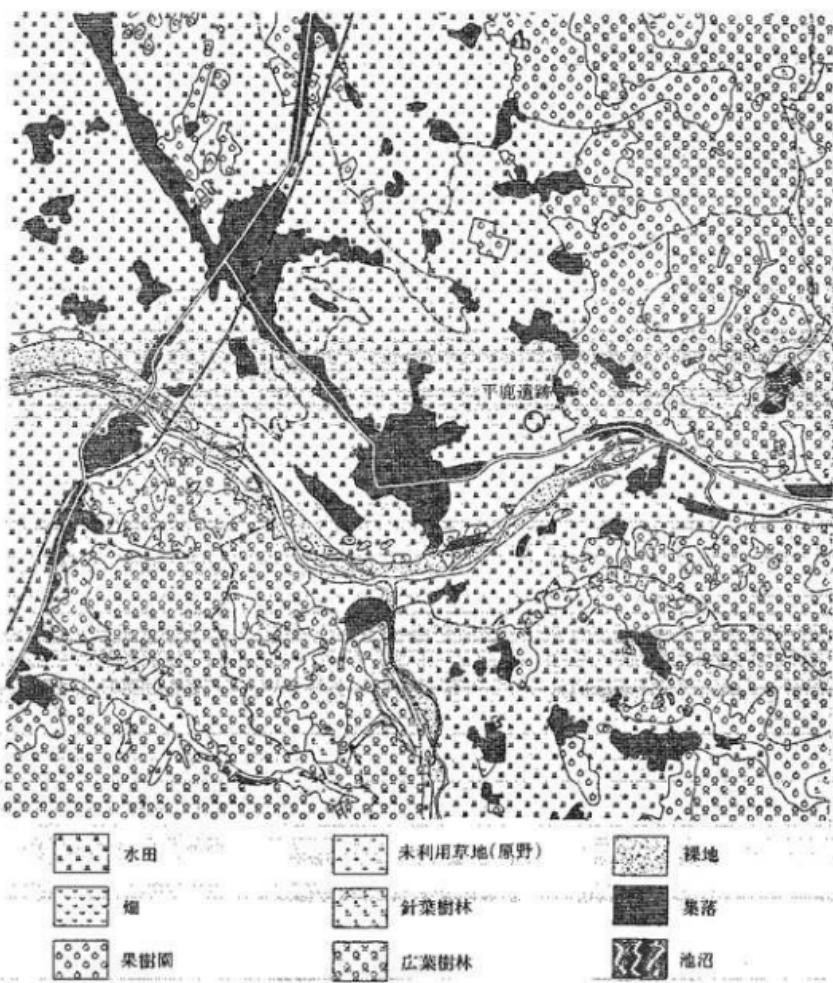
雄物川水系の一支流である成瀬川は、栗駒山(1,628m)の雄勝郡東成瀬村地内に源を発し、椿川断層谷を北流してから流路を西に変え、真人山(390.7m)南麓をかすめて平野部に入り、増田



第1図 遺跡の位置

町戸波付近で皆瀬川に合流し、さらに西進して羽後町大久保付近で雄物川の大動脈と合体する。遺跡のある一帯はこの成瀬川が山間地から平野部に抜け出た所に形成された扇状地であり、横手盆地の東南部に属する。現河岸は東南へ400mと近い。遺跡地は標高112m前後の平坦地であるが、横手盆地は北へ進むほど標高が低下し、北5.5kmの平鹿町醍醐では81m、北14.3kmの横手市坂堀では43mとなる。

増田町の基幹産業は農業であるが、稻作の他に果樹栽培も盛んである。遺跡東方の真人山麓



第2図 土地利用現状図

や北方の金峰山麓一帯は明治34年以来、りんご、梨が植えられ、遺跡地も一部が樹齢地内に入り込んでいる。真人山東方には県南地方最大の銅鉱山であった吉乃鉱山があり、そこから採取したと思われる方鉛鉱製の石器が出土している。

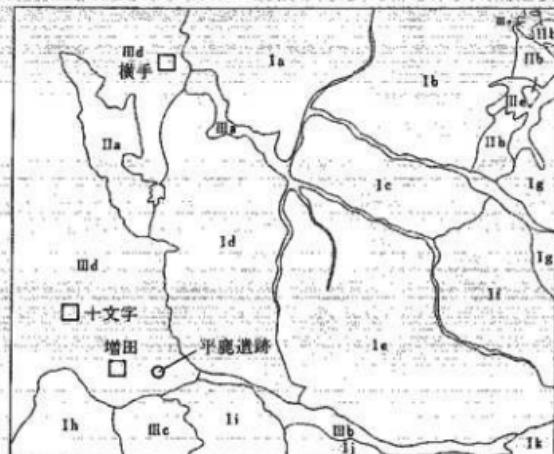
2. 地形概況

遺跡周辺の地形は大地形区分として地盤変動による隆起部の奥羽脊梁山地と沈降部の横手盆地とに二大別される。

奥羽脊梁山地には県境に三界山(1,381.1m)、蟻巣山(1,157m)、三森山(1,102.2m)などの高峰の他、向山(780m)、大鈴森(865m)、小鈴森(757m)、割倉山(770m)などの比較的高度の大きい早壯期山地が位置し、東高西低の地勢を呈しており、このため水系も西ないし北西に流れる成瀬川、皆瀬川、横手川、黒沢川などの河成段丘を伴う河谷の水を集めて雄物川となり、西の盆地床面には大小の複合扇状地を累積している。

大日向山、大鈴森は起伏量400~800mの大起伏山地、中山丘陵地は脊梁山地より西へ分派された山地性の丘陵地である。

横手盆地は南北に狭長な菱形を呈し、盆地面での海拔高度は雄物川の出口で20m、最奥部で120mを測る。



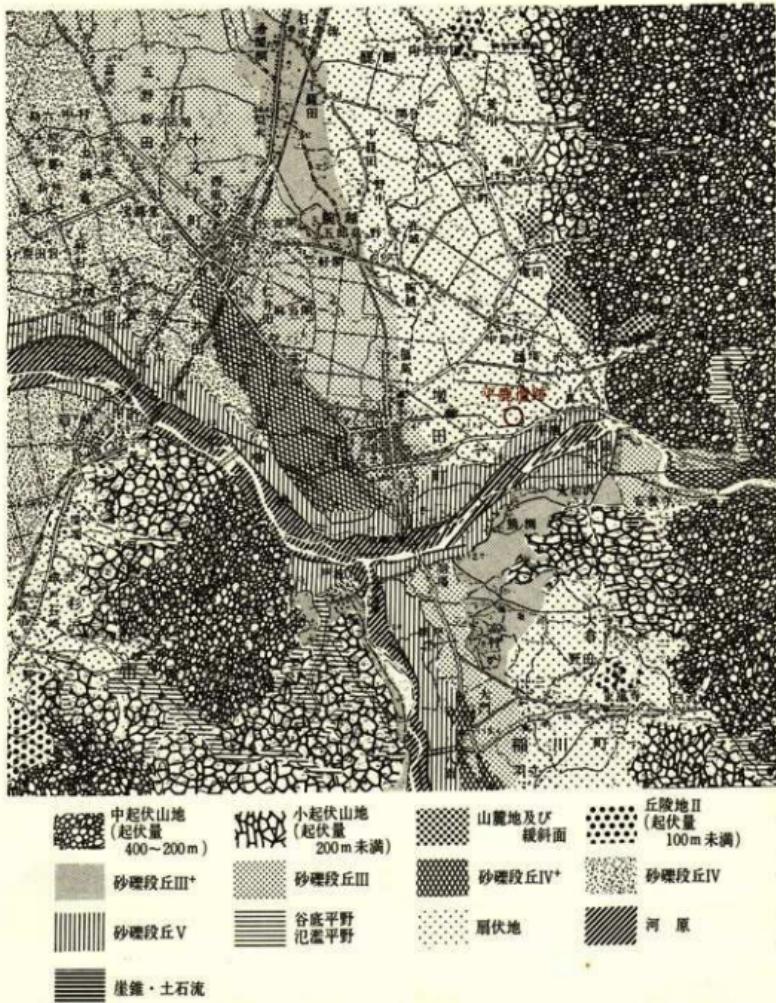
I 山 地	II 丘 地	III 台地・低地
Ia 捩岳山地		Ij 菊師岳山地
Ib 別倉山山地		Ik 三界山山地
Ic 大穴穂山地	IIa 中山丘陵地	Il 花山丘陵地
Id 金峰山山地		IIb 成瀬川低地
Ie 大日向山山地	IIc 皆瀬川低地	IIc 成瀬川低地
If 大鈴森山地		Id 横手低地
Ng 三ヶ森山地		IIe 鬼ヶ瀬川低地
Ih 天ヶ吉山地		
Ii 東福寺山地		

第3図 地形区分図

遺跡のある5万分の1
横手図幅内の地形は山地、
丘陵地、台地・低地に三
大区分され（第3図）、
増田町を中心とした地形
分類図は第4図の如くで
ある。

3. 表層地質

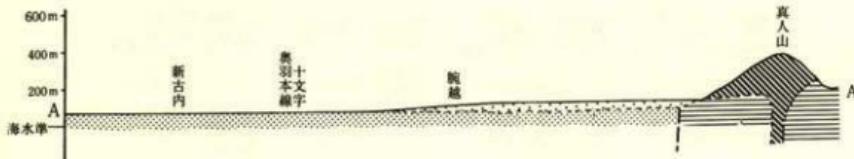
遺跡地東側には成瀬川
北側に金峰山山地、南側
に東福寺山地があるが、
これらは新第三紀中新世、
眞桑川層の石英安山岩、
火山礫凝灰岩および凝灰
角砾岩、山内層の珪質一
硬質泥岩、相野々層の泥
岩などから形成されてい



第4図 地形分類図

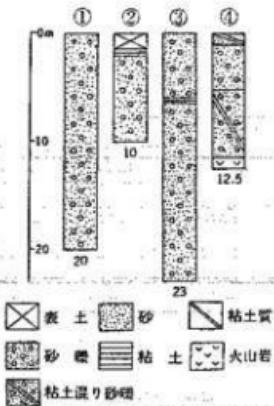
る。

遺跡は第四紀沖積世の沖積層である砂がち堆積物1の上に形成されている。砂がち堆積物1は真人～腕越～釜の川及び稻川町大倉～東福寺にかけて分布する扇状地堆積物で礫を主体とするが砂、泥を介在する。砂がち堆積物2は皆瀬川、成瀬川流域、旧河道などに発達し、さらに



各種岩屑	泥がち堆積物	砂がち堆積物 1	砂がち堆積物 2
礫・砂および泥	泥岩 (石灰質團塊を伴う)	珪質一硬質泥岩	石英安山岩質 凝灰岩
泥岩 (石灰質團塊を伴う)	火山礫凝灰岩お よび凝灰角礫岩	安山岩質 凝灰角礫岩	石英安山岩 凝灰岩
玄武岩質岩石	石英安山岩		

第5図 表層地質図



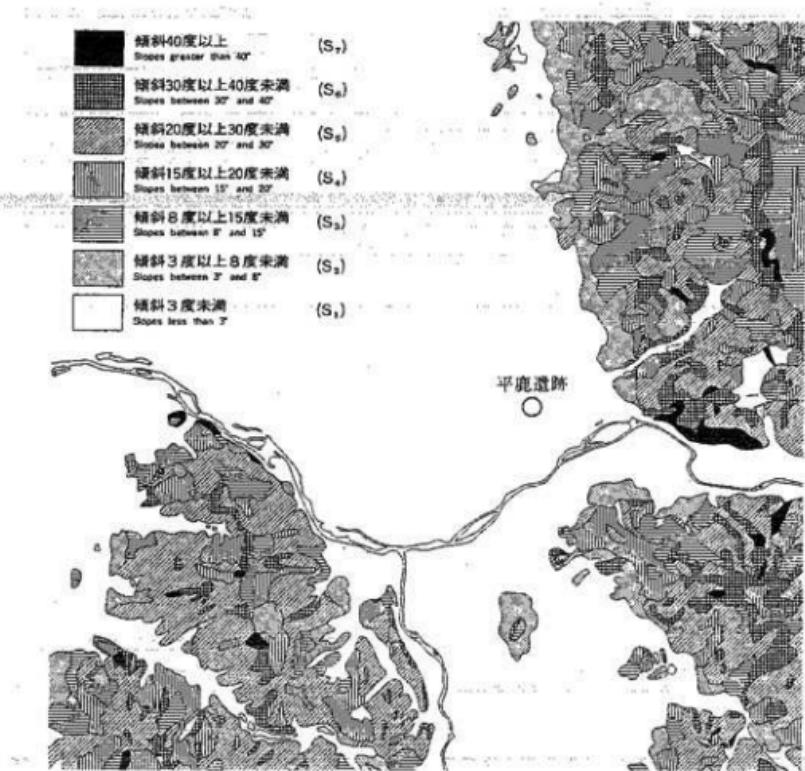
第6図 地質柱状断面図

山間部の小河川にも見られ、玉石を主体とした堆積物で泥の介在物はほとんど見られない。

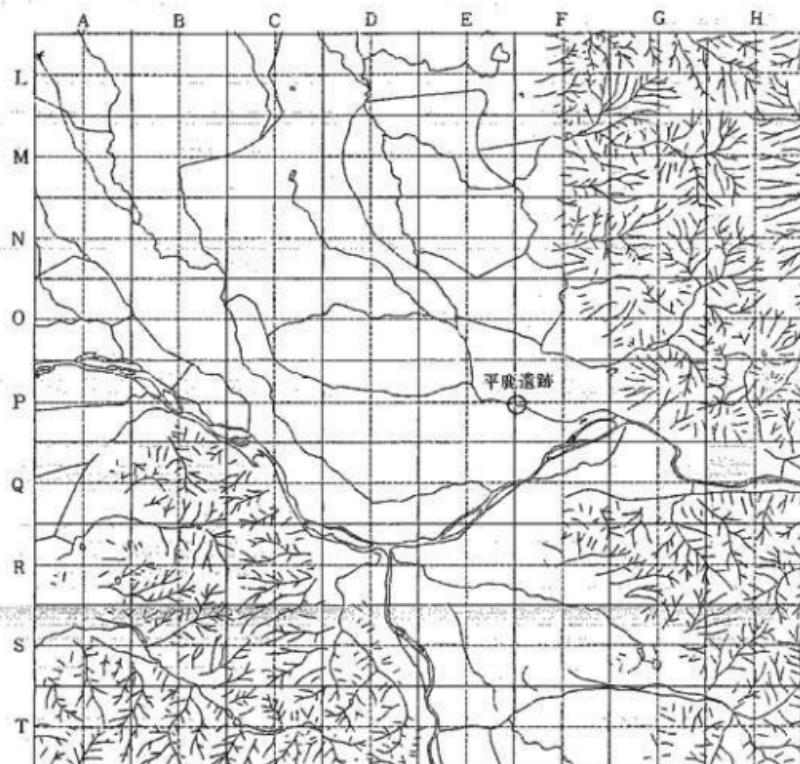
沖積低地においては、真人扇状地、成瀬川、皆瀬川を有する増田町及び十文字町は背後山地からの降水及び河川からの伏流水等が豊富で、砂がち堆積物1・2の良好な発達と相まって県内有数の地下水に恵まれた地域となっている。

4 傾斜区分

本山地の西縁に位置する御岳山山地-金峰山山地一天ヶ台山地では中間勾配の(S₃)が卓越し、(S₂)の緩斜面が規則的に分布、また前者の標高300m付近に(S₁),(S₂)ないし(S₁)の平坦地も存在する。真人山南側は(S₁)の急



第7図 傾斜区分図



第8図 谷・水系密度図

	A	B	C	D	E	F	G	H
L	12	0	14	13	12	35	47	44
M	15	4	4	9	11	32	30	32
N	15	10	2	16	6	30	30	39
O	15	10	14	6	15	21	29	44
P	19	26	14	4	7	11	33	41
Q	13	39	29	7	12	20	20	28
R	16	41	34	20	10	20	46	46
S	27	44	34	35	10	6	31	54
T	31	46	39	34	24	8	20	45

斜面が発達しているが、遺跡のある低地面は(S₁)の緩傾斜面である。

5. 谷・水系密度

地形分類と水系との関係は山地・丘陵地・台地・低地とそれぞれ異なり、山地の大傾斜地ではよく水系が発達しているが、一部洪積台地としての成瀬川緩扇状地面では上流で遠心的放散状、下流では求心的収斂

状となっている。第8図は地形図郭の縦横を20等分したもので、数値はこのメッシュの1/4方眼の各辺を切る谷の数を4単位区画毎に集計したものの総和であり、平面形現状で主要流路と地

形を開析するものを示す。

6. 土 壤

遺跡地の土壤は灰色低地土の十文字統に属し、増田町・十文字町に連続して広く分布している。堆積様式は水積で、埋設腐植層を有し、農地として汎用性が高く、現在転換樹園地として利用されているものもある。

7. 哺乳類分布

本県は八幡平、森吉山、鳥海山など緑濃い山地に恵まれており、多くの哺乳動物が生息している。以下に県内に生息する海獣を除く哺乳動物を示す。

靈長目 ホンドザル

ホンドタヌキ	ホンドキツネ	ホンドテン
ホンドイタチ	ホンドオコジョ	ニホンアナグマ
ニホンツキノワグマ		

偶蹄目 ニホンカモシカ

兔 目 トウホクノウサギ

齧歯目 ニホンリス ヤマネ

ホンドアカネズミ	ホンドヒメネズミ	ホンドハツガネズミ
ホンドクマネズミ	ニホンドブネズミ	
ホンシュウトガリネズミ	ホンシュウジネズミ	ニホンカワネズミ
ホンシュウヒミズ	アズマモグラ	
翼手目 モモジロコウモリ	ニホンヤマコウモリ	アブラコウモリ
ニホンウサギコウモリ	ニホンユビナガコウモリ	ニホンキクガシラコウモリ
ニホンコキタガシラコウモリ		

8. 植 生

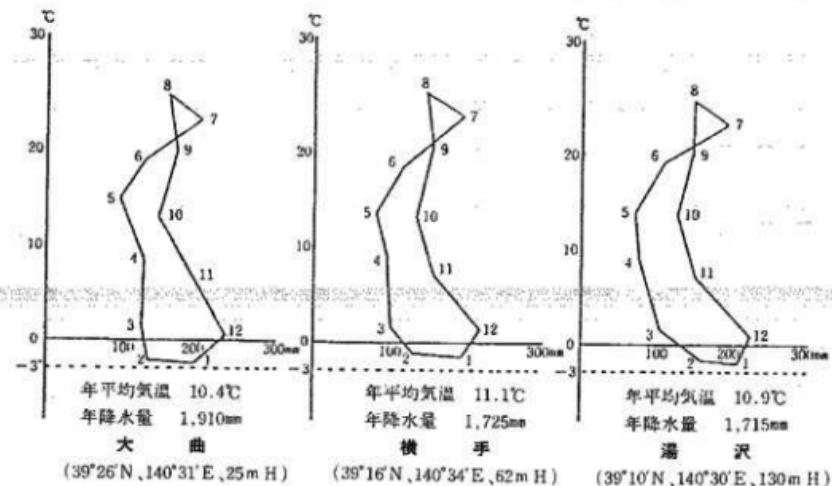
植生図を見ると、河川流域の平坦面あるいは横手盆地の平野部は水田・畑などの耕作地として利用されているのがわかる。しかし遺跡東方の山地に入ると落葉広葉樹で占められ、殊に成瀬川以北ではコナラ・クリ林であるのに対し、以南ではミズナラ林も多くなり木本草原も所々に発達している。標高 600 ~ 700 m ではこれにブナが加わり、県境に近づくにつれてブナ単純相となる。当時の植生は花粉分析や潜在自然植生の復元によらねばならないが、今回の調査で遺構内からクリ・トチ・クルミが出土していることを考え合わせると、遺跡周辺にはやはり落葉広葉樹林の繁茂が見られたのではなかろうか。

9. 気 象

秋田県の気候は温帯から冷温帯への漸移帶にあたり、このことは植物の分布、農作物の種類にも影響を及ぼしている。桑・茶の栽培の北限界が秋田県にあり、甘藷の経済的栽培の限界、二毛作可能限界も大体山形県までである。

平鹿遺跡のある横手盆地の北部・中部・南部に位置する大曲・横手・湯沢3市のクライモグラフから、3市の気候はケッペンの気候分類によるとCfa(温潤温暖気候)に属する。

この地方は県内でも豪雪地帯に属するが、雪積量は盆地北部で比較的少なく、南部程多くなる。増田町における1941年～1964年までの平均積雪量は137cmを測る。



第9図 大曲・横手・湯沢3市のクライモグラフ

参考文献

- (1) 秋田県『土地分類基本調査 横手』 昭和51年
 - (2) 秋田県『第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書(哺乳類)』 昭和54年
 - (3) 文化庁『植生図・主要動植物地図-5・秋田県』 昭和48年
 - (4) 秋田県『秋田県史』 第1巻 古代・中世編 昭和37年
 - (5) 秋田県地域開発研究会『横手盆地の雪害に関する研究』 昭和49年
- 本節中、2地形概況、3表層地質、4傾斜区分、5谷・水系密度、6土壤、及び第2図～第8図は文献(1)に基づき作成した。7哺乳類分布、8植生はそれぞれ文献(2)、(3)、9気象は文献(4)、(5)に基づく。第9図は文献(5)中、斎藤実則・小野一巳「1974年横手盆地の雪害に関する自然地理学的研究」によるものである。

第2節 歴史的環境

『秋田県遺跡地図』を見ると、山間部では成瀬川に沿う河岸段丘上、平野部では山地との境界部に遺跡が集中し、それ以外の山間部、平野部には少ないことがわかる。

増田町には旧石器時代の遺跡は発見されておらず、近い所では成瀬川上流13.5kmの東成瀬村矢櫃、横手市の横手高校裏山、羽後町新成、五把出山から、ナイフ形石器・彫刻器などが出土している。

縄文時代の遺跡としては9カ所登録されているが早期の遺跡、遺物は未確認である。前期になると成瀬川上流2kmの梨ノ木塚遺跡で大木2~5式土器が発掘調査により出土しているほかさらに上流の東成瀬村皆生田掛・滝の沢捨に大木3~6式期、あるいは狙半内川上流の標高500mの丘陵線上に、増田町、東成瀬村にまたがって大木1~2式期の遺跡が形成されている。

中期に至ると平鹿遺跡北方2.5kmの地点に大木7b式を出土する鍋ヶ沢遺跡が、また天ヶ合山から続く丘陵上的一角に戸波捨遺跡があり、この遺跡からは前期大木4式の他、大木8a、8b式土器、鮫石が出土している。さらに南の欠上り遺跡、宝龍台遺跡はほぼ同時期の大木6~8b式期にかけての遺跡で、それぞれ発掘調査が行われて久しい。前記梨ノ木塚遺跡でも大木9式期の石組複式炉を有する竪穴住居跡が2棟検出され、確実な複式炉文化圏の浸透をうかがわせている。

後期になると増田町八木の扇状地上に広範囲な遺跡が見られ、中葉頃の遺物が出土しているほか、平鹿町明沢、東成瀬村下田大捨、不動滝、福川町内田などに遺跡がある。

晩期の遺跡としては、梨ノ木塚遺跡で昭和53年度に県教育委員会による発掘調査が行われ、主として縄文晚期前葉の土壙墓、埋葬が検出されている。この他、平鹿遺跡とは1.5kmの至近距離に真当遺跡があるほか、湯野沢上捨にも大洞A式期の遺跡が見られる。成瀬川上流地域では東成瀬村平良小森、福川町でも森、中野、女男沼などに遺跡が存在する。

湯沢市松岡の鎧田遺跡は平鹿遺跡の南西12kmに所在し、昭和48年度に調査がなされている。この遺跡は標高92mの沖積地にあり、大洞A、A'式土器に伴って土偶・土版・岩版・独鉛石・石棒などの呪術性を帯びた多数の遺物、木製櫛のほか、トチ・クリ・クルミ・ドングリなどの堅果類の出土も多い。

弥生時代の遺跡は増田町内ではこれまで不明確であったが、今回の調査で中期初頭以降の土器少量であるが検出された。平鹿町では鳥越森、牛首、郷林、平沢などから、福川町でも荒神森、湯沢市では捨ノ上、木津根崎にそれぞれこの時代の遺跡があり、増田町で今後も発見される可能性はある。

奈良・平安時代の遺跡として調査されたものには平鹿町中藤根、下藤根遺跡があり、奈良時

第2章 遺跡の立地と環境

代後半の堅穴住居跡が3棟、平安時代前半の堅穴住居跡が5棟検出されている。稻川町宮の前遺跡は平鹿遺跡の南4kmの地点に存在し昭和51年と53年に発掘調査がなされている。平安時代末頃の掘立柱建物跡を中心とした土壙群が検出されている。

天平宝字3年(759年)雄郡の平鹿郡は、天平5年(733年)雄郡の雄勝郡を母体とし、その北東部に雄郡されたものである。郡衙は今に遺名を伝える平鹿郷に置かれ、助河駅が郡衙に近い八木あたりに置かれたと推定されているが、考古学的実証はなされていない。口碑・伝説によると天平宝字2年(758年)に平鹿堰が開削されたといい、正保・慶安年間に至って本格的開発が進んでいる。

中世城館は増田町にも多く、鬼城山館・城長根館・真人城・新成山城・片倉山城・戸波城・増田城・八木城・飯館の9館が数えられる。真人城は清原真人武則の居館とされ、倉刈沢を挟んで北側に「二階館」、「小階館」、「役人館」などの地名が残っている。増田城は王肥館とも呼ばれ、大正13年増田小学校新築工事の際発見された貞治2年碑は県重要文化財に指定されている。

註1 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』 1976年

註2 奈良修介・豊島昂『秋田県の考古学』 地土考古学叢書3 1967年

註3 a 茅山憲司『館下遺跡・梨ノ木塚遺跡・宮の前遺跡(第2次)発掘調査概報』秋田県教育委員会
1979年

b 茅山憲司『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会 1979年

註4 a 山下孫繼『外畠遺跡発掘調査報告書』『北方考古』 第10号 1975年

b 山下孫繼『荒砥沢遺跡発掘調査報告書』『北方考古』 第12号 1977年

註5 滝口宏・西村正衛『秋田県雄勝郡久上遺跡発掘報告』『古代』 第18号 1956年

註6 武藤鉄城『宝龍台石器時代遺跡発掘調査報告書』 1955年

註7 昭和57年11月、遺跡範囲確認調査を実施

註8 山下孫繼『秋田県稻川町内田遺跡発掘調査報告書』『北方考古』 第11号 1976年

註9 註3 a・bに同じ

註10 増田町教育委員会『増田町郷土史』 1972年

註11 山下孫繼・鍋倉勝夫『鎌田遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会 1974年

註12 秋田県立博物館『秋田県立博物館収蔵資料目録 考古』 1982年

註13 秋田県『秋田県史 考古篇』 昭和35年

註14 伊東信雄『東北北部の弥生式土器』『文化』 第24卷1号 1959年

註15 註12に同じ

註16 山下孫繼『拘ノ上遺跡発掘調査』『北方考古』 第2号 1967年

註17 山下孫繼『孤崎遺跡発掘調査報告』『北方考古』 第5号 1970年

- 註18 秋田考古学協会『中藤根遺跡』 昭和49年
- 註19 庄内昭夫『下藤根遺跡発掘調査報告書』 秋田県教育委員会 1976年
- 註20 a 庄内昭夫『宮の前遺跡発掘調査報告』 稲川町教育委員会 1977年
b 註3 aに同じ
- c 庄内昭夫『宮の前遺跡発掘調査報告』 秋田県教育委員会 1979年
- 註21 新野直吉『古代東北の開拓』 昭和44年
- 註22 a 盛田 慎・本堂寿一・富隈泰時『日本城郭大系』 第2巻 青森・岩手・秋田 1980年
b 池田憲和『秋田県の中世城館』 秋田県教育委員会 1981年

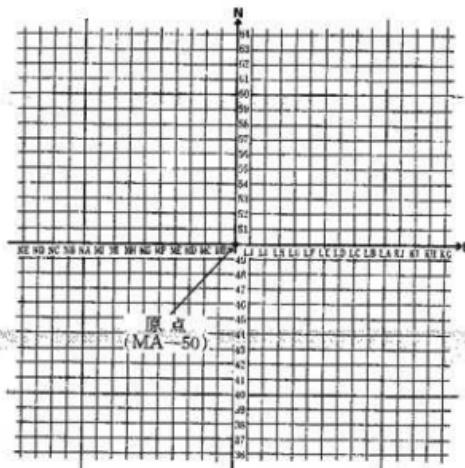
第3章 調査の方法と経過

第1節 グリッドの設定

グリッドの設定は調査対象面積が広範囲であるため業者委託とし、以下の方法で行った。

調査区のはば中央部に原点MA-50

を取り、これから磁北に合わせた南北基線(Y軸)とこれに直交する東西基線(X軸)を求め、南北方向には4mごとに北ほど順に増加する2桁の算用数字、東西方向には4mごとに東から西に向かってアルファベット2文字の組み合わせを付した。アルファベット2文字の一桁目はA~J(40m)の繰り返して、二桁目は40mごとに変わりグリッドの呼称は東南隅の座標で表すこととし、座標名はアルファベット・算用数字の組み合わせで呼ぶこととした。



第10図 グリッド設定図

第2節 調査経過

4月13日、機材搬入と共に調査区域西端の水路・道路造成箇所から調査を開始する。これに先立つ12日より、東邦技術株式会社委託によるグリッド杭打ち作業を開始する。道路造成箇所からは焼土遺構、配石のある土壤、完形の往口土器などが出土する。グリッド杭打ち作業は22日で終了し、この日真入山頂より遺跡遠景写真を撮影する。

道路造成区域外の東側も掘り始めるが、表土厚く、26日よりベルトコンベアーアーを使用して西→東へ掘り進む。LCラインで土層断面観察のため、MCラインに沿って南北に幅2mのトレンチを掘り始める。北端のLC71グリッド内には黄褐色土の下に南に向かって深く傾斜する遺物包含層の存在することが確認された。5月8日には水路・道路造成部分の調査を終了し、埋

め戻しを行う。

11日、調査区域西端を流れる水路に沿って、遺構の有無確認のためグリッド単位でつは掘りを進める。南へ行くほど遺物が少なくなり、38ラインより南では遺構、遺物は皆無に近く、46ライン以南の水路に沿った区域と38ライン以南の全城、及び調査区域内中央部の59ライン以北は土捨て場として確保できることが知られた。

この頃、表土剥ぎ作業の効率化を図るため、作業員を約70名に増員する。20日からLCライン東側の表土剥ぎに入り、表土剥ぎは予定通り5月中には終了することができた。

6月1日からMB47~49付近を掘り下げる第III・IV層から完形土器・土偶など多数の遺物が出土し、この東方にもこうした出土状況を示す区域の拡がりが予想された。8日、MC60内に黒色土の落ち込みがあり、その外縁に黄灰色の火山灰の分布が見られた。これは18日になって平安時代のSI001竪穴住居跡とその覆土上部に堆積した火山灰であることが確認され、この時期の遺構と火山灰との関係にも注意が喚起された。14日入植、MB52IV層上面に石圓が検出。17日よりLCライン東側の精査に入る。ここでも縄文晩期の石開炉、配石を検出しつつ、47ラインまで北→南へ精査する。少量の弥生土器、土師器も出土する。

7月1日、SI001のすぐ北側にSI002竪穴住居跡を検出。2日、包含層の掘り下げはいよいよ中央部へ移り、56ラインから南へ調査を進行する。予想通り遺物の出土は極めて多く、連日多量の遺物がアレハブ内に運搬される。ほとんど降雨なく畠から水中ポンプで揚水しながら調査する。北西端に検出されていた土壙墓の実測が終了する。8日、LD48内において初めて小玉が出土する。9日、LC44内の地山面に、大洞C₁~C₂式期の完形土器が一括発見された状態で検出された。中央部一帯は捨て場的状態で膨大な遺物の出土量であるが、その中に大洞A式土器の一括出土も検出される。14日、SI003竪穴住居跡が北東部に発見される。22日から県立増田・湯沢・湯沢北高校生が参加し、南端の地山面の落ち込みを調査する。多量の土器・石器の中に土製・石製の小玉類が多数検出され、傍らでフルイ作業も並行する。

8月1日、梅雨明け。4日、南端落ち込みの遺物を取り上げ、南から北方へ地山面までの掘り下げを開始する。土壤・配石遺構などの他、遺物量も多く、28日になって調査を終了し、30日に荷物を運搬して引き上げる。なお、調査期間中、三回にわたり2トントラックを使用して遺物を埋蔵文化財センターに運搬、また、最終日には南端の落ち込みの堆積土をフルイにかけるため、4トントラックで1台分の堆積土を運搬した。

第4章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の土層

調査にあたって、東西方向では40・47・56ラインで、南北方向ではLCラインでそれぞれ上層断面図を作成した。

第I層：暗灰黄色土(2.5Y R 5%).表土、水田耕作土で、層厚10~22cmで堆積する。

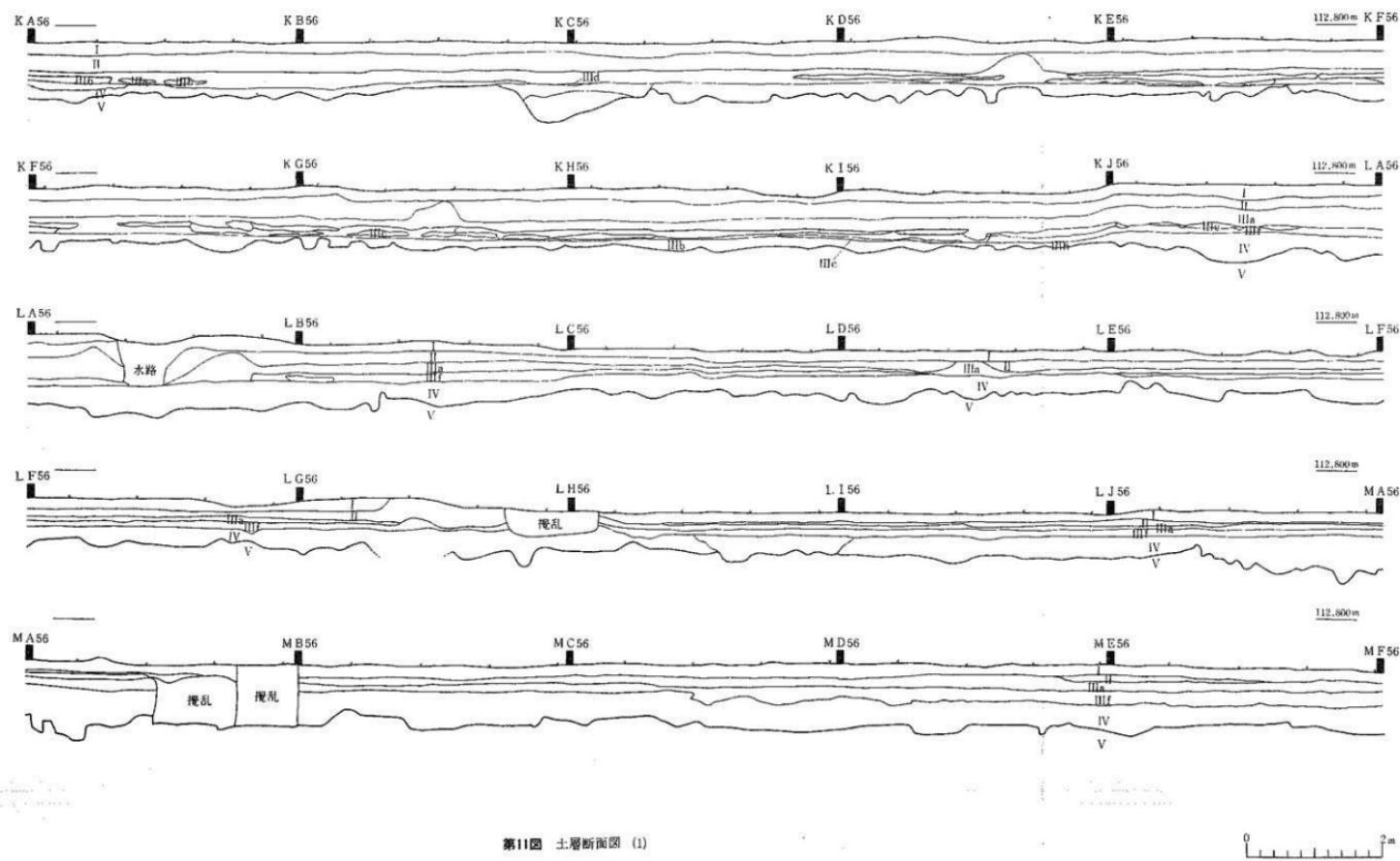
第II層：ふじい黄褐色土(10Y R 5%).耕地整理前の旧水田上の堆積土で、旧水田の畦畔をも覆っている。56ラインでは東側が厚く、30cm前後の厚さであるが、西ほど薄くなりMA以西ではほとんど消滅している。LCラインでは41グリッド以南で20cm前後の層厚であるが、中央部から58グリッドまでは5~10cmと薄い。しかしその北ではしだいに厚くなり40cmほどとなる。

第III層：現場の調査時点において遺物包含層をIII層下部・IV層として遺物を取り上げたが、IV層はそのままでし、III層を細分して、III層下部とした包含層はIII f層とした。

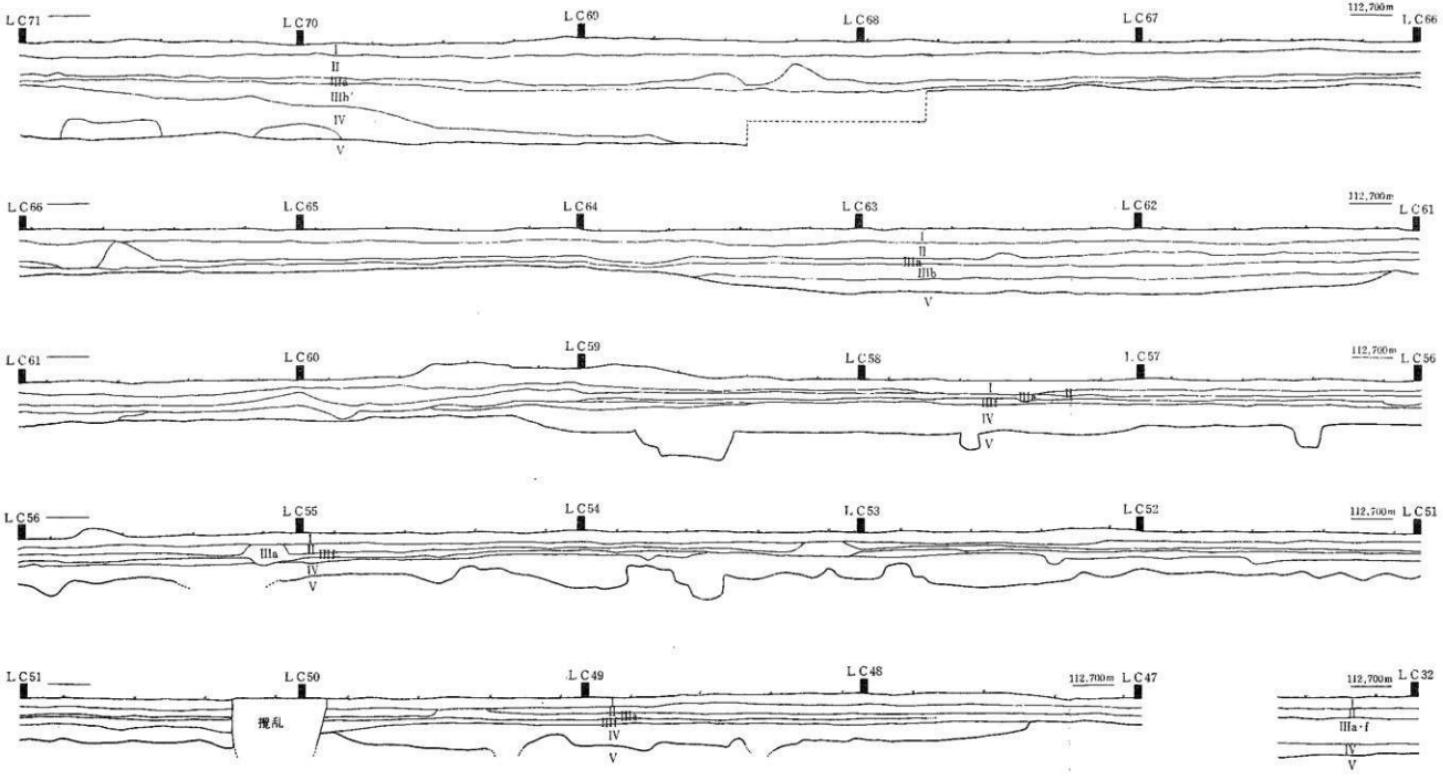
a：黒褐色土(10Y R 5%).耕地整理前の旧水田耕作土で、所々に畦畔の断面が盛り上がりとなり、遺跡内全体に分布している。遺物包含層の深さが比較的深い56ライン北側では後述するIII b層、平安時代の土層であるIII c・III d・III e層が存在し、これらの土層の上に堆積しているが、包含層の比較的浅い範囲ではIII b~III e層ではなく、III f層の上に本土層がのる。このことはIII f層の浅い範囲においてはIII f層を耕作してIII a層が形成されていることを示している。

b・b'層：明黄褐色土(10Y R 5%).分布が発掘区域内北東部に限られ、他の区域では存在しない。b層は56ラインではKAグリッド内に5~10cmの層厚で堆積が見られ、KDグリッド付近からKIグリッド付近までは途切れがちながら同様の厚さで堆積しているが、これより西には存在しない。粘性のあるシルトである。b'層はLCライン北端の上から4層めの層で、b層に類似する。しかし、b層に比し砂質であること、炭化物を含むこと、b層は明らかに平安時代以降の堆積であるが、b'層は大洞C₁~C₂期の第IV層に直接のつており、堆積年代に違いのあることは明白である。また両b・b'層はともに遺物包含層や黒褐色腐色土層に挟在する無遺物層であること、b'層はLCライン最北端の71グリッドでは8cmの厚さながら、南に向かって急激に厚さを増し、68グリッドでは80cmにも達し、最下部に青灰色の砂礫層が見られることなどの事実から、両層は河川の氾濫による堆積土と考えられる。

c：黒色土(7.5Y R 5%).この土層も分布及び堆積年代が限定される。40・47ライン、LCライ



第II図 土層断面図 (I)

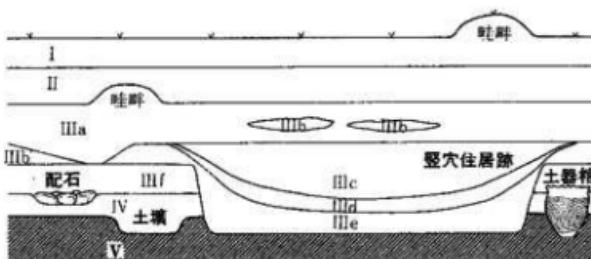


第12図 土層断面図(2)

ンには見られず、56ラインで東端のKAグリッドからLBグリッドの間に途切れながら5~13cmの厚さに堆積し、その直下には火山灰が見られる。平安時代のSI001竪穴住居跡・SK(1)002竪穴遺構においては遺構内に堆積した火山灰層の直上に本土屑があり、遺構埋没途中の凹みの中への堆積であることが知られる。

d: 淡黄色(2.5Y 4/6)の火山灰層である。主として56ライン以北の発掘区域内に点々と分布する。平安時代のSI001竪穴住居跡・SK(1)001・002竪穴遺構では、遺構がある程度埋没した後に本火山灰がレンズ状に堆積しており、平安時代における降下火山灰であることが明らかである。火山灰については付篇に庄司貞雄氏の分析を掲載した。

e: 黒褐色土(10Y R 3/6)。平安時代竪穴住居跡・竪穴遺構内では堆積土下層にあり、火山灰の下に堆積している。しかし



第13図 遺構と土層の関係模式図

f: 黒褐色土(2.5Y 4/6)。大洞A式期の遺物包含層である。この土層の存在は遺物を多く出土する範囲にはほぼ限られる。すなわち、LCラインにおいては北は59グリッド付近から、南は47グリッド内までで、この間は5~10cmの層厚を保って存在しているが、それ以南ではIIIa層との区分はほとんどできなくなる。40ライン以南ではIIIa層と合体してしだいに厚くなり、32グリッドでは33cmの厚さを測る。56ライン東側では明確でなく、3~5cmの層厚で堆積しているが、KIグリッド付近からしだいに厚みを増し、LFグリッドで10~13cm、MEグリッドで20cm前後の厚さとなる。

IIIa層のあり方も含めて考察すると、遺物包含層として遺物の多い範囲には厚く堆積しているが、地表からの深度の浅い所では後世の耕作の度合が大きく、したがって層厚は薄く存在していると言えよう。

第IV層: 黒褐色砂質土(7.5Y R 3/6)。大洞C₁・C₂式期の遺物包含層で、ほぼ全域に存在する。56ラインでは東端で20cmの層厚であるが西ほど厚みを増し、40~60cmに堆積する。LCラインでは、遺物包含層としては47グリッド以南には存在せず、また、北方では60グリッド内で消滅しているが、69・70グリッドでは北からの流入による堆積が見られる。

第V層: 褐色砂質土(10Y R 4/6)及び疊で地山を構成する。疊層にはその表面に細かな凹凸があり、この上に砂質土が堆積して平坦面を形成している。発掘区域内北東部、北西部では砂

質土の中に細かな疊層が露出しているが、中央部から南部では粘性のある砂質土となり、疊層の露出もほとんどない。

第2節 検出遺構と遺物

1. 繼文時代

(1) 遺構と遺構内出土遺物

① 土 壁

S K 001 (第14図)

M G 65グリッド西部に位置し、第IV層上面で確認された。92cm×84cmと円形に近く、深さは10cmほどである。底面はほぼ平坦で径70cmを測る。壁は緩やかに丸みを帯びて立ち上がっている。南東隅にピットがあり、径10cm前後の石が2個入っている。遺物は出土しなかった。

S K 002 (第14図)

M G 65グリッド内でS K 001のすぐ南にある。第IV層上面で確認された。123cm×105cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 72°Wである。上面に径20cm前後の石が4個配石されている。深さが13~18cmのピットが5個あるが、そのうち3個は配石の直下にある。底面は86cm×76cmではほぼ平坦であり、深さは6cmと非常に浅い。壁はなめらかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

S K 003 (第14図)

M H 60グリッド北部にあり、第IV層上面で確認された。135cm×57cmの楕円形を呈しており、確認面からの深さは9cmにすぎない。底面は西に傾斜し、壁はわずかに立ち上がる程度である。長軸方位はN 76°Eである。遺物は出土しなかった。

S K 004 (第15図)

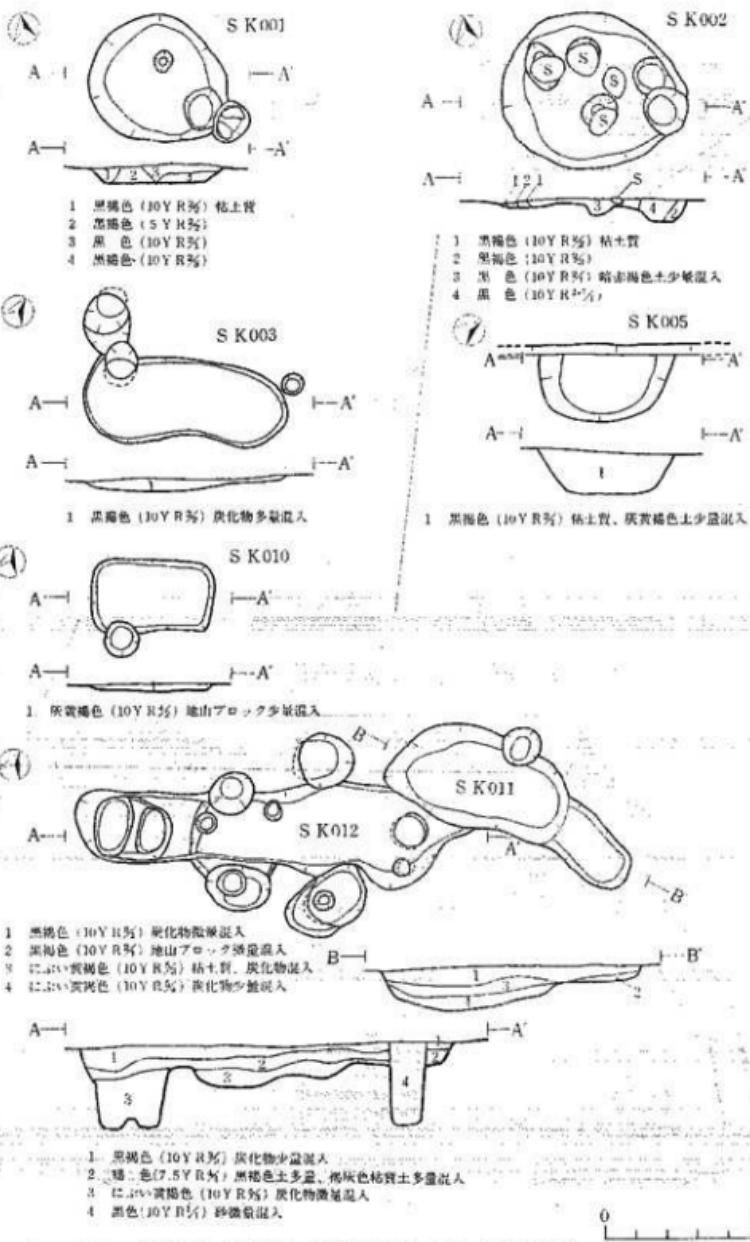
M G 60グリッドにあり、S N 001と接している。第IV層上面で確認された。110cm×48cmの楕円形を呈しており、深さは13cm、底面は南西ほど低くなっている。壁は北東側はなだらかに、立ち上がるが南西側はS N 001に切られている。長軸方位はN 50°E。遺物は出土しなかった。

S K 005 (第14図)

M I 60・61グリッドにまたがり、西側は調査範囲外に入っている。第IV層上面で確認された。深さは26cmを測る。底面は平坦で、壁は直線的に傾斜して立ち上がる。遺物は出土しなかった。

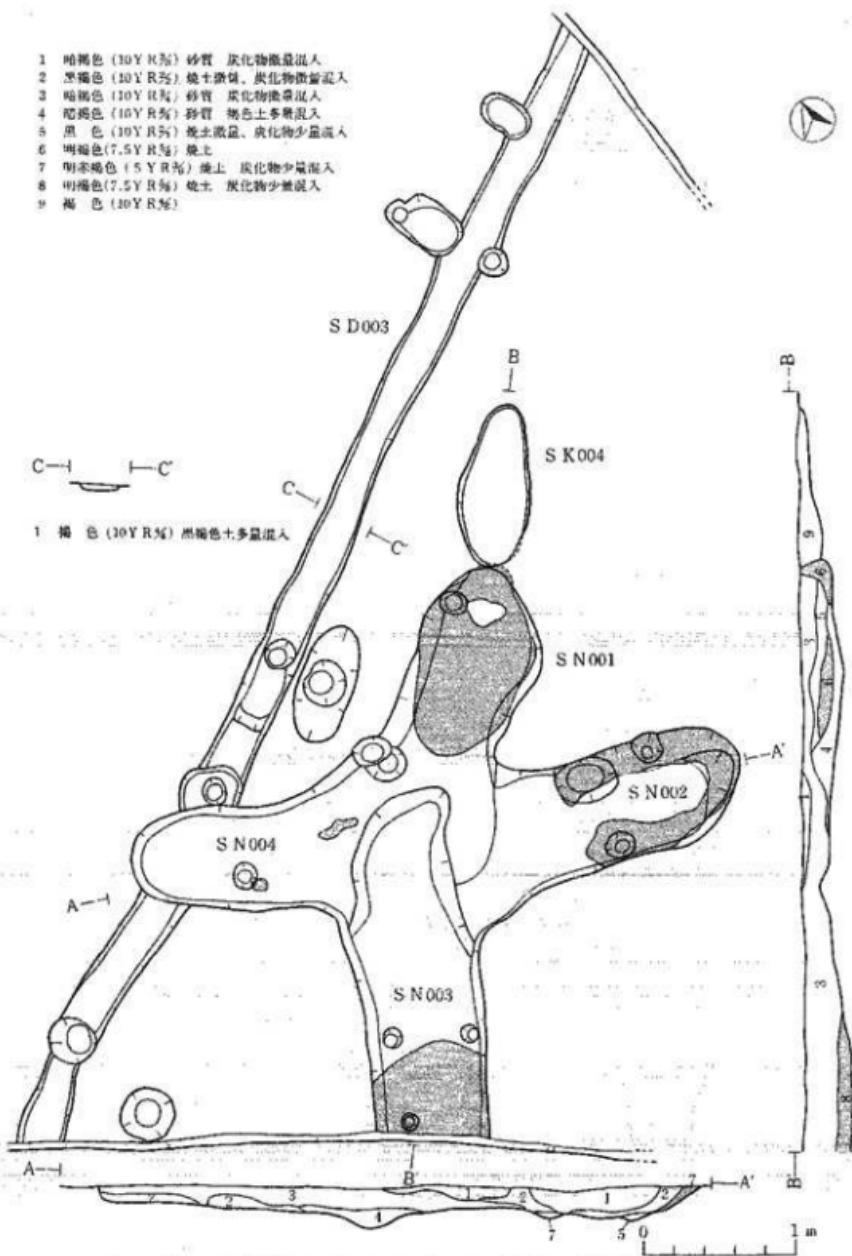
S K 010 (第14図)

M H 61グリッドに位置し、第IV層上面で確認された。81cm×47cmの長方形を呈し、深さは6cmを測る。底面は平坦で、壁はわずかに傾斜して立ち上がる。長軸方位はN 86°E。遺物は出土しなかった。

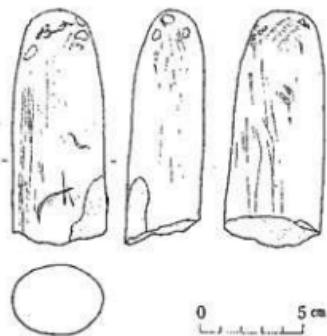


第14図 S K001~003·005·010~012 土壌実測図

- 1 單褐色 (10Y R 5%) 砂質 炭化物微量混入
- 2 黑褐色 (10Y R 5%) 烟土微偏、炭化物微量混入
- 3 單褐色 (10Y R 5%) 砂質 炭化物微量混入
- 4 褐褐色 (10Y R 5%) 砂質 硫化物多量混入
- 5 黑 色 (10Y R 5%) 烟土微偏、炭化物少量混入
- 6 明褐色 (7.5Y R 5%) 烟土
- 7 明赤褐色 (5 Y R 5%) 烟土 炭化物少量混入
- 8 明褐色 (7.5Y R 5%) 烟土 炭化物少量混入
- 9 褐 色 (10Y R 5%)



第15図 S K004土壤・S D003溝・S N001~004焼土遺構実測図



第16図 SK 011出土遺物

SK 011 (第14図)

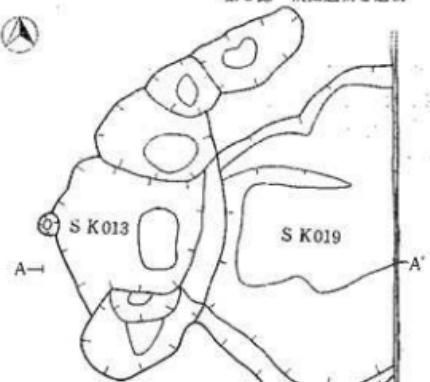
MH62グリッド杭付近に位置し、第IV層上面で確認された。125cm×63cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは31cmであった。底面にはやや凹凸があり、中央部がやや深い。壁はややなだらかに立ち上がる。長軸方向はN89°E。SK 012と重複しているが、本遺構の方が新しい。土器片少量と磨製石斧が1点出土している。

SK 012 (第14図)

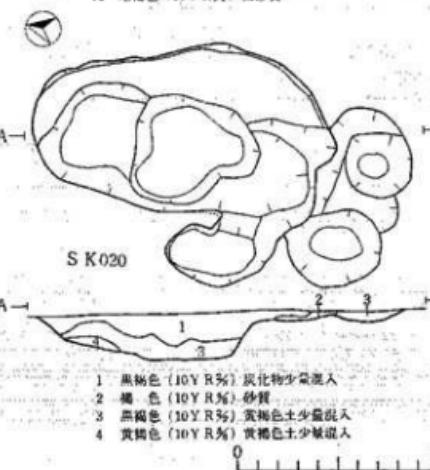
SK 011のすぐ西隣にあり、第IV層上面で確認された。東西に重複があるが、120cm×60cmの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。東端のピットは本遺構よりも確實に新しい。A-A'西端のピットも本遺構とは時期が異なるものかも知れない。底面は凹凸が激しく、壁は緩やかに立ち上がる。土器片が少量出土している。

SK 013 (第17図・第10図版)

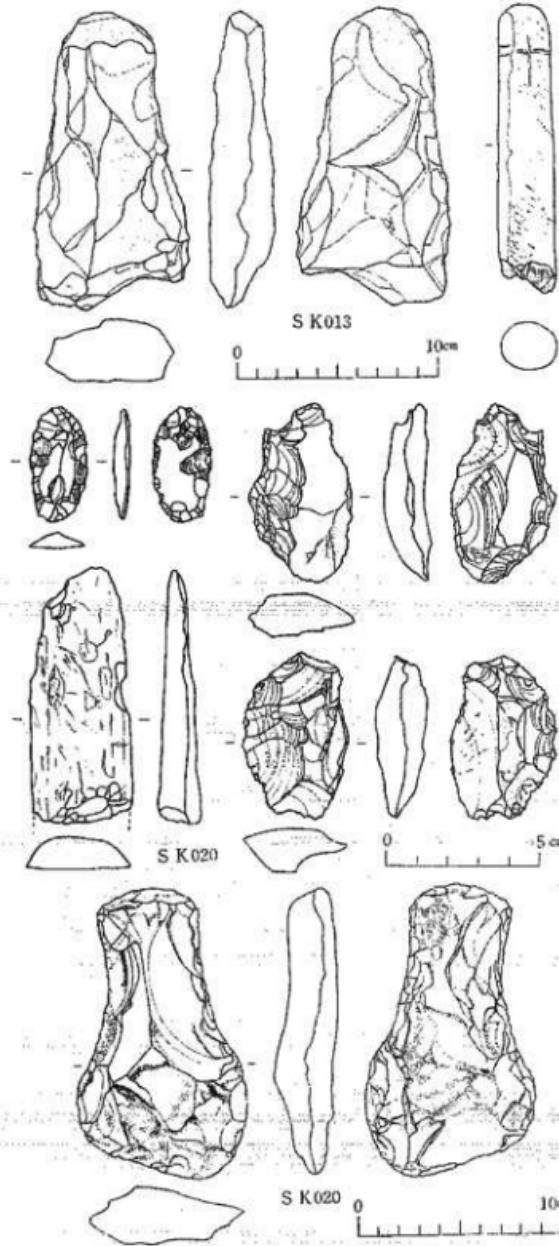
MG69グリッドにその大部分があり、第IV層で確認された。332cm×172cmとかなり大きいが、中央部の大きく深い部分とその南北の部分とに大別される。中央部は径170



	15	12	21	4
1	黒褐色 (10Y R 5%)			
2	黒褐色 (10Y R 5%)			
3	暗褐色 (10Y R 5%)			
4	黒色 (10Y R 5%)			
5	にじむ黄褐色 (10Y R 5%)	暗褐色土多量混入		
6	暗褐色 (10Y R 5%)			
7	褐色 (7.5Y R 5%)	砂質		
8	黒褐色 (10Y R 5%)			
9	黒褐色 (10Y R 5%)	にじむ黄褐色土少量混入		
10	暗褐色 (10Y R 5%)			
11	暗褐色 (10Y R 5%)	にじむ黄褐色土後並認入		
12	褐色 (10Y R 5%)	砂質		
13	褐色 (7.5Y R 5%)			
14	黒褐色 (10Y R 5%)			
15	褐色 (7.5Y R 5%)	炭化物少量混入		
16	暗褐色 (10Y R 5%)	細砂質		



第17図 SK 013-019-020土壤実測図



第18図 SK 013・020出土遺物

cm、深さ46cmであるが、北側及び南側の凹みは径100cm、深さ36~40cmである。底面には細かな凹凸があり、壁は丸みを帯びている。多量の大洞C₂式土器片と、打製石斧、石棒各1が出土した。

SK 019 (第17図・第10図版)

M G69グリッド中央部にあり、東側の一部が調査範囲外に入り込んでいる。第IV層で確認された。

調査部分のみで336cm×180cmと大きいが、全体では径350cmほどの楕円形となるようである。内部は緩やかな立ち上がりを示すが、外縁近くで急な立ち上がりとなる。大洞C₁式土器片が少量出土した。

SK 020 (第17図)

M I 67グリッドの東部に位置し、第IV層で確認した。301cm×164cmの楕円形である。確認面からの深さは48cmで底面の状況は凹凸が激しく、壁は西側では垂直に立ち上がりっているが、他はなだらかである。大洞C₁~C₂式土器片と石器が5点出土している。

SK 024 (第19図・第10図版)

L H42・L I 42両グリッドにまたがり、地山面で確認された。222cm×158cmの西側が少しづれる楕円形で、深さは36cmを測る。底面から壁が丸みを帯びて立ち上がり、東側には小ピットを有する。

長軸方位はN 78°E。遺物は出土しなかった。

S K 026 (第20図・第10図版)

M C 66グリッドに大部分があり、地山面で確認された。遺構上面には小石が5個あり、径50cmほどの円形で、最深部までの深さは12cmを測る。遺物は出土しなかった。西側に隣接してS N 048が構築されている。

S K 027 (第20図・第11図版)

M C 67グリッドの東部に位置し、地山面でプラン確認された。120cm×72cmの楕円形で西側が少し狭くなっている。深さは最深部で34cmと比較的深く、長軸方位はN 71°Eである。表面に小石が10個ほど不規則に置かれている。底面は若干平坦で大小の礫が数個見られるが、これは地山の様である。この他に北東部隅に40cm×20cmの石があるが、これは人為的に置かれたものと思われる。壁は急角度で立ち上がり、一部は数cm内側に入り込んでいる。S K 028と重複するが本遺構の方が古い。少量の土器片の他、底部から石錐1点が出土した(第21図)。

S K 028 (第20図・第11図版)

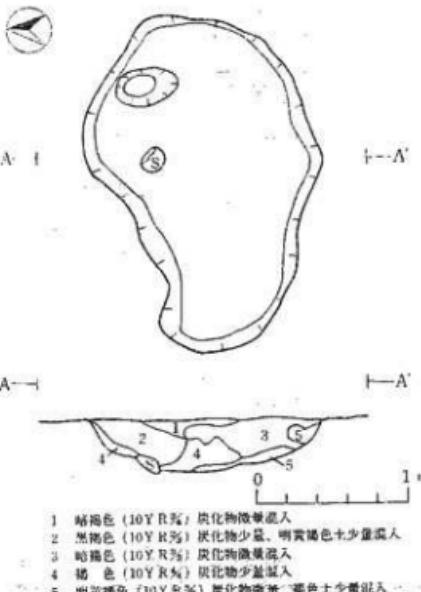
S K 027の南に重複し地山面で確認された。上面に大小数十個の配石があり、その中に打製石斧を含んでいる。97cm×58cmの楕円形で、深さは最深部で13cmと比較的浅い。底面は中心部で幾分深いが、南ほどならかに浅くなる。長軸方位はN 42°Wである。

S K 029 (第22図・第11図版)

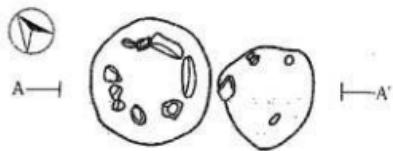
M B 67グリッド南部に位置し、山層下部で配石を検出し、地山面で土壌プランを確認した。遺構確認面は60cm×48cmの楕円形で長軸方位はN 20°E。上面には7個の配石がみられる。深さは最深部で8cmとかなり浅い。底面には凹凸があり、中央部が5cmほど高くなっている。壁は極めてなだらかである。少量の土器片が出土した。

S K 030 (第22図・第3・12図版)

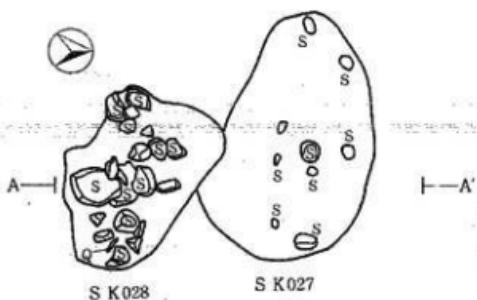
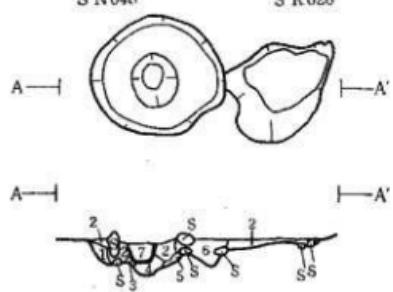
M B 67グリッドの北東部に位置する。上面に30数個の配石があり、およそその遺構範囲は把握できたが、土壌内埋土と地山との区別がし難く、土壌の確認は困難であった。82cm×54cmの楕円形を呈し、深さ18cm、長軸方位はN 68°Wである。埋土中や底部付近にも石があり、壁は丸



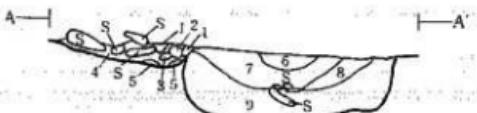
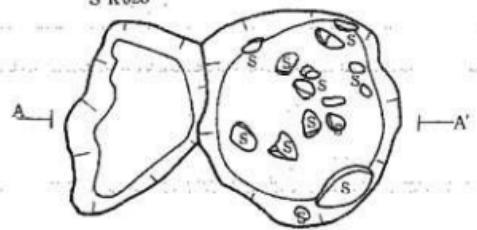
第19図 S K 024 土壌実測図



- 1 暗褐色(10YR 3/6) 硅少量混入
- 2 黑褐色(10YR 8/6)
- 3 黑褐色(10YR 8/6) 硅少量混入
- 4 暗褐色(10YR 3/6) 砂質 地土少量混入
- 5 暗褐色(7.5YR 3/6) 砂質 地土多量混入
- 6 暗褐色(7.5YR 3/6)
- 7 黑褐色(10YR 3/6) 硅化物少量混入



- 1 黑褐色(10YR 3/6)
- 2 暗褐色(10YR 6/6) 硅土少量混入
- 3 暗褐色(7.5YR 3/6)
- 4 黑褐色(10YR 3/6) 砂土少量混入
- 5 暗色(10YR 4/6) 砂質
- 6 黑褐色(10YR 3/6) 硅化物少量混入
- 7 黑褐色(10YR 3/6) 硅化物微量混入
- 8 暗褐色(10YR 3/6) 硅少量混入
- 9 暗褐色(10YR 3/6) 硅少量混入



第20図 S K026~028土壤・S N048石圓炉実測図

みを帯びて立ち上がっている。土器片が少量出土した。

S K 031 (第22図・第3図版)

MB67グリッドの北部にあり、地山面で確認された。上面の東南端に径15cmほどの石を置いている。この石の東側付近は旧水田畦畔のしみにより、確認がやや困難であった。95cm×40cmの楕円形で、最深部で13cmの深さである。底面にも石があるが、人為的なものではなく地山の礫であろう。底面は北西ほど深さを増しており、壁の状態は東側においては垂直に立ち上がっているが、西側では緩やかな立ち上がりを示す。長軸方位はN50°W。少量の土器片の他、石錐の一部が出土した。

S K 032 (第22図・第3図版)

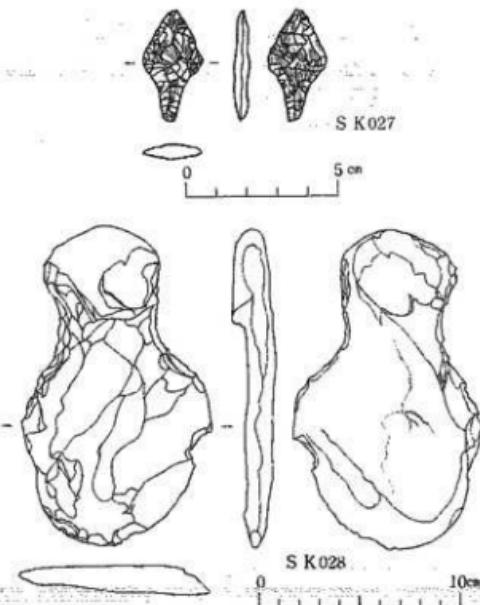
MB67・68両グリッドにまたがっており、地山面で確認された。遺構上面南東部に大きな石が3個配石されている。この遺構の東側には深さ7cmの細長い掘り込みがあり、SK031と連結しているが両遺構によって切られている。106cm×62cmの楕円形で長軸方位はN48°W、深さは14cmを測る。底面は略平坦で数個の石が置かれており、壁は緩やかに立ち上がっている。土器片が少量出土した。

S K 033・034 (第23図・第3図版)

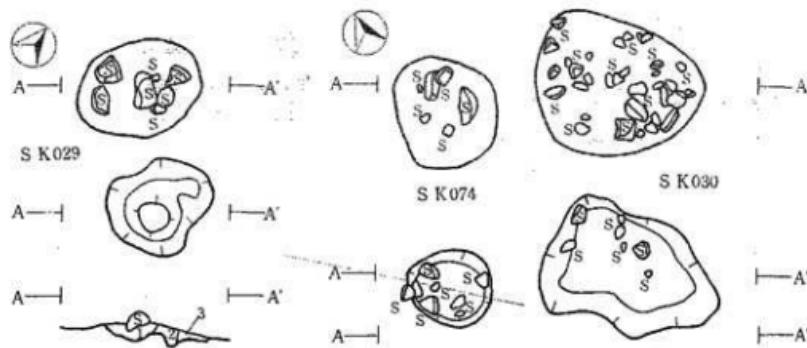
MB67グリッドの北西部に位置し、地山面で確認した。两者重複しているが、SK033がSK034を切っている。遺構上面には数個の配石があるが、SK034の配石は特に大きく45cm×40cmを測る。SK033は96cm×46cmの楕円形で、深さは6cm、長軸方位はN80°E、SK034は63cm×53cmの略円形で、深さは10cmを測る。底面は両遺構ともに中心部からなだらかに浅くなり、壁と呼べるものはない。遺物はともに出土しなかった。

S K 035 (第24図・第3図版)

MB65グリッド南部にあり、地山面で確認された。SK075と重複しており、本遺構の方が新しい。遺構上面の中心に1個の大きめの石と、南半部に20個ほどの大きな石を配している。中心に置かれた石は10cmほど埋土中に埋まっている。102cm×67cmの楕円形を呈し、深さは最深

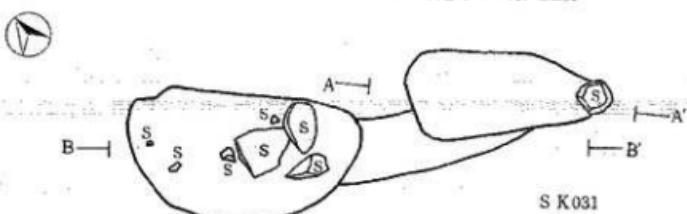


第21図 SK027・028出土遺物

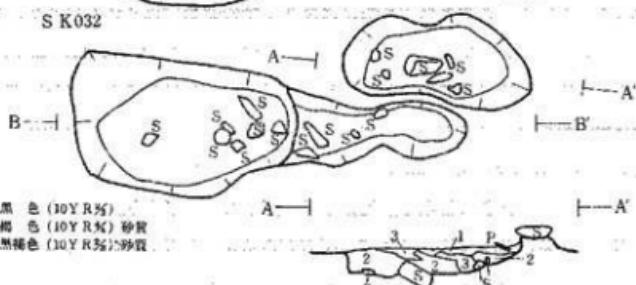


- 1 黒褐色 (10Y R 3%)
- 2 噴褐色 (10Y R 3%) 黄褐色土少量混入
- 3 黒褐色 (10Y R 3%) に近い黄褐色土少量混入

- 1 に近い黄褐色 (10Y R 3%) 砂質
- 2 オリーブ褐色 (2.5Y G 6%) 砂質
- 3 黒褐色 (10Y R 3%) 砂質 灰化物少量混入
- 4 黑褐色 (2.5Y G 6%) 粘土質



S K032



- 1 黒色 (10Y R 3%)
- 2 棕色 (10Y R 3%) 砂質
- 3 黒褐色 (10Y R 3%) 砂質

- 1 黒色 (7.5Y R 3%) 黄褐色土少量混入
- 2 噴褐色 (10Y R 3%) 砂質
- 3 黑褐色 (7.5Y R 3%) 砂質
- 4 黑褐色 (5Y R 3%) 砂質
- 5 棕色 (10Y R 3%) 砂質
- 6 棕色 (10Y R 3%) 砂質

第22図 S K029~032・074土壤実測図



A

SK 034

SK 033

B

S

SK 037

SK 036

B'

A

A'

B

A

A'

B'

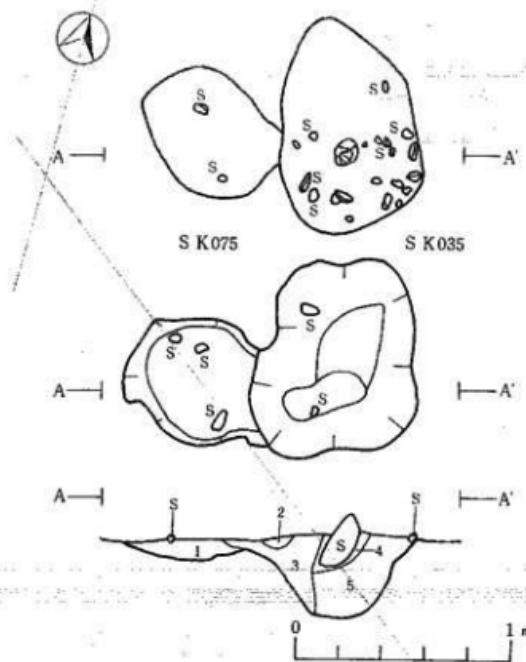
- 1 黑褐色(10Y R 5%) 砂質
2 黑褐色(10Y R 5%) 砂質
3 黑褐色(10Y R 5%) 砂質
- 4 黑褐色(10Y R 5%) 粘土質
5 黑色(10Y R 5%) 粘土質

- 1 黑褐色(10Y R 5%) 砂質
2 黑褐色(10Y R 5%) 粘土質
3 黑色(7.5Y R 5%) 黑褐色土少量混入
4 黑褐色(10Y R 5%) 砂質
5 黑褐色(10Y R 5%) 粘土質
- 6 黑褐色(10Y R 5%) 黑褐色土少量混入
7 暗褐色(10Y R 5%) 砂質
8 暗褐色(5Y R 5%) 砂質
9 暗褐色(7.5Y R 5%) 粘土質
10 暗褐色(10Y R 5%) 细砂質 黑褐色土少量混入

0

1m

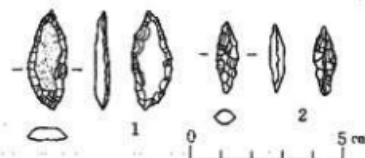
第23図 SK 033・034・036・037土壤実測図



- 1 楊色 (10Y R 5/6) 砂質 硫化物微量混入
- 2 喀斯特色 (10Y R 5/6) 砂質
- 3 喀斯特色 (10Y R 5/6) 砂質 小石多量混入
- 4 黒褐色 (10Y R 5/6)
- 5 喀斯特色 (10Y R 5/6) 硫化物少量、小石多量混入

第24図 SK 035・075土壤実測図

部で38cmを測る。底面は西から東へ急角度で傾斜する面と、比較的平坦な面と二つあり、後者は前者より14~15cm高い位置にある。壁は底面から30cmほどの所まで丸く急な角度で立ち上がり、残りは緩やかとなる。長軸方位はN 21°W。少量の土器片と石鉄が2個出土した。(第25図)



第25図 SK 035 出土遺物

SK 036

(第23図、第3図版)

MB 67グリッドの中央部
~西側にあり、約120cm×
64cmの楕円形で長軸方位は

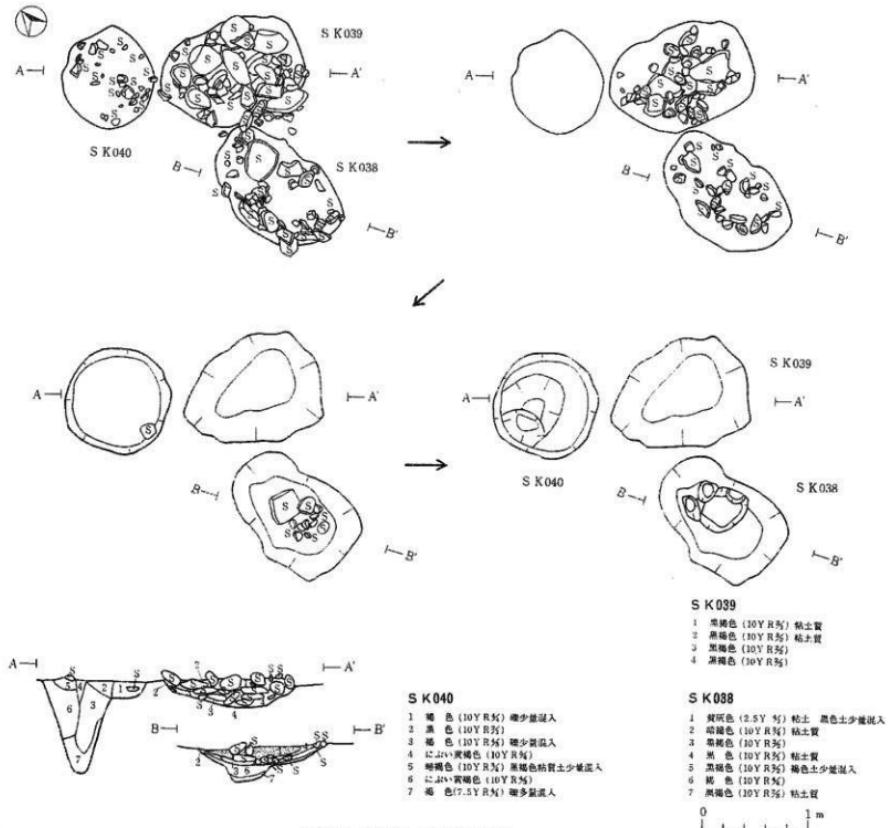
N70°Eである。遺構上面に多数の石が配されており、最深部まで15cmの深さである。底面にも小砾が数個あるが、これは地山の石である。壁は緩やかに立ち上がっている。SK 037に切られている。少量の土器片が出土した。

SK 037 (第23図・第3図版)

SK 036を切って構築している。地山面で確認された。155cm×84cmの長楕円形で最深部で17cmの深さである。SK 036同様の配石があり、底面に地山の砾が露出する。長軸方位はN70°Eで、壁は緩やかに立ち上がる。少量の土器片が出土した。

SK 038 (第26図・第12図版)

MB 66グリッド南部にあり、上面配石の一部を第III層下部で、平面プランは地山面で確認した。土壤北側に径40cmほどの大きな石を置き、その南に40個ほどの石を略円形に配している。これらの石を取り除きさらに掘り下げるとき、その下にも30個ほどの石で同様に配石が検出され



第26図 SK 038~040土壤実測図

た。さらにこの下の底部付近にも10数個の配石が認められた。土壌は140cm×92cmの楕円形で最深部で37cmを測り、長軸方位はN 8°Wである。底面にピットがあり、この中から大洞C₁式土器片が少量出土し、最下部から赤色顔料を検出した。壁は丸みを帯びて非常になめらかに立ち上がる。なお土壌内埋土の第1層は粘土である。

S K 039 (第26図・第12図版)

S K 038の北東に隣接し、石の一部を第III層下部で、土壌プランを地山面で確認した。遺構上面には大小の石が數十個、ほとんど土壌プランの全面に配石されている。土壌は138cm×104cm、西側がやや細くなる楕円形を呈し、深さは23cmを測る。長軸方形はN 60°W、配石の状態はS K 038と酷似し、表面の配石を取り除くと大きめの石1個と小さな石數十個が配石されていた。底面は最深部を中心に四方に緩やかに浅くなっている。

S K 040 (第26図・第12図版)

S K 039の北西に隣接し、地山面で確認された。上面には小石が全体に20数個配されている。土壌は径102cmの円形で、深さは最深部で102cmと深いが東側では15cmほどである。壁は底から一直線に急角度で立ち上がる。遺物は少量ではあるが上部から底部に至る広範囲にわたって土器片が出土した。また、底部付近より折損した石刀(第27図)と植物遺体(クリの実の皮)が出土した。

S K 041 (第28図・第12図版)

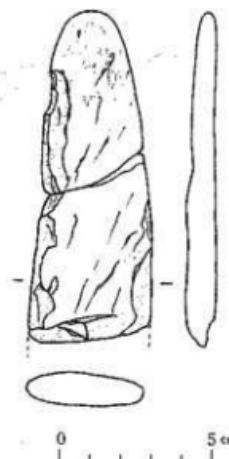
M B 66グリッドの北東部にあり、地山面で確認した。遺構上面の東端に10個ほどの配石が見られる。土壌は80cm×50cm、深さ14cmを測る。底部は最深部付近が凹みになっているが、他の4~5cmと非常に浅い。壁は西側では小さな弧を描くようになっているが、東側は極めて緩やかに傾斜しており、ほぼ無いに等しい。長軸方位はN 58°Wである。土器片が少量と石錐1点、石棒かと思われるものが出土した(第29図)。

S K 042 (第28図)

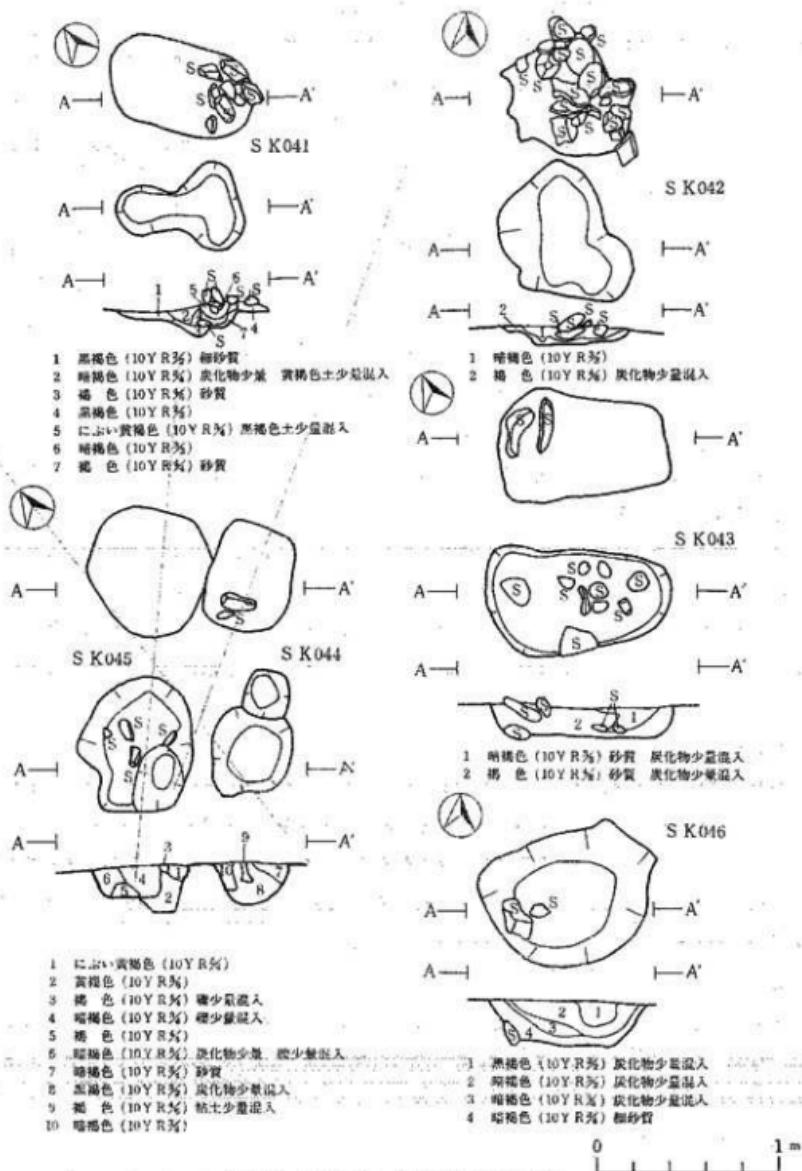
M B 65グリッドの南端にあり、上面に40数個の石があるために第III層下部で検出された。76cm×60cm、深さ17cmを測る。上面の石の一部は土壌埋土中にも深さ10cmほど入り込んでいる。底部はほぼ平坦で壁はなだらかである。長軸方位はN 72°E。遺物は出土しなかった。

S K 043 (第28図)

M B 67・M C 68グリッド内、地山面で確認された。埋土の色調が地山のそれと酷似しており



第27図 S K 040 出土遺物



第28図 SK041～SK046土壤実測図

土壌プランのわかりにくい造構であった。102cm×56cmの楕円形で、深さは18cmを測る。長軸方位はN 79°Wで、土壌上面の西端に細長い石が「こ」の字状に置かれていた。底面は平坦で10個余りの石があるがこれらは地山の礫である。壁はやや急角度で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK 044 (第28図)

MC 66グリッドの中央部に位置し、地山面でプランを確認した。上面の南西端に石2個を配している。60cm×49cmの楕円形を呈し、深さは23cmを測る。底面は円形で壁は丸く、塊状を呈している。底部から赤色顔料が少量検出された。土器片少量が出土している。

SK 045 (第28図)

SK 044の西隣にあり、地山面で確認した。73cm×65cmの略円形で深さは最深部で18cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、南側に径20cm、深さ5~6cmの凹みがある。壁はやや急角度で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK 046 (第28図)

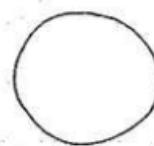
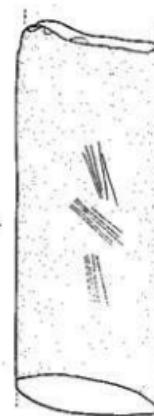
MC 67・68グリッドにまたがっており、地山面で確認されたが、SK 043同様範囲のわかりにくい造構であった。96cm×84cmの楕円形で深さ28cmとやや深く、底面形も53cm×46cmの楕円形である。底面は平坦で西端に石が置かれている。壁はやや傾斜しながらもまっすぐに立ち上がっている。長軸方位はN 65°Eで遺物は出土しなかった。

SK 047 (第30図)

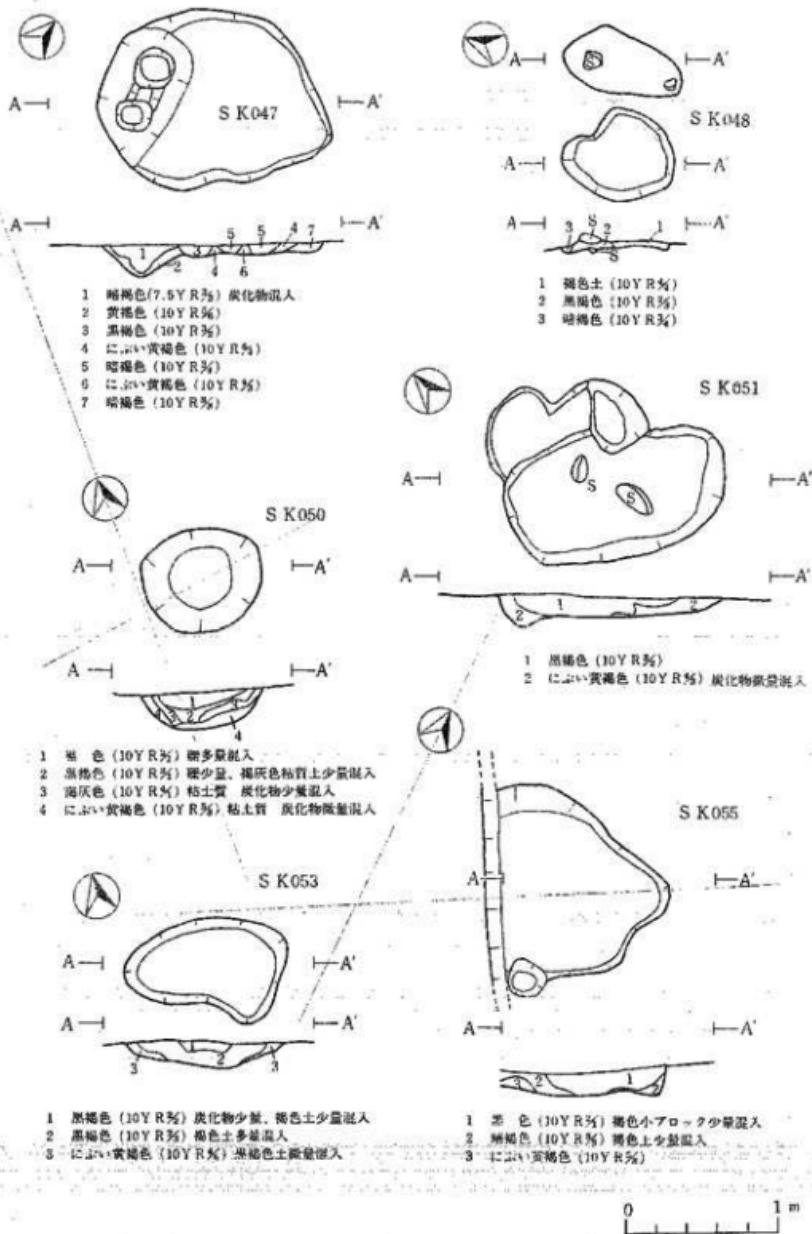
MB 65グリッドの中央部に位置する。旧水田畦畔のしみが土壌東側の大部分を覆っていたことと、土壌上面の配石が3個と少なく、さらに東側には石がなかったために、プラン確認がかなり困難であった。149cm×113cmの楕円形で、深さは西端の最深部で33cm、他では13cmほどである。底面は西端の凹みを除き、ほぼ平坦である。長軸方位はN 62°E、若干の土器片が出土した。

SK 048 (第30図)

MB 65・66内にあり、第Ⅲ層下部で確認された。造構上面の両端に石を1個ずつ配している。75cm×62cmの楕円形で長軸方位はN 5°E、深さは8cmと浅い。底面は中央部が幾分盛り上がった状態である。壁はほとんど無いが、やや外方に傾斜して立ち上がる。遺物は土器片が少量出土しただけである。



第29図
SK 041 出土遺物

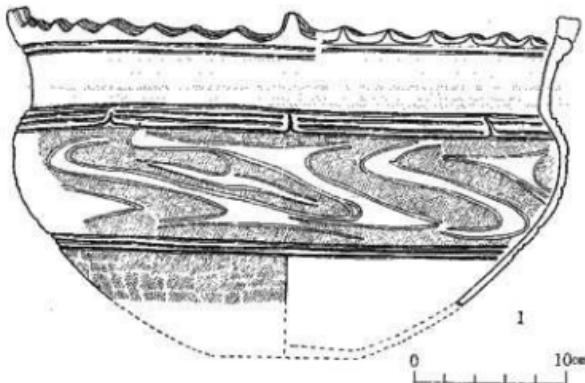


第30図 S K047・048・050・051・053・055土壤実測図

SK 050

(第30図・第12図版)

MA47グリッドの中央部にあり、地山面で確認された。配石はなく、78cm×70cmの略円形で深さは北西部が最も深く26cmを測る。底面形も径42cmの円形を示し、壁はなだらかに立ち上がっている。少量の土器片が出土した。



SK 051

(第30図・第13・68図版)

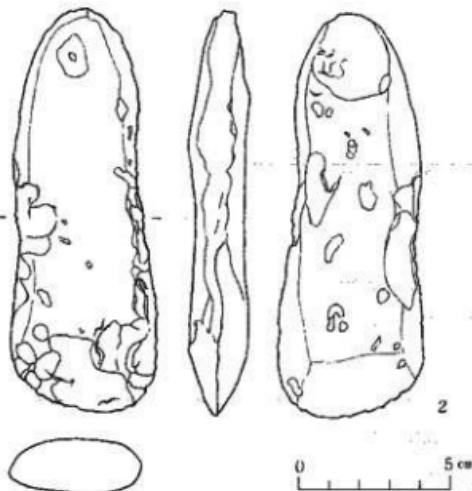
MA47グリッド北部にあり、地山面でプラン確認された。152cm×85cmの楕円形で、長軸方位はN45°Wである。この土壤の北～東部にかけて、深さ25cmほどのピットと、深さ8cmほどの掘り込みが見られるが、本遺構とは無関係であろう。

最深部までの深さは20cmであるが、底面にはかなりの起伏があり、30cm×13cm、

18cm×9cmの2個の石が中央部に置かれている。壁の状態は一様ではなく、箇所により形状、傾きが異なる。遺構内より土器と磨製石斧が1点出土している。土器は大形の浅鉢で約3%のみであるが、推定口径38cm、底径10cm、器高23cm、大洞C₂式であると考えられる。

SK 053 (第30図・第13図版)

MA48グリッド南部にあり、地山面で確認された。111cm×60cmの楕円形で、深さは16cmを測る。底面は西から東に若干傾斜し、壁はなだらかに立ち上がっている。長軸方位はN80°Wである。土器片が少量出土した。



第31図 SK 051 出土遺物

第4章 発見された遺構と遺物

S K 055 (第30図)

M C 47・48グリッドにあり、地山面で確認された。西側は調査範囲外に入り込んでおり、全体の大きさは不明である。最深部は中央部～北東部にかけてであるが、他の部分では7cmと浅い。底面は起伏に富み、壁の北西部は緩やかであるが他はやや急である。土器片が少量出土した。

S K 057 (第32図・第13図版)

M A 48・49、M B 48・49の4グリッドにまたがり、地山面で確認された。103cm×86cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 85°Wである。底面は平坦で14cmの深さであるが、西側がピット状になってしまおり32cmの深さである。壁はこの部分で急角度となっているが、他の部分では幾分緩やかとなる。大洞C₁式かC₂式と思われる土器片が出土した。

S K 058 (第32図・第14図版)

M B 49・50、M C 49・50の4グリッドにまたがり、S K 059を切って構築されている。138cm×126cmとほぼ円形で、深さは10cmである。底面は多少の起伏はあるが平坦に近く、北側に大小各1個の石がある。壁は全体的に緩やかに立ち上がりをしている。大洞C₁式の土器片が少量出土した。

S K 059 (第32図・第14図版)

S K 058の東側にあり、地山面で検出された。西端がわずかにS K 058に切られている。径110cmほどの円形で、深さは17cmと浅い。底面はやや丸みがあり、壁は緩やかな立ち上がりを示している。土器片が少量出土した。

S K 061 (第32図)

M A 50グリッド南西部にあり、地山面で確認された。84cm×58cmの楕円形で深さは15cmを測る。長軸方位はN 48°W。壁は北東側ではやや急であるが、他は緩やかに立ち上がりをしている。少量の土器片が出土した。

S K 062 (第32図・第14図版)

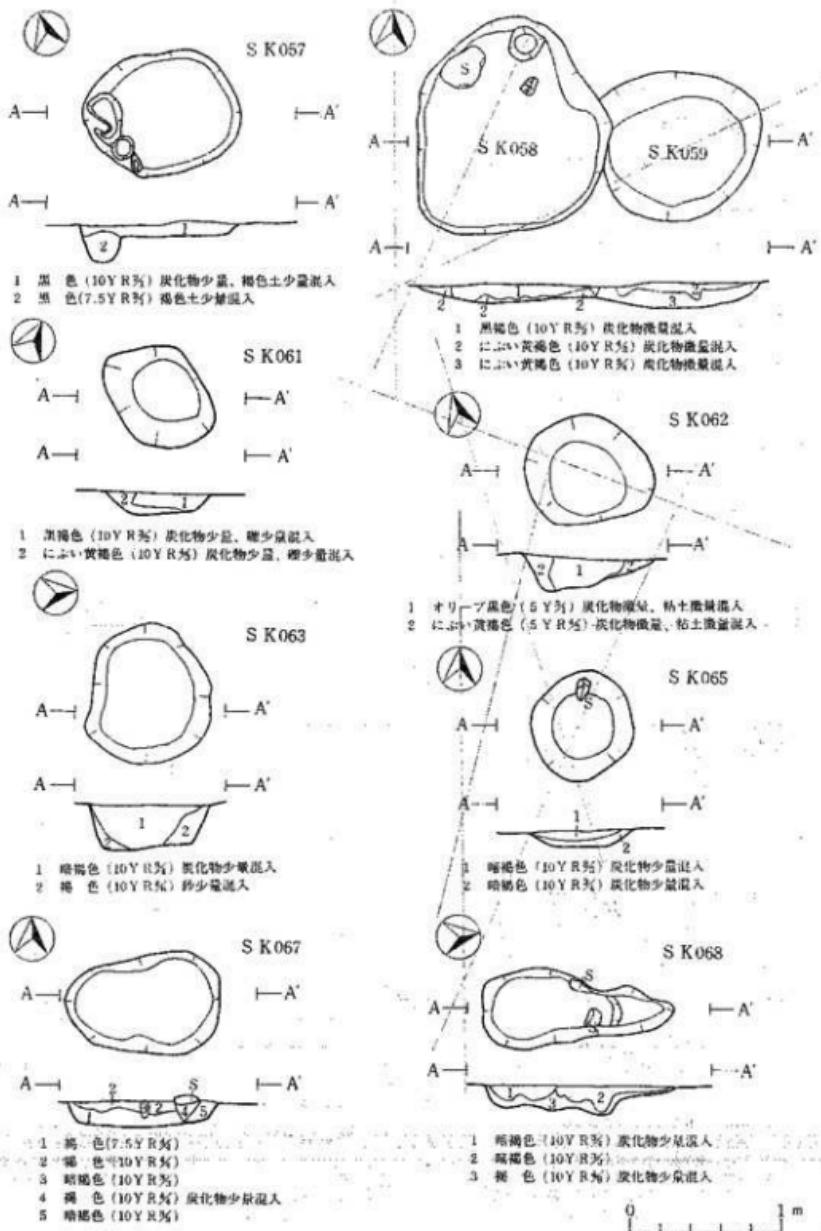
L J 49グリッドの中央付近に位置し、地山面で確認された。86cm×75cmの略円形で、最深部での深さは27cmを測るが、南側は17cmと浅くなる。底面は起伏があり、壁は南側がやや急角度となっている他は緩やかな立ち上がりを示している。少量の土器片が出土した。

S K 063 (第32図・第14図版)

S X 001底面精査時に確認された。97cm×78cmの円形に近い楕円形で、深さは35cm、長軸方位はN 86°Eである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直である。土器片が少量出土した。

S K 065 (第32図)

M C 50グリッド中央部にあり、地山面で確認された。74cm×68cmの略円形で、深さは11cmを



第32図 S K057~059・061~063・065・067・068:土壤実測図

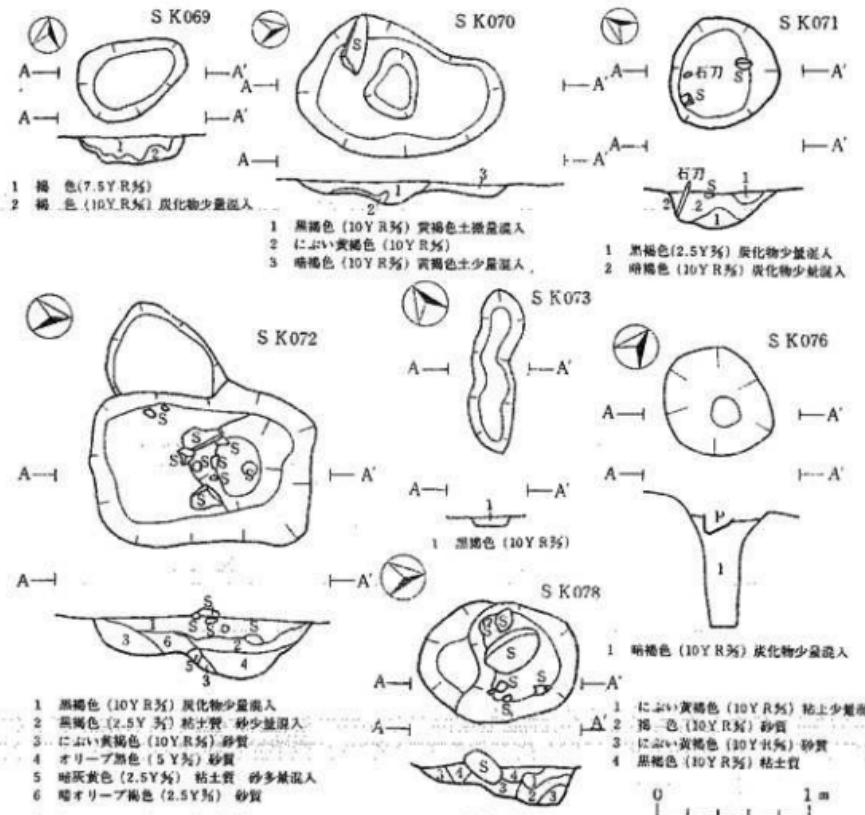
測るが南側では7cmと浅くなる。底面は平坦で北側に石が1個置かれている。壁は緩やかな立ち上がりを示し、遺物として土器片が少量出土した。

SK 067 (第32図)

MC 64グリッド南東部に位置し、第Ⅲ層下部で配石が確認され地山面で土壙が検出された。遺構上面東側に大きめの石2個、西側に小さめの石1個を配している。土壙は91cm×48cmの楕円形で最深部で15cmの深さを測り、長軸方位はN 62° Eである。底面は平坦で壁は幾分急な立ち上がりを示している。土器片が少量出土した。

SK 068 (第32図)

MB 63・64グリッドにまたがり、地山面で検出された。旧水田畦畔のしみによって一部が変色しており土壙プランは必ずしも明確ではないが、131cm×54cmで北側が細くなる楕円形で、



第33図 SK 069~073・076・078土壙実測図

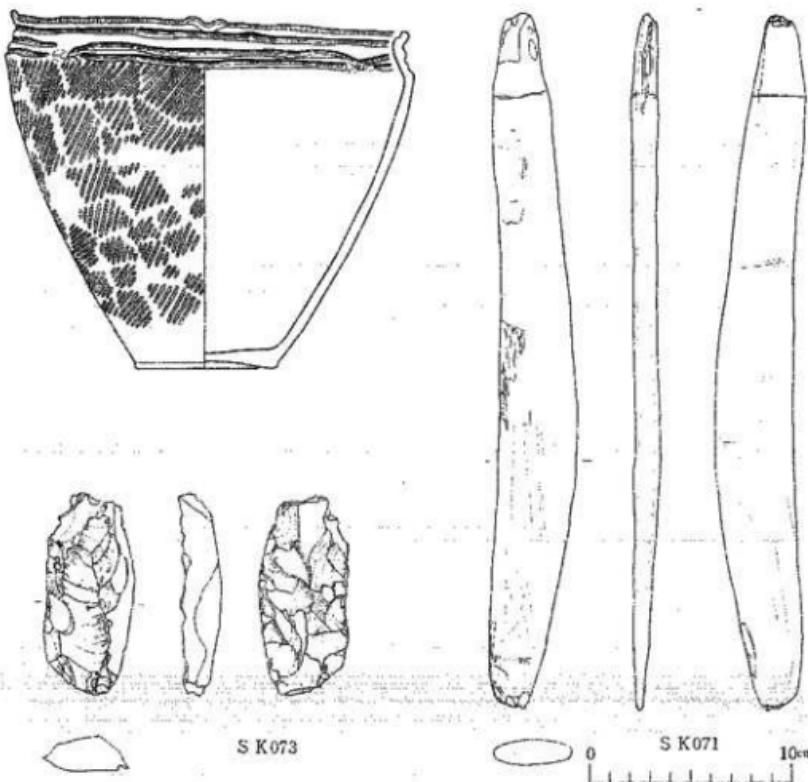
長軸方位はN 20° W、深さは17cmを測る。底面には凹凸があり、壁は北側が浅いためながらであるが、南側ではやや急に立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

S K 069 (第33図)

MB64グリッドにあり、田水田吐畔のしみによって確認が困難であった。75cm×50cmの楕円形で、深さは最深部で20cmを測る。長軸方位はN 70° Eである。底面は平坦で、壁は西側の立ち上がりが緩やかとなっている。遺物は出土しなかった。

S K 070 (第33図)

MA51グリッド北部の第IV層下部で確認された。149cm×96cmの楕円形で、深さは中央部の凹みで確認面から20cm、他は8cm、長軸方位はN 5° Eである。底面は平坦で南西側に40cm×14cmの石が置かれている。壁は非常に緩やかな立ち上がりである。少量の土器片が出土した。



第34図 S K071・S K073・S K076出土遺物

第4章 発見された遺構と遺物

S K 071 (第33図・第15図版)

K H60グリッドにある。第IV層掘り下げ中に石刀（第34図）の頭部を発見したが、直立しており全く動かなかったので、土壌に直立させて埋設したものと考えて周辺を精査した。IV層から地山を掘りくぼめた土壌の底部に石刀の先端部を密着させて埋設したものであるが、埋設時に石刀の頭部が地表に出ていたか否かは明らかでない。土壌は74cm×70cmの略円形で、深さ23cm、底面はやや凹んでおり、壁は東南部がなだらかに立ち上がっている。

S K 072 (第33図)

M C 68グリッドにその大部分があり地山面で確認されたが、西側が旧水田畦畔のしみによつて変色しており確認には困難が伴った。遺構上面の中央部に石が2個置かれている。土壌は146cm×101cmの方形に近い楕円形を呈しており、長軸方位はN 10° Eを測る。底面は南側では平坦で深さは10cmであるが、北側は40cmの深さで塊状に丸くなっている。壁は緩やかで、遺物は土器片が少量出土しただけである。

S K 073 (第33図・第3図版)

M B 67グリッド南西部の地山面で確認された。他の土壌とは異なりかなり細長く、109cm×26cmのベルト状をなし、最深部でも10cmと浅い。長軸方位はN 30° Eである。底面は平坦で壁は急角度に立ち上がっている。石器が1点出土した（第34図）。

S K 074 (第35図)

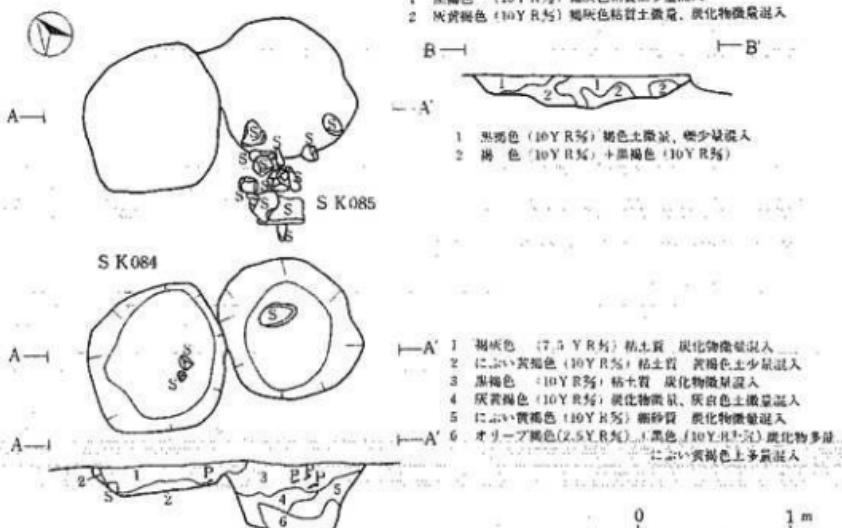
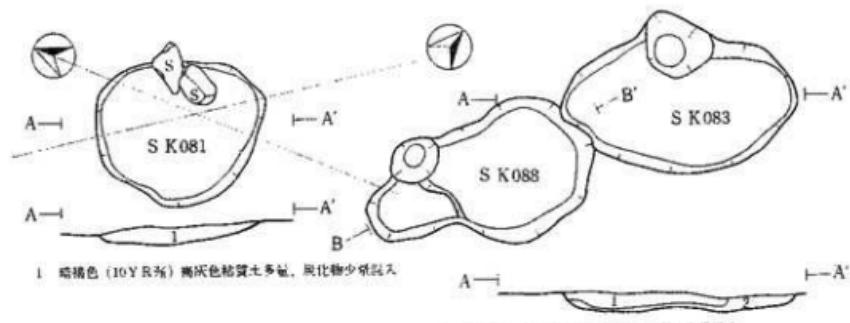
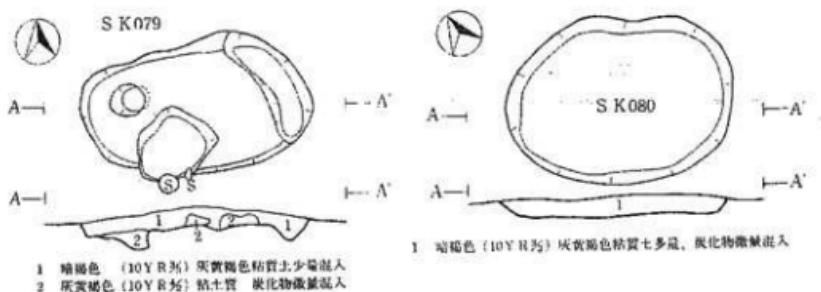
M B 67グリッドの北側、S K 030に隣接している。旧水田畦畔のしみのため土色が大部分変化していたが、遺構上面に数個の配石が出ていたので地山面で確認ができた。土壌は39cm×36cmの略円形を呈し、深さ12cmを測る。底部は平坦で壁はやや急角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

S K 075 (第24図・第3図版)

M B 67グリッド北部の地山面で検出された。S K 035と重複しているが、本遺構の方が古い。上面には南北に各1個の小さな石が見られる。61cm×57cmの略円形を呈しており、深さは13cmを測る。底面は丸みがあり、北側に2個、南側に1個の石が置かれている。壁は緩やかな立ち上がりを見せ、次第に消夫する。土器片が少量出土した。

S K 076 (第33図・第15・68図版)

M C 60グリッドのすぐ東側に位置し、地山上面で確認された。上面は77cm×70cmの略円形であるが、確認面からの深さは89cmを測り、断面形は上部が広く下部が鉤状となる逆フラスコ形を呈している。壁面全体には地山の礫が露出している。上部に完形の深鉢形土器が置かれていた（第34図）。



第35図 SK079~081・083~085・088土壤実測図

SK 078 (第33図)

MB68グリッドの東側にあり、地山面で確認された。102cm×79cmの楕円形で、深さは29cmと比較的深い。底面は南側では浅いが北側ではこれより15cm深く、2段となっている。上面から埋土中にかけて、39cm×26cmの大きな石が置かれ、この周囲にも小さな石数個が見られる。壁の南側は緩やかであるが、北側は急角度で立ち上がっている。長軸方位はN 11°E、遺物は出土しなかった。

SK 079 (第35図・第16図版)

MB52グリッドに位置し、第IV層中で確認された。154cm×91cmの楕円形で長軸方位はN 8°Wで、底面西側には径20cmで底面よりも15cm深いピットがあり、また南側には53cm×45cmの大きさで底面より23cmほど深いピットが見られる。東側は幅10数cmにわたり、5~7cmほど落ち込んでいる。

SK 080 (第35図・第16図版)

MB53グリッドにその大部分があり、第IV層中で確認された。149cm×109cmの比較的大きな楕円形を呈し、深さは12cmを測る。長軸方位はN 70°Wである。底面は北東部と南西部で少し浅めであるが全体的にはほぼ平坦で、壁はやや急角度で立ち上がっている。土器片が少量出土した。

SK 081 (第35図・第16図版)

MA53グリッド北部にあり、第IV層中で検出された。108cm×97cmの略円形で、深さは12cmを測る。東端に石が2個置かれている。底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかである。土器片が少量出土した。

SK 083 (第35図・第18図版)

LJ54グリッド南部に位置し、第IV層下部~地山面で確認された。SK 088と重複するが本遺構の方が新しい。158cm×99cmの楕円形で、長軸方位はN 32°E、西側に径40cm、深さ24cmのピットがある。確認面から最深部までは13cmと浅いが、他の部分では4~11cmとさらに浅い。底面は平坦に近いがわずかに起伏がある。壁は丸みを帯びている。土器片少量と石鉄1点が出土した(第36図)。

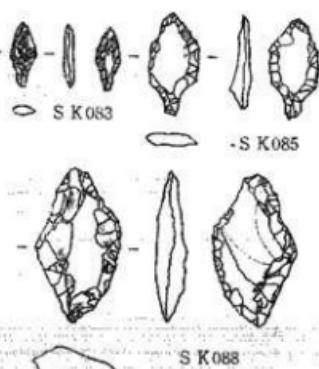
SK 084 (第35図・第17図版)

MA52グリッド北西部にあり、地山面で確認された。

東に隣接するSK 085を切って構築されている。109cm

×95cmの略円形で、確認面から最深部までの深さは20cm

第36図 SK 083・085・088出土遺物



を測るが、浅い所では8cmほどである。底面は南側ほど傾斜して低くなり、壁は緩やかである。大洞C₁式の土器片が少量出土している。

S K 085 (第35図・第17図版)

M A 52グリッド内の地山面で確認された。S K 084と重複しているが、本遺構の方が古い。96cm×85cmの略円形を呈し、最深部で43cmとやや深い。底面の北側に25cm×14cmの石を1個配している。壁は急角度で立ち上がる。大洞C₁式の土器片と石錐1個が出土した(第36図)。

S K 086 (第37図・第17図版)

L J 54・55グリッドにあり、地山面で確認した。口縁部は87cm×72cmで断面中間部が少しひびれるフラスコ状を呈し、底部径は87cm×81cmとなっている。深さは54cmを測り、底面は平坦で、底面から10~15cm上に小は28cm×18cm、大は38cm×35cmまでの石が6個見られる。その他径10cm前後の石も2個入っている。大洞C₁式の土器片が少量出土している。

S K 087 (第37図・第18図版)

M A 53・54、M B 53・54の4グリッドにまたがり、地山面でプラン確認がなされた。245cm×202cmの円形に近い形をしている。底面は東側へ傾斜しており、確認面からの深さは東側で55cmある。他の浅い所でも30cm前後はあり全体的に深い。壁は急角度で立ち上がっている。多量の大洞C₁式土器片の他、石錐・凹石などの石器が出土した。この他埋土中部よりサメの歯を作製した装飾品が1点出土した。この装飾品について県立男鹿水族館竹内健館長より鑑定いただいたところ、ほほじろざめ、*Carcharodon carcharias* (LINNÉ) の歯に最も近く、新世代第三紀の化石である可能性が高いとのことであった。先端部を欠損しているが推定52mmあり、中央部とその両側に3個の穿孔がある。青灰色で光沢があり、欠損部は石化していることがうかがわれる(第38図・第18図版)。

S K 088 (第35図)

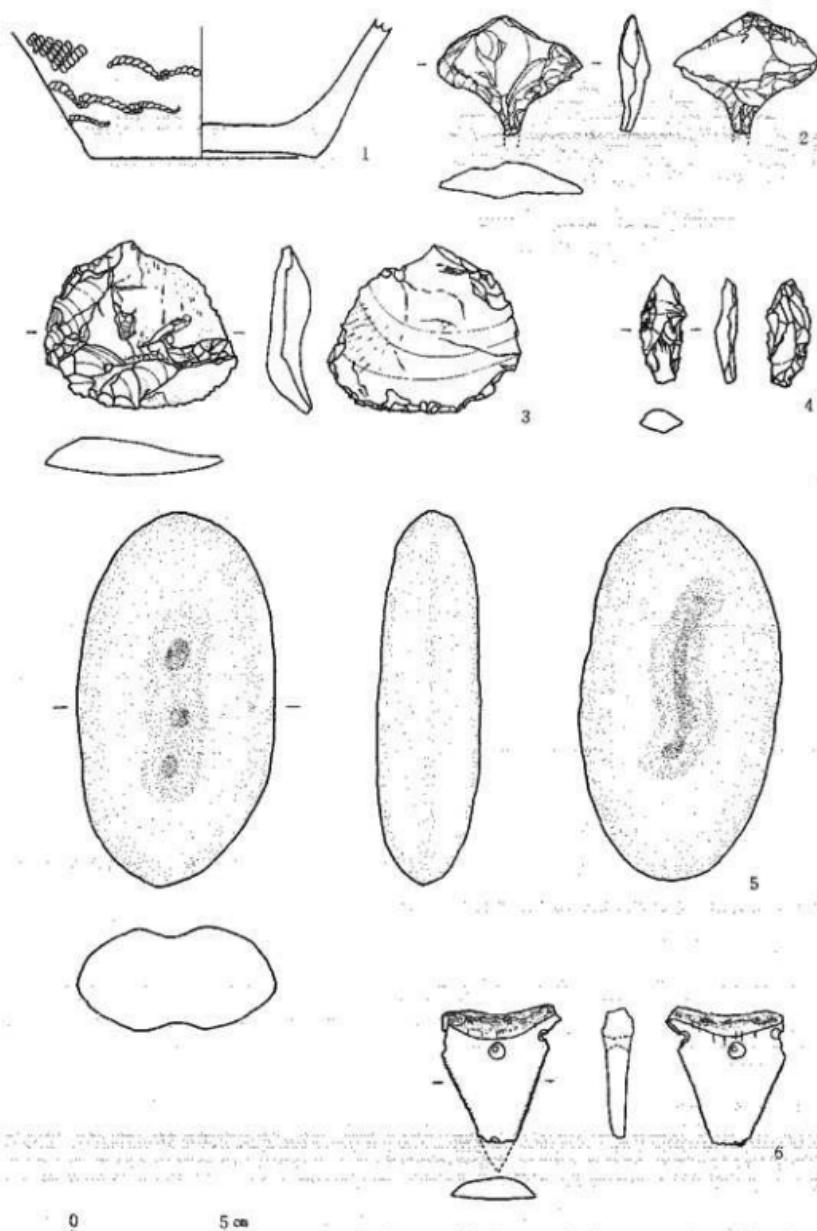
L J 53グリッド北西部に位置し、第IV層下部で検出された。S K 083に切られている。155cm×91cmの不整楕円形を呈しており、長軸方位はN 12° E、最深部で27cmの深さである。南西部に径30cm、深さ40cmほどのピットがあり、底面は起伏を有する。壁はなだらかである。大洞C₁式土器の破片が少量と石錐1点が出土した(第36図)。

S K 090 (第37図・第18図版)

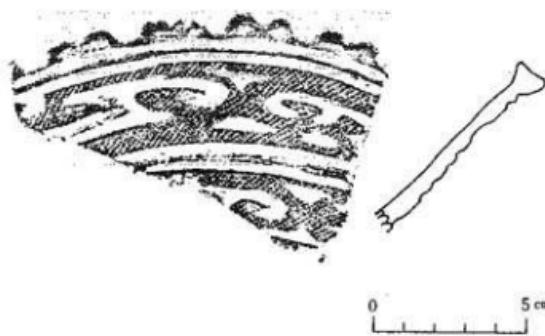
L J 53・54両グリッドにまたがり、第IV層下部で確認された。108cm×74cmの楕円形を呈し、最深部でも12cm、他の部分では5~11cmの深さで非常に浅い。長軸方位はN 18° Eで、遺構内には石が4個置かれている。底面はわずかに起伏があり、北側が少し低くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。土器片が少量出土した。



第37図 S K086・087・090~092土壤実測図



第38図 SK 087 出土遺物



SK 091 (第37図)

MB 61グリッド杭付近にあり、地山上面で確認された。117cm×86cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 66°W、深さ49cmを測る。底面はほぼ平坦で壁は下方で丸みを有しながらも急角度で立ち上がっている。

5 cm 大洞C₁式の土器片が出土している(第39図)。

第39図 SK 091 出土遺物

SK 092(第37図・第19図版)

MD 59グリッド杭付近に位置し、地山上面で確認された。100cm×84cmの円形に近い楕円形を呈し長軸方位はN 85°W、深さは最深部で77cmを測る。確認面に21cm×6cmの石1個が土壤中央部に立てた形で埋設されていた。土壤内底部付近に多量の石があり、底面にピット状の落ち込みがあり、段を形成してほぼ垂直に立ち上がっている。土器片が少量出土している。

SK 093 (第40図)

MF 60グリッドの東部に位置し、地山上面で確認された。146cm×119cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 83°W、確認面からの深さは29cmを測る。底面は丸底で、壁は丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。大洞C₁式の土器片が出土した。

SK 094 (第40図)

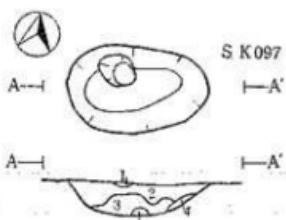
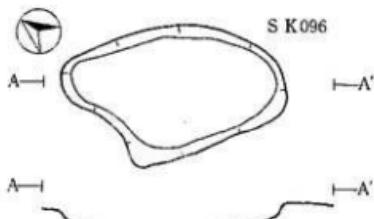
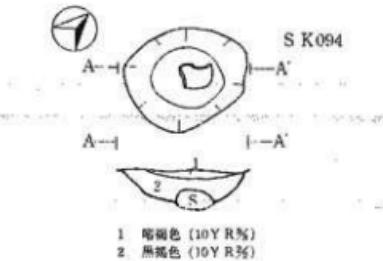
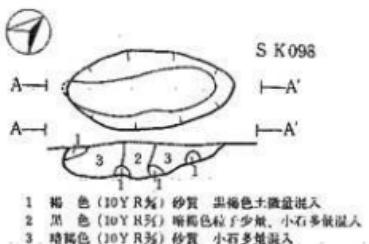
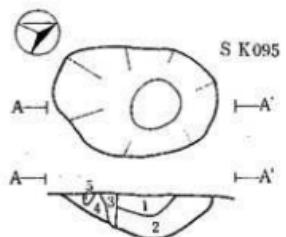
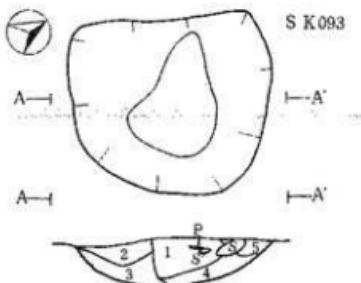
MC 58グリッドの東部にあり、地山面で確認された。81cm×65cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 45°E、深さは19cmを測る。底面はほぼ平坦で25cm×15cmの石が見られる。壁は南西側で急角度であるが、北東側は幾分緩やかである。土器片が少量出土している。

SK 095 (第40図)

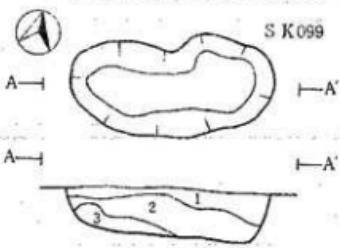
MF 59グリッドの杭付近にあり、地山上面で確認された。104cm×72cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 24°E、深さは中央部で最も深く28cmを測る。壁は緩やかに立ち上がっている。土器片が少量出土した。

SK 096 (第40図)

MC 63・64の両グリッドにまたがる遺構である。地山の土が遺構上部を覆っており、さらに配石も全くなかったので確認は困難であったが、地山面で検出された。151cm×87cmの楕円形で長軸方位はN 70°W、最深部で25cmの深さを測る。底面は平坦で石はなく、壁は低いが立ち上がりの角度はやや急である。土器片が少量出土した。



- 1 棕色 (10Y R 4%) 砂質 黑褐色土少量混入
2 黑褐色 (10Y R 4%) 哈褐色粘土多量混入
3 棕灰色 (10Y R 3%) 哈褐色粘土多量混入
4 棕色 (7.5Y R 3%) 砂多量、小石多量混入



- 1 黑褐色 (10Y R 4%) 小石多量混入
2 棕灰褐色 (10Y R 4%) 小石少量混入
3 棕红褐色 (10Y R 3%) 砂多量混入



第40図 SK 093~099土壤実測図

第4章 発見された遺構と遺物

S K 097 (第40図・第19図版)

L C・L D56の両グリッドにまたがり、地山面で確認された。97cm×58cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 88° E、最深部の深さは23cmを測る。底面はほぼ平坦で、その北西部には径20cm、土壤底からの深さが15cmほどのビットがある。壁は西側で急であるが、他は丸みをもって立ち上がっている。土器片が少量出土した。

S K 098 (第40図・第19図版)

L C56グリッド中央部に位置し、地山面で確認された。113cm×53cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 45° Eを測る。深さは中央部～南西部では20cmを測るが、北東部ではしだいに浅くなる。底面は凹凸があり、壁は南西部で数cmであるが内側に入り込んでいる他は緩やかな立ち上がりである。土器片が少量出土した。

S K 099 (第40図)

L B・L C56グリッドに大部分があり、地山面で確認された。135cm×67cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 75° Eを測る。底面は西から東へ傾斜しており、深さは西側で20cm、中央部で30cm、東側では35～37cmと深くなっているが、北東部では15cmである。壁はしっかりとしており、やや急角度で立ち上がっている。土器片が少量出土した。

S K 100 (第42図・第19図版)

L D56グリッド東側に位置し、地山面で確認がなされた。211cm×89cmの大きさで、中間部がくびれる不整楕円形で、長軸方位はN 20° Eを測る。中央部に掘り込みがあり、この部分の深さは36cmであるが、その北側と南側では10cm前後と浅くなっている。また、東側には径20cm、土壤確認面からの深さが40cmほどのビットが1個ある。全体的に底面は起伏に富み、壁は急角度で立ち上がっている。大洞C₁式の土器片が少量出土した。

S K 101 (第42図・第19図版)

L D56グリッド中央部に位置し、地山面で確認された。84cm×67cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 2° E、最深部で26cmの深さである。底面は中央部が最も深く、周辺部がしだいに浅くなるレンズ状を呈している。土器片が少量出土した。

S K 102 (第42図・第20図版)

L D56・57、L E56・57の4グリッドにまたがり、地山面で確認された。138cm×115cmの略円形を呈し、深さは最深部でも14cmと浅い。底面は全体にはほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がっている。S K 115を切って構築されている。土器片が少量出土した。

S K 104 (第42図)

L H57南東隅に位置し、地山面で確認された。163cm×53cmで中間部が少し細くくびれる長楕円形で長軸方位はN 85° Eを測る。中央部に35cm×16cm、確認面からの深さが41cmの小ビット

があるが、この東側では底面までの深さが29cm、西側では37cmを測る。壁は丸みを帯びて立ち上がっている。土器片が少量出土した。

SK 105 (第42図・第20図版)

LD57グリッド東部にあり、地山面で確認された。110cm×58cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 5°E、深さ31cmを測る。底面は平坦に近く、壁は北側が急傾斜であるが、南側はやや緩やかに立ち上がっている。少量の土器片が出土した。

SK 106 (第43図)

LD57・58両グリッドにまたがり、地山面で確認された。114cm×63cmの楕円形で、長軸方位はN 40°Nを測る。底面の北西部と南東部がそれぞれ46cm、36cmの深さでくぼんでいる。壁は急角度の立ち上がりを見せており、少量の土器片が出土した。

SK 107 (第43図)

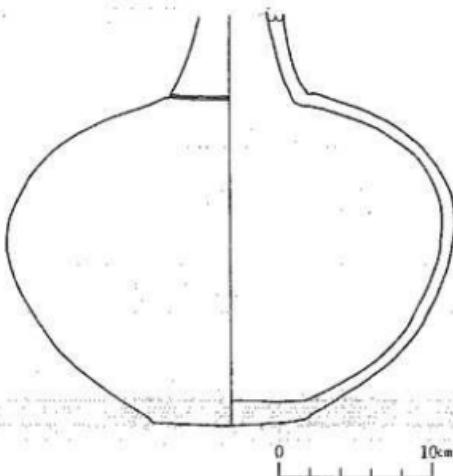
LD58グリッドに位置し、地山面で確認された。北側は未調査の59ラインに入り込んでおり全容は不明であるが、おおよそ120cm×63cmの楕円形を呈するようである。長軸方位はN 40°Eで、深さは40cmを測る。底面は平坦で、壁は緩やかである。

SK 109 (第43図)

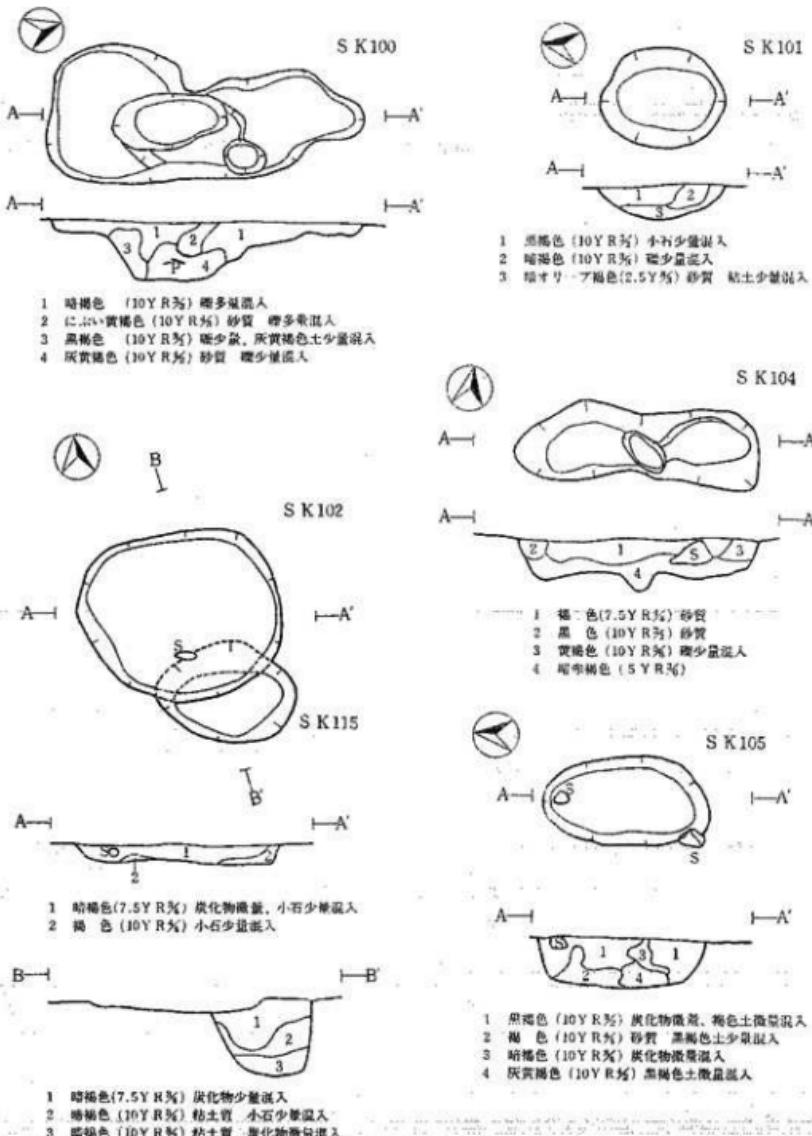
LC58グリッド南側に位置し、地山面で確認された。75cm×46cmの小さな楕円形を呈し、最深部でも17cmとやや浅い。底面は北西部から南西部にかけて幾分傾斜し、壁は急角度で立ち上がっている。長軸方位はN 53°W、遺物はない。

SK 110 (第43図・第20・68図版)

LC58グリッド南部にあり、地山面で確認された。径84cmほどの円形で、深さは37cmを測る。底面は丸く、全体が塊状で、壁は急角度で立ち上がっている。北西側に18cm×14cmの石と、ほぼ完形の壺形土器が置かれていた。この土器は口縁部を欠き、頸部と肩部の境界部に浅く細い沈線が一条入る他は無文で、全体がよく研磨されている。底径5.6cm、胸部最大幅14.8cm、器高推定15cmを測る(第41図)。

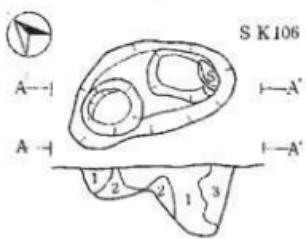


第41図 SK 110 出土遺物

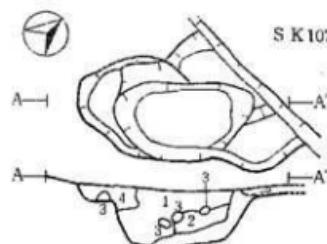


0 1 m

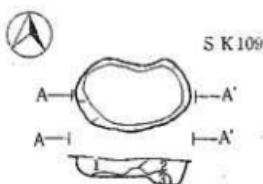
第42圖 SK 100~102・104・105・115土壤実測図



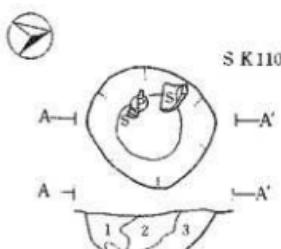
- 1 黑褐色 (10Y R 5%) 塵化物微量混入
2 暗褐色 (10Y R 5%) 塵化物微量、褐色土多量混入
3 暗褐色 (10Y R 5%) 塘化物微量、褐色粒子少量混入



- 1 黑褐色 (10Y R 5%) 塘化物微量混入
2 暗褐色 (10Y R 5%) 褐色土少量混入
3 棕色 (10Y R 5%) 粘质
4 暗褐色 (10Y R 5%) 塘化物微量、灰褐色粘质土微量混入
5 にじむる暗褐色 (10Y R 5%) 塘化物微量、暗褐色土多量混入

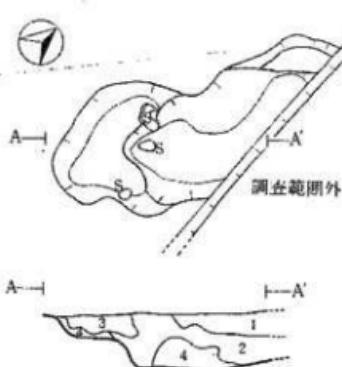


- 1 暗褐色 (10Y R 5%) 塘化物微量混入
2 暗褐色 (10Y R 5%) 塘化物微量、褐色土微量混入
3 暗褐色 (10Y R 5%) 地山ブロック多量混入

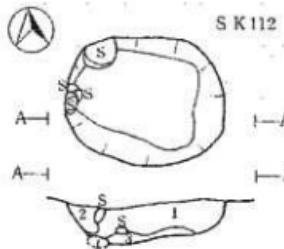


- 1 暗褐色 (10Y R 5%) 塘化物微量、砂少量混入
2 黑色 (10Y R 5%) 塘化物微量、砂微量混入
3 暗褐色 (10Y R 5%) 塘化物微量、砂多量混入

S K 111



- 1 暗褐色 (10Y R 5%) 塘化物微量混入
2 黑褐色 (10Y R 5%) 塘化物微量、褐色粒子少量混入
3 黑褐色 (10Y R 5%) 塘化物微量
4 暗褐色 (10Y R 5%) 砂多量混入



- 1 暗褐色 (7.5Y R 5%) 塘化物微量、砂少量混入
2 棕色 (10Y R 5%) 砂質
3 棕色 (7.5Y R 5%) 砂少量混入



第43図 S K 106・107・109~112土壤実測図

第4章 発見された遺構と遺物

S K 111 (第43図)

L C 58グリッド東部にあり、地山面で確認された。未調査のL C ラインの上層観察用ベルトの中に一部が入り込んでおり、全容は不明であるが北東～南西方位に長軸を有する不整楕円形を呈するものようである。西側は浅く24cmほどであるが、東側は一段深く40cmの深さである。底面、壁ともに不整形である。土器片が少量出土した。

S K 112 (第43図・第21図版)

L F 56グリッド南部にあり、地山面で確認された。106cm×88cmの楕円形を呈し、長軸方向はN 75°N、深さ29cmを測る。底部は方形に近く、底面は略平坦である。底面西側には径20cmほどの石が1個置かれている。壁の立ち上がりは全体にやや緩やかである。大洞A式の土器片少量が出土した。

S K 113 (第44図)

L G 57グリッド南東隅に位置し、地山面で確認された。94cm×79cmの不整楕円形で、長軸方位はN 29°W、深さは最深部でも14cmと浅い。底面は略平坦で北西に径12cmほどの石を1個置いている。壁は主として北側が幾分丸みを帯びた立ち上がりを示している。遺物は出土しなかった。

S K 114 (第44図)

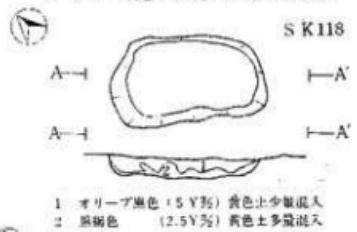
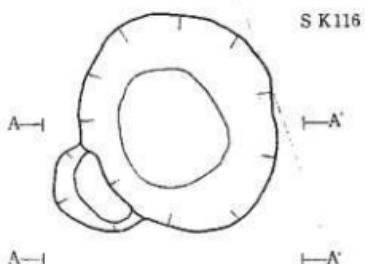
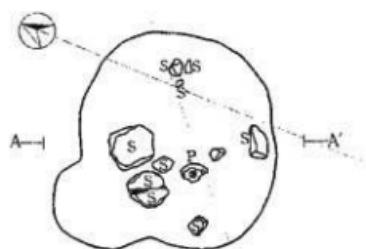
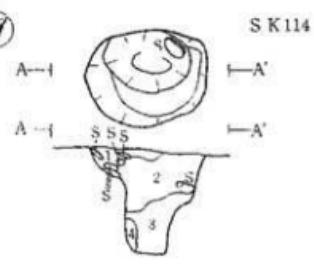
L F 57グリッド北西部にあり、地山面で確認された。平面形は82cm×63cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 60°Eを測るが、断面中間部で幅が狭くなってしまっており、最深部では73cmの深さとなる。中間部の西側には10cm×5cmほどの石が数個配されており、北側によ16cm×8cmの石が1個置かれている。壁は北西側では略垂直に立ち上がっているが、南東側では底部から中間部までは垂直に近く、それより上は丸みを有して立ち上がっている。少量の土器片が出土した。

S K 115 (第44図・第20図版)

L D・L E 56にまたがり、地山面で確認された。93cm×63cmの楕円形で長軸方位はN 70°W、深さ50cmを測る。底部は中央部が幾分くぼみ、壁は北側がやや緩やかである他は略垂直に近い立ち上がりを示す。S K 102によって切られている。大洞A式の土器片が少量出土した。

S K 116 (第44図・第21図版)

K J 47・48、L A 47・48の4グリッドにまたがり、地山面で検出された。上面に大小の石(5cm×4cm～29cm×25cm)を11個配している。このうち大きめの石は土壤確認面より8～13cmほど出ているが、土壤埋土中にも4～10cm埋没している。151cm×130cmの略円形を呈し、最深部で56cmの深さを測る。底面から壁にかけて、全体が塊状に丸みを帯びている。土壤埋土中より大洞A式土器と石鎌2、石匙1、凹石1が出土した。

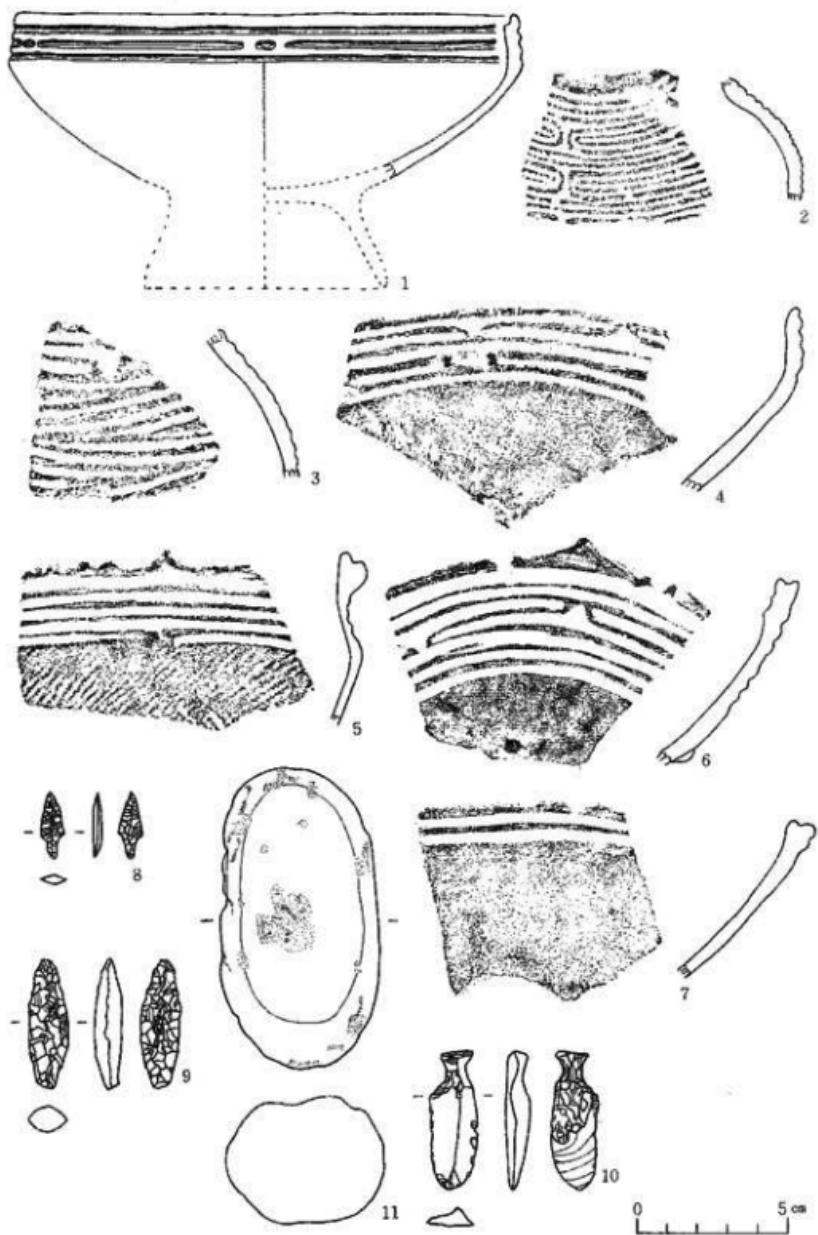


- 1 黑褐色(10Y R 5/6) 塩化物少量、褐灰色粘土少量混入
2 黑褐色(10Y R 5/6) 褐灰色粘土多量混入
3 新褐色(20Y R 5/6) 塩化物微量、黄褐色粘子少量混入
4 黑褐色(10Y R 5/6) 塩化物少量混入
5 黑褐色(10Y R 5/6) 塩化物微量、褐灰色粘土多量混入
6 褐褐色(10Y R 5/6) 塩化物微量、黑色土少量混入
7 品褐色(10Y R 5/6) 塩化物少量混入

- 1 暗褐色(5Y R 5/6) 塩化物少量混入
2 に深い黄褐色(10Y R 5/6) 塩化物少量、赤褐色粘子微量混入



第44図 SK 113・114・116～119土壤実測図



第45図 SK 116 出土遺物

SK 117 (第44図・第22図版)

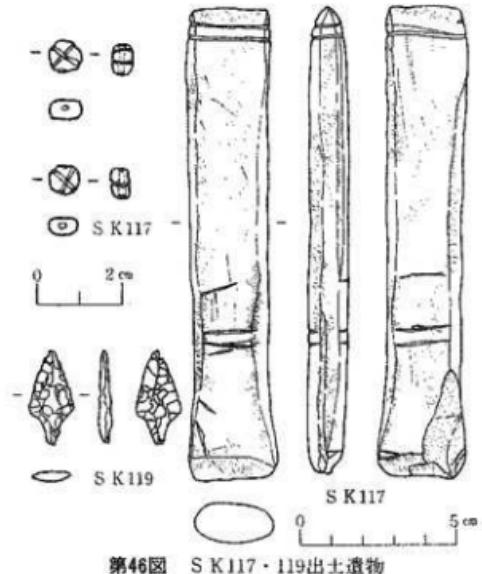
L F47グリッド北東に位置し、地山面で確認された。132cm×121cmのはば円形を呈し、深さは15cmである。底面は平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。底部から小玉と石棒状石器が出土した。小玉は土壤北西部に11個と3個がそれぞれ一塊となっており、二組の連繩状態を示すものであろうか。すべて土製で、径7~8mm、厚さ4~5mm、たすきかけ状の浅い沈線が両面をめぐり、赤色塗彩されている。14個ともにはば同様である。石棒状石器は長さ15.3cm、最大幅27mm、厚さ12mmを測り、折損した石刀をさらに研磨、加工したもので、図下端には折損部断面を残している。上方に2本、中央部に1本、その下方に2本の沈刻線が見られるが、全周を巡るものは1本のみである。両端は両面からの研磨により尖鋭化している(第46図)。

SK 118 (第44図)

L H47グリッド北西部に位置し、地山面で確認された。104cm×58cmの楕円形で長軸方位はN 30°W、深さは最深部で15cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを有して立ち上がっているが、北東部は急角度となっている。土器片が少量出土した。

SK 119 (第44図)

L I 50・51両グリッドにまたがっており、地山面で確認された。130cm×58cmで楕円形を呈し、長軸方位はN 70°Wである。南東隅が最も深く18cmの深さであるが、北西部では浅くなり10



第46図 SK 117・119出土遺物

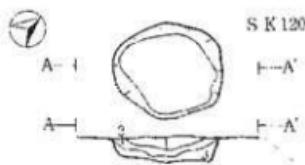
cm足らずとなる。底面はやや起伏があり、壁は底部付近は急角度で立ち上がるがしだいに緩やかとなる。土器片が少量と石鉄1点が出土している(第46図)。

SK 120 (第47図)

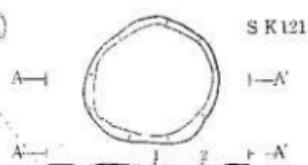
L G51グリッド両端に位置し、地山面で確認された。72cm×64cmの略円形で、最深部で19cmの深さを測る。底面は平坦で、壁は急角度をなしている。少量の土器片が出土した。

SK 121 (第47図)

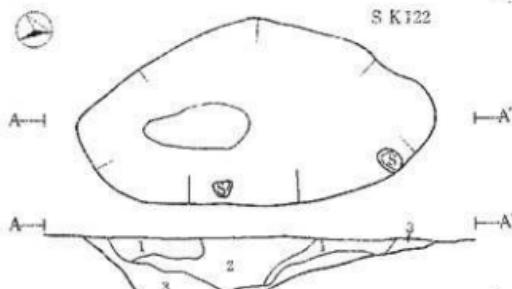
L G53グリッドにあり、地山面で確認された。径88cmほどの円形で、深さは中央付近の最深部でも9cm、他の部



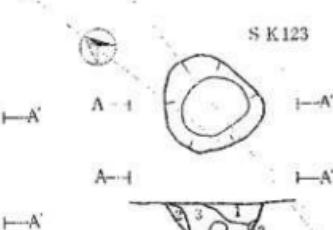
- 1 黑褐色 (7.5 Y R 5) 腐化物少量混入
2 黑褐色 (10 Y R 5) 腐化物少量混入
3 棕褐色 (10 Y R 4) 黄色土混入



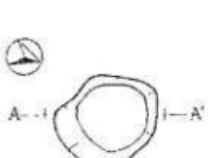
- 1 棕褐色 (10 Y R 5) 腐化物少量混入
2 棕褐色 (10 Y R 4) 腐化物少量混入
3 灰褐色 (10 Y R 5) 砂多量混入



- 1 黑褐色 (10 Y R 5) 小石少量混入
2 棕褐色 (10 Y R 4) 小石少量混入
3 棕褐色 (10 Y R 4) 腐化物少量、黄色土少量混入



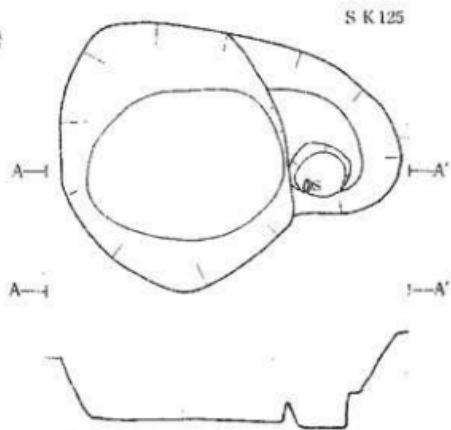
- 1 棕褐色 (10 Y R 5) 腐化物少量、小石少量混入
2 棕褐色 (10 Y R 4) 腐化物多量混入
3 黑褐色 (10 Y R 5) 腐化物少量混入



SK 124



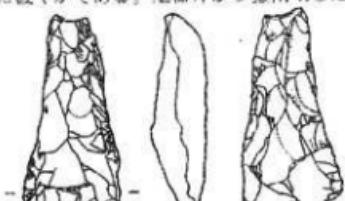
- 1 黑褐色 (10 Y R 5)
2 黑褐色 (10 Y R 5) 棕色土多量混入



0 1 m

第47図 SK 120~125土壤実測図

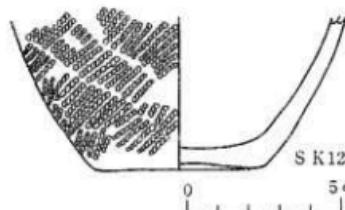
分では4~6cmと非常に浅い。底面は中央部がややくぼんでいるがおおよそ平坦で、壁は非常に緩やかである。上器片が少量出土した。



SK 122

SK 122 (第47図・第22図版)

LH55にその大部分があり、地山面で確認された。236cm×126cmの楕円形で、長軸方位はN6°W、最深部で46cmの深さを測る。底面も長楕円形であるが主として南半分が深く、壁の傾斜も全体に緩やかである。北側は特に浅く、なだらかになっている。多量の大洞A式の土器片と範状石器が出土した(第48図)。



第48図 SK 122・125出土遺物

SK 123 (第47図)

LE・LF47両グリッドにまたがり、地山面で確認された。68cm×62cmのはば円形を呈し、小型であるが深さは30cmを測る。底面に丸みがあり、中心部が最も深く、周辺部は5~7cm浅くなっている。壁は丸みを帯びて立ち上がっている。土器片が少量出土した。

SK 124 (第47図)

LE51グリッド西端の地山面で確認された。69cm×59cmの略円形で深さは35cmを測る。遺構上面に配石は見られないが、覆土中間部、底部には配石がある。底面はほぼ平坦であるが若干北側に傾斜している。壁は南側が幾分緩やかであるが、北側は急である。土器片が少量出土した。

SK 125 (第47図・第18図版)

K161杭と62杭のライン上にあり、第IV層上面で確認された。224cm×176cmの不整楕円形を呈し、長軸方位はN15°E、確認面から最深部まで59cmを測る。北側に40cm×35cmのビットが1個あり、底面は全体に平坦であるが北側が少し高くなる。壁は直線的に外方へ傾斜している。北側ビット中から大洞A式の土器片が出土している。第48図は織文が施された底部である。

SK 126 (第49図・第22図版)

LD47グリッド北東部に位置し、地山面で確認された。136cm×109cmで南側が少々歪んだ楕円形で、長軸方位はN11°E。最深部でも19cmと比較的浅いか、東側と西側との一部では深さが10cm前後とさらに浅くなっている。底面は起伏があり、中心部から北側にかけて径10~15cmの石が4個配されている。壁は緩やかに立ち上がっている。土器片が少量出土した。

第4章 発見された遺構と遺物

S K127(第49図・第23図版)

L B 46グリッドの中央付近の地山面で確認された。110cm × 92cmの円形に近い楕円形で、長軸方位はN 80°W、深さ20cmを測る。底面はほぼ平坦で、北西隅が若干浅めになっており、西側は底面より10cmほど高い部分がある。壁は東、西側は急角度であるが、南北では緩やかに立ち上がりっている。少量の土器片が出土した。

S K128(第49図・第23図版)

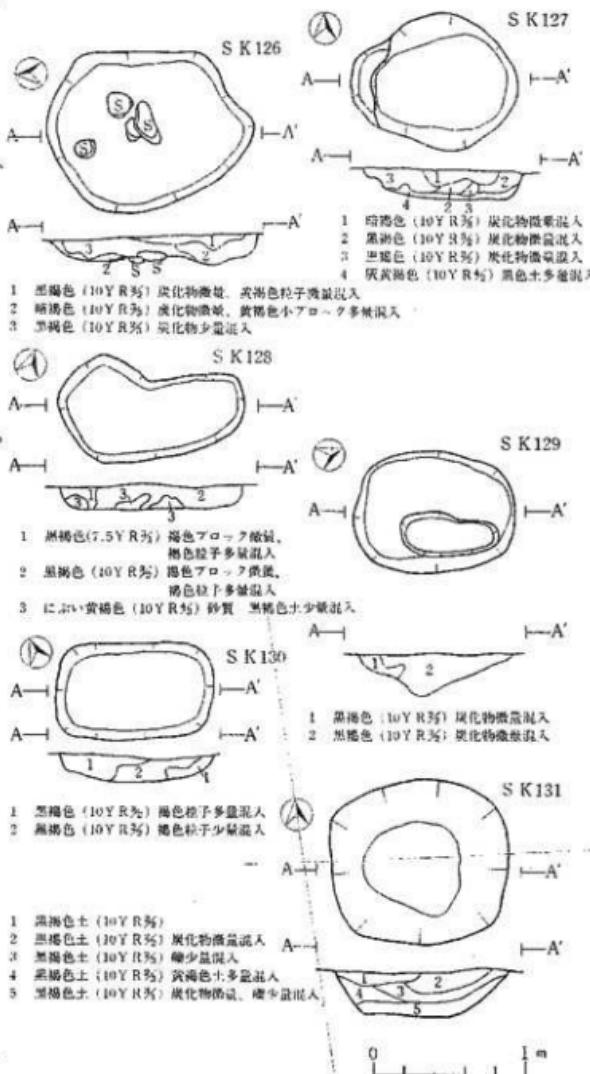
L B 46グリッドの南側に位置し、地山面で確認された。122cm × 72cmの歪んだ楕円形を呈している。中心部分がわずかに低く、17cmの深さである。長軸方向はN 85°W、壁は急角度をなしている。遺物は出土しなかった。

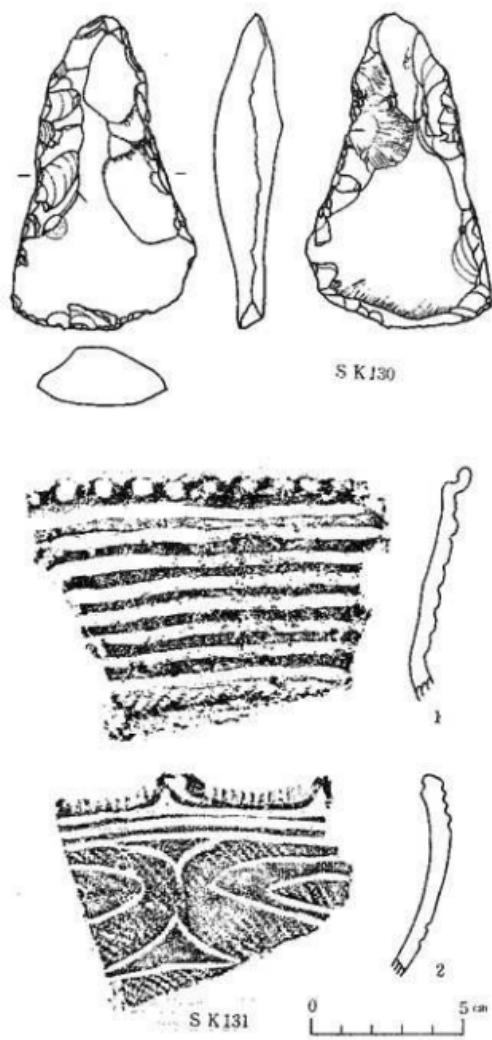
S K129(第49図・第23図版)

L B 46グリッド南西部に位置し、地山面で確認された。106cm × 82cmの楕円形で、東側に40cm × 30cmのピット状のくぼみがあり、この部分で23cmの深さを有する。長軸方位はN 25°Eを測り、壁は緩やかである。大洞C₂式の土器片が少量出土している。

S K130 (第49図・第23図版)

L B・L C 46グリッドにあり、地山面で確認された。104cm × 64cmの隅丸長方形を呈しており、深さ21cm、長軸方位はN 85°Eを測る。中心部付近が最深部で周辺部では5～8cmほど浅く





第50図 SK 130・131出土遺物

は底面から20cmほどまでは丸みをおびているが、その上部では緩やかな立ち上がりとなる。大洞C₂・A式の土器片と折損した石刀先端部が出土している（第52図）。

なっている。壁は少し丸みを帯びて立ち上がっている。少量の土器片と打製石斧1点が出土した（第50図）。

SK 131（第49図・第23図版）

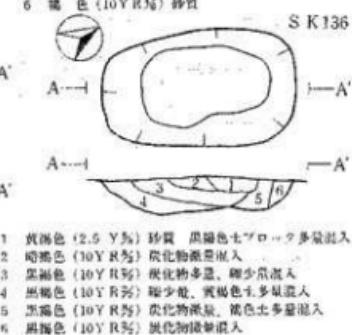
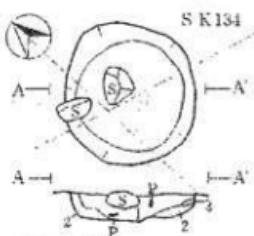
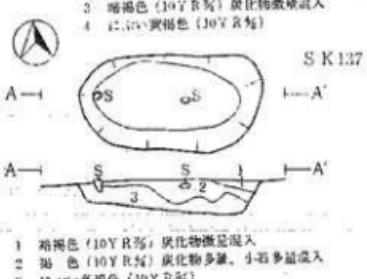
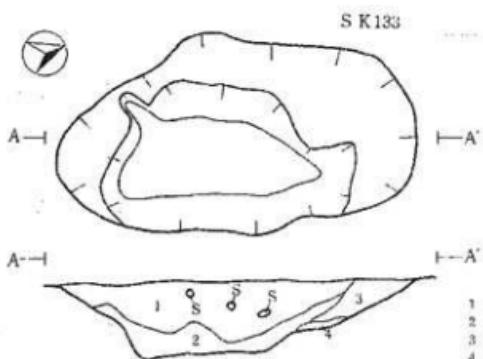
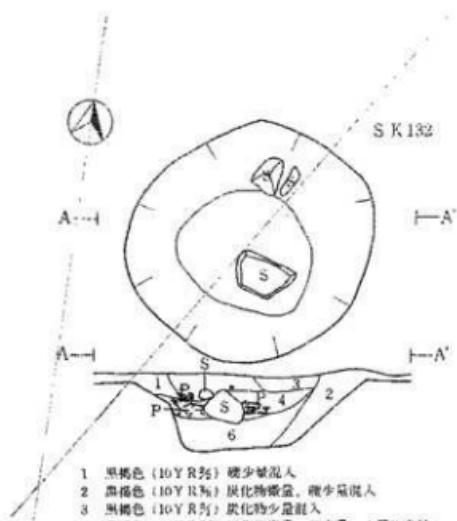
K J 46グリッド北東に位置し、確認は地山面で行われた。116cm×110cmのほぼ円形を呈し、最深部で35cmを測るが、西側でわずかに浅くなっている。壁はなだらかな立ち上がりを示している。大洞C₂式の土器片が出土している（第50図）。

SK 132（第51図・第24図版）

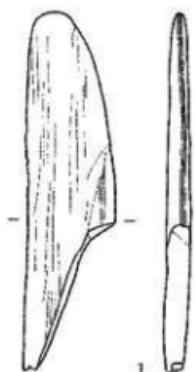
K J 46・47、L A 46・47の4グリッドにかかり、地山面で確認がなされた。径155cmほどの円形で、深さ53cmを測る。底面も円形で、南側が中心部よりも8cmほど浅くなっている。底部には36cm×24cmの大きな石が1個、北側にも2個の石が置かれている。埋土中央部の第IV層中にも石と大洞C₂式の土器片が多量に含まれている。この他トチの遺体が少量検出された。

SK 133（第51図・第24図版）

L E 44・45グリッドにあり、地山面で検出された。239cm×130cmの楕円形で、長軸方位はN14°E、深さ46cmを測る。底面は平坦であるが北側および西側がしだいに高くなり、壁



第51図 S K 132~138土壤実測図



SK 134 (第51図・第23図版)

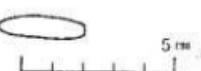
K I 46グリッド南東隅にあり、地山面で確認された。98cm×86cmではば円形を呈し、遺構上面に二側の石が配置されている。深さ19cmで底面も円形で平坦であるが中心部に凸凹が見られる。壁は丸みを帯びて立ち上がっている。土器片が少量と折損した石棒の一部が出た。

SK 135 (第51図・第23図版)

K J 46グリッドの南部にあり、地山面で確認された。95cm×56cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 40°E、深さ16cmを測る。底面は全体が丸みを帯び、壁はゆるやかである。大洞C₂式の土器片が少量出土した。

SK 136 (第51図・第24図版)

K J 46グリッド西部に位置し、地山面で確認された。127cm×78cmの楕円形で、長軸方位はN 26°E、深さ26cmを測る。底面は中央部がやや盛り上がり、壁は丸みを有して緩やかに立ち上がっている。大洞A式の土器片が数点出土した。



第52図

SK 133 出土遺物

SK 137 (第51図・第25図版)

L D 44グリッド北西部にあり、地山面で検出した。121cm×63cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 89°W、最深部で21cmの深さを測る。底面は南西側がやや高くなっているがほぼ平坦で、壁は直線的に傾斜している。少量の土器片が出土した。

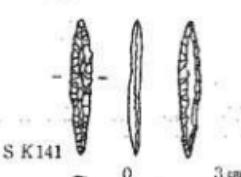
SK 138 (第51図・第25図版)

L C 45グリッド中央部に位置し、地山面で確認された。96cm×73cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 65°E、深さ26cmを測る。底面は西側ほど低くなってしまっており、東から中心付近に幅15cmの溝が走る。壁は西側では緩やかであるが、東側では急角度に立ち上がっている。土器片が少量出土している。



SK 139 (第54図・第25図版)

L C 44・45グリッドにまたがり、地山面で確認された。165cm×96cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 30°W、深さ17cmを測る。底面は南東隅付近が若干高まっている他は、人よそ平坦である。壁は緩やかな立ち上がりを示している。大洞C₂式の土器片が少量と石鉄1点が出土している。(第53図)。

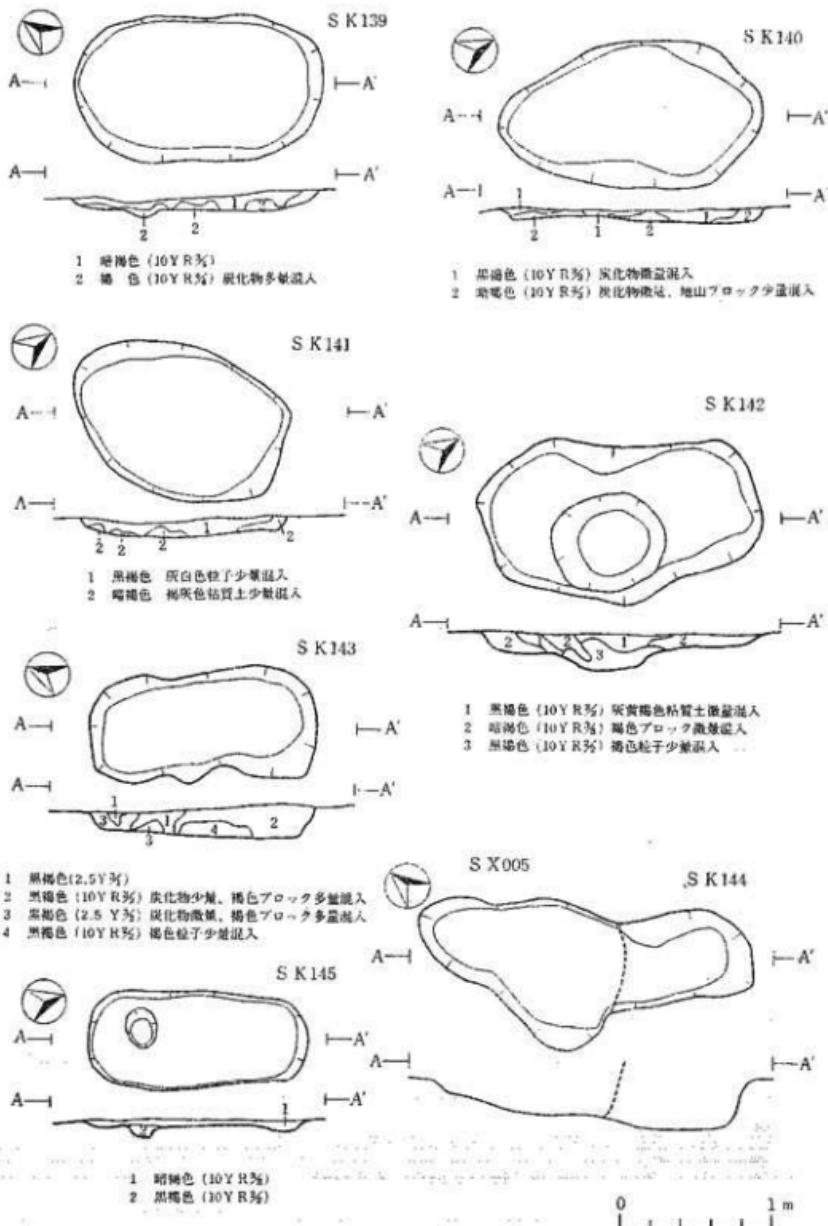


SK 140 (第54図・第25図版)

L B 44・45両グリッドにまたがり、地山面で確認された。174cm×97cmの楕円形を呈し、最深部でも13cmと浅い。底面は全体的に平

第53図

SK 139・141 出土遺物



第54図 SK 139~145土壤・SX 005実測図

坦で、壁は低いが外方に傾斜して立ち上がっている。長軸方位はN21°E、土器片が少量出土。

S K 141 (第54図・第25図版)

L B・L C44グリッドにまたがり、地山面で確認された。146cm×99cmの楕円形で、深さ16cm、長軸方位N82°Eを測る。底面は中心付近が周辺よりも5~7cmほど深くなっている。壁は幾分丸みを帯びて立ち上がっている。少量の土器片と石鐵が1点出土した(第53図)。

S K 142 (第54図・第25図版)

K I 44グリッド中央部に位置し、地山面で確認がなされた。183cm×105cmの楕円形で、長軸方位はN33°Eを測る。底面が円形にくばんでおり、この部分の深さは25cm、他の浅い所で10cm前後を測る。壁は南側では丸みを帯び、北側では緩やかに立ち上がっている。少量の土器片と土偶の一部が出土した。

S K 143 (第54図・第26図版)

K I・K J 45両グリッドにまたがっており、地山面で確認された。149cm×76cmの楕円形を呈し、長軸方位はN10°W、深さ21cmを測る。底面は全体に平坦で、壁は緩く傾斜して立ち上がっている。大洞C₂式土器が出土した。

S K 144 (第54図)

L C44の南部に位置し、地山面で確認された。S X 005上器—括磨棄遺構を掘り上げた段階で確認されたので本遺構の方が古いと思われる。およそ110cm×58cmの楕円形であろうと思われ、深さは37cm、長軸方位はN68°Wを測る。底面は西側がだいに高くなり、壁は急角度で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

S K 145 (第54図)

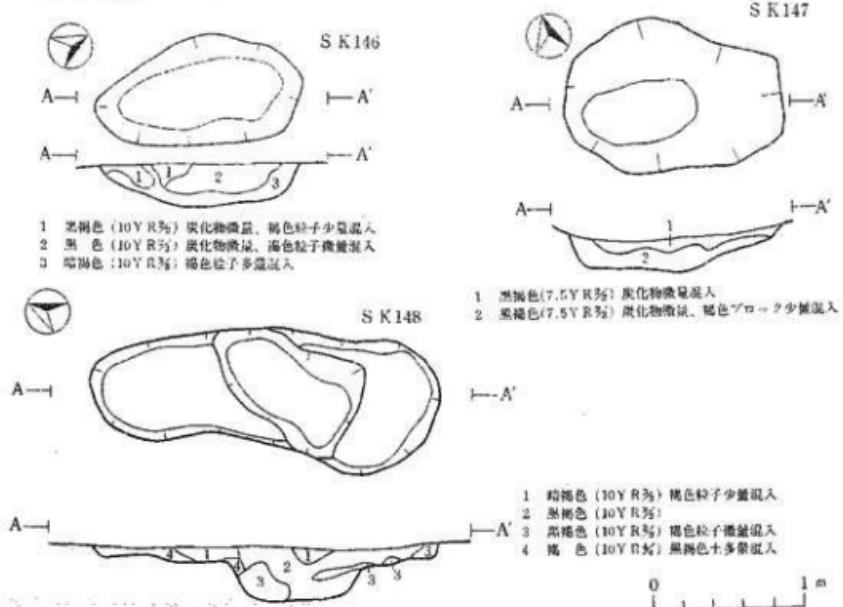
K J・L A45両グリッドにあり、地山面で確認された。144cm×68cmの楕円形を呈し、主軸方位はN32°E、深さは9cmと浅い。底面はほぼ平坦で南側に25cm×19cm、深さ14cmのビットがある。壁は低く、北側がなだらかになっている。大洞C₂式の土器片が少量出土した。

S K 146 (第55図・第26図版)

L A44・45両グリッドにあり、地山面で確認された。139cm×72cmの楕円形であるが、南側がやや細くなっている。長軸方位はN16°E、最深部で27cmの深さを測る。底面は平坦ではなく丸みを帯び、壁の立ち上がりは南側が北側よりも緩やかである。大洞C₂式の土器片が少量出土した。

S K 147 (第55図・第26図版)

K H41・42グリッドに位置し、地山面で確認された。144cm×102cmの楕円形を呈し、長軸方位はN71°W、最深部で36cmの深さを測る。主たる底面は西~中央部にあり、壁は東側がなだらかになっている。大洞A式土器が多量に出土した。



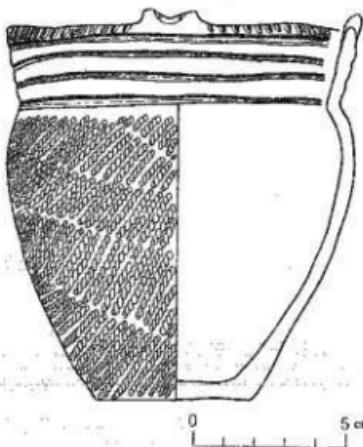
第55図 SK 146～148土壤実測図

SK 148 (第55図・第27図版)

K F43・44、K G43・44の4グリッドにまたがり、地山面で確認がなされた。232cm×77cmの細長い楕円形を呈し、長軸方位はN15°Wを測る。南北両側が浅く、10cmの深さであるが、中央部で一段低くなり、この部分で38cmの深さを有する。底面は平坦で、壁は中央部、南北両端部とともにわずかな丸みを有しながら傾斜して立ち上がる。中央部のくぼみは土壌の重複の可能性があるが、平面や土層断面では窺い知ることができなかった。大洞A式土器が少量出土した。

SK 149 (第189図・第68図版)

平安時代のSK(I)002の床面を精査中に検出された。187cm×111cmの方形に近い形をしており、長軸方位はN25°W、SK(I)002床面からの深さは17cmを測る。底面はほぼ平坦で径10cmほどの石が数個



第56図 SK 149 出土遺物

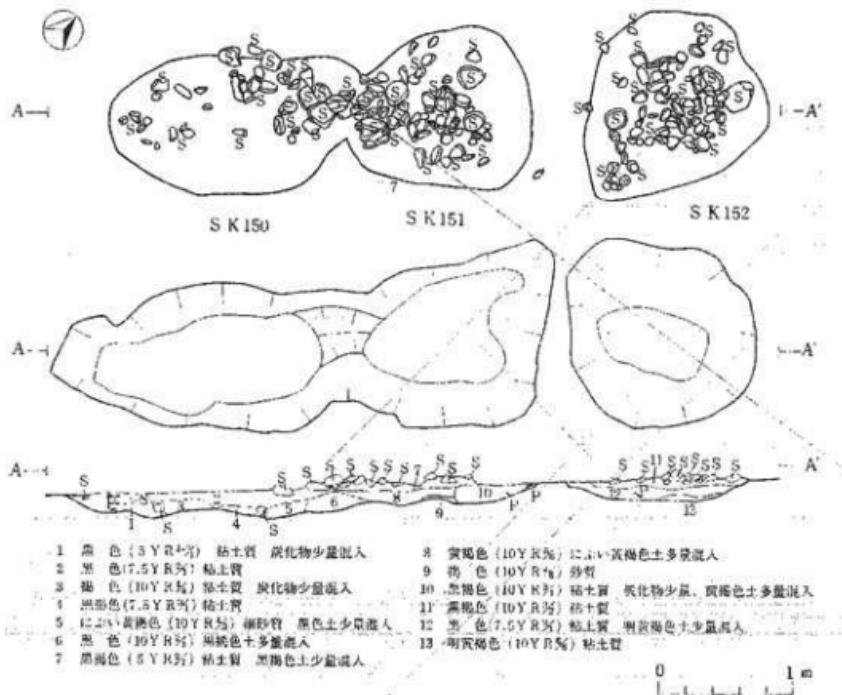
見られる。北東部から完形土器が出土した。口径10.5cm、底径5.3cm、器高13.0cmの小形深鉢で両面に赤色顔料が施され、内面にはその上に褐色の物質が付着している（第56図）。

SK 150（第57図・第27図版）

KF・KG42グリッドに位置し、地山面で確認された。SK 151により東端を切られているが、確認面ではほぼ190cm×102cmの楕円形を呈し、長軸方位はN 60°Eを測る。造構上面に40数個の配石があるが土壇上部のみに限られ、埋土中にはほとんど入り込んでいない。底面には凸があり、最深部で26cmの深さを有している。壁は緩やかである。大洞A式の土器片少量と、石錐2点、その他の石器1点（第58図）が出土した。

SK 151（第57図・第27図版）

KF42グリッド中央部にあり、地山面で確認された。確認面では134cm×120cmの略円形で上面に90余個におよぶ配石を施している。配石は造構上面のみで、土壇埋土中には5~6cm入り込んでいるだけである。土壇上面から底面までは16cmの深さで、壁は非常に緩やかである。土器少量と石錐1点が出土した（第58図）。



第57図 SK 150~152土壤実測図

SK 152 (第57図・第27図版)

K F42グリッド北東部に位置し、地山面で確認された。SK 150・151とは北東～南西方に向かって一直線に並ぶ。確認面の平面形は162cm×130cmの大きさであるが、なんだ円形である。土壤上面に100個ほどの配石が見られる。土壌確認面から最深部までは17cmを測り、底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がってい。土器片少量と、折損した磨製石斧が1点出土した(第58図)。

② 土器棺墓

SR 001 (第60図・第4・27・68図版)

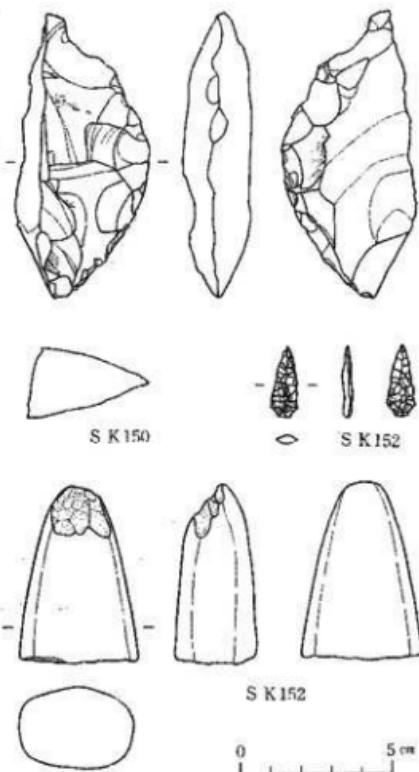
L I 56グリッド内にあり、地山砂礫層を穿つ墓壙を造築している。墓壙上面は径47cmの円形で、深さ37cmを測り、底面より5cm上方に土器棺を正位に置く。土器棺は口径28.5cm、胴部最大径30.8cm、底径推定10.2cm、器高39.4cmの大形粗製深鉢で底部を一部欠くが穿孔ではない(第67図)。

SR 002 (第60図)

N D60グリッドにあり、土器棺墓としては西端にある。地山面で確認された。墓壙上面は北側の輪郭が旧水田畦畔により土色が変色しており不明であるが、およそ47cm×38cmの楕円形を呈し、墓壙の深さは23cmほどである。土器棺は壙底より3cm上方に納置され、一部が破損して検出された。

SR 004 (第60図・第28・68図版)

M G52グリッドの中央部に位置し、地山面で検出された。墓壙上面は東側の輪郭が不鮮明であるが、およそ径40cmの円形を呈するらしい。墓壙の深さは確認面より29cmを測り、壙底より3cm上方に土器棺を納置する。棺は若干北に傾き、口径推定28.8cm、底径9.7cm、器高30cmの大形粗製深鉢で底部穿孔はない(第67図)。この土器棺上には平面27cm×17cm、厚さ5cmほどの扁平な石が、土器棺上部の北半を覆うように置かれている。蓋であろう。



第58図 SK 150~152出土遺物

S R 005 (第60図・第28・68図版)

M G 54グリッド内にあり、地山面で検出された。墓壙上面は径40cmの楕円形を呈するが、下方はやや斜位に穿たれて袋状となり、壙底も平坦ではない。壙底より16cmほど上方に土器棺を若干斜位に納置しているが、この場合、土器棺の傾きは墓壙の傾きと同一である。土器棺は口径29.2cm、底径7.6cm、器高37.7cmの大形粗製深鉢で、底部に穿孔はない（第67図）。

S R 006 (第60図)

M H 56グリッドにあり、地山面で検出された。墓壙上面は36cm×29cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。壙底はほぼ平坦で、深さ18cmを測り、壙底より5cm上方に土器棺がほぼ正位に納置される。土器棺は大形粗製深鉢下半部のみで、現存口径28.3cm、底径10.2cm、現存器高19.8cmを測る。底部穿孔はない（第67図）。

S R 007 (第61図・第69図版)

M H 54グリッドにあり、地山面で検出された。墓壙上面は径45cmほどの円形で、深さ25cm、側壁は擂鉢状に傾斜し、底面より5cm上方に土器棺が納置される。土器棺は口径推定27.6cm、底径8.0cm、器高29.9cmの大形粗製深鉢で、墓壙内で破損している。底部穿孔はない。土器棺内埋土土層断面図作成時には検出されなかったが、土器棺内に第59図に示す土器が入っていた。精製の小形台付深鉢で、口径12.6cm、高台径推定7.6cm、器高13.9cmを測る（第67図）。

S R 008 (第61図)

M G 63グリッド内に位置し、第IV層上面で検出された。墓壙上面は44cm×25cmの楕円形で、擂鉢状に下部が細くなる。墓壙の深さは24cmを測り、壙底より13cmほど上方に土器棺が正位に納置されている。

S R 009 (第61図・第28・29・69図版)



第59図 S R 007 棺身内埋納土器

M A 60グリッド内に位置し、地山面で検出された。墓壙上面は50cm×42cmの楕円形を呈し、垂直に掘り下げているが、網狀北西部は外方へ張り出している。壙底は平坦ではなく、深さ38cmを測り、9cm上方に土器棺が正位に納置されている。土器棺は口径28.3cm、胸部最大径推定30.8cm、底径11cm、器高39.9cmを測る大形粗製深鉢である（第68図）。

S R 010 (第61図・第29・69図版)

L I 44グリッド杭の西にあり、地山面で確認された。土器棺墓としては最南端にある。墓壙上面は58cm×40cmの楕円形を呈し、深さ33cmを測る。壙底は丸みを帯び、4cmほど上方に土器棺が納置されているが、土器棺は底部より5~10cmのところで折れ、大きく北側に傾いている。

第4章 発見された遺構と遺物

上器棺は口径32cm、底径9.3cm、器高38.5cmの大形粗製深鉢である（第68図）。

S R 012（第62図・第29図版）

M A 60グリッド内にあり、第IV層上面で確認された。墓壙上面は46cm×41cmの略円形で、側壁は擂鉢状であるが底部は垂直に近く、深さ32cmを測る。壙底面は平坦で、これより6cm上方に大形粗製深鉢の土器棺が納置されている。土器棺底部付近の埋土には赤色顔料が混入し、これが土器内から流出、浸透したためか、底部周辺及びその下部も赤色化している。

S R 015（第62図・第30・69図版）

M B 61グリッド内にあり、第IV層上面で確認された。墓壙上面は並んだ梢円形で54cm×46cm、壙底までの深さは37cmを測る。墓壙はほぼ垂直に掘り下げられており、底面に丸みを有し、これより5cm上方に上器棺が納置される。土器棺は発掘時に口縁部を欠いてしまったが、おおよそ口径23.7cm、底径8.8cm、器高推定38cmの大形粗製深鉢で穿孔はない。

S R 016（第62図・第30・69図版）

M F 58グリッド内、S X 001の東端に検出された。同様にS X 001の東端で検出されたものに本遺構の北2mのS R 017がある。これらはS X 001の覆土を若干掘り下げた段階で検出されたものであるが、S X 001より古いとすると土器棺の上部がS X 001の掘り込みによって破壊を受けていない点で不自然である。この付近にはS R 016・017と距離的に密接して019・022・023と5基の土器棺が構築されており、このうち3基はS X 001の外に検出されている。S X 001は現水田の水路に分断されており、水路部分の下の調査は行わず、したがって全容を明らかにしたわけではないが、少なくとも長径8m余りの梢円形を呈する遺構らしく、大洞C1式の完形土器を含む多量の土器破片や石がくぼみの中に投入された如き状況で出土し、土器棺はその東端のみに検出されている。

以上のことからS X 001とS R 016・017の時期的関係を考慮すると、両遺構が同時存在で、何らかの関連を持った統一体と見なすには横断的根拠に乏しく、むしろ2基の土器棺はS X 001埋没後に新たに構築されたものと考えた方が妥当であると判断される。

墓壙上面は径30cmほどの円形で、墓壙はほぼ垂直に掘り込まれている。壙底までの深さは22cmを測り、底部より6cm上方に口径19cm、底径8cm、器高20.5cmの粗製深鉢の土器棺が正位に納置される。土器棺底部に穿孔はない。棺内底部より6cm上方に深鉢下部がこれも正位に納入されており、蓋としての使用が考えられる（図版30）。

S R 017（第62図、第31・59図版）

S R 016の北2mの位置にあり、墓壙上面は径50cmほどの円形を呈し、墓壙は側壁が傾斜する擂鉢状となっている。壙底は上面から38cmの深さで、これより6cm上方に土器棺が納置されている。棺身は復原していないが、口径約28cm、底径約10cm、器高約35cmほどの深鉢を用い、

これに口径23.8cm、底径約8cm、器高20.7cmの柄身より一回り小形の深鉢を逆位に被覆して合口蓋としている。合口蓋を有する土器棺は本例のみである。柄身底部に穿孔はない。

S R 018 (第63図・第31・69図版)

M C 61グリッド内にあり、平安時代S 1-001型穴住居跡の北隅で検出された。同住居跡壁によって破壊を受けており、墓壙南部の上面輪郭は不明であるが、径38cmほどの円形を呈するものであろうと思われる。墓壙の確認面は地山面で、これより壙底まで26cmを測り、壙底から2cm上方に土器棺が正位に納置される。土器棺は口径31cm、底径8.2cm、器高31.3cmの深鉢で、口縁部に幅1.5cmほどの文様帶を有している。底部に穿孔はない(第68図)。

S R 019 (第63図・第4・70図版)

M E 59グリッドにあり、第IV層で確認された。墓壙上面は41cm×35cmの梢円形を呈し、墓壙確認面より33cmの深さを有する。壙底は平坦で壙底より8cm上方に土器棺を正位に納置している。土器棺は口径28.6cm、底径4.7cm、器高33.9cmの深鉢で、口縁部に刺突列点と二条の沈線からなる文様帶を有している。底部穿孔はない(第69図)。

S R 020 (第63図・第32図版)

M A 56グリッドにあり、第IV層上面で確認された。墓壙上面は23cm×17cmの梢円形を呈し、墓壙確認面より壙底まで23cmほどの深さを測る。墓壙は播種状を呈し、底面より3cmほど上方に土器棺が正位に納置されている。土器棺は本例のみ合付体で、口径約15cm、器高約10cmを測り、土器棺内埋土下方には赤色顔料が含まれている。

S R 021 (第63図・第32・70図版)

M B 56グリッドに位置し、第IV層上面で確認された。墓壙上面は径40cmの円形で、墓壙確認面から墓壙底部までは23cmの深さを測る。底面はやや丸みを有し、これより4cm上方に土器棺が正位に納置されている。土器棺は底部を欠くが、口径推定24.2cm、器高推定28.3cm、底径推定6.9cmを測る深鉢である(第69図)。

S R 022 (第63図・第32・70図版)

M F 59グリッド内にあり、地山面で検出された。S R 016・017・019・023に近接した位置にある。墓壙上部は径42cmほどの円形で、墓壙は側壁が張みながら下部ほど狭くなり、確認面より壙底まで30cmの深さを測る。しかし土器棺口縁部は墓壙確認面より9cm上にあり、墓壙の深さは40cmほどになろう。壙底は平坦で、6cm上方に土器棺が正位に納置されている。土器棺は口径28.5cm、底径9.0cm、器高30.9cmの深鉢で、棺内埋土下方には赤色顔料を混入する(第69図)。

S R 023 (第64図)

M F 59グリッド内にあり、地山面で検出された。S R 016・017・019・022に極めて近接した位置にある。墓壙上部は径36cmの円形で、確認面から壙底まで27cmの深さを測る。墓壙は中間

第4章 発見された遺構と遺物

部以下が細く、底部が逆円錐形となり、壇底より15cm上方に土器棺を納置している。土器棺は大形粗製深鉢であるが、南に傾斜しており、大きく破損している。

S R 024 (第64図)

M A57グリッドにあり、S R 020の北3.3mの位置にある。第IV層にて確認された。墓壙上面は径38cmの円形で、墓壙確認面から壇底までは15cmの深さを測る。しかし土器棺上端は墓壙上面より12cm上にあるので、実際の深さは30cmほどになろう。壇底より3cm上方に土器棺が正位に納置される。土器棺は大形粗製深鉢下半部で、現存口径27.8cm、底径推定8.7cm、器高推定21.3cmを測る(第69図)。

S R 025 (第64図)

M B62グリッド内にあり、地山面で確認された。大形粗製深鉢の底部付近のみであるが、ちょうど旧水田畦畔の真下にあり、畦畔築成時に破壊を受けたものであろう。墓壙確認面では48cm×40cmの歪んだ円形で、壇底まで24cmの深さを測る。壇底から18cm上方に土器棺を正位に納置している。

S R 026 (第64図)

M A59グリッドにあり、第IV層で確認された。墓壙上面は49cm×35cmの楕円形を呈し、確認面より壇底まで22cmの深さを測る。これも土器棺上端が墓壙確認面の21cm上にあるので、墓壙の真の深さは少なくとも43cmほどになろう。土器棺は壇底より7cmほど上方に正位に納置されている。大形粗製深鉢である。

S R 027 (第65図)

L F58グリッドにあり、地山面で確認された。墓壙上面は41cm×31cmの楕円形で、墓壙側壁はかなり歪みがあり、上面から壇底までは33cmの深さを測る。土器棺は上面でおおよその輪郭が分るが、墓壙内では破片となってほとんど原形を留めない。壇底より6cm上有に最下部がある。

S R 028 (第65図・第33・70図版)

L G49グリッドにあり、地山上面で確認された。墓壙は上面が径35cmほどの円形を呈し、下方ほど狭くなり、底部は平坦でない。確認面から壇底までは29cmを測り、壇底より6cm上方に土器棺が正位に納置される。土器棺は粗製深鉢で、口径20.5cm、底径9.0cm、器高23.6cm、胴部最大径21.1cmを測り、底部に穿孔はない(第69図)。

S R 029 (第65図・第70図版)

L H53グリッドにあり、地山面で確認された。墓壙上面は径30cmほどの円形を呈し、確認面から壇底までは24cmを測る。墓壙は下方が細く尖る逆円錐形で、壇底から6cm上方に土器棺が正位に納置される。土器棺は口径22.6cm、底径7.4cm、器高35.5cmの大形粗製深鉢である。底部に穿孔はない。

S R 030 (第65図・第33・70図版)

L E 47, L F 47両グリッド杭の中間に位置し、墓壙上面は径40cmほどの円形を呈し、墓壙確認面から壙底まで32cmの深さを測る。墓壙は西側壁が緩く傾斜する歪んだ逆円錐形で、壙底に密着させて土器棺を正位に納置している。土器棺は口径29.9cm、底径8.3cm、器高36.0cmの大形粗製深鉢で底部に穿孔はない(第70図)。

S R 031 (第66図・第33・70図版)

L G 46グリッド内に位置し、地山面で確認された。墓壙上面は径55cmほどの円形で、墓壙確認面から壙底までは48cmの深さを測る。墓壙は階鉢状を呈し、底面は平坦で、底面より5cm上方に土器棺が正位に納置されている。土器棺は口径36.5cm、底径11.4cm、器高43.7cmの大形粗製深鉢(第70図)で、底部の一部を欠くが意識的な穿孔か否か判断しかねる。土器棺上面と棺内に土器破片が見られ、これを復原すると口径30.6cm、器高37.2cmの大形粗製深鉢となった(第70図)。恐らく合口式の蓋として被せたものであろう。

S R 032 (第66図・第70図版)

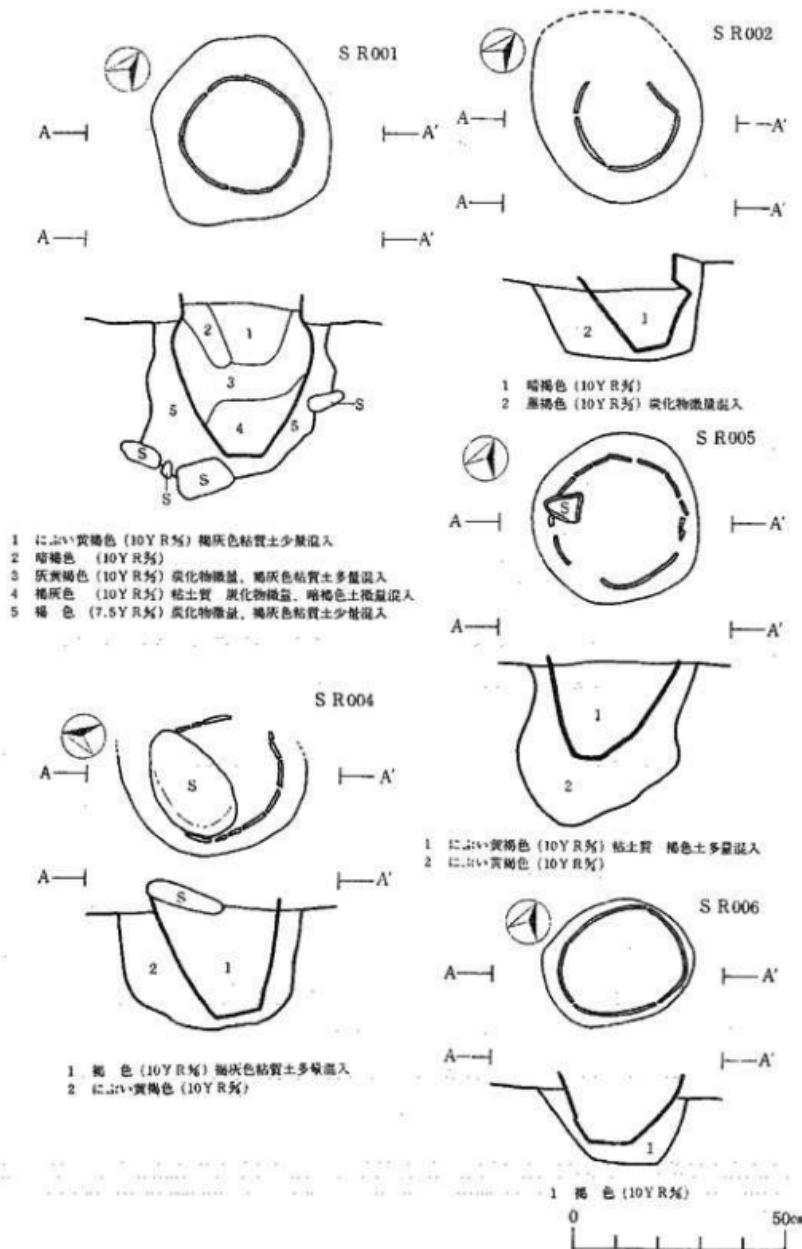
L F 45・46両グリッド杭の中間に位置し、地山面で確認された。墓壙上面は径35cmほどの円形で、墓壙は底部ほど細くなる逆円錐形を呈し、墓壙上面から壙底までは25cmの深さを測る。壙底より7cm上方に土器棺が正位に納置されている。土器棺は口径推定27.5cm、底径8.6cm、器高推定31.5cmの大形粗製深鉢で、底部に穿孔はない(第70図)。

S R 033 (第66図)

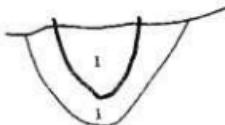
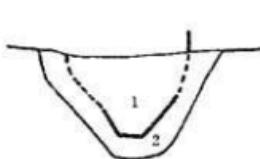
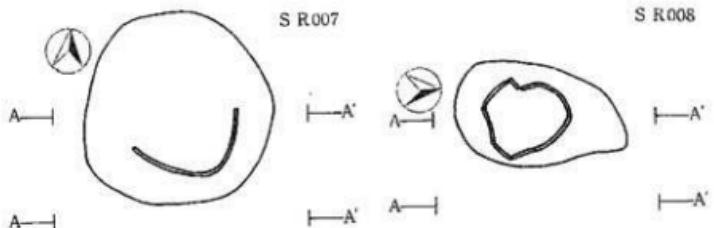
L G 45グリッド内にあり、地山面で確認された。墓壙の上面は径33cmほどの円形を呈し、墓壙底面は丸みを有して側壁と連なっている。壙底より4cm上方に土器棺が正位に埋置されているが土器棺口縁部は墓壙確認面より約10cm上にある。

S R 034 (第66図・第34・71図版)

L F 51グリッドに位置し、地山面で確認された。墓壙の上面は40cm×35cmの楕円形で、墓壙確認面から壙底まで26cmの深さを有する。墓壙は下部ほど細くなる逆円錐形で、壙底より4cm上方に土器棺が正位に埋置されている。土器棺口縁部は墓壙確認面より約10cm上にある。土器棺は口径推定35.7cm、底径12.4cm、器高35.9cmの大形粗製深鉢で、底部に穿孔はない。口縁部に大洞C₂式の精製土器に施文される大腿骨文の如き文様が沈線で表現されている(第70図)。

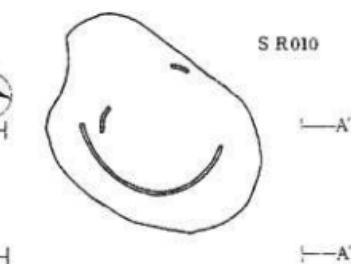
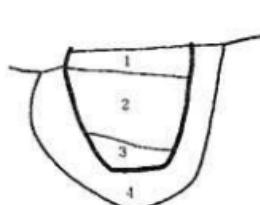
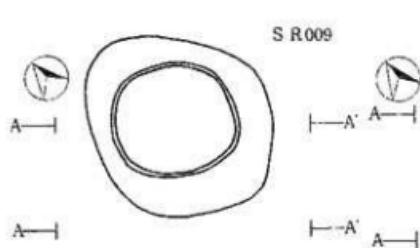


第60図 S R 001・002・004～006土器棺実測図



1 暗褐色 (10YR 5/6) 炭化物微量混入

- 2 暗 色 (10YR 5/6)



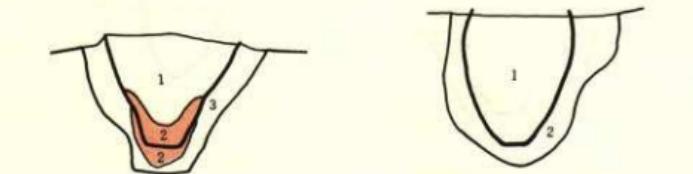
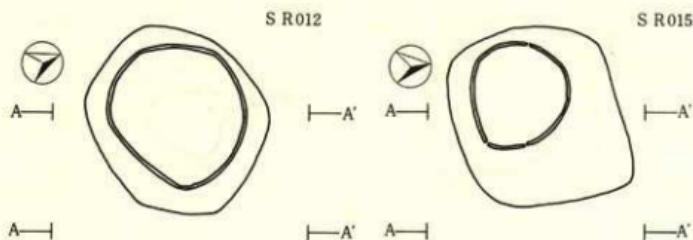
1 暗褐色 (10YR 5/6) 炭化物微量、褐色上多量混入

2 暗褐色 (10YR 5/6) 炭化物多量混入

- 1 暗褐色 (10YR 5/6) 炭化物微量混入
2 暗褐色 (10YR 5/6) 炭化物微量混入
3 黑褐色 (10YR 4/6) 炭化物微量混入
4 暗 色 (10YR 5/6) 炭化物微量混入

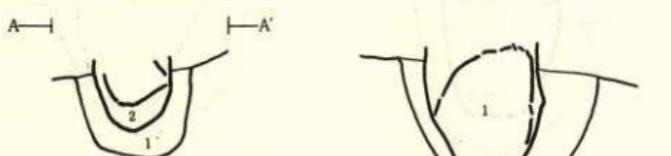
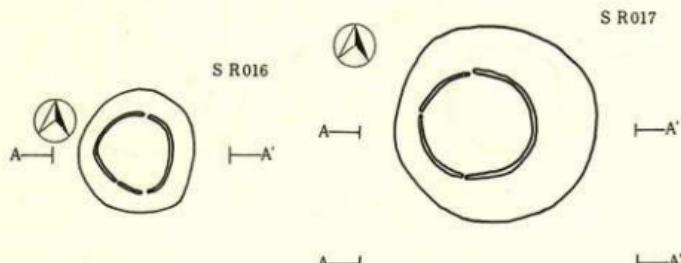


第61図 S R007~010土器棺実測図



- 1 墨褐色 (10Y R 5%)
2 墨赤褐色 (5Y R 5%) 赤色顔料少量混入
3 墨褐色 (10Y R 5%) 黄化物少量混入

- 1 墨褐色 (10Y R 5%) 黄化物多量、褐色土多量混入
2 墨色 (10Y R 5%)

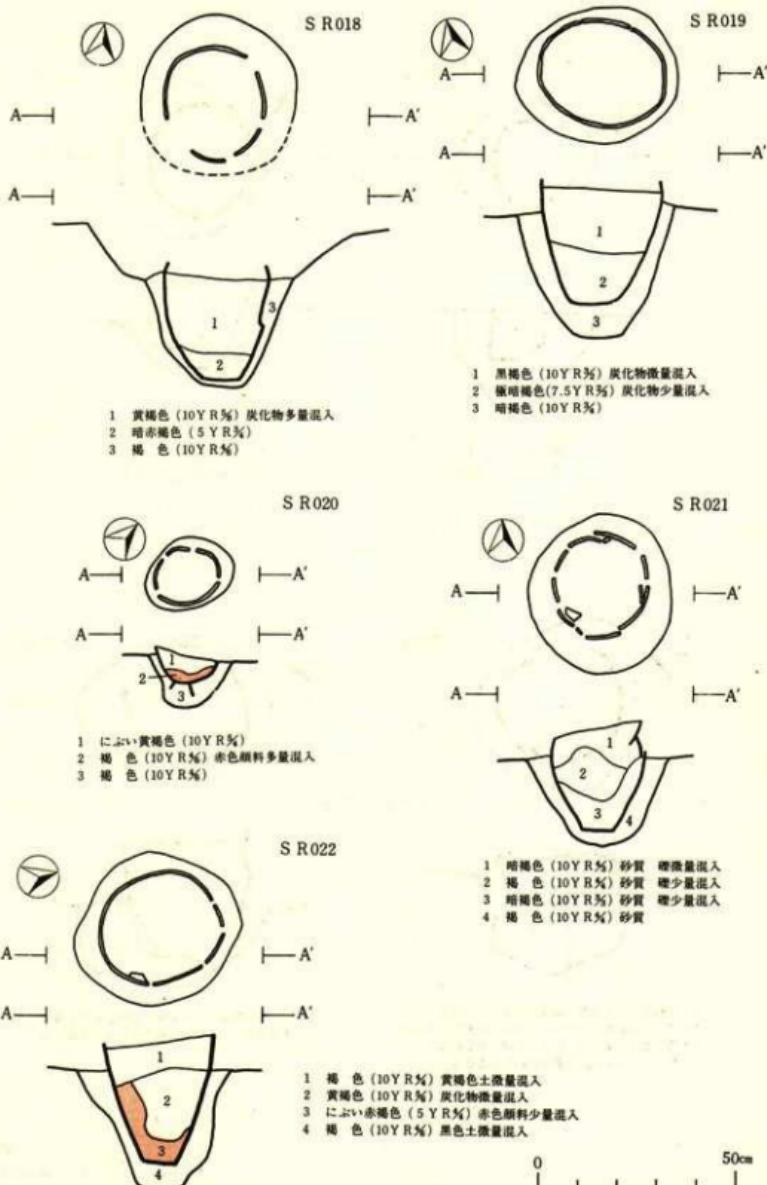


- 1 墨褐色 (7.5Y R 5%)
2 黄褐色 (10Y R 5%)

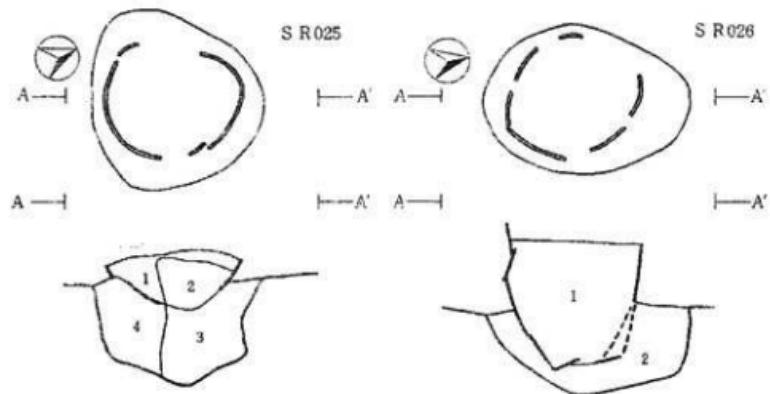
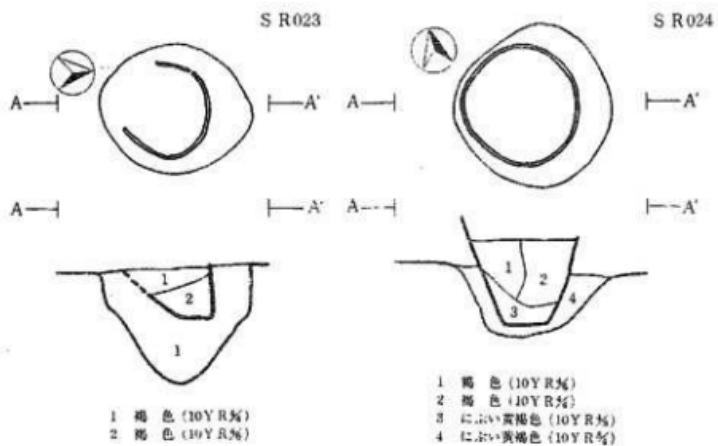
- 1 墨褐色 (10Y R 5%)
2 墨褐色 (10Y R 5%)



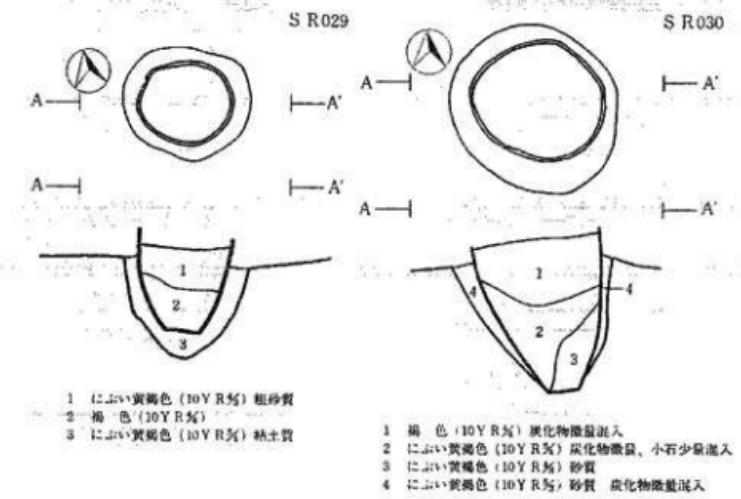
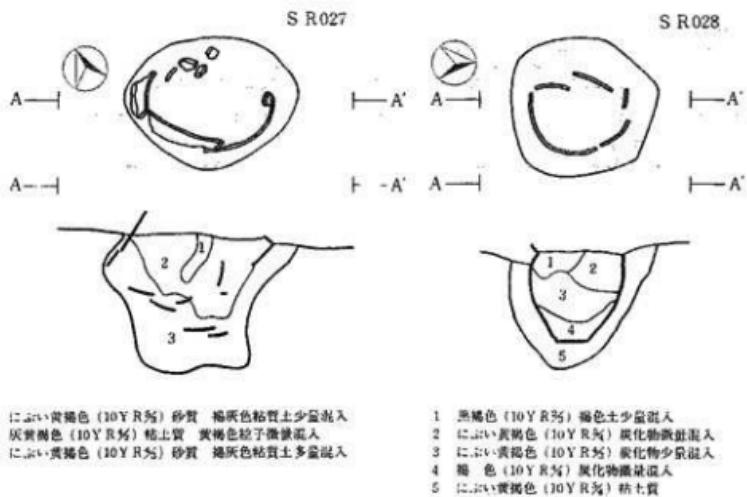
第62図 S R012・015～017土器棺実測図



第63図 S R018~022土器棺実測図

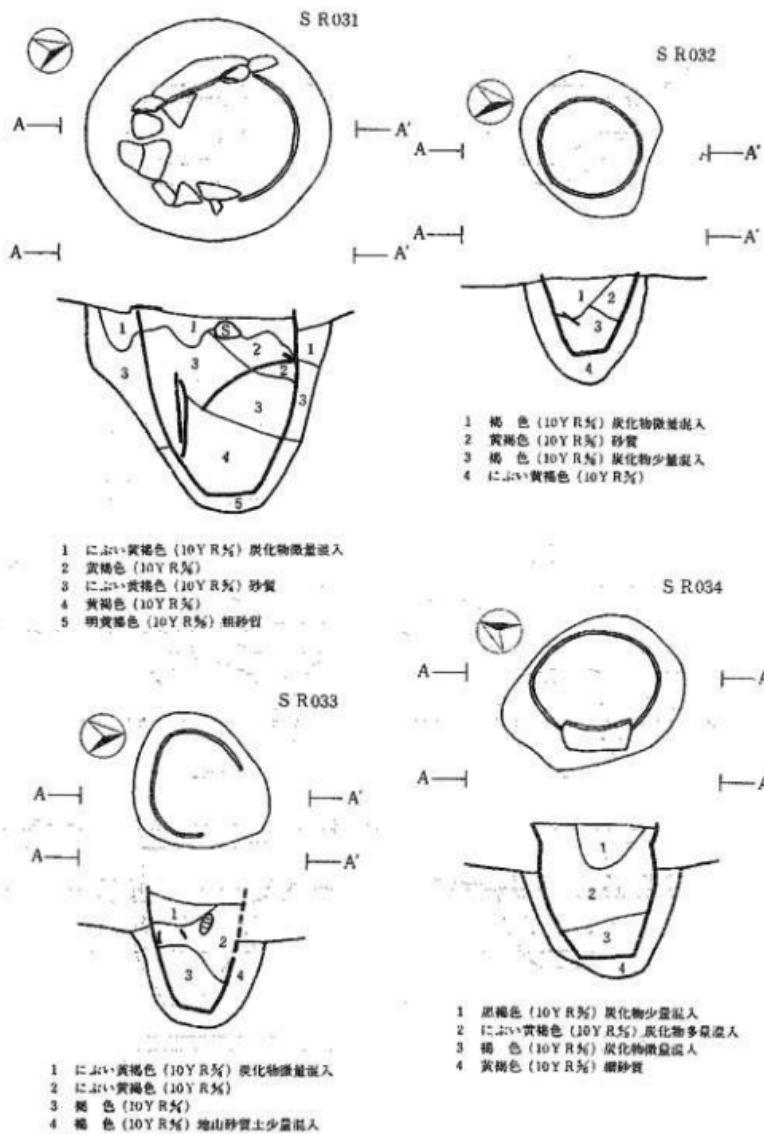


第64図 S R023~026土器棺実測図

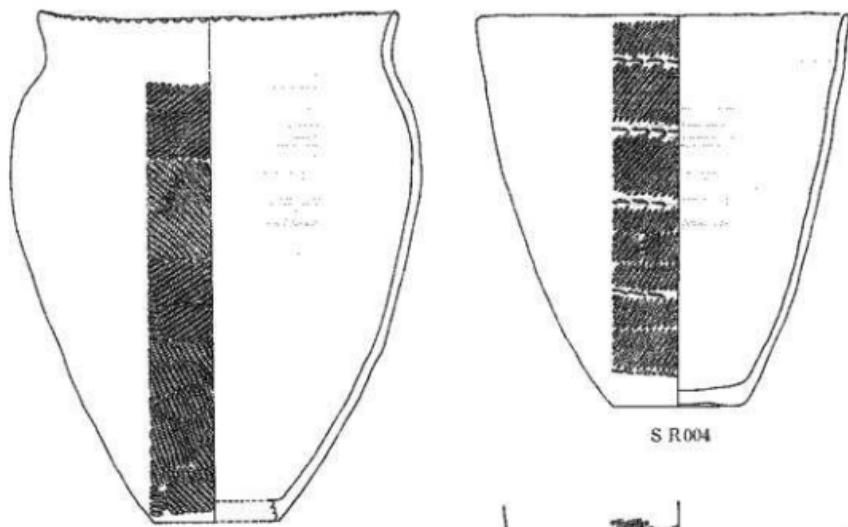


0 50cm

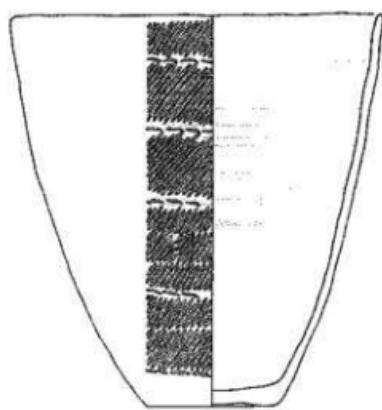
第65図 S R027~030土器棺実測図



第66図 S R031~034土器棺実測図



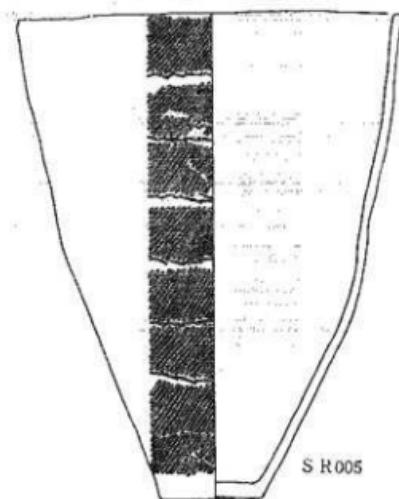
S R001



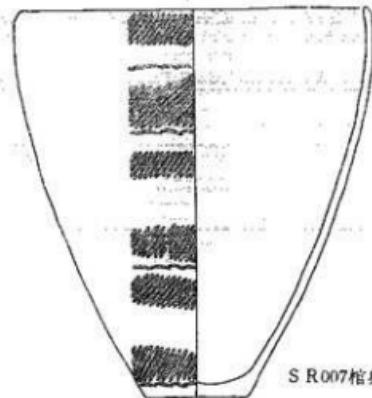
S R004



S R006



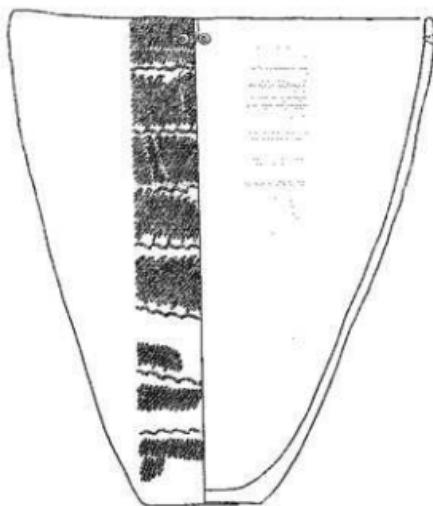
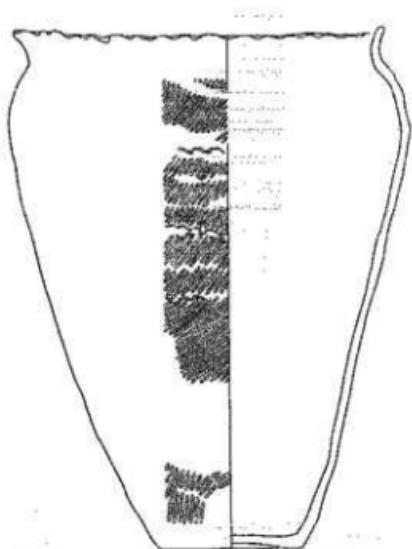
S R005



S R007 桜身

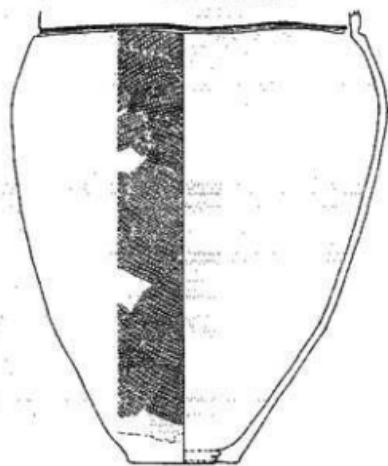
第67図 S R001・004~007土器館

0 10cm



S R009

S R010



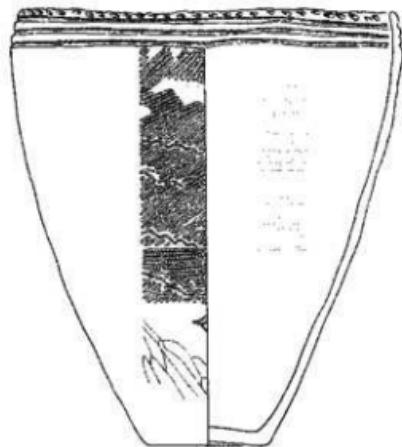
S R015



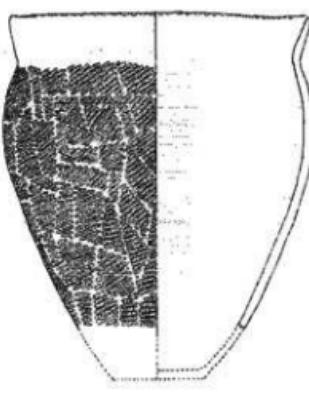
S R018



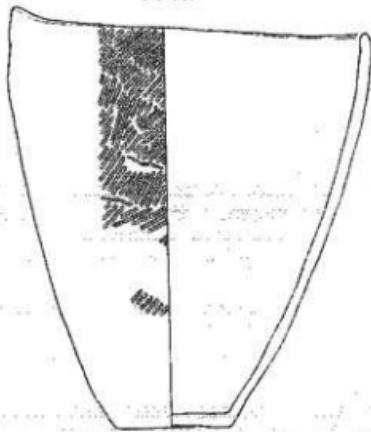
第68図 S R009・010・015・018土器柾



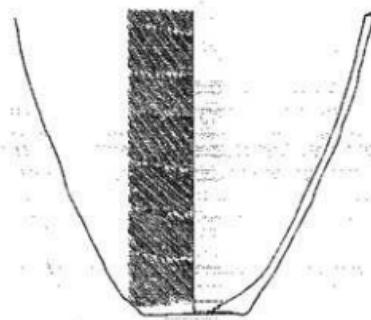
S R019



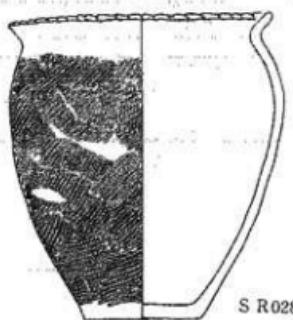
S R021



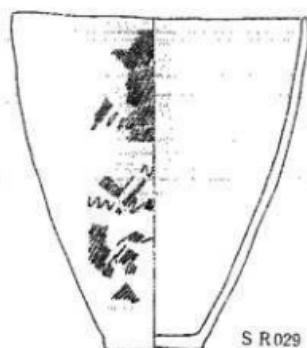
S R022



S R024



S R028



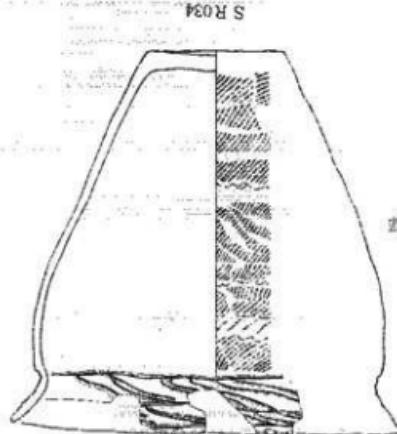
S R029

第69図 S R019・021・022・024・028・029土器柾

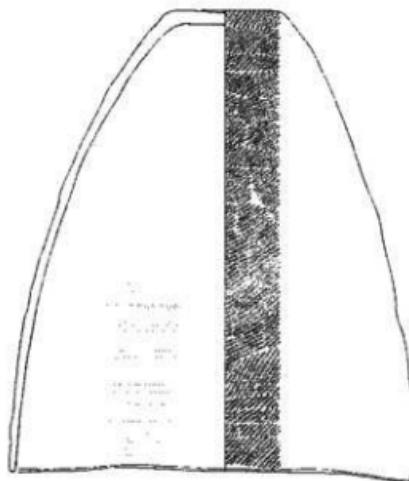
0 10

第70回 S R030-032・034上器輪

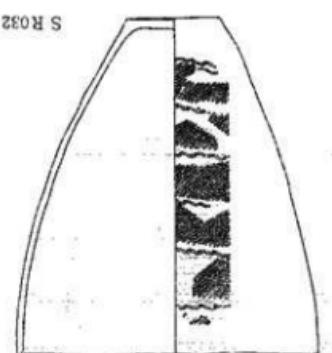
0
10-



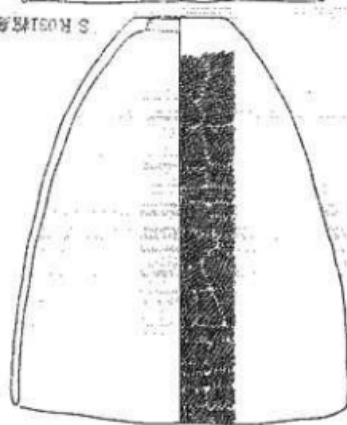
S R031



S R030



S R032



S R034

(3) 石圓炉・焼土遺構

S N 005 石圓炉（第72図・第34図版）

M B 60グリッドにあり、第IV層上面で確認された。平安時代のS I 001豊穴住居跡の構築によって破壊を受けており、東半部しか残存せず、石も4個のみである。石圓に使用された石は径10~20cmほどの扁平な石で、全周に圍繞されたものと想定すると、径約100cmの石圓となる。焼土は約8cmの厚さで堆積している。焼土上の覆土から石匙が1点出土した（第71図）。

S N 007 焼土遺構（第72図・第34・35図版）

L J 52グリッドに位置し、第IV層中で確認された。95cm×63cmの楕円形の浅い掘り込みの中に、焼土が5~10cmの厚さで堆積している。

S N 008 石圓炉（第72図）

M B 52グリッドに位置し、第IV層中で確認された。石圓は北東側に開口部を有する「コ」の字形を呈し、径60cmを測る。この石圓を構築するための径80cmほどの掘込みが石圓周縁に見られ、石圓中央部の底面には径20cm、深さ10cmの小ビットがあり、この中に土器片が入っている。その上部を覆って厚さ5cmの焼土地積が見られ、小ビット中に土器を埋設して、火を焚いたことを示している。

S N 012 石圓炉（第72図・第35図版）

M A 55グリッドに位置し、地山面で確認された。長さ10~15cmの扁平な石を縦に突き刺して構築した、径55cmを測る円形石圓炉である。S N 008と類似して、中央部に径18cm、深さ12cmの小ビットがあり、この中に土器が埋設され、焼土が充満している。土器は大洞C₁式土器である。

S N 013 焼土遺構（第72図）

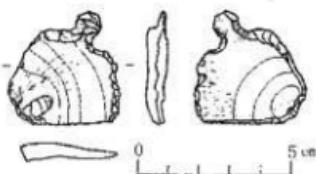
M A 54グリッド内にあり、地山面で検出された。S N 012 石圓炉の南2.6mに位置する。100cm×65cm、厚さ10cmに焼土が堆積している。

S N 014 石圓炉（第73図・第35・36図版）

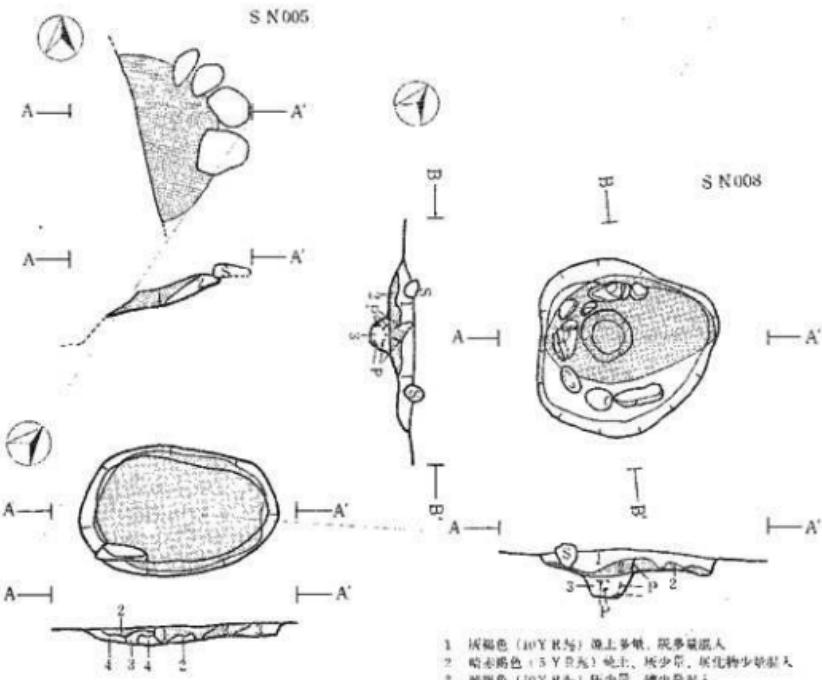
L A 56グリッド内北側に位置し、第IV層上面で確認された。S N 016、S Q 016と極めて近接した位置にある。10数個の石をもって径90cmの円形に石を配置しているが南側では石圓が途切れている。中央部に焼土が見られる。大洞A式土器の破片が出土した。

S N 016 石圓炉（第73図・第35・36図版）

L A 56グリッド内、S N 014 東南の第IV層上面で確認された。長径20cm内外の石を10個ほど用いて、径90cmほどの石圓を構成している。西側の一部にわずかではあるが、焼土の堆積が認められた。埋土中より、石鏃、箆状石器など7点が出土した（第74図）。

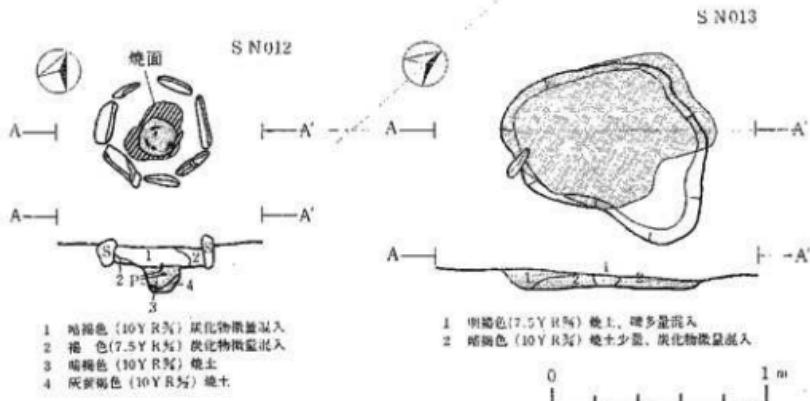


第71図 S N 005出土遺物

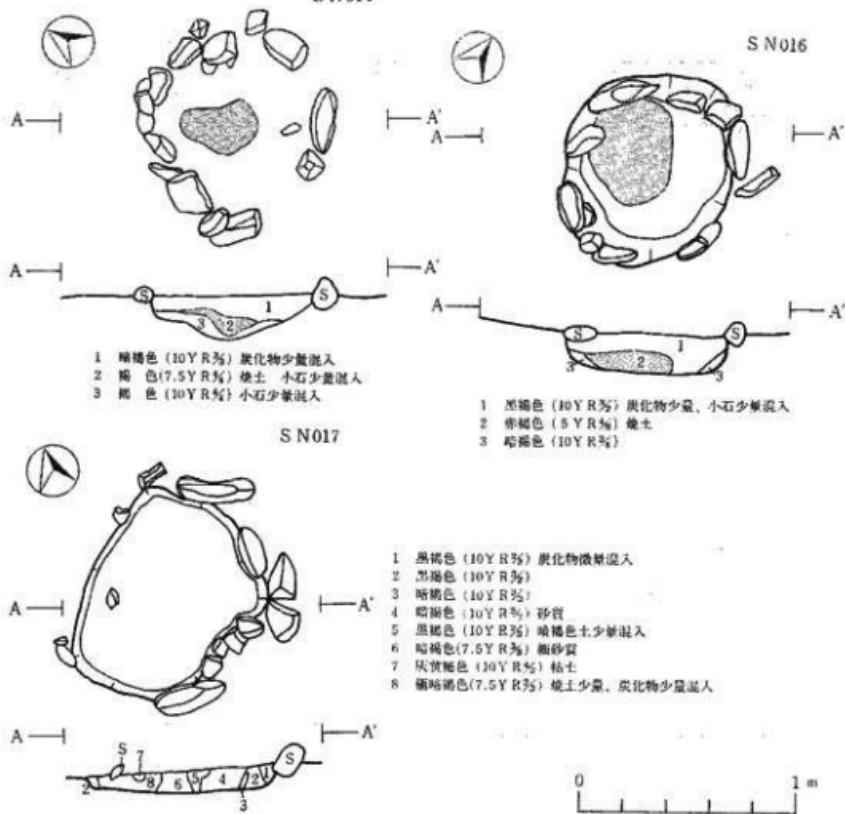


1. 浅褐色 (7.5 Y R 5%) 地上
2. 焙褐色 (10 Y R 5%) 地上少量、炭化物微量混入
3. 暗褐色 (10 Y R 5%) 炭化物微量、黄色色土少量混入
4. 黄褐色 (10 Y R 5%) 黑褐色土上少量混入

1. 咸褐色 (10 Y R 5%) 地上多量、炭化物混入
2. 焙褐色 (5 Y R 5%) 地土、灰少量、炭化物少量混入
3. 暗褐色 (10 Y R 5%) 灰少量、碳少量混入



第72圖 S N005·007·008·012·018石圈炉・燒土遺構測量圖



第73図 S N014・016・017石圓炉実測図

S N017 石圓炉 (第73図・第36図版)

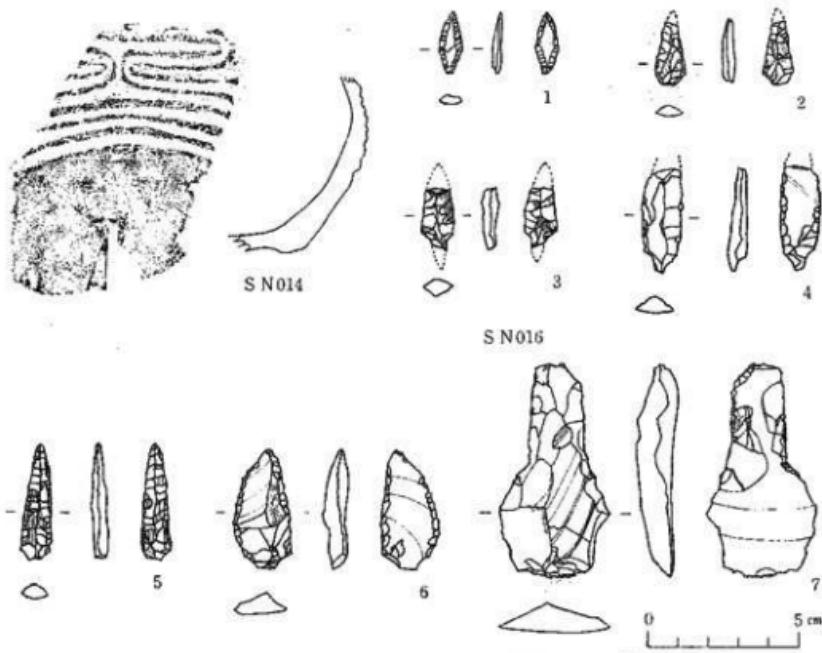
L A55グリッド内にあり、第IV層上面で検出された。石圓は東半分のみで、西側にはほとんど見られないが、掘り込みの形態から径 100 cm前後を有したもののが想定される。東半分に残る石は最大のもので長さ36cmを測る。焼土は西側に極めて少量検出された。

S N018 石圓炉 (第75図・第37図版)

K J53・54グリッドに位置し、第IV層上面で確認された。東隣に接してS N019が存在する。石はかなり乱れており、西側にしか残存しないが、掘り込みの状況から90cm×70cmの楕円形を呈するものと思われる。焼土、焼面は存在しなかった。

S N019 石圓炉 (第75図・第37図版)

K J53・54グリッドの第IV層上面で確認された。これもS N018同様、西側の石が乱れてい



第74図 SN014・016出土遺物

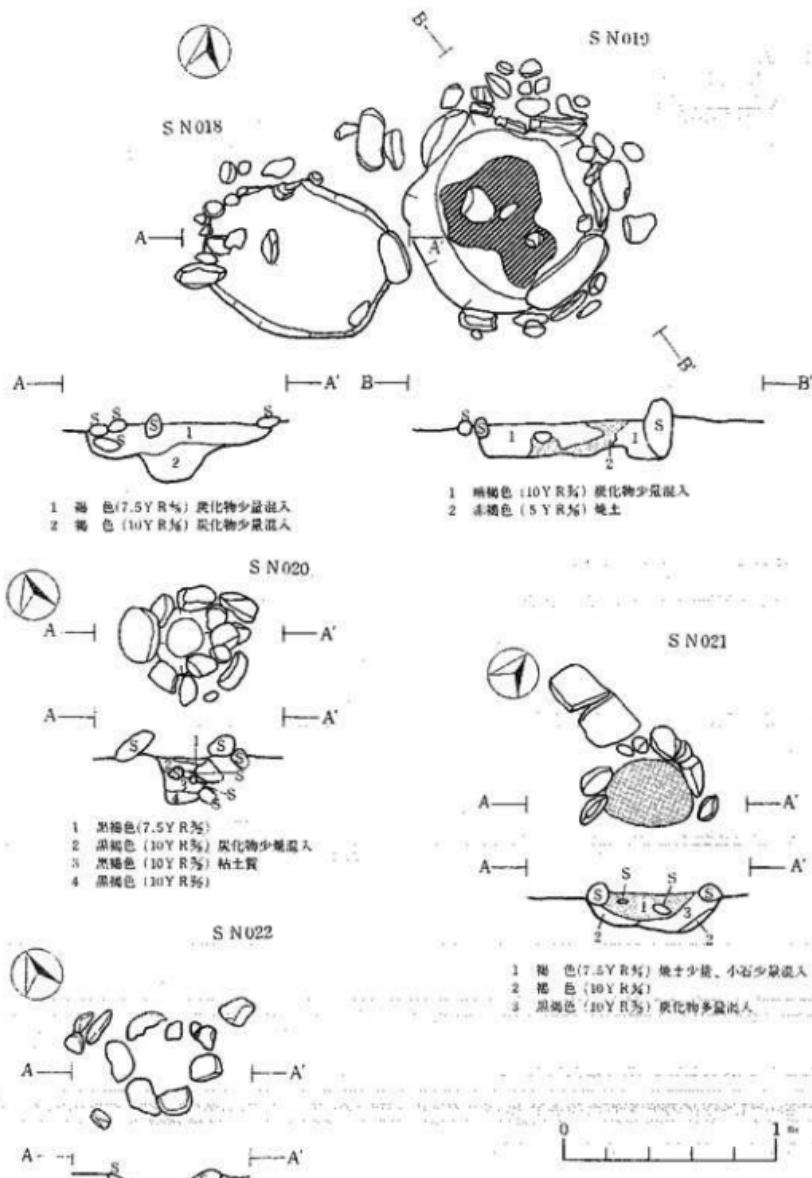
るが、北から東南部にかけての石と掘り込みの状況から、径120~130cmの円形石圏炉が想定される。石圏のうち東南部には長さ48cm、幅15cmのとりわけ大きな石を用い、地山を20cmほど掘り込んで縦に埋設しており、この石の外方にも小さな石を用いて、この部分のみ三重に石が開む。また北方の石圏も不整ではあるが、やはり三重の石圏を意識したものと思われる。埋土内に焼土を含み、底面には焼面を形成している。埋土中の石も赤変している。

SN 020 石圏炉（第75図・第37図版）

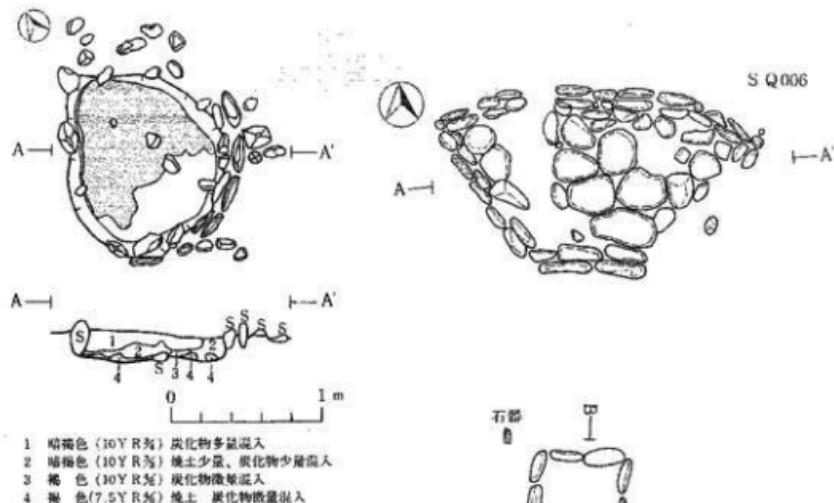
LA51グリッド北西部に位置し、第IV層上面で検出されたものである。径15~20cmほどの石を使用して、径約60cmの円を構成しているが、西端の石はとりわけ大きく、27cm×20cmを測る。石圏中心部は深さ22cmの小ピットとなるが、焼土、焼面ともに見られない。

SN 021 石圏炉（第75図・第38図版）

LA49グリッドに位置し、第IV層上面で確認された。8個の石を使用しているが北半分のみで、円をなさない。東西両端で66cmを測り、上面から18cmの深さの掘り込みを有する。焼土は12cmの厚さに堆積している。石圏西側に板状の石2枚が並ぶが、石圏炉との関係は明らかでない。



第75図 S N018~022石圍炉実測図



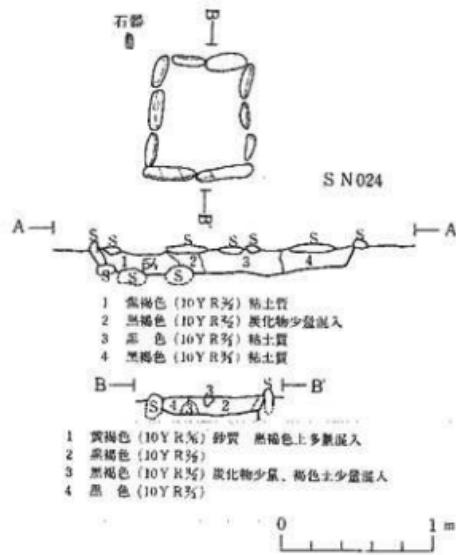
第76図 S N023石窯炉実測図

S N022石窯炉(第75図・第22図版)

LD 56グリッド内に位置し、第IV層上面で確認された。比較的扁平な石7個を用いて径50cmほどの円を構成する。石窯内部に掘込み及び焼土・焼面は存在しない。

S N023石窯炉(第76図・第38図版)

LE 53グリッド内に位置し、第IV層上面に確認された、160cm×130cmの楕円形となる石窯炉である。石は東～南側にかけて良好な状態で残存するが、北東～北側では散逸し、西側にはほとんど石を有しない。東～南側の石は長さ20～25cmほどの石を縦に突き刺して二重になって整然としており、丁寧な造作の様子が窺える。焼土はないが、底面が焼面となっている。



第77図 S N024石窯炉・S Q006配石遺構実測図

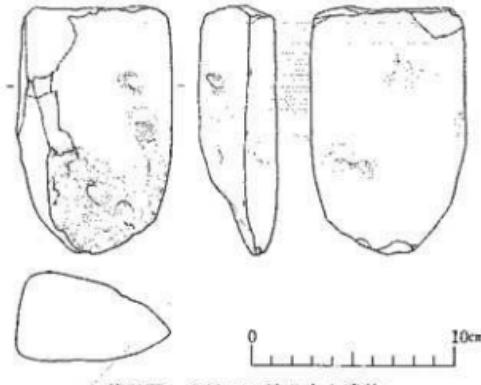
S N 024 石圓炉（第77図・第39図版）

LG55グリッド内に位置し、第IV層上面で確認された。唯一の方形石圓炉で、84cm×72cmの大きさを測る。東西両側はそれぞれ3個、南北両辺はいずれも東西側よりも長大な石2個を使用している。南辺の石は北辺の石よりも大きく、長さ38cm、幅8cmを測り、いずれも地面对し横方向に埋め込んでいる。底面は平坦で、焼土、焼面は全く見られず、火を使用したとしても極めて短時間、小規模なものであったと思われる。本遺構内からではないが、石圓炉北西隅から北西20cmの地点から、断面二等辺三角形の特殊な磨製石器が出土した。本遺構北辺から北1.2mの同一面 S Q006配石遺構が存在する。いずれも左右対称で、中軸線も一致することから、両者は同時存在の関連する遺構であると考えられる。

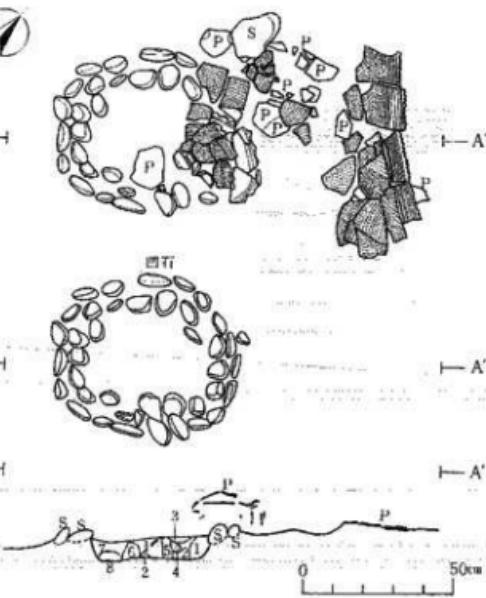
S N 025 石圓炉

(第79図・第5・39・71図版)

I-E47グリッド内に位置し、第III層中に半精製の深鉢形土器(第80図3)が発見され、周辺を精査したところ、その西側に石圓炉、東側からさらに2個の土器が検出された。石圓炉は第IV層中に検出され、角礫ではなく、全て丸味のある石41個をもつて二重、部分的に三重に、64cm×57cmの楕円形に構築されている。極めてわずかに焼土、灰が認められた。石圓の中には凹石も使用されている(第80図4)。

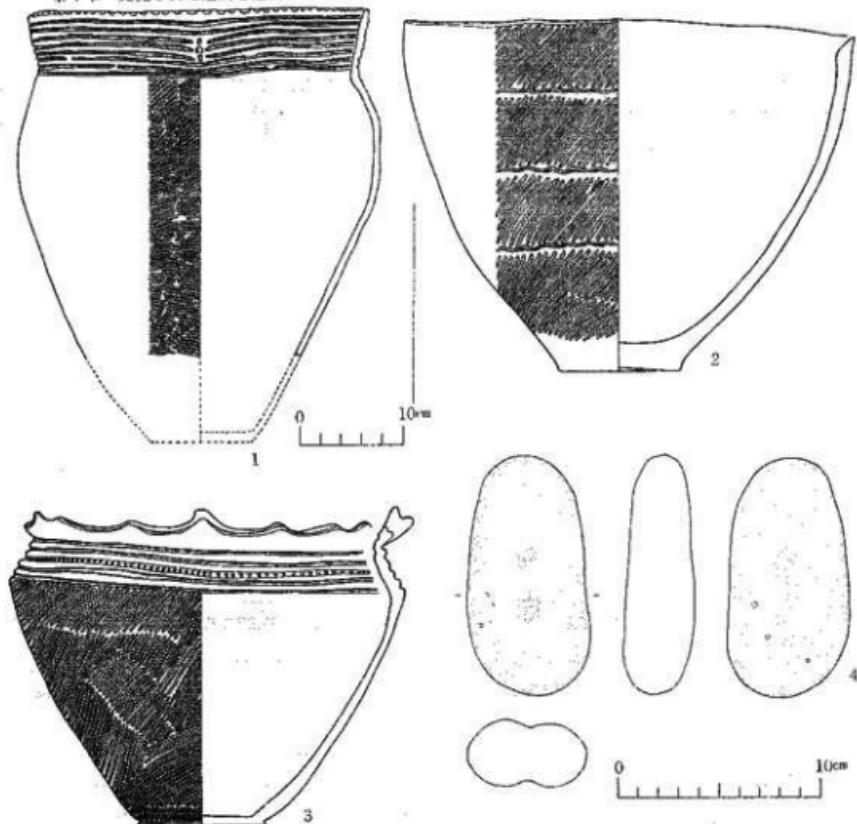


第78図 S N 024 付近出土遺物



- 1 黒褐色(10YR 4/2)炭化物少姫、粘土少量混入
- 2 黄褐色(10YR 4/2)炭化物少姫、黒褐色多量混入
- 3 黑褐色(7.5YR 4/2)炭化物多量混入
- 4 型褐色(5YR 4/2)焼土、炭化物多量混入
- 5 黄褐色(10YR 4/2)粘土質
- 6 黑褐色(10YR 4/2)黄褐色少量混入
- 7 青褐色(10YR 4/2)粘土質
- 8 黑色(10YR 4/2)粘土質

第79図 S N 025 石圓炉実測図



第80図 S N 025 出土遺物

石窓の東方同一面に、大形粗製深鉢形土器の口縁部大破片4枚が並んでいる。この下面には接合する口縁部は見られないことから、自然に割れたものではなく、意識的に破粹して並置したものと考えられる。胴下半部は一部が石窓北側の上部を覆っており、この下に別の粗製深鉢形土器が検出された(第80図2)。最初に第III層中で検出された半精製深鉢形土器は、これら石窓と同一面で検出された土器よりもかなり上位にある。本遺構周辺は完形土器を含む多量の土器を出土する捨て場的状況があり、この土器も石窓及び他の2点の完形土器と直接の関りを有せず、偶然に下位の遺構と重複した可能性は無いとは言えない。しかし、大形粗製深鉢と編年上大きな時間的懸隔はないと考えられるし、石窓を若干埋土した上に置かれたことも想定できよう。第80図1は、口径33.8cm、胴部最大幅35.5cm、器高推定88.2cmを測り、底部を欠く。口縁部に8条の沈線による文様帯がある。2は口径22.2cm、底径7cm、器高17.3cm、3は口径18.2cm、

底径66cm、器高15.6cmを測る。

S N 026 石圓炉（第82図・第40図版）

K H 58グリッドに位置し、第IV層上面で確認された。径120cmほどの円形石圓炉である。北東部の石が殊に大きく、長さ52cmを測り、これと対峰する位置にある東南部の石がこれに次ぐ。石は地面に対し縦に突き刺してあり、焼土はないが、底面に広く焼面が見られる。

S N 027 石圓炉（第82図・第40図版）

K F 58グリッドに位置し、第IV層上面で確認された。北半部の石は散逸しているが、南半分は良好な残存状態で、石を縦に突き刺した二重の石圓となっている。径140cmほどに推定される。焼土及び焼面は見られない。

S N 028 石圓炉（第82図・第40図版）

K C 56グリッド内に位置し、第IV層上面で確認された。かなり錯乱しており、西側の石は直線上をなすが、やはり円形ないしは楕円形を呈するものであろう。径100~120cmに推定される。石は縦に突き刺しており、焼土及び焼面ではなく、埋土に大洞A式の土器片を含んでいた。

S N 029 石圓炉（第82図・第41図版）

K F 60グリッド内にあり、第IV層上面で確認された。大きく錯乱を受けており、掘り込み部からかなり離れて石が散逸するが、およそ径100cmほどの円形ないしは楕円形を呈するものであろう。掘り込み中央部に小ピットが存在する。焼土、焼面は見られない。

S N 030 石圓炉（第82図・第41図版）

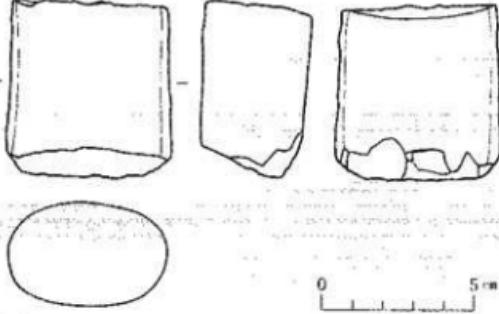
K B 56グリッド内にあり、石圓炉の中では最東端にある。第IV層上面で検出された。これも石はかなり散乱した状況を示しているが、掘り込みの大きさから90cm×60cmほどの楕円形を呈するものであろう。焼土、焼面ともなく、埋土中より磨製石斧が出土した（第81図）。なお本遺構の北20cmの所に、70cm×50cmの範囲で焼土が薄く分布していた。ここで火を焚いたものではなく、むしろ焼土だけを移動させて捨てたものとの感が強い。

S N 031 焼土遺構

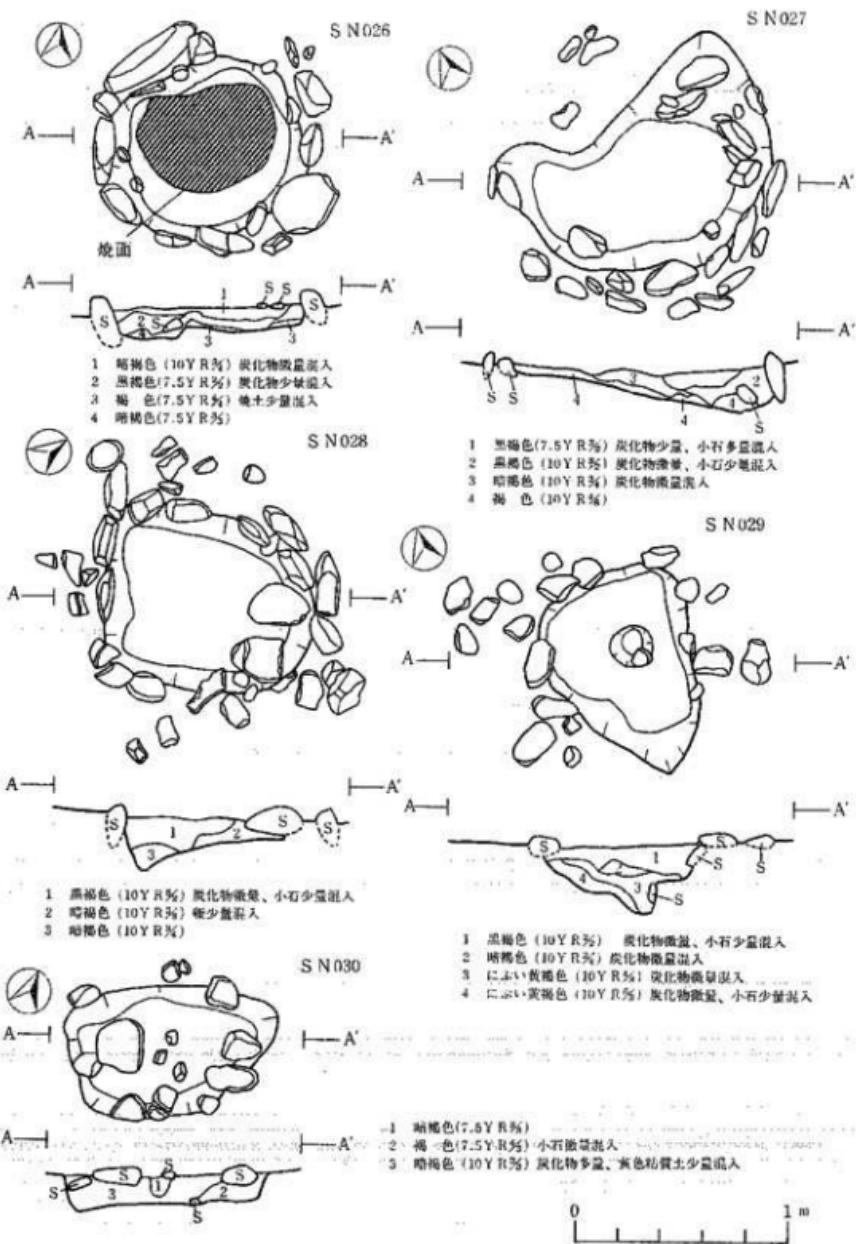
（第83図・第41図版）

K H 61グリッドにあり、第IV層上面に確認された。平安時代のS

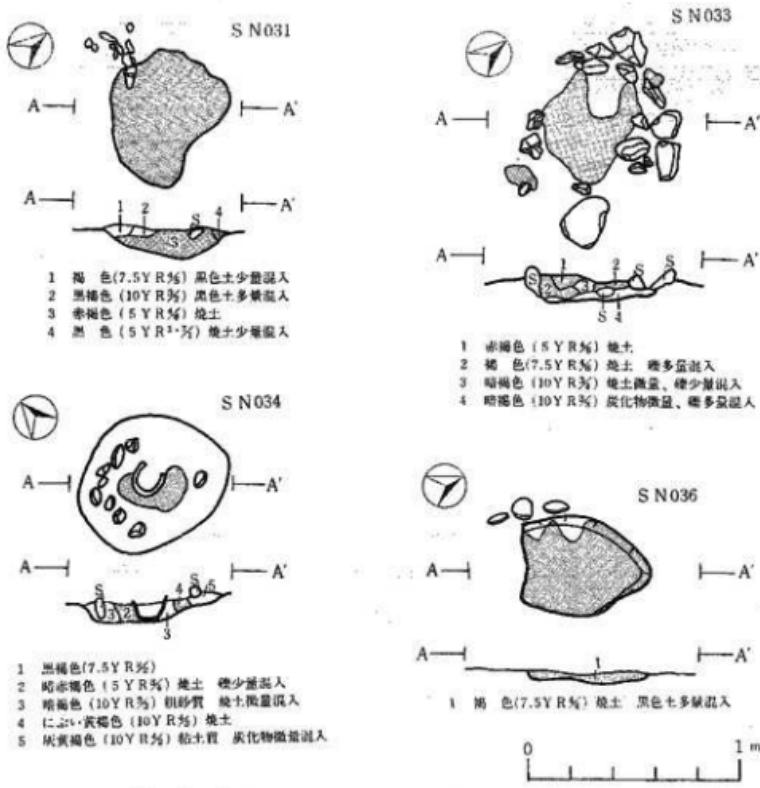
N 009・032・035に極めて近い位置にあり、本遺構も同時代に属するものかも知れないが、上面の一部に縄文式土器が覆っていること



第81図 S N 030 出土遺物



第82图 S N026~030窑洞实测图



第83図 S N 031・033・034・036石圓炉・焼土遺構実測図

から縄文時代の遺構と見なした。

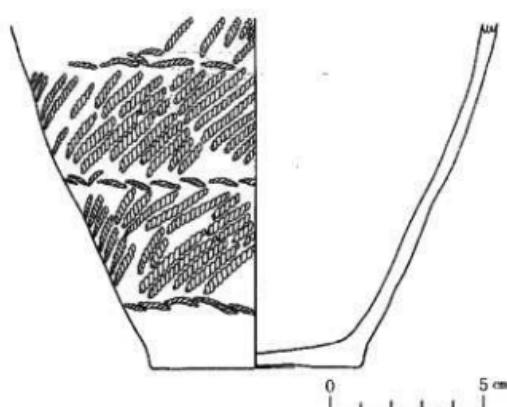
平面は65cm×55cmの不整円形を呈し、焼土の厚さは12cmを測る。

S N 033 石圓炉 (第83図・第42図版)

L D58グリッドに位置し、第IV層中で確認された。石圓がかなり散逸しているが、主として北半部には良好に残存しており、これと焼土の範囲から、径70cmの石圓を想定できる。他の石圓炉に比して焼土が多く、厚さ12cmに堆積している。

S N 034 石圓炉 (第83図・第42図版)

L E57グリッド内にあり、S N 033の南西1.9mに位置し、第IV層中で確認された。北及び西側に径5~10cmの8個の小石がL字形に並ぶ他は、東南部に1個見られるだけで、石圓はかなり散逸している。平面形態も明確ではないが、石圓周囲の掘り込みの形から、径54cmほどの円



SN 034 埋設土器

る。焼土の厚さは 6 cm を測る。

SN 037 石圓炉（第85図・第43図版）

L H57グリッド北西端に位置し、第IV層下部で確認された。本遺構も錯乱を受けており、石圓、焼土とともに雜然としている。殊に焼土は石圓掘り込み部よりもかなり外部にまで広がっている。石圓の大きさは 120 cm × 90 cm を測る楕円形で、石圓内の焼土は厚さ 7 cm に堆積している。

SN 038 焼土遺構（第85図）

L C57グリッド内に位置し、地山面で確認された。深さ 12 cm の掘り込み内に 40 cm × 40 cm の範囲で焼土が分布するが、西側はこの遺構よりも新しいピットに切られている。焼土は 3 ~ 6 cm の厚さで堆積している。

SN 039 石圓炉（第85図・第43図版）

L G58内にあり、SN 036 焼土遺構の西隣に位置する。第IV層下部で確認された。石圓は東南部では良好に残存しているが、他は乱れており、西～南側にはほとんど残存しない。石圓の掘り込みは径 160 cm と大きく、石圓の径も 140 ~ 150 cm に推定される。上面と埋土中には焼土がわずかに見られるが、底面には焼面を形成している。

SN 040 石圓炉（第86図・第44図版）

K H54グリッド北部に位置し、第IV層上面で確認された。10個の石をもって径 104 ~ 116 cm の円形石圓炉を構築している。残存状態はほぼ良好で、掘り込みは 20 cm を測る。焼土、焼面は見られない。

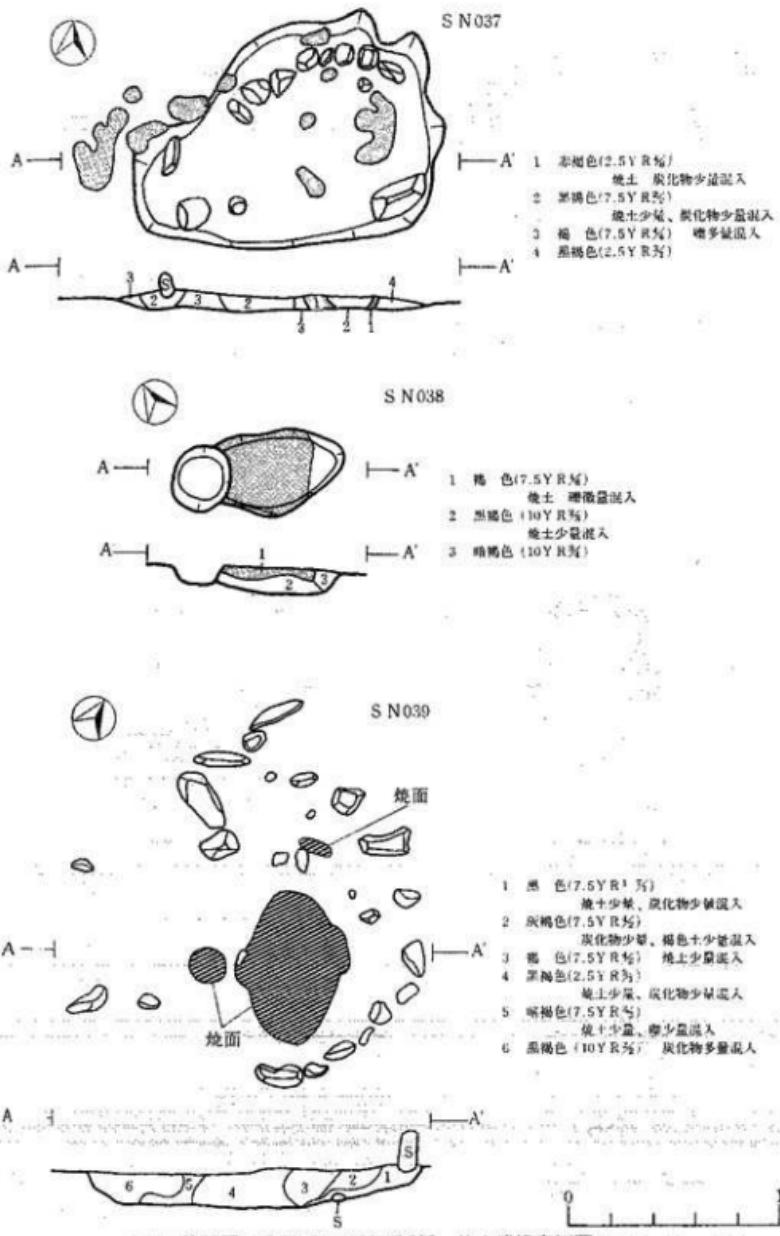
SN 041 石圓炉（第86図）

K I48グリッド杭のすぐ南側に位置し、第IV層上面で確認された。石は 7 個を数えるが、散

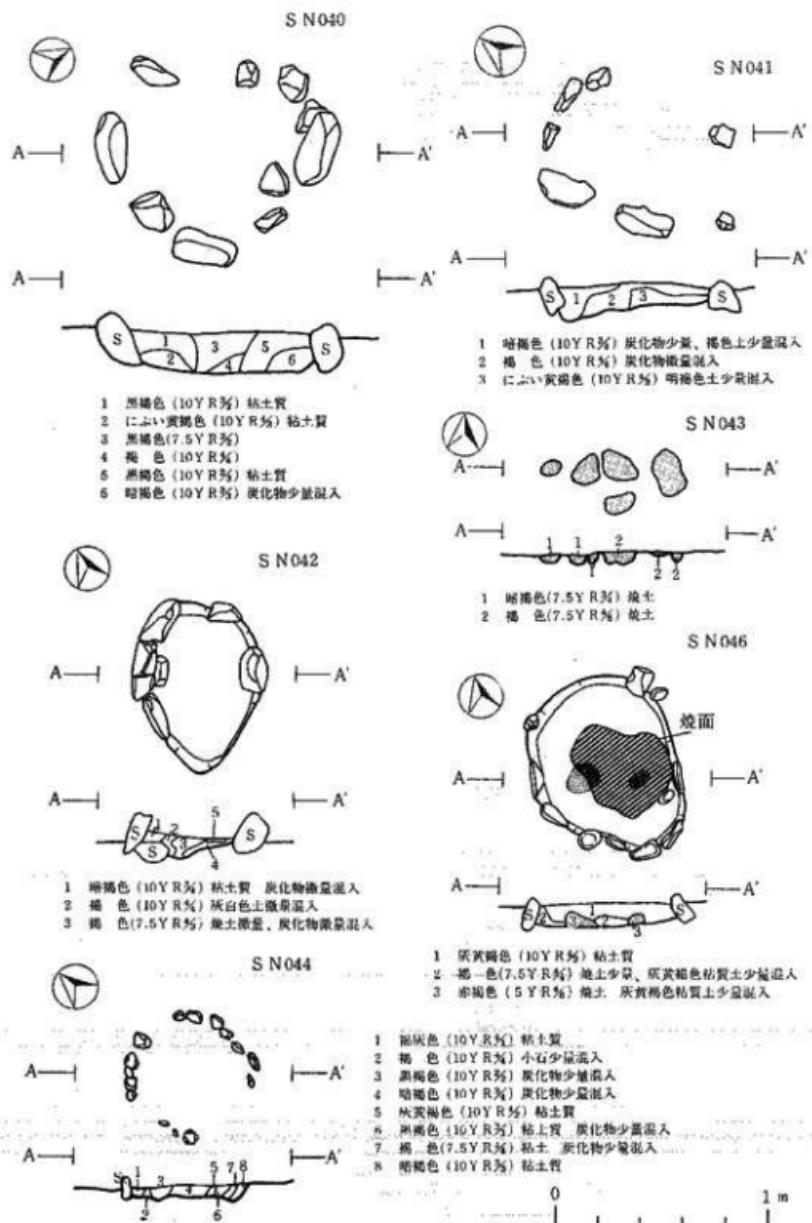
形あるいは楕円形となるものであろう。中央部に深さ 11 cm ほどの深鉢形土器の下部（第84図）が埋設されており、その周間に焼土が分布している。

SN 036 石圓炉（第83図）

L G58グリッド内にあり、SN 039 石圓炉の東隣に位置する。第IV層下部で確認された。60 cm × 45 cm の範囲で焼土が分布するが、西側に 3 個の石があり、これが散逸した石圓の残余である可能性もある。



第85図 S N 037~039石窯跡・焼土遺構実測図



第86図 S N040~044・046石窯炉・焼土遺構実測図

逸した状況を示すものと思われる。東側には石は存在しないが、西側に長さ28cm、幅14cmの他の石よりもことさら大きな石2個を用いている。掘り込みは深さ16cmを測るが、焼土、焼面は存在しない。102cm×70cmほどの大きさを測る。

S N 042 石圈炉（第86图·第44图版）

KJ51グリッド杭のすぐ西側に位置し、第IV層上面で確認された。石は7個を数えるのみで、南側には残存せず、北側の石門も途切れており散逸した状況にある。しかし、掘り込みの大きさから80cm×65cmの楕円形を呈するものと看取される。焼土、焼面とともに存在しない。

SN 043 燥土遺構（第86図）

L F50グリッド内にあり、第IV層の捨て場的状況を示す極めて多量の遺物出土地点の中に、わずかながら焼土が検出された。他地点から焼土のみを運んだものではなく、この位置での火の使用が考えられる。およそ70cm×30cmの範囲を測る。

S N 044 石圓炉 (第86図・第44図版)

L I 52グリッド内にあり、地山面で確認された。径10cmに満たない小石を使用した円形石囲炉である。石は15個を数え、南側には全くないが、北側、西側の一部も途ぎれていることから、「コ」の字形の石囲炉と見るよりは、散逸した状況を示すものと思う。径60cmほどを測る。

S N 046 石圓爐（第86圖）

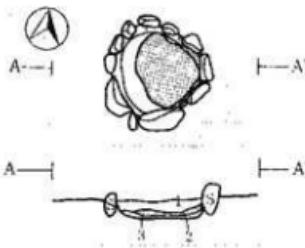
K 152グリッドにあり、第IV層上面で確認された。石はかなり散逸しているが、90cm×75cm
ほどの橢円形を呈するものであろう。焼土が5~8cm
の厚さに堆積し、底面に焼面がある。

S N 047 石圓炉（第87図・第45図版）

K 146グリッドにあり、地山面で確認された。残存状態は良好で、延58cmを測る。石は地面に対して縦方向に突きさしており、南側に長径20cmほどの殊に大きな石を用いている。焼土がわずかに分布している。

S N 048 石窯炉（第20図・第45図版）

K 146グリッドにあり、地山面で確認された。SK 026の西には接している。径60cmほどの掘り込みの中に石9個を用いて径45cmの円形石壠炉を構成する。遺構中央部に、上端径15cmの深鉢形土器底部が埋設され、この横一下部にかけて焼土が堆積していた。また土器周辺から径3~5mmほどの骨片が数片出土した。



1 黑褐色 (10Y R 3)；氯化物微量
 +0.01% 氯褐色 +微量氯
2 褐色 (7.5Y R 5)；氯土
3 暗褐色 (10Y R 3)；渺少氯混入

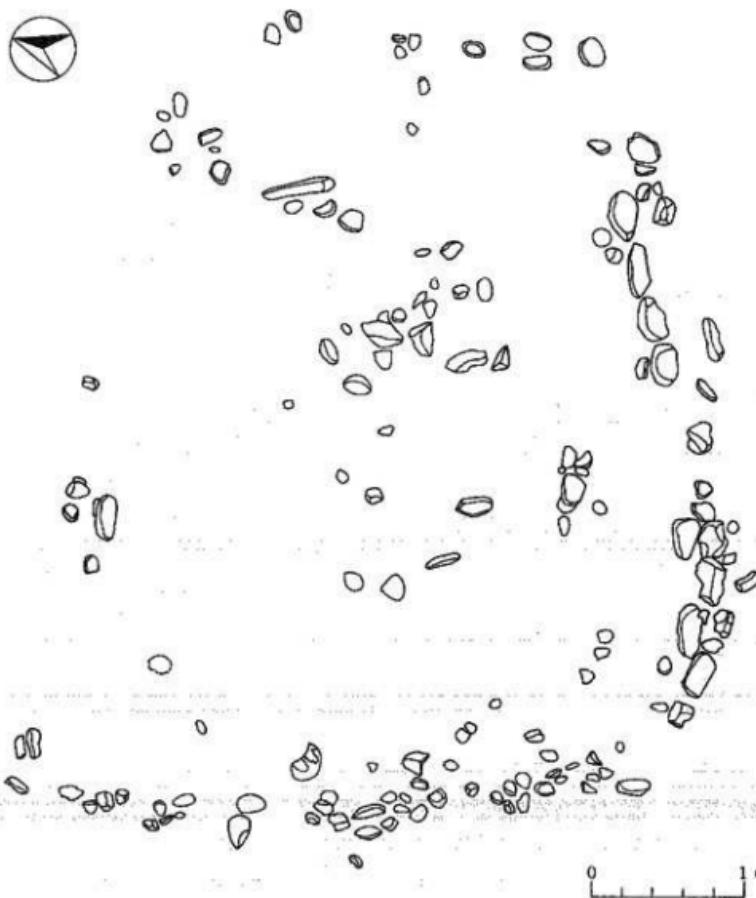


第87図 S N 0473-41の変調

④ 配石遺構

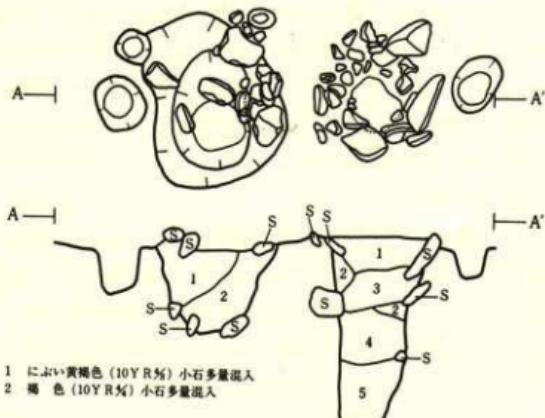
S Q 001 (第88図・第5図版)

LC 54・55、LD 54・55の4グリッドにかかり、IV層上面で確認された。東西560cm、南北460cmの方形を呈している。配石の状況を見ると、西側では径5~10cmの石が2~3列に並べられ、その中に径20cmほどの石が少數点在する。石列は緩やかにカーブを描いて東西方向の直線となるが、この列では30cm×15cmほどの大きめの石が主体となり、ほぼ一列に並んでいる。東側列は石が少ないが、径10cmほどの石である。北側にはほとんど石が見られず、ラインを形



第88図 S Q 001 配石遺構実測図

S Q002



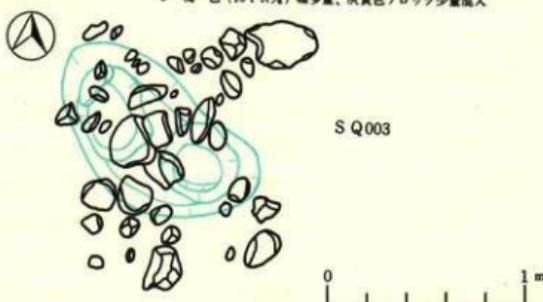
1 にょい黄褐色 (10Y R 5%) 小石多量混入

2 黄色 (10Y R 5%) 小石多量混入

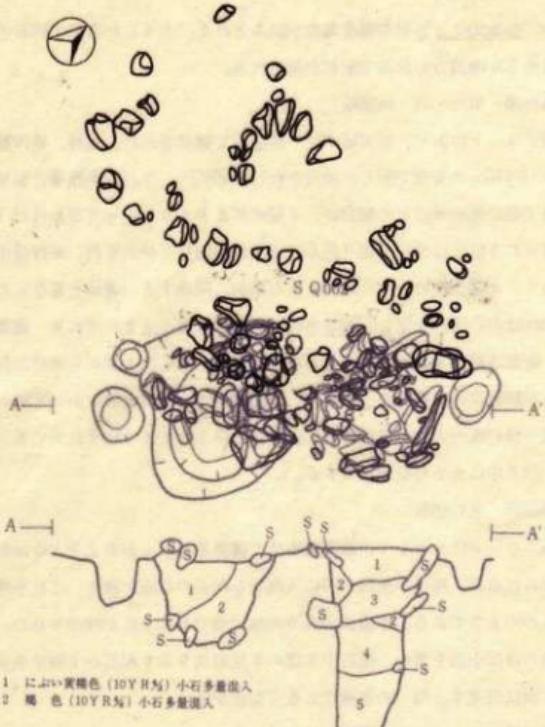
3 黑褐色 (10Y R 5%) 砂質

4 黄灰色 (2.5Y R 5%) 粘土質

5 黄色 (10Y R 5%) 砂多量、灰黄色ブロック少量混入



第89図 S Q002・003配石造構実測図



- 1 黒褐色 (10Y R 5/6) 砂微量、黄褐色粒子多量混入
- 2 灰色 (10Y R 5/6) 砂質 黑褐色土多量混入
- 3 褐灰色 (10Y R 5/6) 粘土質
- 4 黄灰色 (2.5Y R 5/6) 粘土質
- 5 灰色 (10Y R 5/6) 砂多量、灰黄色ブロック少量混入



第89図 S Q 002・003配石遺構実測図

第4章 発見された遺構と遺物

成していないが、全体的には方形の遺構輪郭が読みとれる。こうした方形の列石の内側やや南寄りに、およそ 200 cm四方の範囲で配石が見られる。

S Q 002 (第89図・第36・45・46図版)

L C 56・57両グリッドにあり、第IV層中位～地山面で確認された。当初、第IV層を若干掘り下げた所で 220cm×150cm の範囲で配石が検出され(第89図①)、これを実測後に取り除くと、この配石東～南側下部に径 80cm ほどの配石が、2箇所のまとまりとなって現われた(第89図②)。さらにそれら各々の下位には地山を掘り込んで土壌が付随して検出され、第IV層中に検出された配石をも含めて、土壌とその上位の配石とを有機的に関連する一遺構と見なした。東側の上端は上面が径 50cm ほどの円形を呈し、垂直方向に円筒形に掘り込まれており、底部までの深さは 92cm を測る。底面は 36cm×18cm の楕円形となり、平坦である。上部から中位にかけて石が含まれ、埋土中から 10 数片の土器片が出土した。その西側の土壌は上面において 85cm×70cm の楕円形を呈し、幾分傾斜度の大きい側壁を有し、48cm の深さまで掘り込まれている。上部から底部に至るまで、埋土中に大小の石を含有する。

S Q 003 (第89図・第42図版)

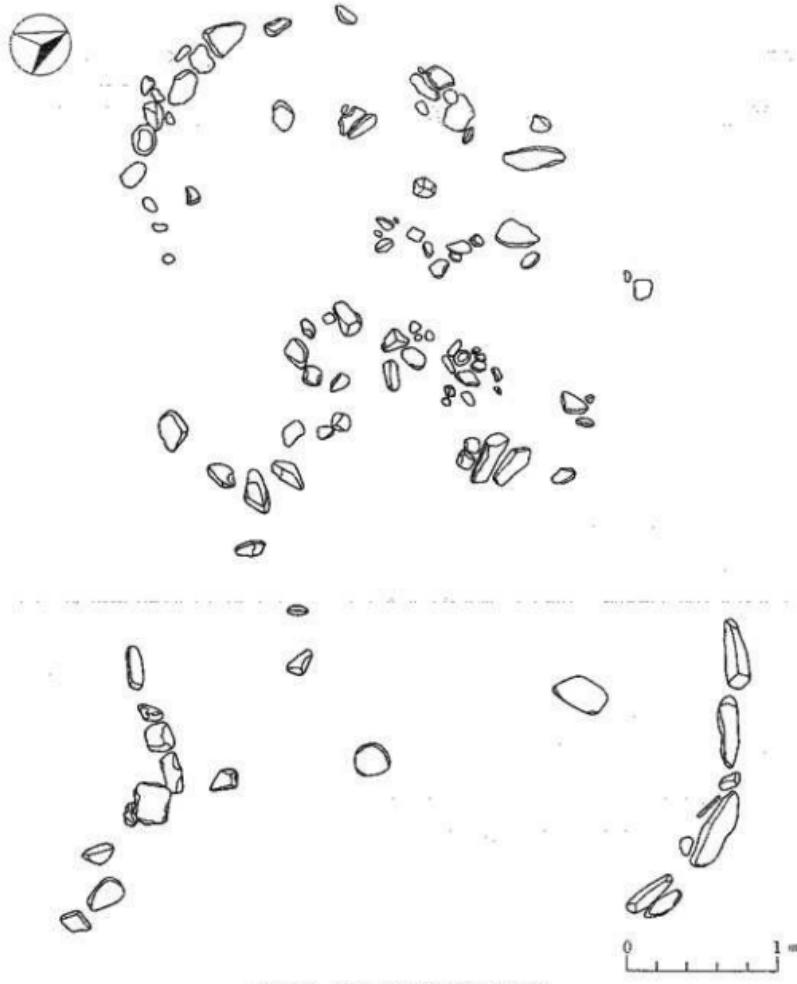
L D 57・58両グリッドにまたがり、第IV層中位で確認された。およそ 150 cm四方の範囲で石の分布が認められるが、殊に中央部の石に人為的な配石の状況が窺え、これを中心として配石が行われたものようである。本遺構の直下の地山面で S K 106 が検出された。両者の大きさは配石が土壌のほぼ全面を覆い、配石中央部の半放射状を示す配石が土壌中央部の位置にある。配石と土壌は関連する同一の遺構である可能性が強い。

S Q 006 (第77図・第6・46・47図版)

L G 55グリッド北部に位置し、第IV層上面で検出された。台形もしくは扇形を呈し、左右対称で、北側に弧状に湾曲する長辺を有する。長辺の東西端は 216cm、南北の中軸線は 124cm を測る。扁平な石を縦に突き刺して外縁ラインを形成するが、東辺は全部と北辺の一部を欠く。南辺は 75cm の長さを有し、外縁部の中でもことさら長大な石を用いている。この内側には大きいもので 40cm×23cm、厚さ 6cm ほどの扁平な石が 10 余個置かれ、外縁部の石との隙間にも小さな石が充填される。これら内部の配石にも、あたかも配石の一部が抜き取られた如き空間が存在するが、外縁部のそれと同様、抜取痕は確認されなかった。南辺より 114cm 南に前述の S N 024 の北辺の石がある。S Q 006 の中軸線の延長は、そのまま S N 024 の中軸線と合致し、両者ともに同一面に構築されていることから見て、両者は同時存在のセットとして把握できると考える。

S Q 007 (第90図・第47・48・49図版)

L A 50、L B 49・50、L C 50のグリッドにまたがり、第IV層上面で確認された。北東部に長

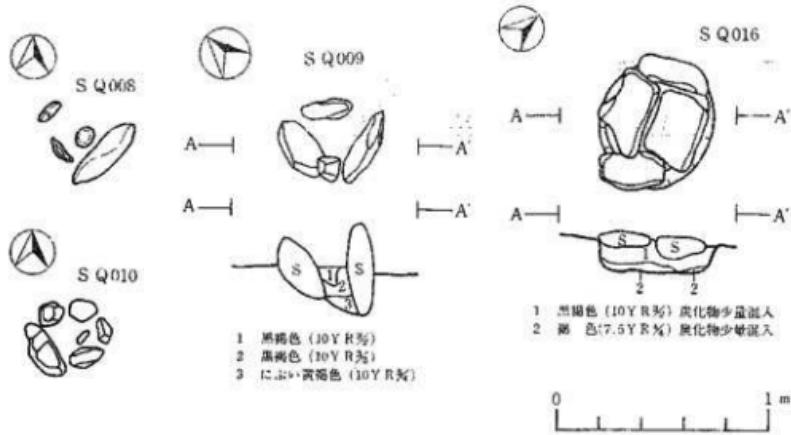


第90図 S Q 007 配石遺構実測図

さ29cm～56cmの長大な石5個を弧状に配し、これに呼応するか如く、南西端にも長さ2mほど
の弧状の配石があり、南西端にも1mの長さで直線状となる4個の列石が見られ、全体として
は660cm×500cmの楕円形を意識したものようである。この内側の主として西半にではあるが、
幾つかの小円形を呈する配石のまとまりが、弧状の配石に内包される様相で看取される。

S Q 008 (第91図)

L.D51グリッド北西部にあり、地山面で確認された。東南部に40cm×12cmの長大な石1個を



第91図 S Q 008-010 · 016配石遺構実測図

置き、この北西部に径8~14cmの小さな石3個を配し、全体としては46cm×38cmの範囲に収まる小さな配石である。遺物は検出されなかった。

S Q 009 (第91図・第49図版)

L B47グリッド南西部に位置し、地山面で確認された。これも50cm×40cmの範囲内に収まる小さな遺構である。配石の状況は、長大な石3個で三角形を構成し、その一頂点に径13cmの球形の石1個を据えている。長大な石のうち最も大きなものは、平面形で長さ38cm、幅12cmを測り、断面では長さ44cmのうち約半分を地山に埋め込んで直立させている。

S Q 010 (第91図)

L E51・52両グリッドにまたがり、第IV層で確認された。S Q 008の北北西1.2mに位置する。南西側に長さ30cm、幅12cmの最大の石を置き、これに径10cm前後の円形に近い石4個を加え、全体としては径40cmの円形となる。石を埋設するための掘り込みはなく、遺物も出土しなかった。

S Q 014 (第92図・第6図版)

L D44・45にあり、地山面で確認された。地山面に250cm×200cm、深さ20cmの掘り込みを穿ち、この中に大小の石を充填させたものである。配石上面には径20cm以上の大粒の石が多く、石のレベルは地山面レベルよりも17~18cm上位にあるので、掘り込み下面までの深さは40cm近くに達する箇所がある。底面はほぼ平坦で、緩やかに立ち上がる壁を有している。配石中に鉛状の打製石器、凹石、特殊磨製石器が含まれていた(第93図)。

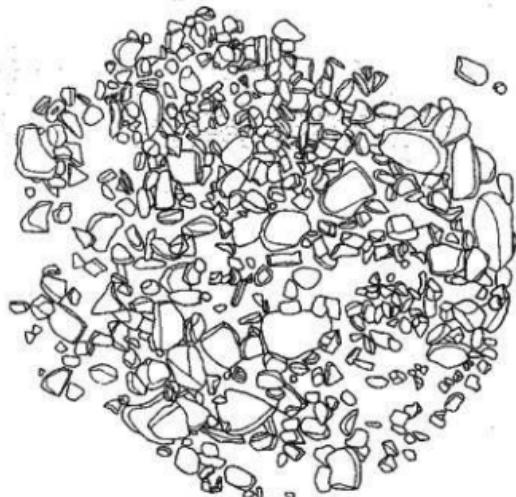
S Q 015 (第94図・図版49・50)

M C67・68両グリッドにかかり、地山面で確認された。西側は水路造成時に破壊を受け、配



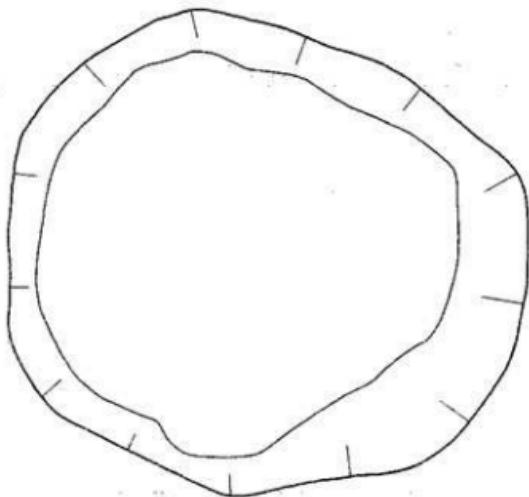
A—

A'



A—

A'



A—

A'

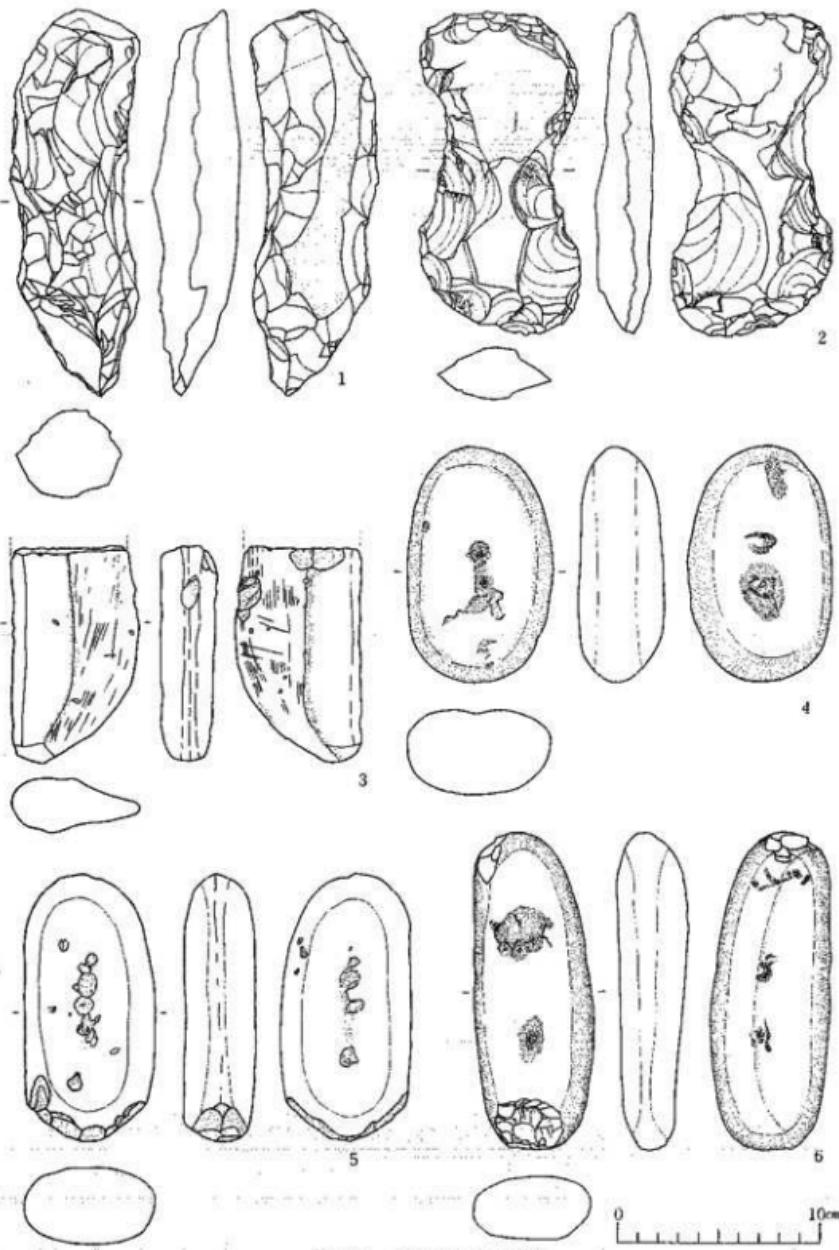


1 黑褐色 (10YR 4/2) 粘土質

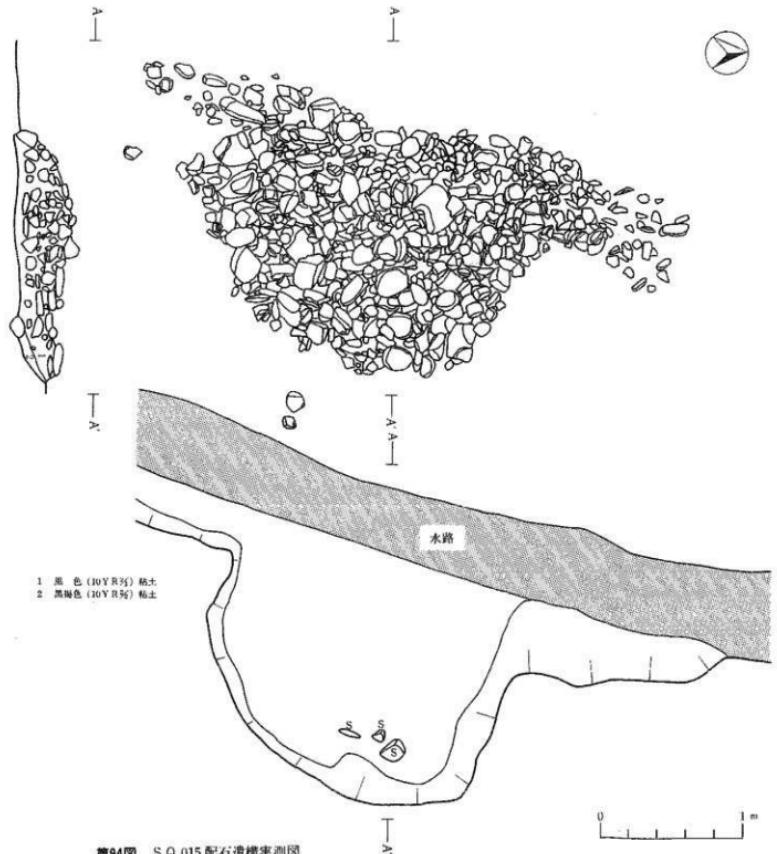
0

1 =

第92図 S Q 014 配石遺構実測図



第93図 S Q 014 出土遺物

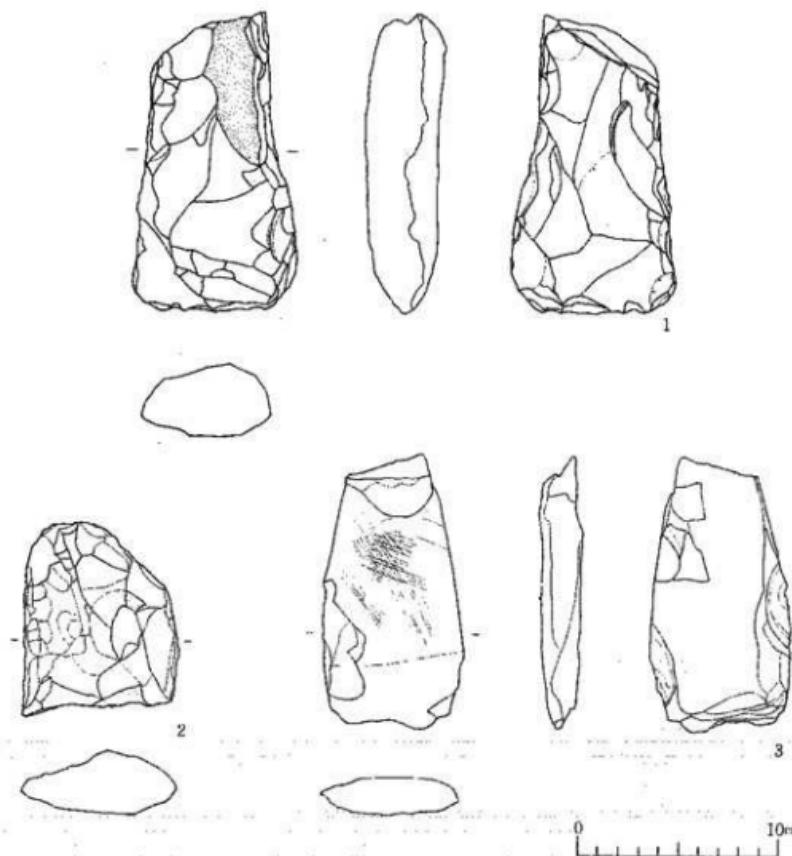


第94図 S Q 015 配石遺構実測図

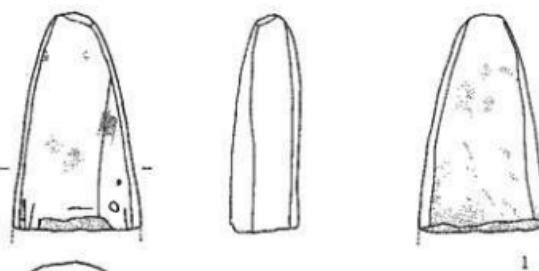
石が水路内に拡散しているが、平面形は S Q 014 同様橢円形を呈するものと思われる。東側約 $\frac{3}{4}$ のみの残存であるが、地山面から深さ約20cmの掘り込み内に多数の石を充填させている。配石は地山確認面よりも最高で30cm上位に達し、最大のもので36cm×32cmの大きさを測る。掘り込み底面はほぼ平坦で、壁は緩やかである。配石中より打製石斧(第95図1~3)、磨製石斧(第96図1)、石匙(同図2・3)、範状石器(同図4)が出土した。

S Q 016 (第91図・第50図版)

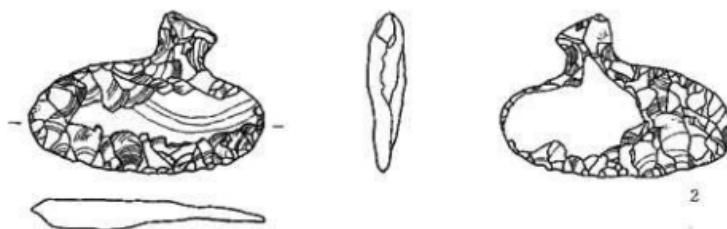
K J 56グリッドにあり、S N 014 の南東約80cmの位置にある。第IV層上面で検出された。35cm×24cmほどの四角い板状の石を並置し、この両側にも35cm×15cmほどの石を2個配置して、全体では65cm×50cmの大きさを測る。配石下に浅い掘り込みを有するが、造物はない。



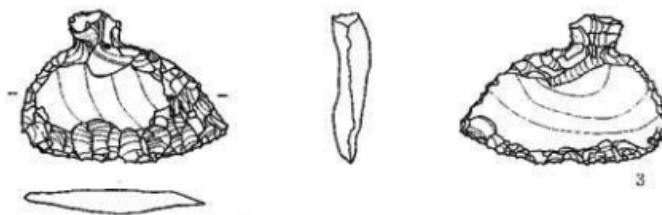
第95図 S Q 015 出土遺物 (1)



1



2



3



4

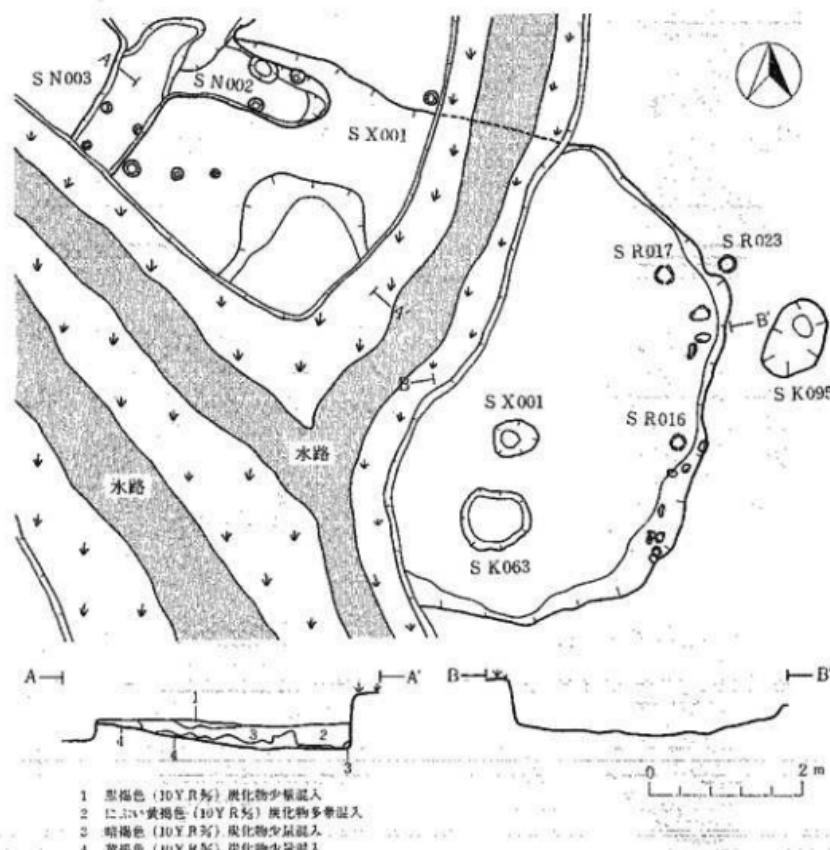
0 5 cm

第96図 S Q 015 出土遺物 (2)

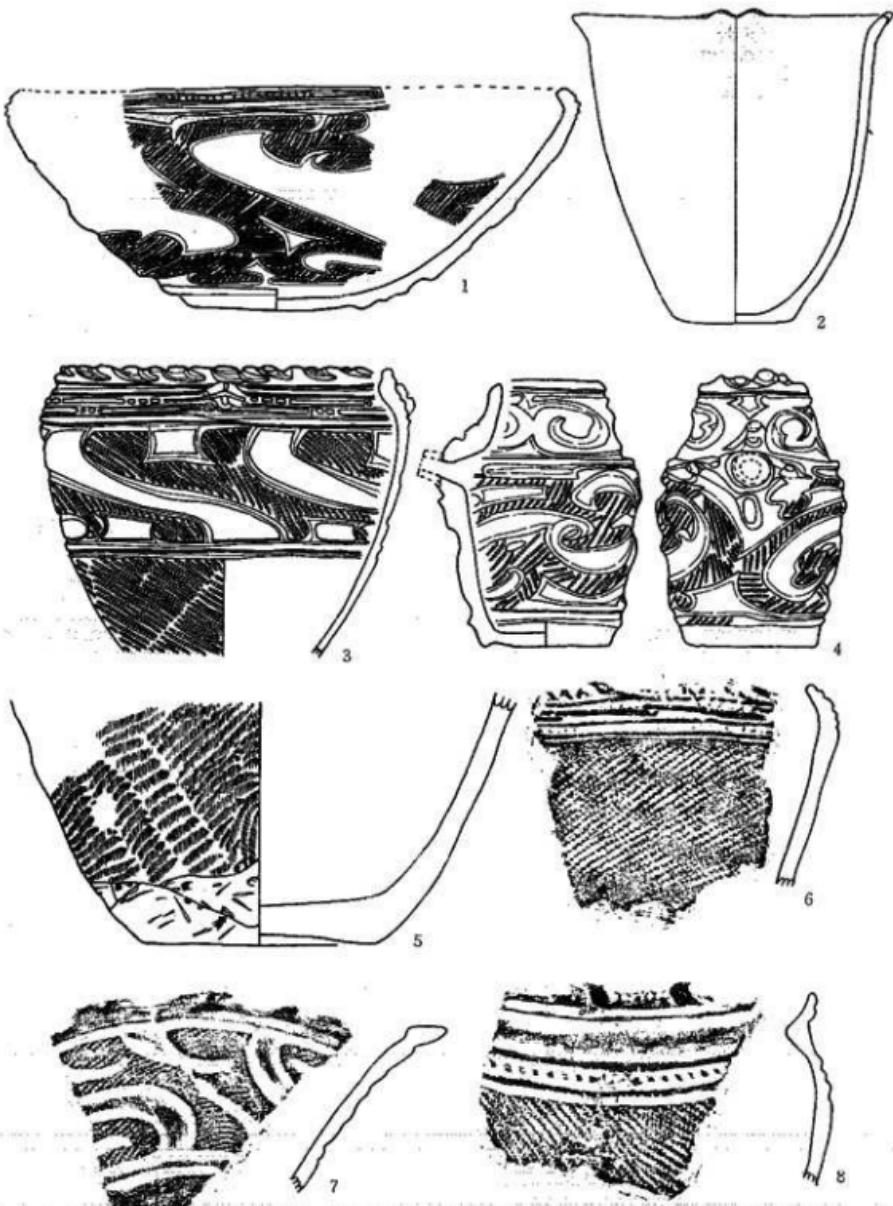
(5) その他の遺構

S X 001 (第97図・第51・71図版)

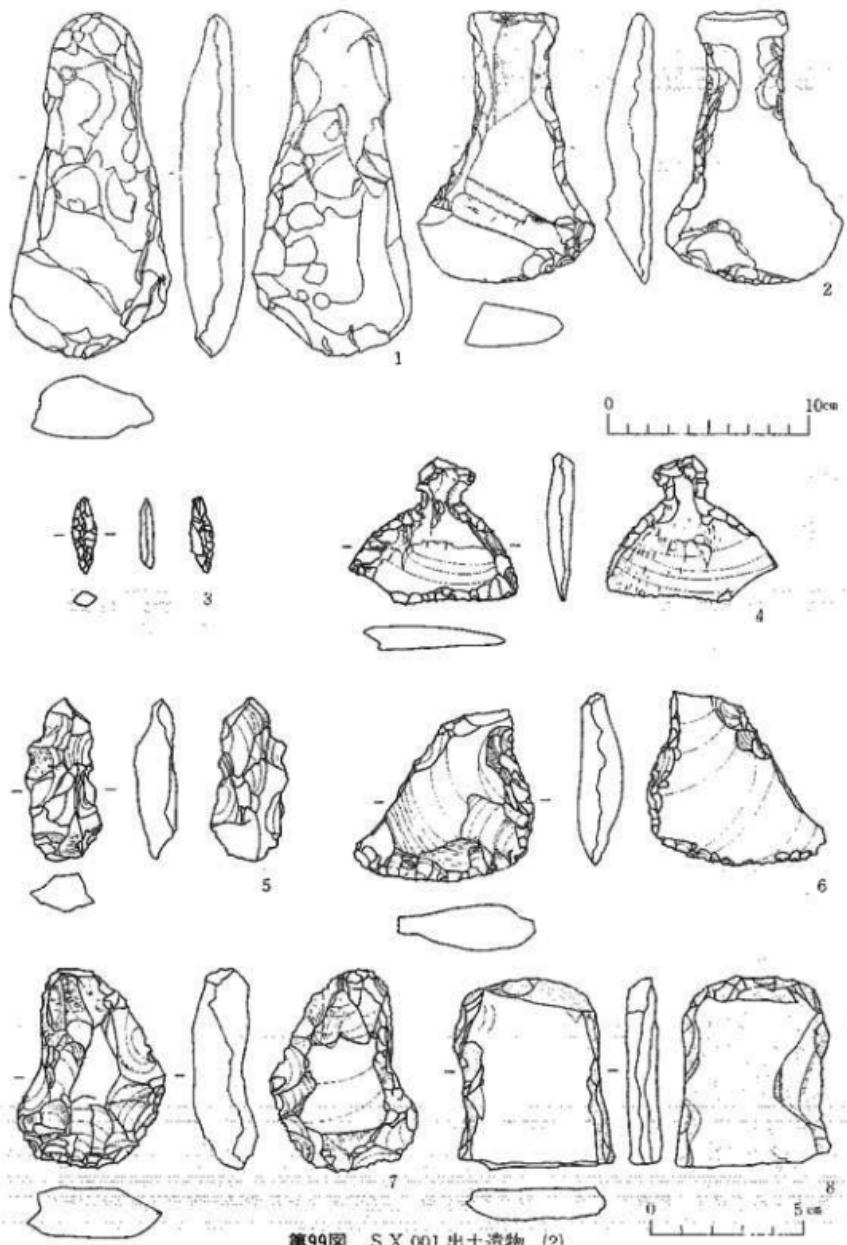
M F58・59、M G58・59、M H59グリッドに渡り、地山面で検出された。水路及び畦畔によって大きく切られ、北西部には S N001~004焼土遺構が重複する。加えて、地山面と埋土との識別が難しく、正確な輪郭は把握できなかったが、およそ 9 m × 6 m の楕円形を呈するものであろう。中心部に向かって極めて緩やかに凹んでおり、自然の落ち込みであると判断される。最深部で確認面から約 20cm の深さを測る。大洞C1式の先形土器を含む多量の土器片と石器、自然石が投げ込まれた状況で出土した。



第97図 S X 001 実測図



第98図 S.X. 001 出土遺物 (1)



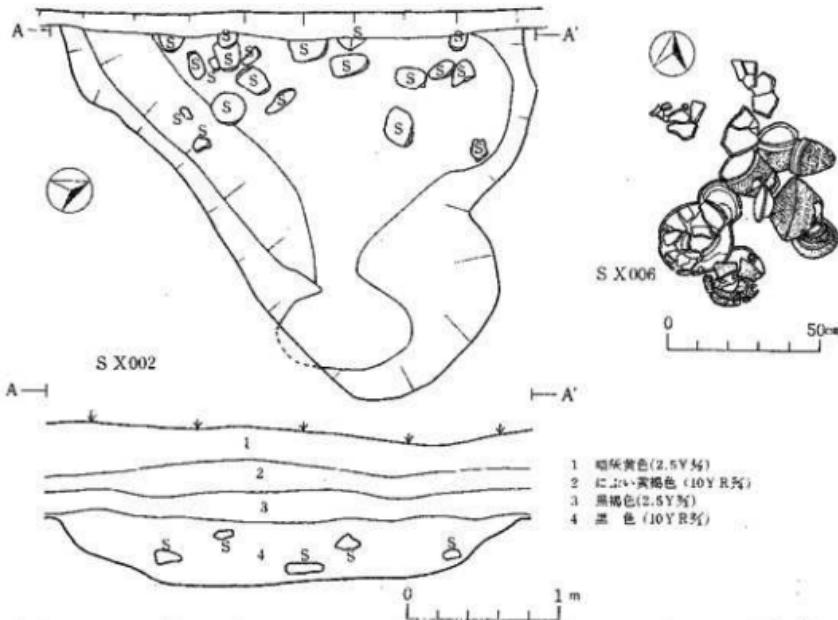
第99図 SX 001 出土遺物 (2)

第1表 SX 001 出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第98図1	第71図版31	浅鉢	(18.0)cm	7.6cm	5.2cm	—	
〃2	第71図版32	深鉢	(10.6)cm	10.3cm	3.8cm	10.3cm	
〃	—	深鉢	11.1cm	—	—	12.3cm	
〃4	第71図版33	注口土器	4.0cm	8.7cm	4.4cm	6.4cm	
〃5	第71図版34	深鉢	—	—	—	7.8cm	

SX 002 (第100図・第51図版)

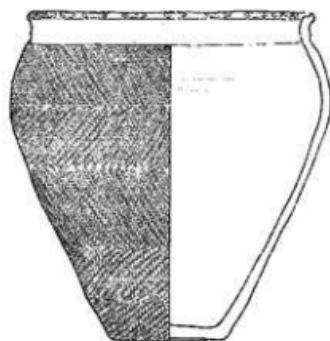
M F62グリッドの東側に位置し、地山面で確認された。西側は水路によって切られている。検出部分のみで東西240cm、南北300cm、不整形で、底面は東側から西側に向かってなだらかに落ち込んでいる。径20cm大の石が投げ込まれており、覆土下方から縄文土器片、上方から中世陶器が1点出土した。



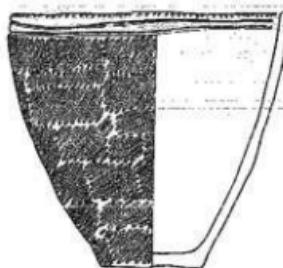
第100図 SX 002・006土器一括廃棄遺構実測図

SX 005 土器一括廃棄遺構 (第54図・第52・72・73図版)

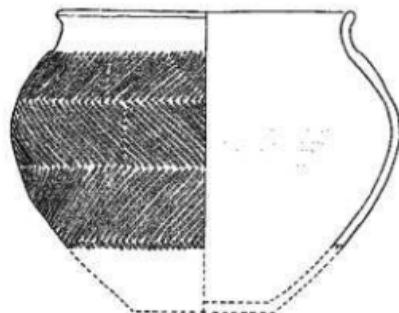
L C44グリッド南側にあり、地山面で確認された。SK 144を切っており、東南端が不明瞭であるが、140cm×92cmの大きさに推定される土壌状の掘り込みで、北西方向が細く、南西側が広がっており、最深部で25cmの深さを有する。この中に大洞C2式期の完形土器13個体及び土器破片、石鏃、小形の獨鉛石、有溝半球状石製品が、一括廃棄された状態で出土した。



1



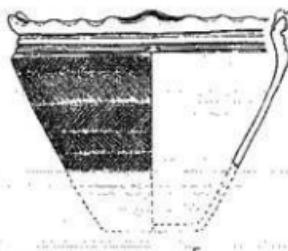
2



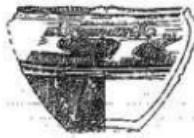
3



4



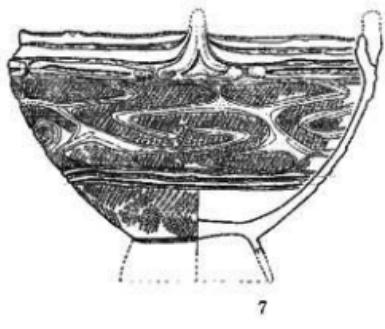
5



6

第101図 S X005出土遺物 (1)





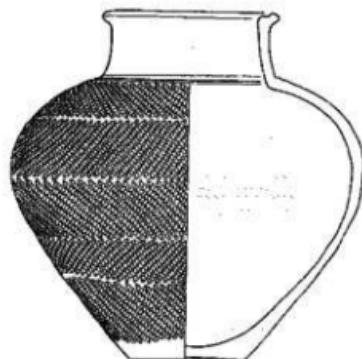
7



8



9



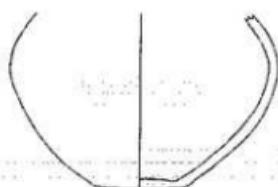
10



11



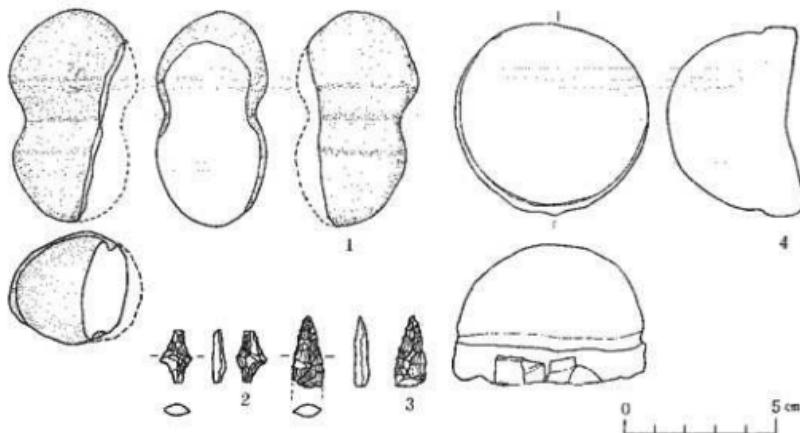
12



13

0 10cm

第102図 S X005出土遺物 (2)



第103図 S X005出土遺物 (3)

第2表 S X 005 出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	脚部最大径	備考
第101図 1	第72図版35	深鉢	13.6cm	16.2cm	5.7cm	17.9cm	
" 2	" 36	深鉢	13.6cm	12.7cm	5.0cm	-cm	
" 3	" 37	壺	14.8cm	(14.9)cm	(7.0)cm	(19.3)cm	
" 4	—	深鉢	(10.3)cm	13.9cm	5.0cm	(10.7)cm	
" 5	第72図版39	鉢	14.1cm	(11.0)cm	4.8cm	13.8cm	
" 6	" 39	鉢	(8.5)cm	6.2cm	3.5cm	(9.6)cm	
第102図 7	" 40	台付鉢	17.3cm	(11.1)cm	6.9cm	18.4cm	
" 8	" 41	台付浅鉢	(11.5)cm	(4.2)cm	5.3cm	-cm	
" 9	" 42	台付浅鉢	15.5cm	4.9cm	5.4cm	-cm	
" 10	—	壺	8.8cm	17.3cm	6.5cm	17.5cm	
" 11	第73図版43	壺	6.5cm	12.4cm	4.9cm	12.8cm	
" 12	" 44	壺	—cm	—cm	4.8cm	13.8cm	
" 13	" 45	蓋	12.0cm	5.6cm	—cm	—cm	朱捺

S X 006 土器一括廃棄遺構 (第100図・第7・52・53・73・74図版)

L 153・54グリッドにまたがり、第IV層上面の捨て場的状況の中に、壺、浅鉢、半精製鉢等8個体の完形土器が一括して廃棄された状態で検出された。土器は大洞A式土器である。

第3表 S X 006 出土土器計測値

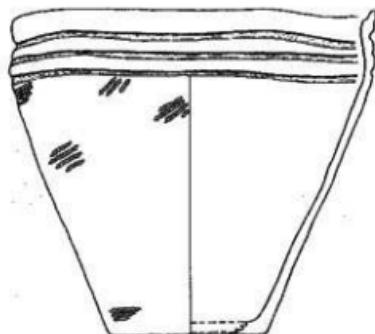
図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	脚部最大径	備考
第104図 1	第73図版46	深鉢	13.4cm	12.9cm	6.5cm	14.4cm	
" 2	" 47	深鉢	13.0cm	12.5cm	4.7cm	13.9cm	
" 3	" 48	深鉢	18.5cm	16.1cm	7.6cm	19.1cm	
" 4	" 49	台付鉢	15.8cm	(14.3)cm	(7.0)cm	15.6cm	
" 5	" 50	壺	—	—	7.1cm	22.0cm	
" 6	第74図版51	壺	—	—	7.3cm	17.3cm	
第105図 7	" 52	壺	—	—	7.0cm	22.9cm	
" 8	" 53	壺	12.8cm	20.7cm	6.7cm	22.7cm	



1



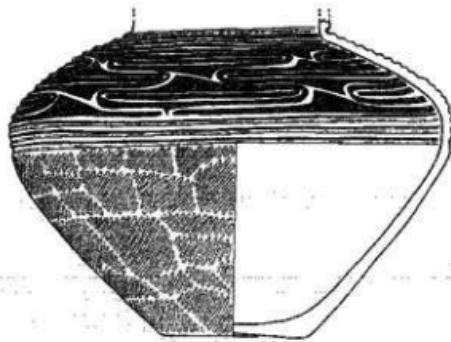
2



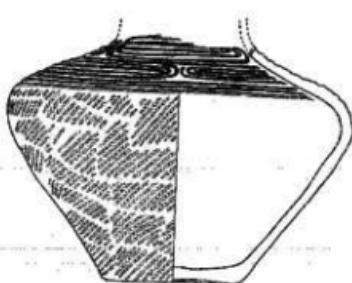
3



4



5



6

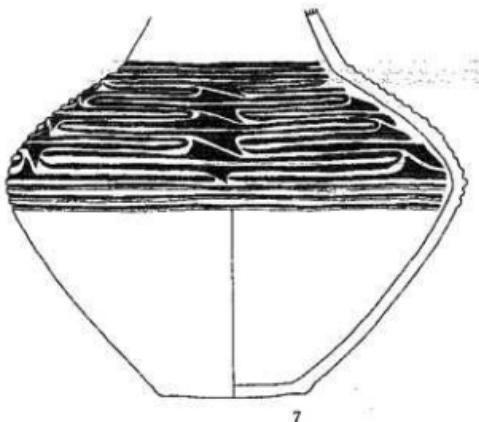
0 10cm

第104図 S X006出土遺物 (1)

S X 008 包含層

(第12図・第53図版)

調査区最北端に検出された遺物包含層である。LCラインで土層断面図作成のためLCラインに沿って幅2mのトレンチを入れたが、トレンチ最北端のLC71グリッド杭直下から南へ傾斜する土層があり、これを追究したところ、LC69グリッド杭より南1.4m、地表下1.5mの地点で消失した。東西方向の括がりを把握するため71ラインに東西方向のトレンチを設定したところ、包含層の分布範囲はLC71グリッド杭より東は4.5m、西は5mの範囲に把握できた。LC71杭の直下では層厚70cmを測り、北側の高位置から流入する形で堆積したことが明らかであるが、これより北方は調査範囲外であるため、北側への追求は不可能であった。包含層からの出土土器は大洞C₁式で、基本層位第IV層にある。LCライン

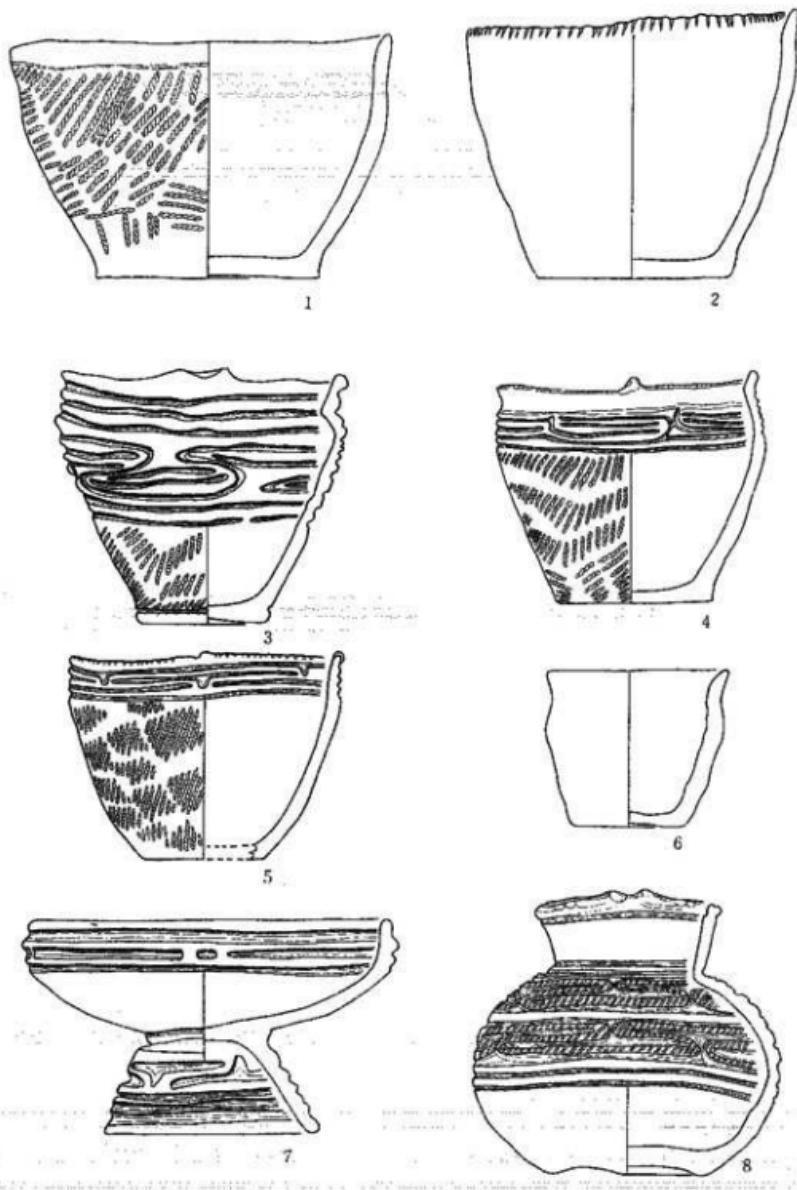


第105図 S X 006出土遺物 (2)

では60グリッド内で第IV層が消失し、それ以北では遺物包含層の存在がなく空白地帯を形成しており、この北端の包含層の存在は特異である。土層が北方からの流入であることを考慮すると、調査区域北方にも遺構の存在が推察される。

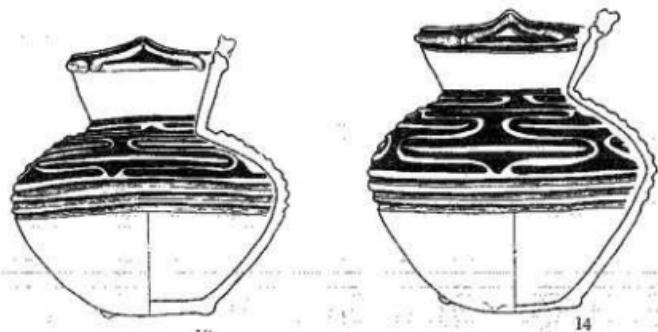
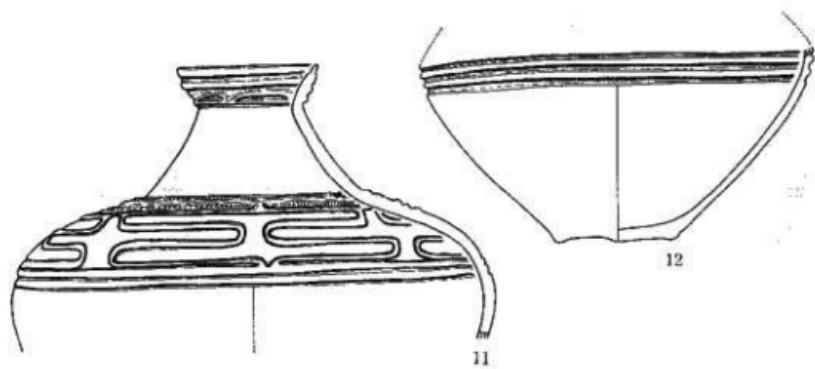
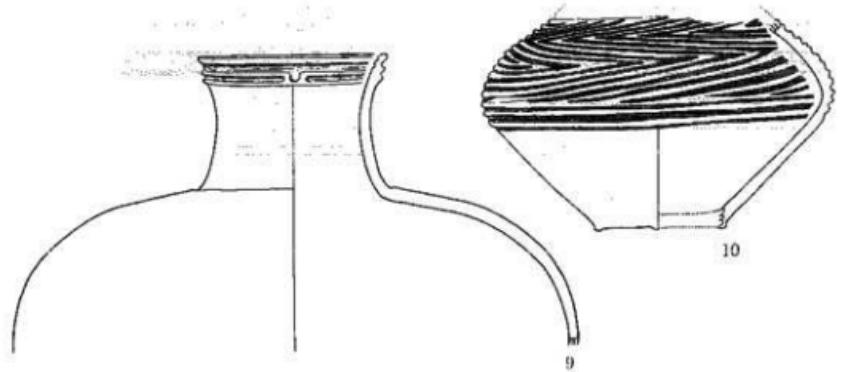
S X 009 捨て場 (第53・54・74・75・76図版)

調査範囲南端に検出された捨て場である。11グリッドに渡り、長さ18m、幅7mで地山上の浅い落ち込みがあり、この中に多量の遺物が投棄されたものであるが、遺物はこの落ち込みを越えてその南北両側にも分布している。東側は調査区域外の樹園地に入り込んでおり、東北東



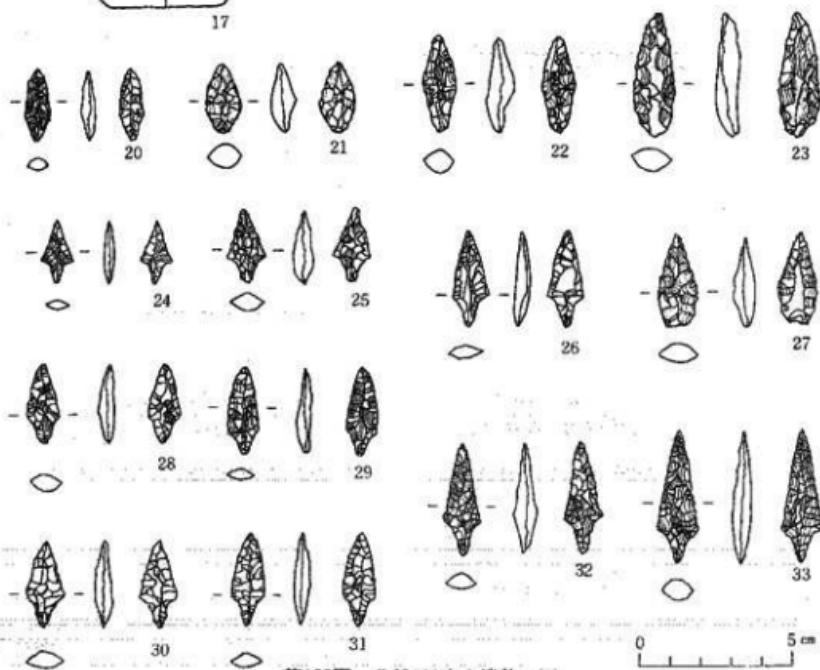
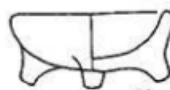
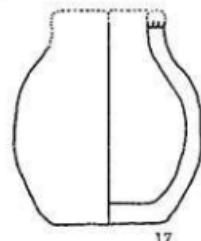
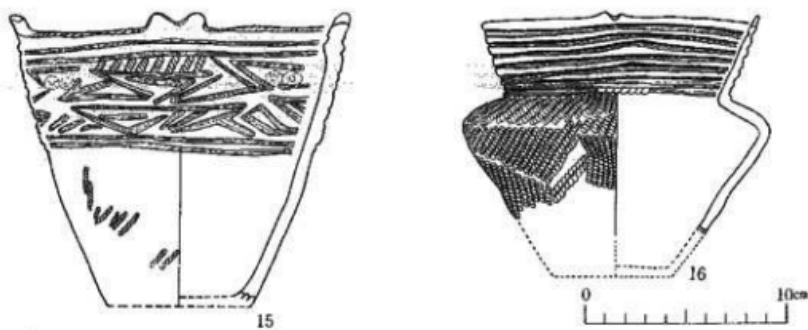
第106図 S X009出土遺物 (1)





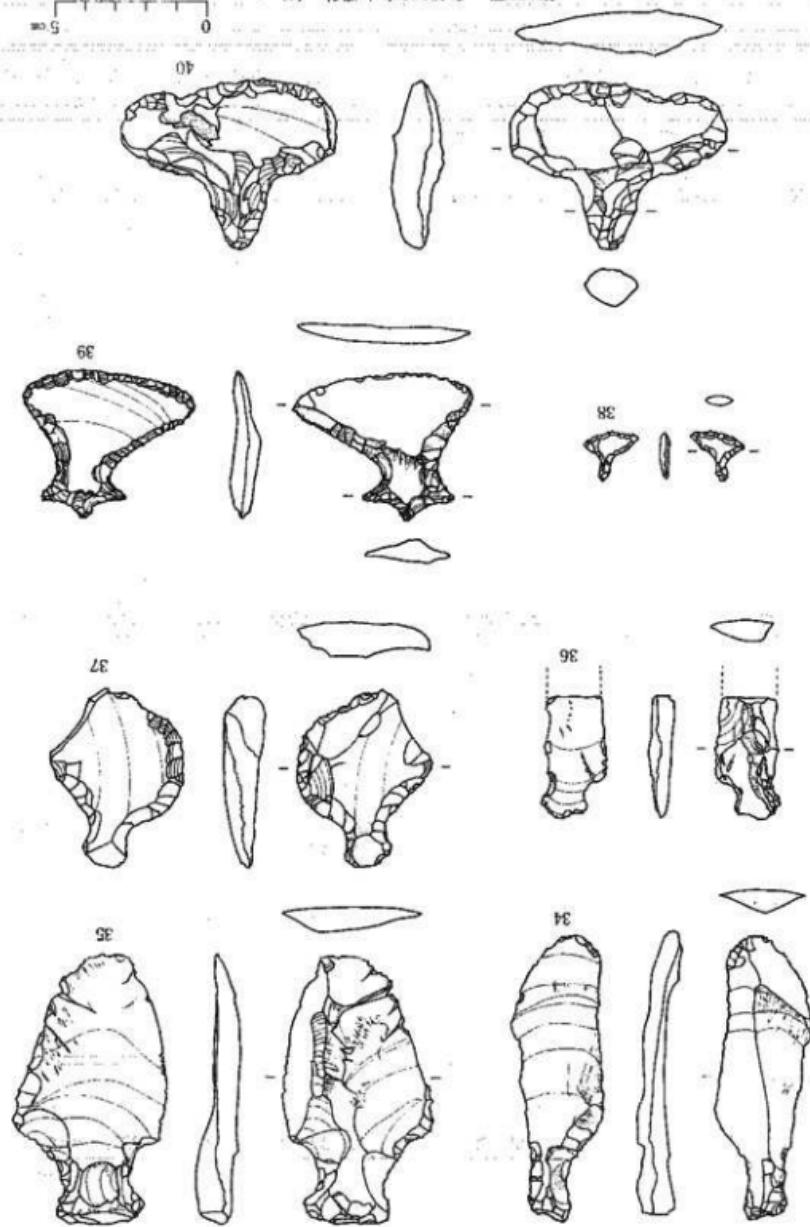
第107図 S X009出土遺物 (2)

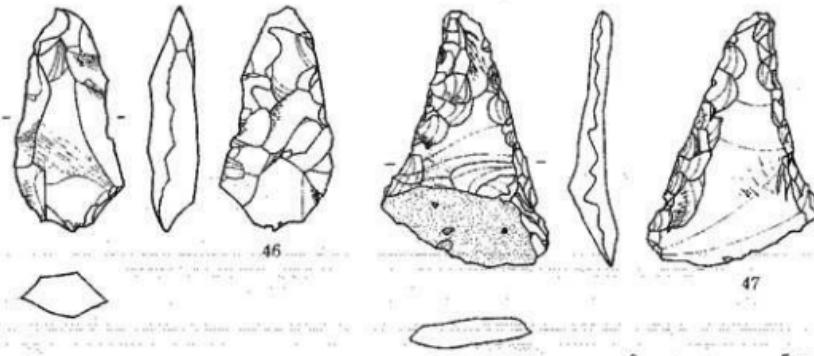
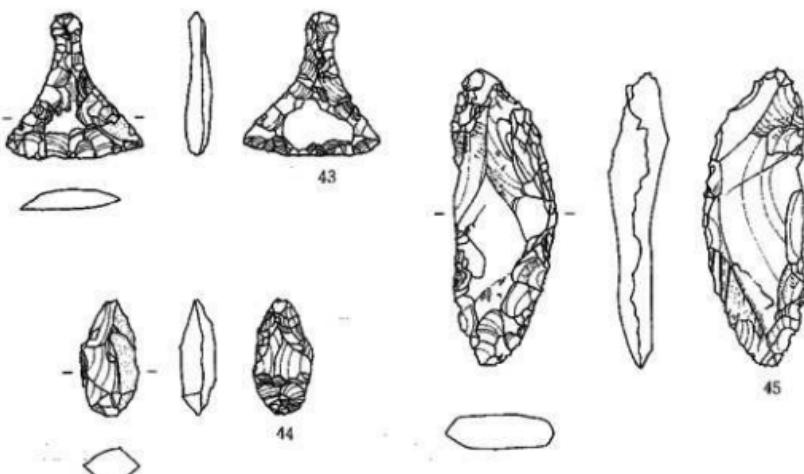
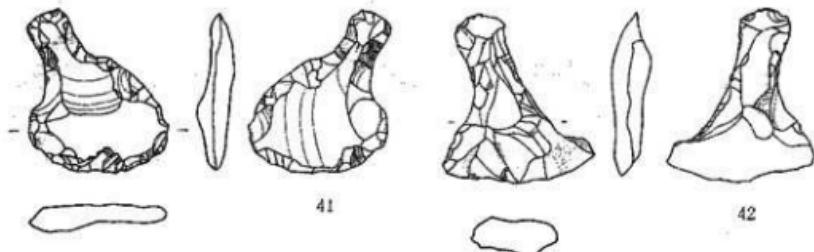




第108図 S X009出土遺物 (3)

圖109 S X600出土器物 (4)

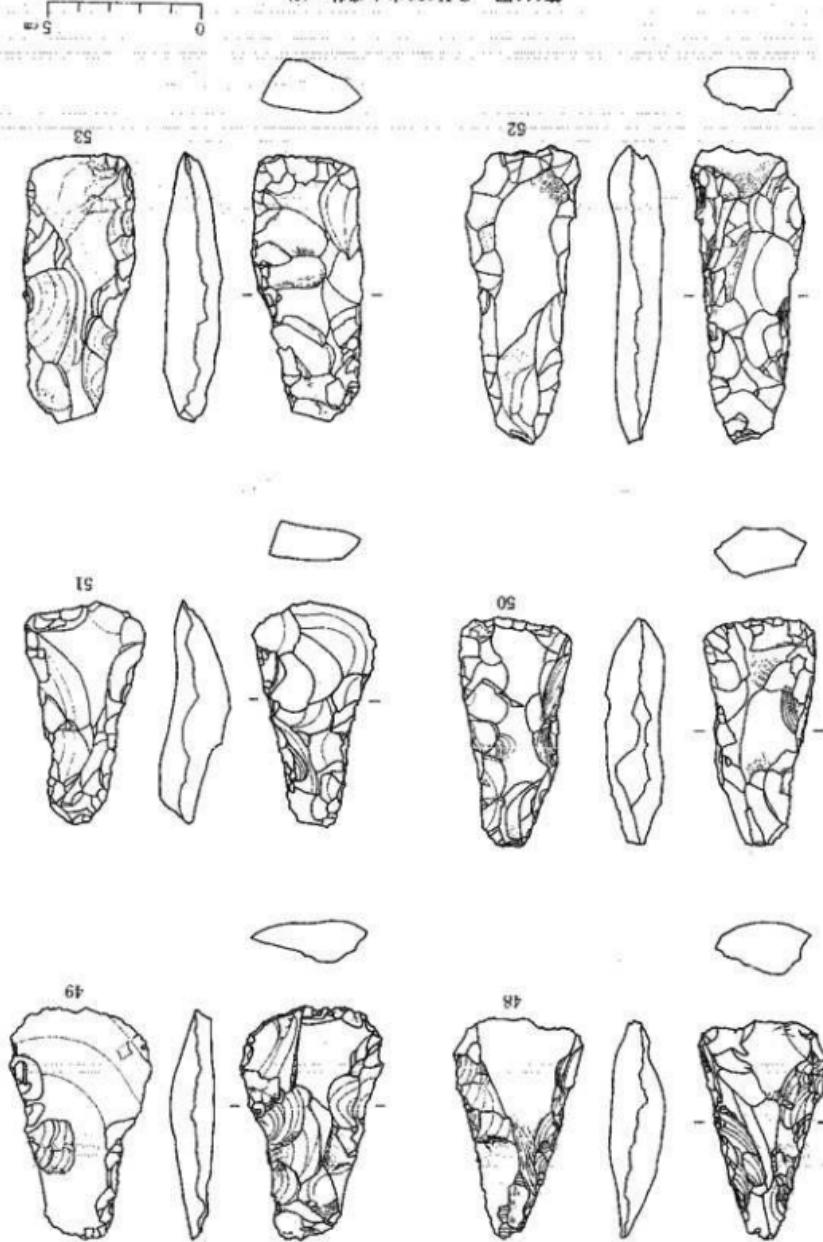


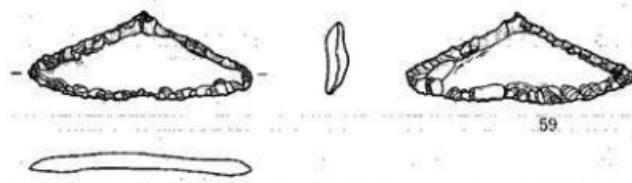
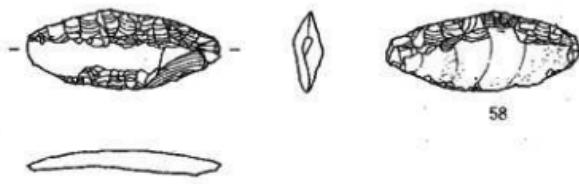
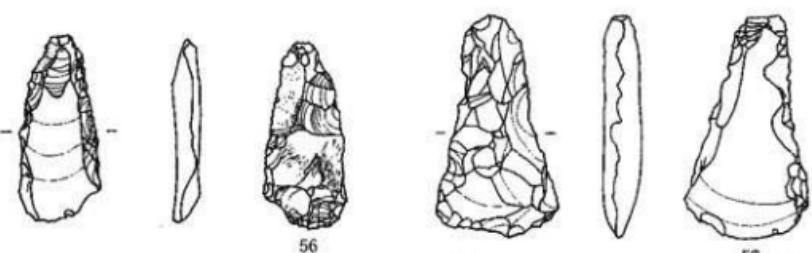
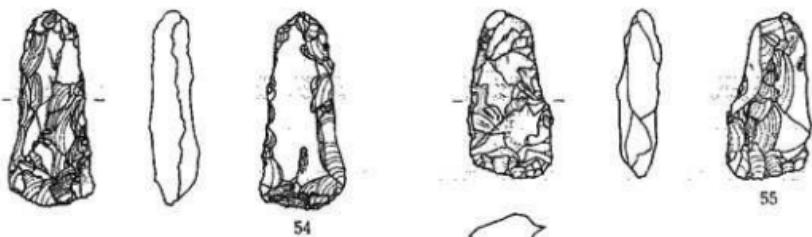


第110図 S X009出土遺物 (5)



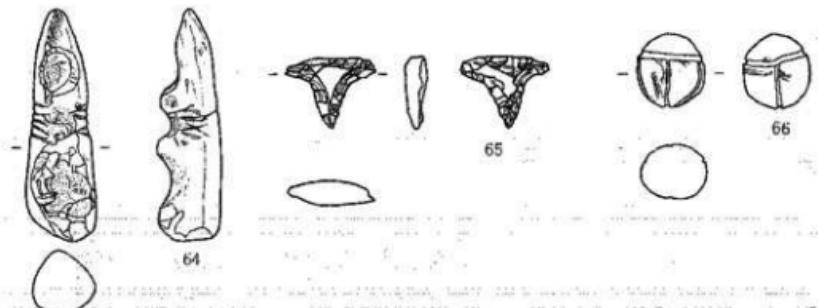
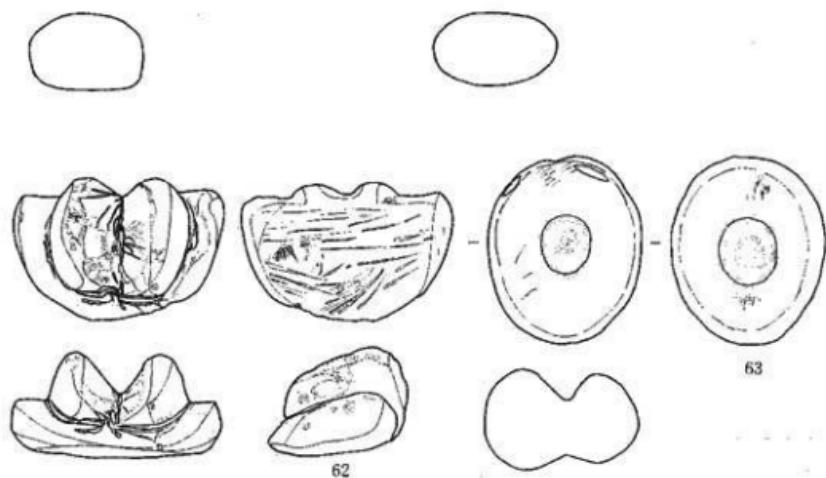
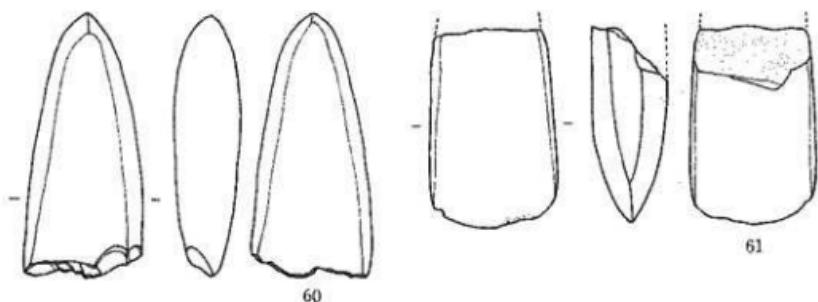
圖11 S-X009出土遺物 (6)





0 5 cm

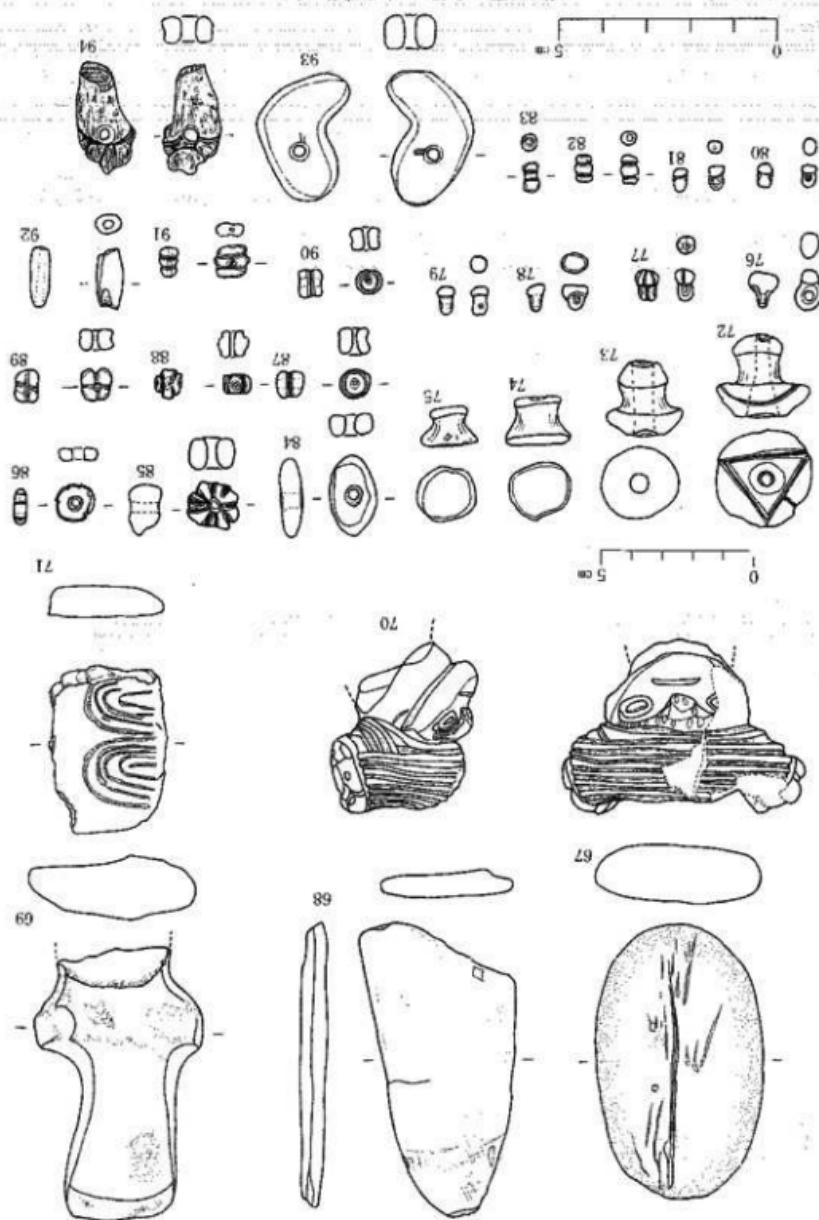
第112図 S X009出土遺物 (7)



第113図 S X009出土遺物 (8)

0 5 cm

第114圖 SX009出土遺物 (9)



方向に伸びていることが窺われる。遺構としては最南端の位置にあり、これより南の区域にも幾つかのグリッド及びトレシチを設定したが、遺構・遺物は皆無であった。出土土器は全て大洞A式に限られ、他型式の土器は全く混入していない。土器は復原、実測し得たもので16個体。石鉗、石斧、石匙、非実用的な石製品、土偶頭部、土版などの他、完形品だけで総計664個の装飾品類が発見された（第106図～第114図）。勾玉は碧玉製、石製小玉のうち多くは凝灰岩製である。

第4表 SX 009 出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	制部最大径	備考
第106図1	第74図版54	鉢	12.3cm	7.9cm	7.4cm	—cm	
〃2	〃55	鉢	10.4cm	8.9cm	6.3cm	—cm	
〃3	〃56	鉢	9.4cm	8.3cm	4.3cm	9.6cm	
〃4	〃57	鉢	8.4cm	7.7cm	5.1cm	8.8cm	
〃5	〃58	鉢	(9.0)cm	6.5cm	(3.9)cm	—cm	
〃6	第75図版59	鉢	(5.5)cm	(5.5)cm	4.0cm	(6.0)cm	
〃7	〃60	台付浅鉢	12.3cm	7.0cm	6.9cm	12.5cm	
〃8	〃61	壺	6.6cm	9.0cm	5.6cm	15.0cm	
第107図9	〃62	壺	9.5cm	—cm	—cm	(28.0)cm	
〃10	〃63	壺	—cm	—cm	(6.1)cm	17.7cm	
〃11	〃64	壺	7.0cm	—cm	—cm	24.0cm	
〃12	〃65	壺	—cm	—cm	6.4cm	(19.7)cm	
〃13	〃66	壺	8.3cm	13.9cm	6.8cm	13.9cm	
〃14	第76図版67	壺	9.6cm	15.1cm	6.9cm	14.1cm	
第108図15	〃68	深鉢	16.7cm	14.3cm	6.4cm	—cm	
〃16	〃69	深鉢	12.5cm	(13.1)cm	(5.7)cm	15.3cm	
〃17	〃70	壺	(4.0)cm	(7.1)cm	3.4cm	6.2cm	
〃18	〃71	袖珍土器	5.4cm	2.4cm	—cm	—cm	
〃19	〃72	袖珍土器	—cm	—cm	2.1cm	—cm	

第5表 SX 009 出土装飾品類グリッド別出土数一覧表

グリッド	KD38	KD39	KD40	KD41	KE38	KE39	KE40	KE41	KF39	KF40	KF41	KG39	KG40	計
土製耳飾	1		4	3	2	2	10		2		1	4		29
勾玉												1		1
土製小玉	4		2	6	5	34	134	2	84	217		46	20	554
石製小玉	2		2	1	4	11	11		16	8		17	3	75
土製管玉											1			1
その他						1			3					4
総計	7		8	10	11	48	155	2	105	226	1	18	23	664

(2) 遺構外出土遺物

調査によって出土した遺物はコンテナ450箱の多さに上るが、縄文時代の遺物が圧倒的大多数を占めている。この縄文時代遺物のうち土壙などの遺構に伴って出土したものは極めて少なく、大部分は遺構外からの出土である。しかし、遺構外とは言え、調査区中央部には完形土器を含む極めて多くの土器片、石器などの遺物を出土するゾーンが、土壙、土器棺墓、石圓炉、配石などの遺構と重なっており、これら遺構の構築と同時進行する形で形成されたと考えられ、「捨て場」の如くそれ自体がひとつの遺構と見なすこともできよう。だが、明らかに時間差のある他の多くの遺構と重複し、また範囲も極めて広範に渡っているので、それら多くの遺物を遺構外出土遺物として取り扱うことにする。遺構配置図には殊に遺物出土量の多い範囲を図示してあるが、必ずしもこの内部出土とは限らない。

遺物整理にあたっては極めて限定された時間内にこれら多くの遺物を処理し、報告することは不可能であるし、また、その方法論をも持ち合わせてはいない。復原、実測して図示した土器は134個体であるが、これらは現場の調査時点において完形資料またはそれに近い状態で出土したもののみであって、詳細に復原、実測作業を行うならば、図示可能な土器は、恐らくこの数倍の数になろう。石器、装飾品類なども同様であって、図示し得たものは限定された一部のみにすぎない。しかし、各器種ごとの代表例は網羅し得たと思う。

① 土 器

深鉢・鉢（第115図1～第122図42、図版76～81）

台付鉢（第122図43～第125図59、図版81～83）

浅鉢（第125図60～第127図70、図版84～85）

台付浅鉢（第127図71～第128図74、図版85）

壺（第128図75～第135図115、図版85～90）

注口土器（第136図116～第137図120、図版91）

皿（第137図121～第138図123、図版91）

筒形土器（第138図124、図版92）

袖珍土器（第138図125～134、図版92）

② 石 器

石鎌（第139図1～43）

石槍（第139図44～第141図59）

笠状石器（第141図60～第144図85）

石匙（第145図86～第148図108）

搔器（第149図109～第150図126）

- 打製石斧（第152図127～第154図140）
 磨製石斧（第155図141～第156図152）
 石錐（第157図153～164）
 凹石（第158図165～172）
 石棒・石刀（第159図173～第161図206）
 独鉛石・独鉛石状石製品（第162図207～第163図222）
 円盤状石製品（第163図223～228）
 石鋸状石冠（第164図229～233）
 石冠（第165図234～237）
 有孔石製品（第165図238～第166図245）
 有溝石製品（第166図243～244）
 扁平磨製石製品（第166図245～248）
 玉類（第166図249～254）
 岩版（第168図264、267）
 その他の石器（第167図256～260）

③ 土製品

- 土版（第168図261～263、265～266）
 土偶（第169図268～第171図282）
 石冠状土製品（第172図）
 有孔円盤（第172図284）
 円柱形土製品（第172図285）
 玉類（第166図255）

④ 獣骨

遺跡内各所から骨片が少量出土している。山口敏氏によるとどの骨片も多かれ少なかれ火燃を受けて細かな破片となっているため、人骨、獣骨の区別もできないものもあるが、少なくとも明らかに人骨片と認められるものはないとのことである。中央部捨て場とS X 009 挣て場の中から、土器・石器等に混じって出土したものが大部分で、他に S N 009・021からもほとんど粉状になって検出された。以下の獣骨が判明した。

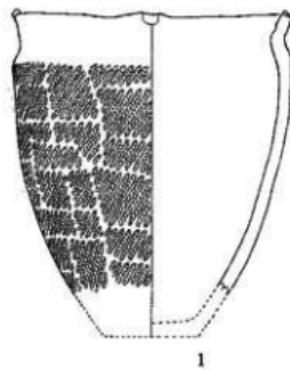
シカ 中足骨(?)、遠位骨端

クマ 左中足骨

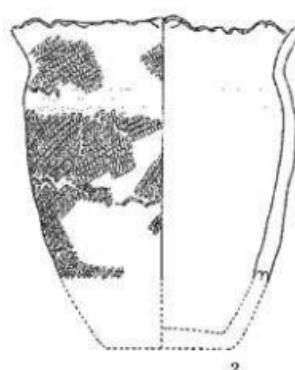
シカ 左中足骨

シカ 左中足骨または中平骨の遠位骨端

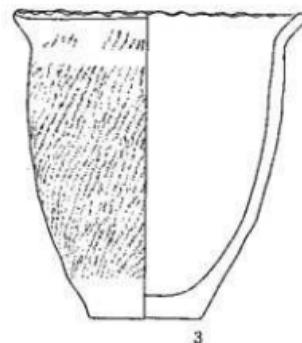
シカ 左距骨



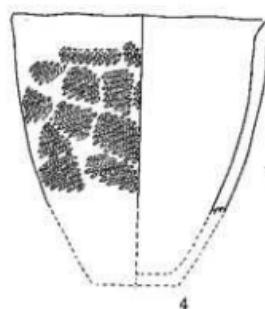
1



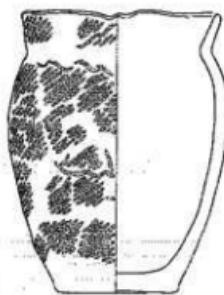
2



3



4

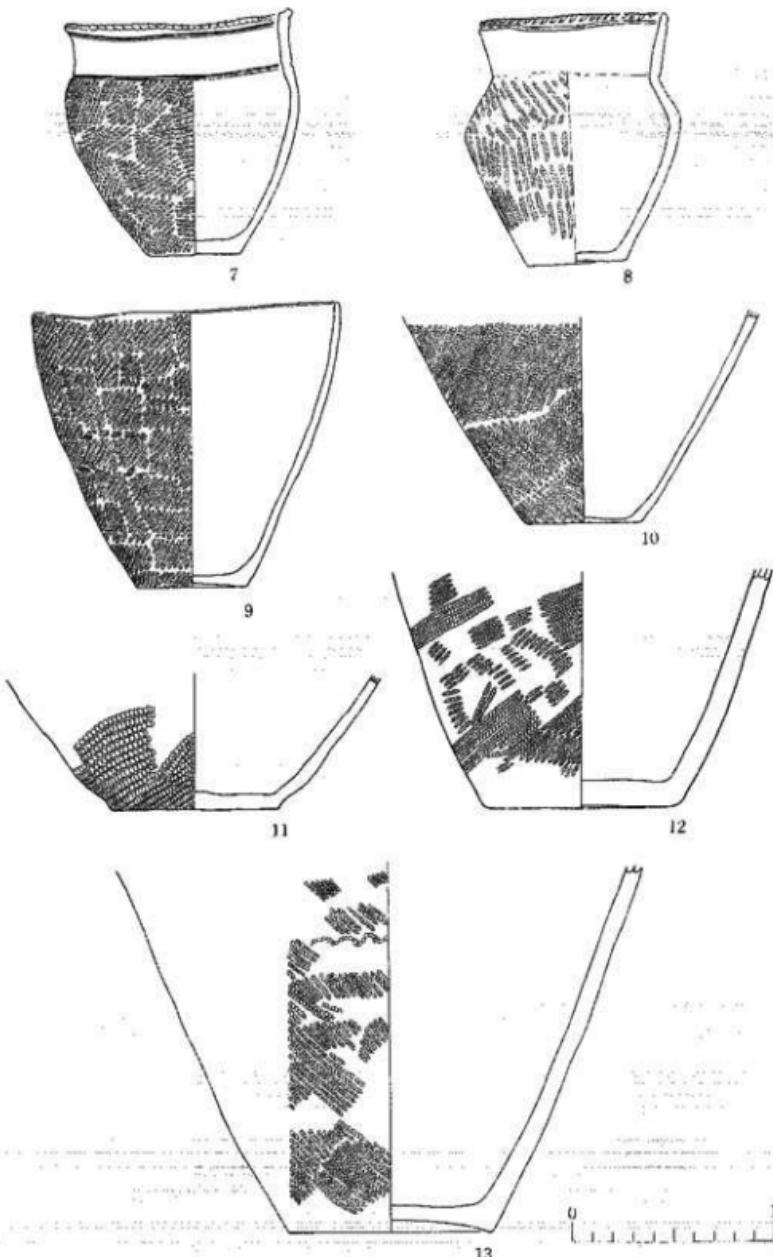


5

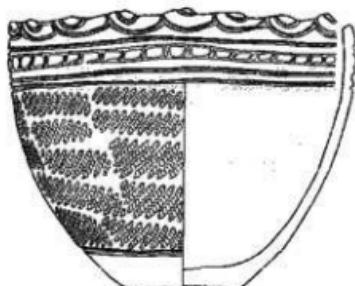


6

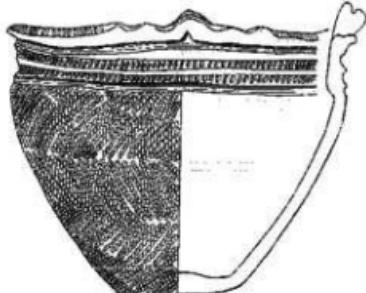
第115図 造橋外出土遺物（縄文1）



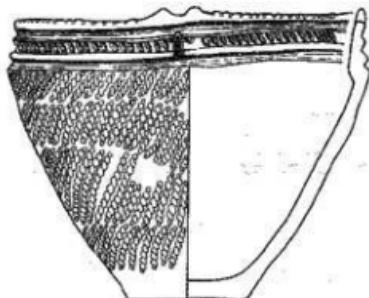
第116図 遺構外出土遺物（縦文2）



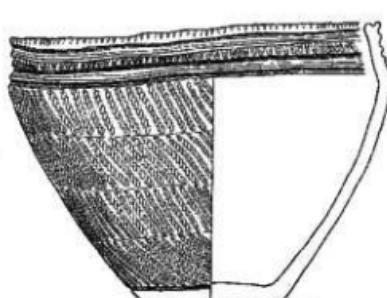
14



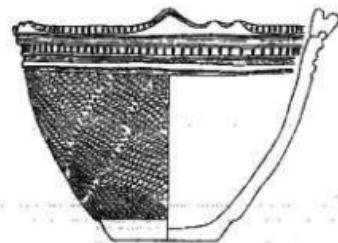
15



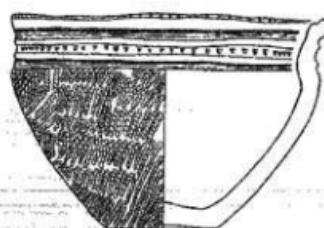
16



17



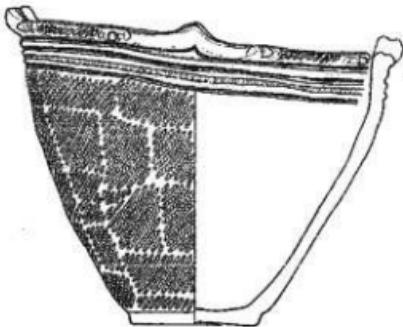
18



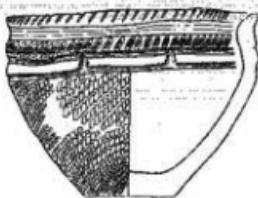
19



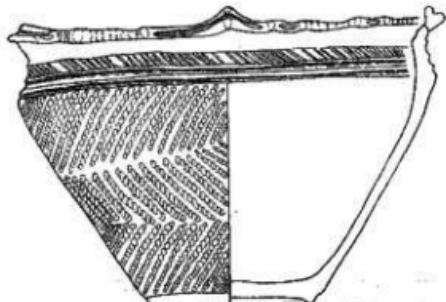
第117図 遺構外出土遺物（縄文3）



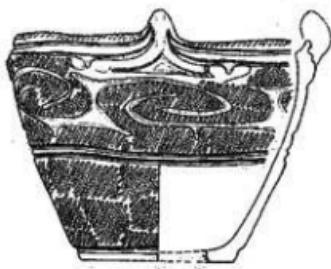
20



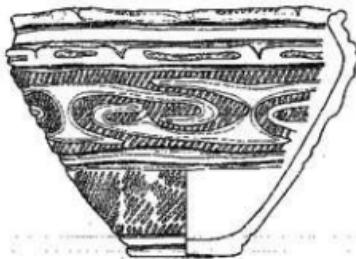
21



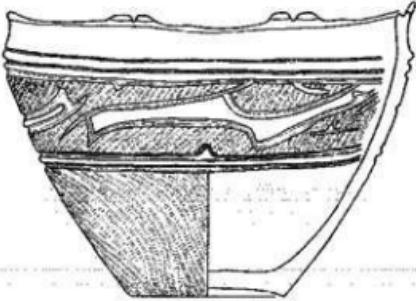
22



23



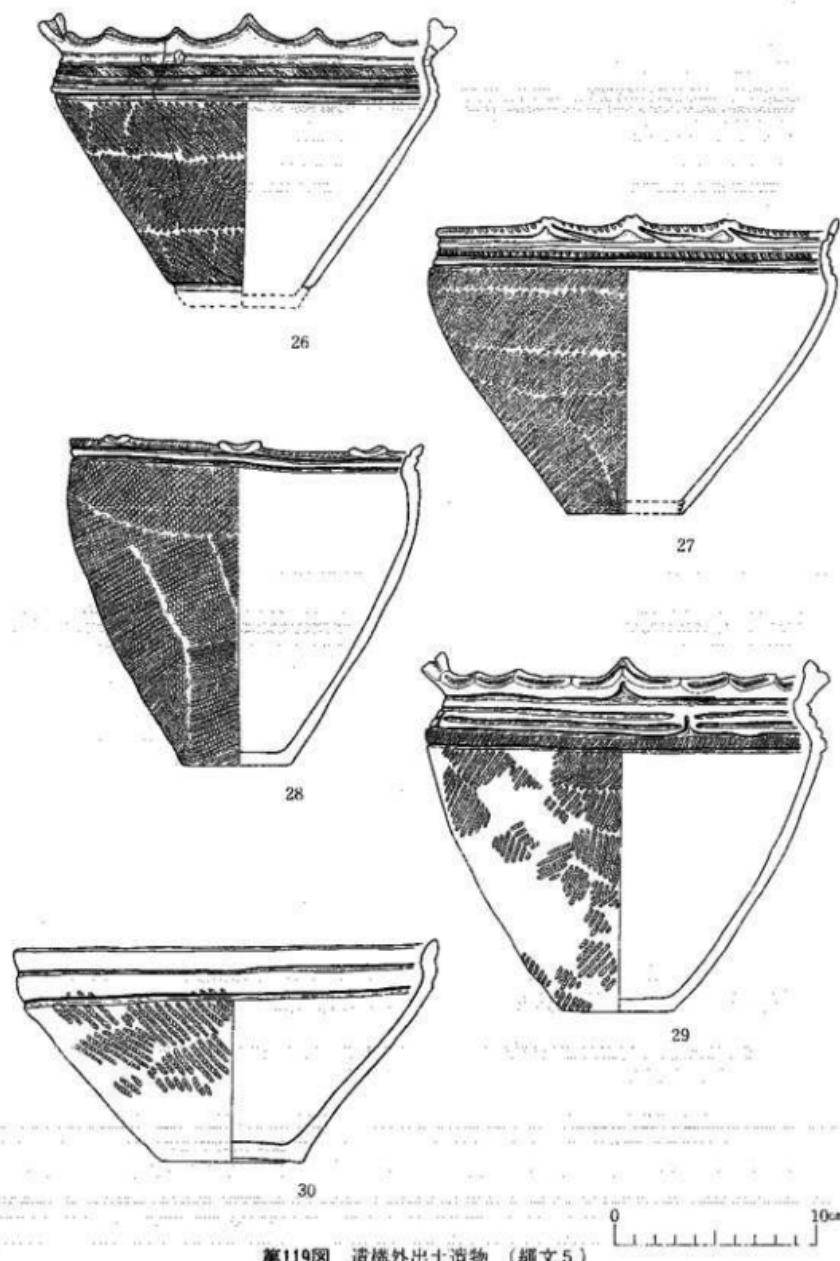
24



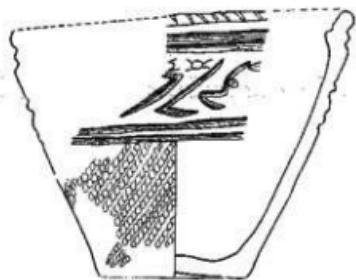
25

0 5 cm

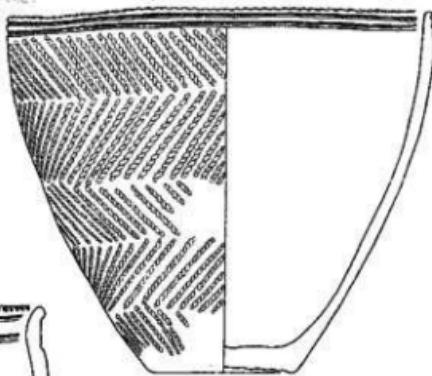
第118図 遺構外出土遺物（縄文4）



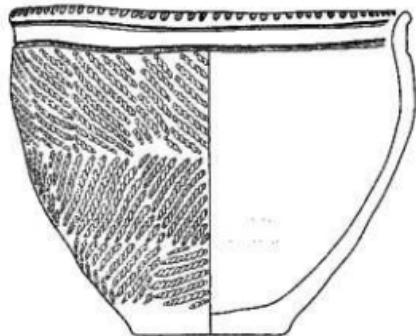
第119図 遺構外出土遺物（縦文5）



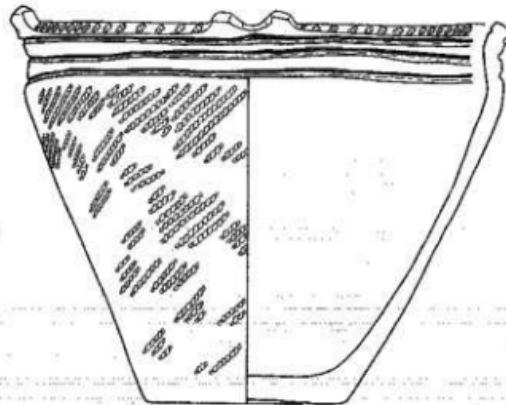
31



32



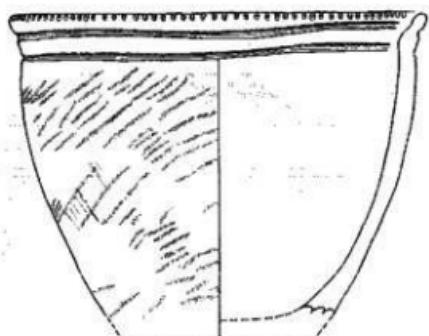
33



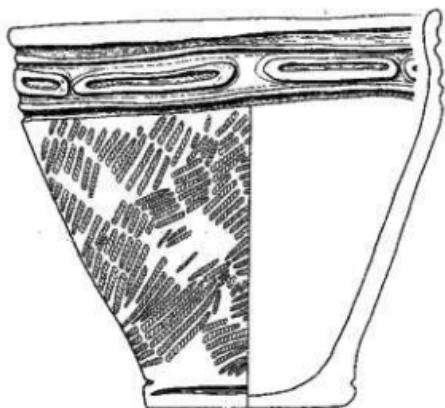
34

第120図 遺構外出七遺物（縄文6）

0 5 cm



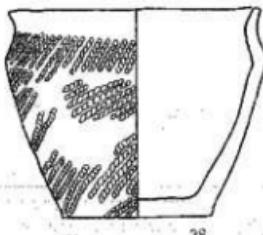
35



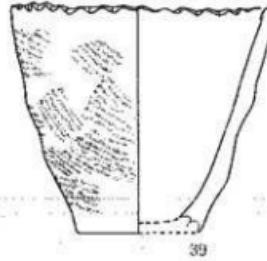
36



37



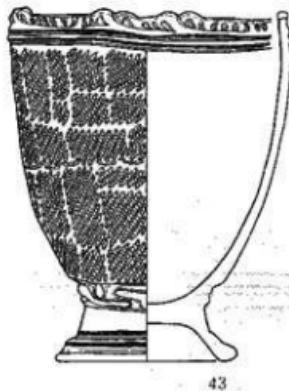
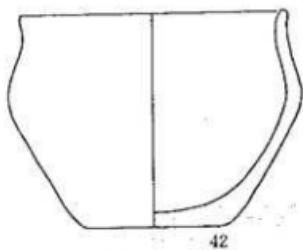
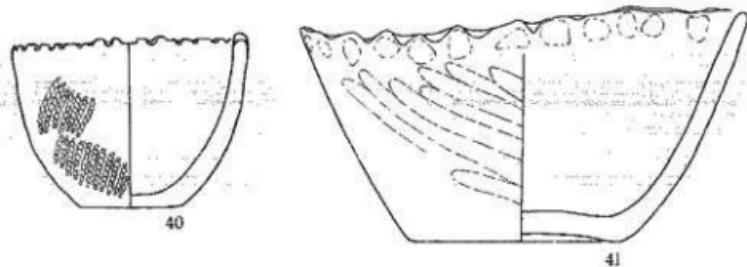
38



39

0 5 cm

第121図 遺構外出土遺物（縄文7）

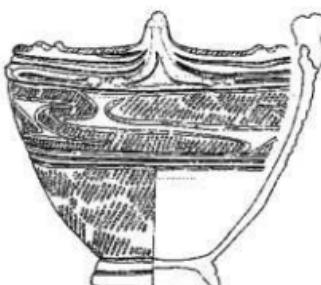


0 5 cm

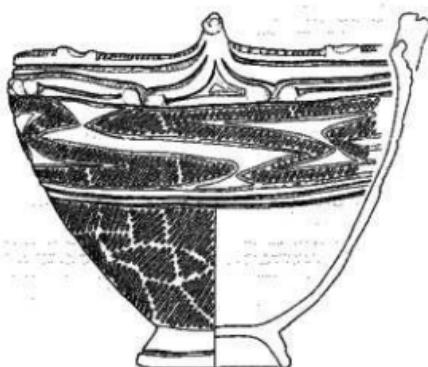
第122図 遺構外出土遺物（縄文8）



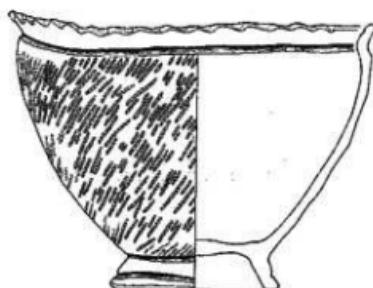
46



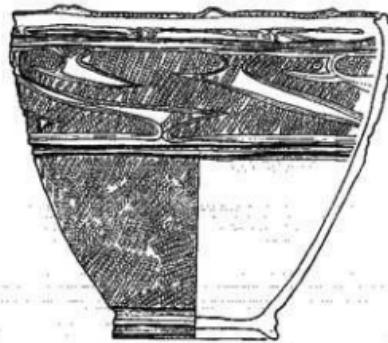
47



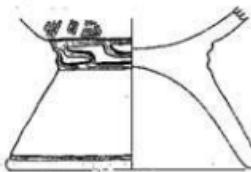
48



49



50



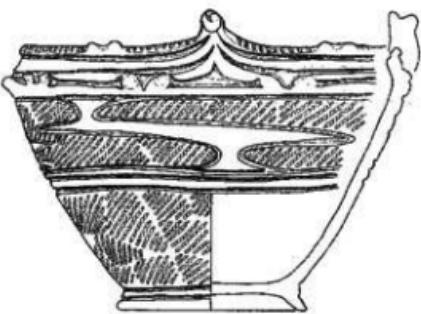
51



第123図 造構外出土遺物（縄文9）



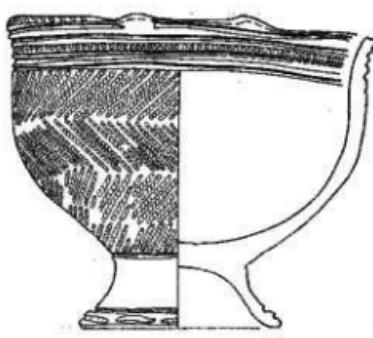
52



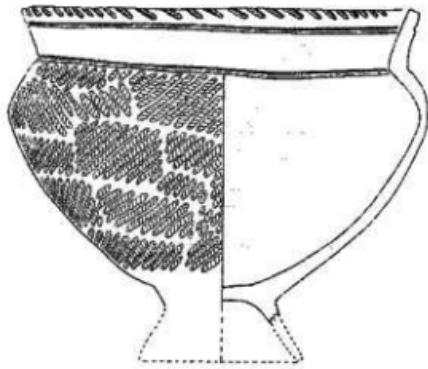
53



54



55



56



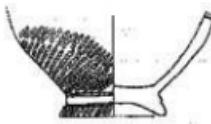
57

A scale bar at the bottom right of the drawing, ranging from 0 to 5 cm.

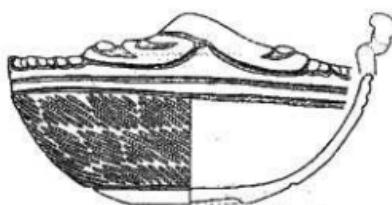
第124圖 遺構外出土遺物（縹文10）



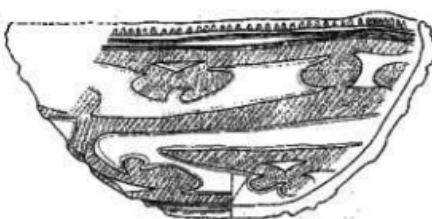
58



59



60



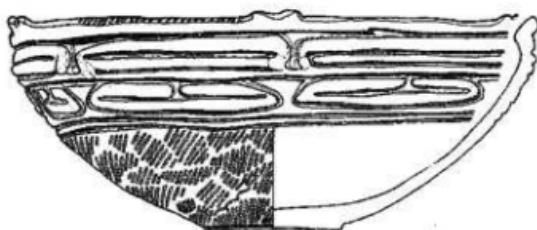
61



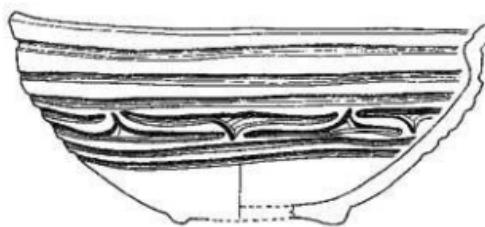
62



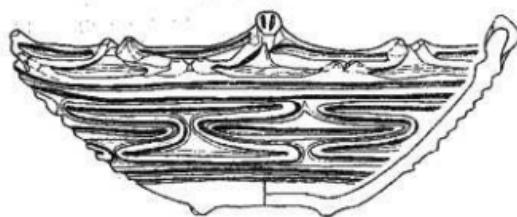
第125図 遺構外出土遺物（縄文11）



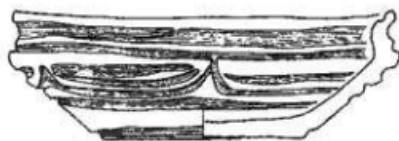
63



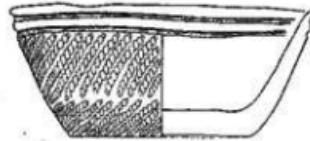
64



65



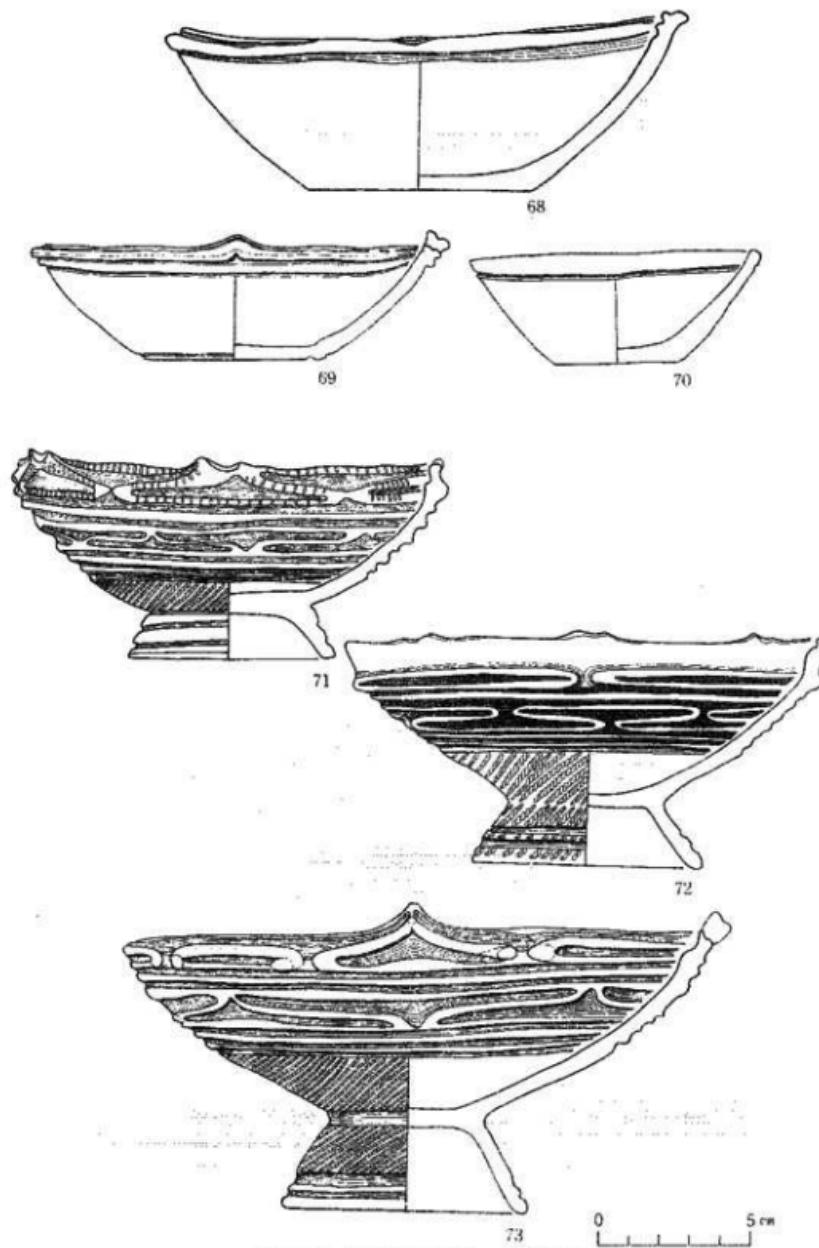
66



67

第126図 遺構外出土遺物（縄文12）

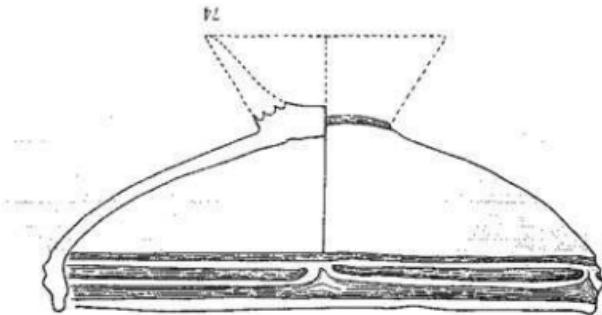
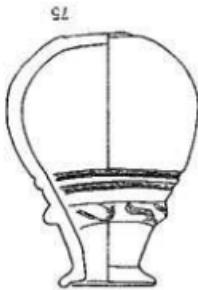
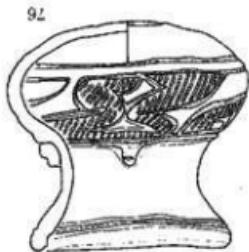
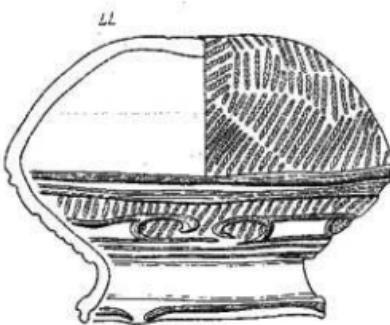
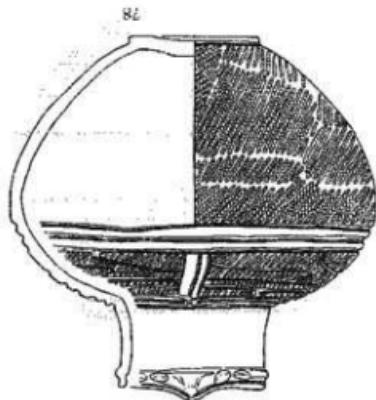


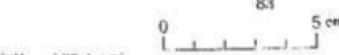
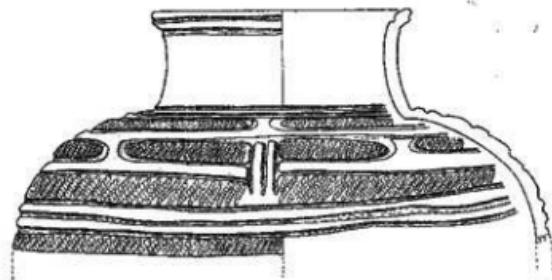


第127図 遺構外出土遺物（縄文13）

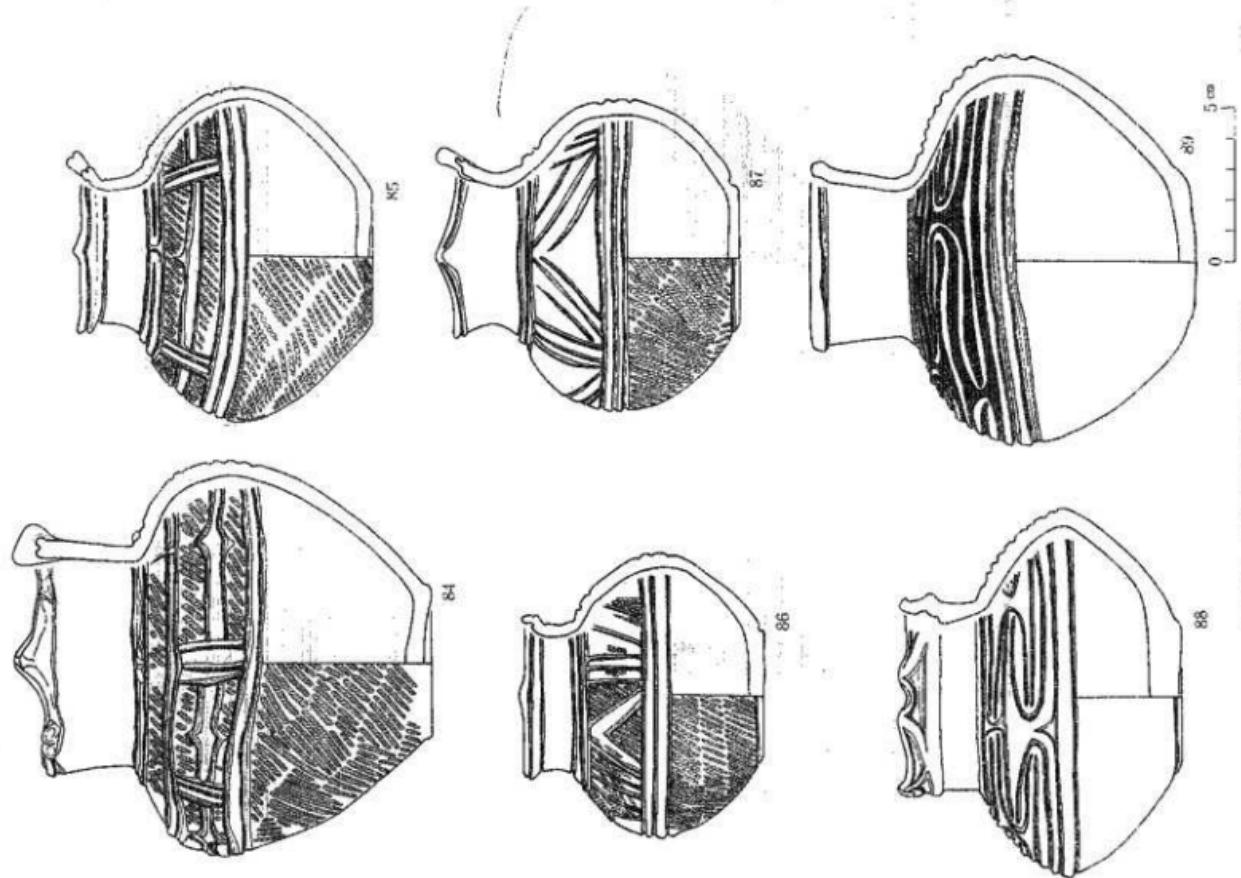
第128圖 遺傳外出手足畸形 (圖文14)

5 cm
0





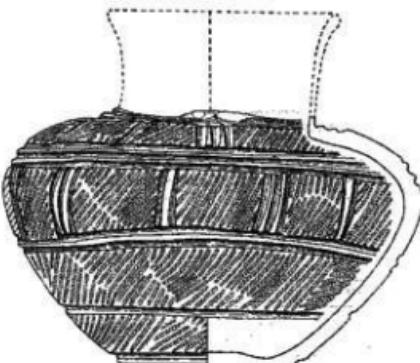
第129図 遺構外出土遺物 (掲文15)



第130図 舊機外出土遺物 (編文16)



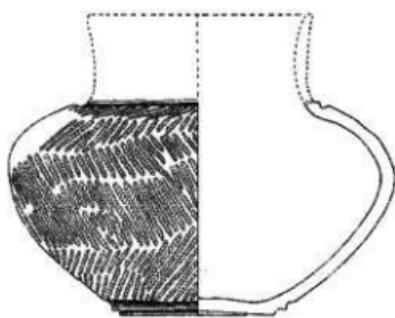
90



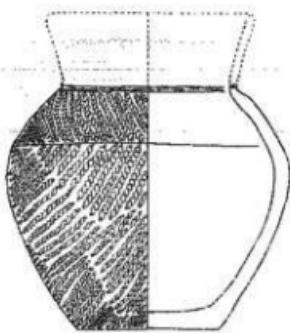
91



92



93



94



95

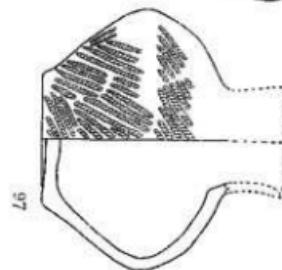
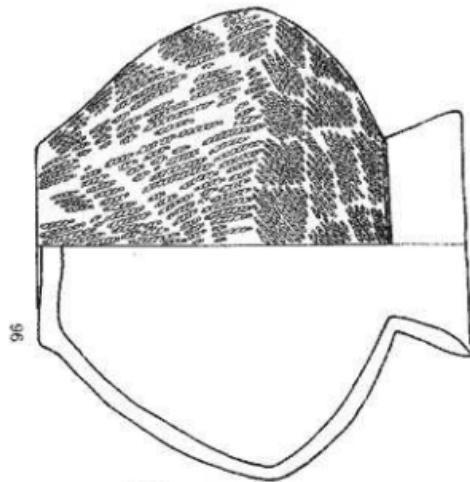
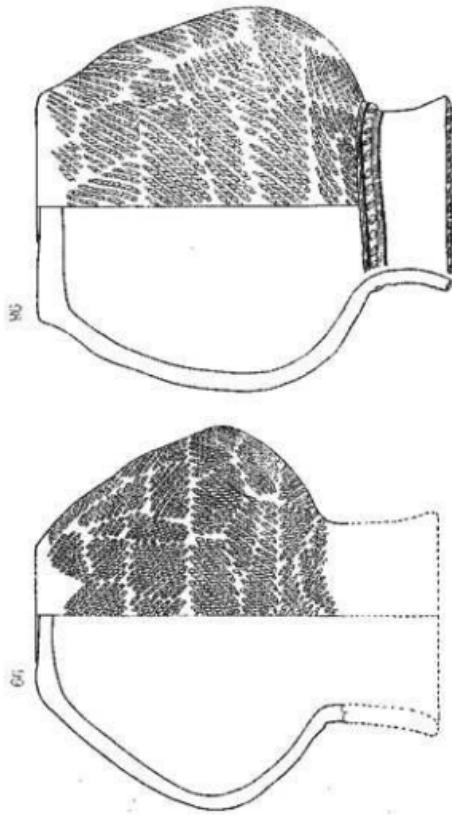
0 5 cm

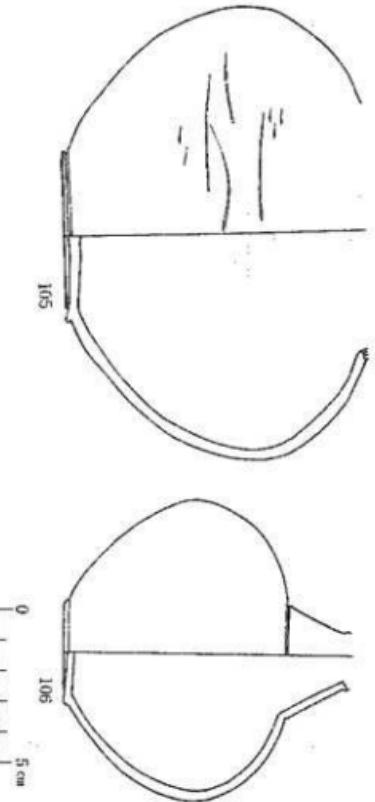
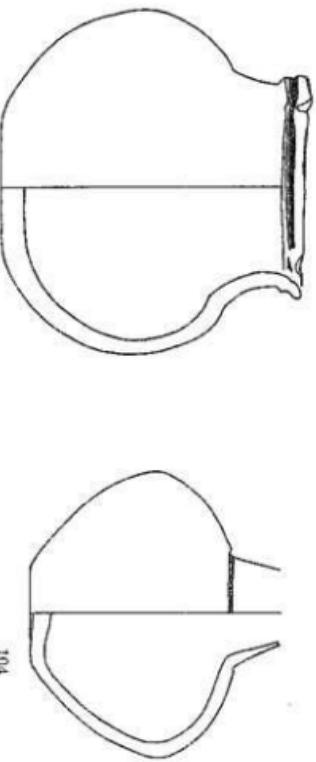
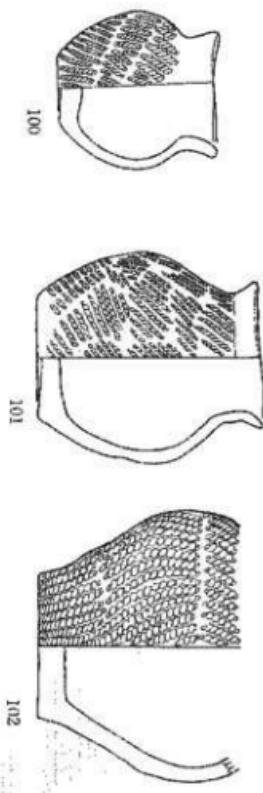
第131図 造横外出土遺物 (縦文17)

第132圖 遺構外出土遺物（圖文18）

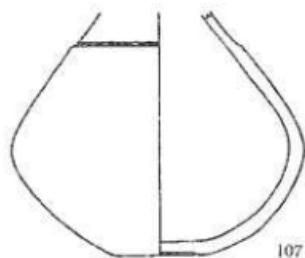
— 153 —

0
— 1 — 2 — 3 — 4 — 5 cm

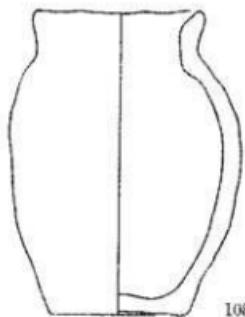




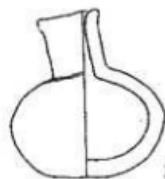
第133圖 漢代外出土遺物 (續文19)



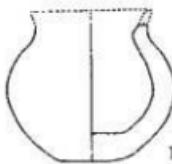
107



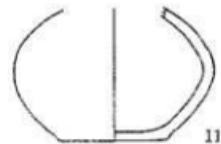
108



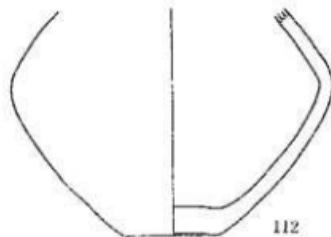
109



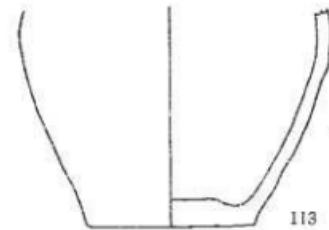
110



111



112



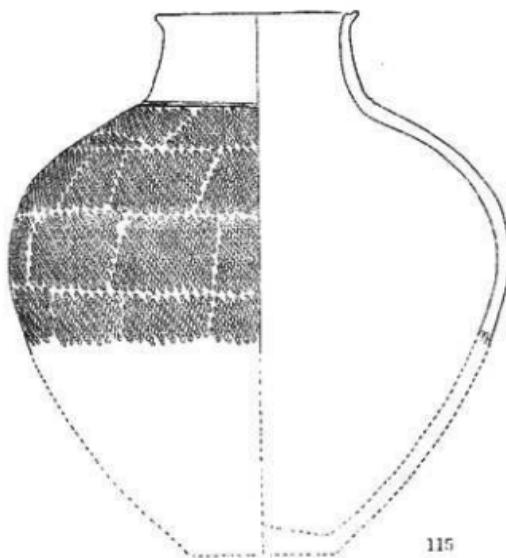
113

0 5 cm

第134図 遺構外出土遺物 (縄文20)



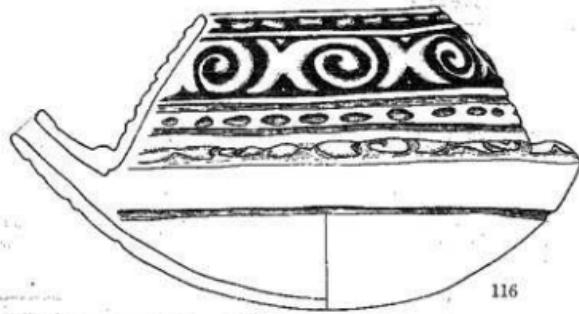
114



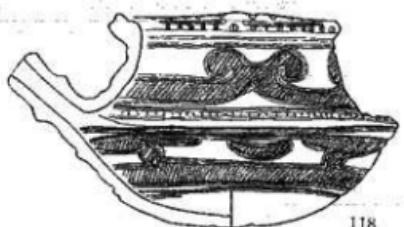
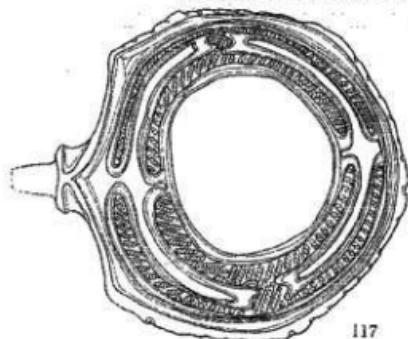
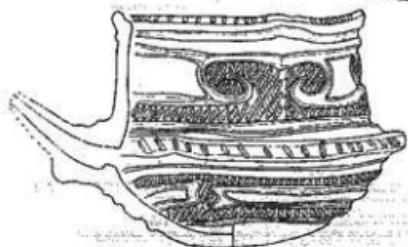
115

0 10cm

第135図 造橋外出土遺物（縄文21）



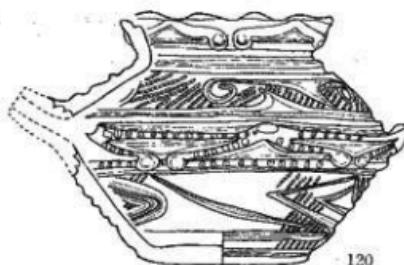
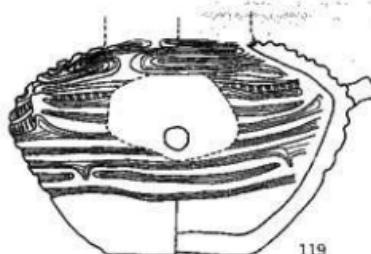
116



118

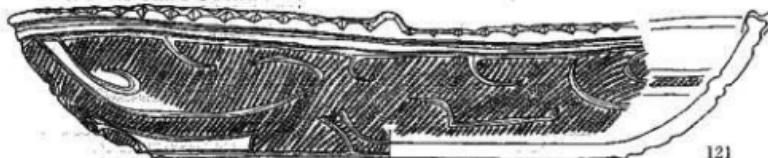
第136図 遺構外出土遺物（縄文22）

0 5 cm

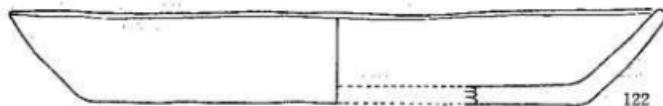


119

120



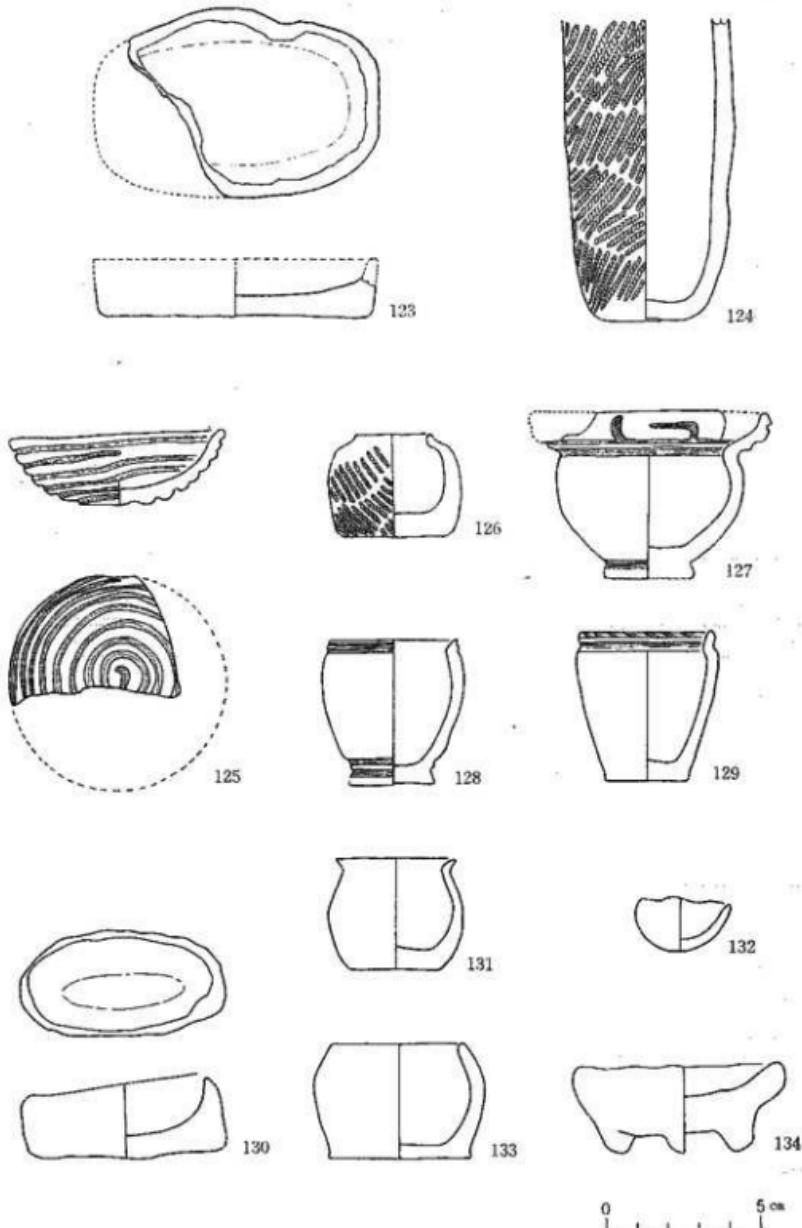
121



122



第137図 遺構外出土遺物（縄文23）



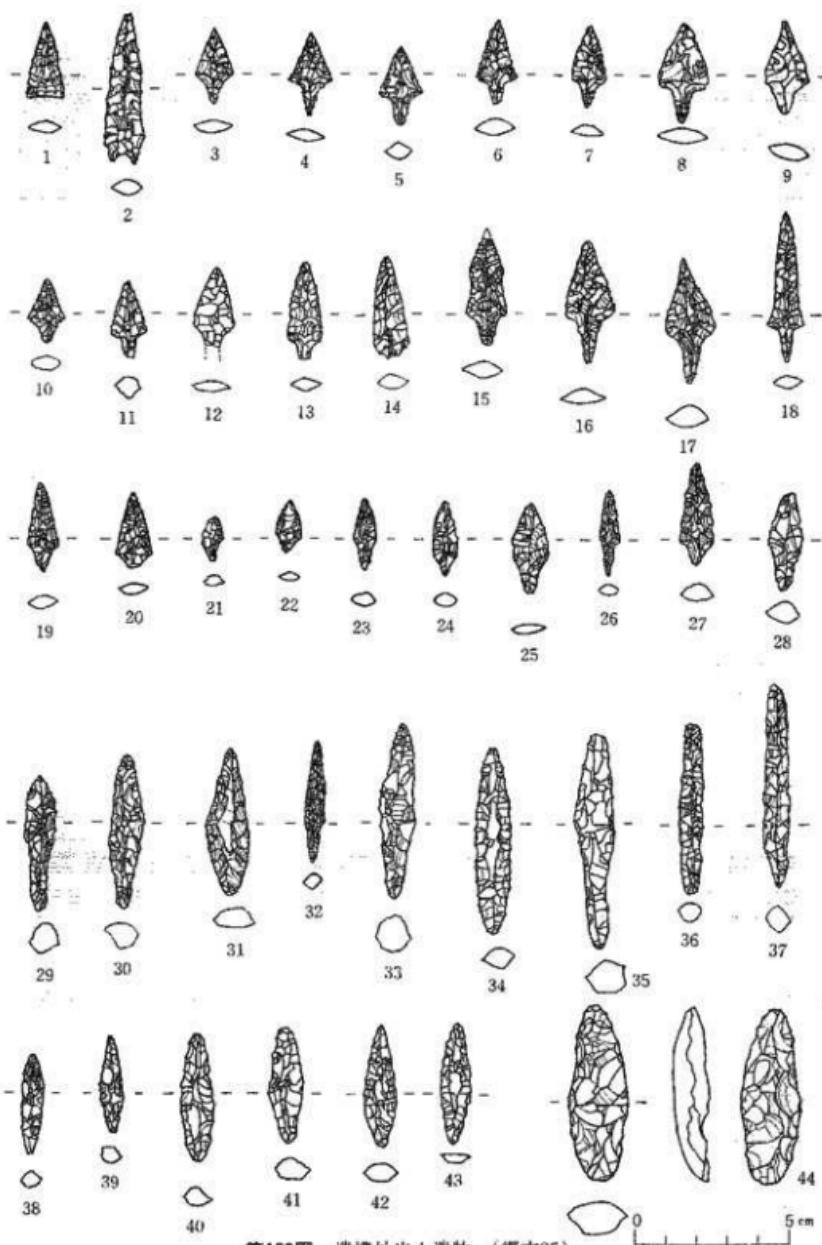
第138図 遺構外出土遺物（縄文24）

第6表 造構外出土土器計測値

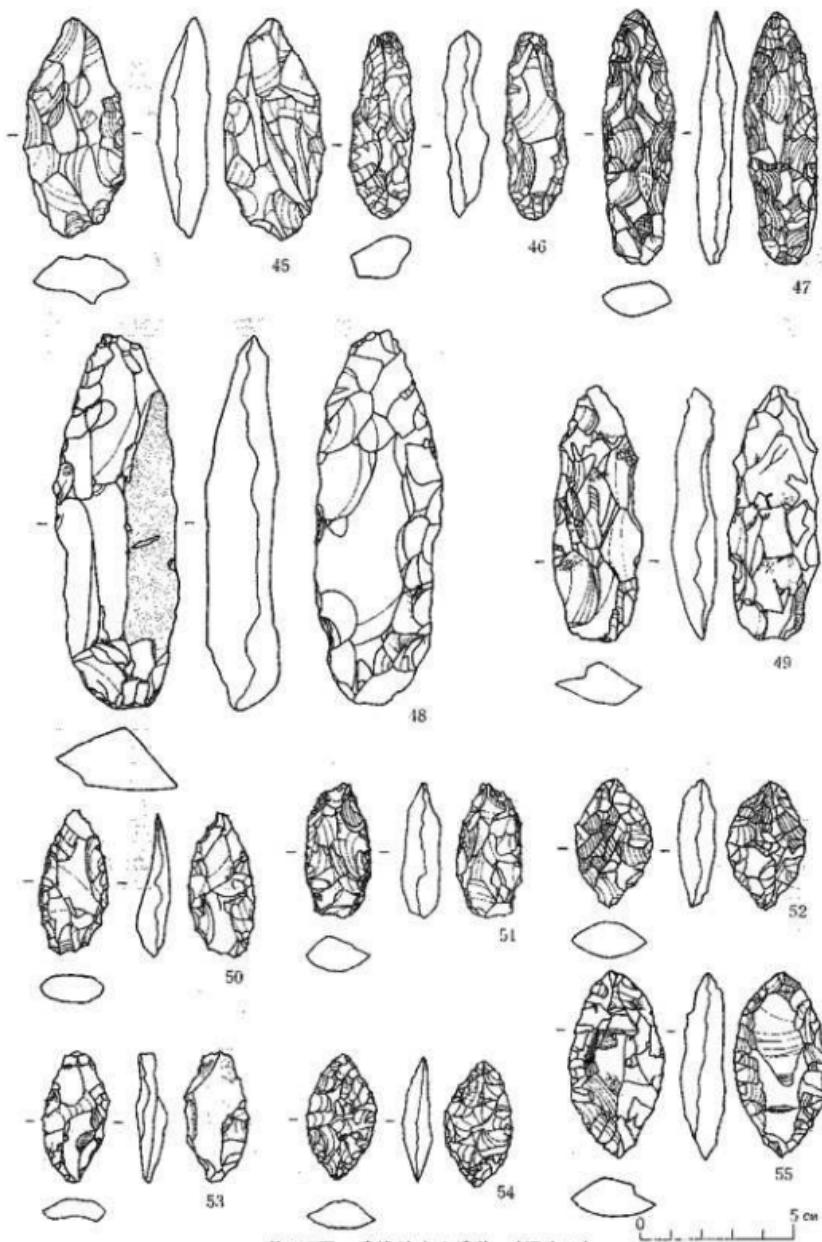
圖番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	制部最大径	出土地点
第115図1	第76図版73	深鉢	13.4cm	16.6cm	4.6cm	13.8cm	MA60Ⅳ層
" 2	" 74	深鉢	14.2cm	(16.6)cm	6.2cm	13.5cm	不明
" 3	第77図版75	深鉢	(14.5)cm	15.2cm	5.6cm	--cm	L I 51IV層
" 4	" 76	深鉢	(12.9)cm	(13.5)cm	(4.3)cm	--cm	L J 48IV層下部
" 5	" 77	深鉢	(10.3)cm	14.0cm	5.9cm	11.1cm	M B50III層下部
" 6	" 78	深鉢	9.4cm	11.7cm	5.5cm	9.9cm	K J 46IV層
第116図7	" 79	深鉢	11.4cm	12.0cm	11.6cm	4.1cm	L F 51IV層
" 8	" 80	深鉢	9.4cm	12.3cm	4.8cm	10.8cm	不明
" 9	" 81	深鉢	15.4cm	14.3cm	5.9cm	--cm	L G 50IV層
" 10	" 82	深鉢	--cm	--cm	5.6cm	--cm	M B49IV層
" 11	第78図版83	深鉢	--cm	--cm	8.6cm	--cm	L B58III層
" 12	" 84	深鉢	--cm	--cm	8.9cm	--cm	L D 48IV層
" 13	--	深鉢	--cm	--cm	10.0cm	--cm	L I 53IV層下部
第13図14	第78図版85	鉢	11.4cm	8.8cm	3.9cm	11.4cm	L D 53III層
" 15	" 86	鉢	12.3cm	9.6cm	4.2cm	12.3cm	L A 48IV層上部
" 16	" 87	鉢	(12.1)cm	9.4cm	4.2cm	12.6cm	L I 56IV層上部
" 17	" 88	鉢	(11.9)cm	9.0cm	4.5cm	12.6cm	L I 57IV層上部
" 18	" 89	鉢	(14.0)cm	7.7cm	3.4cm	--cm	K I 45IV層
" 19	" 90	鉢	10.4cm	7.2cm	3.6cm	10.2cm	K I 45IV層
第18図20	第79図版91	鉢	(12.5)cm	10.1cm	4.2cm	--cm	K H 45IV層
" 21	" 92	鉢	8.3cm	6.0cm	2.8cm	8.3cm	M C 48III層
" 22	" 93	鉢	(14.0)cm	10.0cm	5.5cm	--cm	M B48IV層上部
" 23	" 94	鉢	11.0cm	(8.3)cm	(5.1)cm	(10.8)cm	L E 48IV層内込
" 24	" 95	鉢	10.4cm	8.3cm	3.8cm	11.4cm	L H 48III層下部
" 25	" 96	鉢	13.3cm	9.6cm	5.0cm	13.9cm	L C 48IV層上部
第19図26	" 97	鉢	19.5cm	(14.7)cm	(5.6)cm	(19.4)cm	M B47IV層上部
" 27	" 98	鉢	20.1cm	14.4cm	5.8cm	19.8cm	L A 47IV層
" 28	第80図版99	鉢	18.1cm	15.9cm	5.2cm	17.3cm	L A 45IV層下部
" 29	" 100	鉢	19.0cm	17.9cm	5.6cm	19.8cm	L F 47IV層
" 30	" 101	鉢	21.2cm	11.6cm	7.7cm	21.2cm	L E 53IV層
第10図31	" 102	鉢	(11.4)cm	9.0cm	5.3cm	(11.2)cm	L G 52III層上部
" 32	" 103	鉢	14.0cm	11.4cm	4.9cm	--cm	L G 51IV層
" 33	" 104	鉢	13.1cm	11.0cm	5.0cm	--cm	M B49IV層上部
" 34	" 105	鉢	16.6cm	13.0cm	6.9cm	16.1cm	L C 58地山面
第12図35	" 106	鉢	(13.9)cm	(11.0)cm	(6.1)cm	--cm	L J 60IV層上部
" 36	第81図版107	鉢	(14.4)cm	(13.3)cm	6.5cm	--cm	K G 46IV層
" 37	" 108	鉢	--cm	6.6cm	3.4cm	7.7cm	L E 55IV層上部
" 38	" 109	鉢	(8.3)cm	(7.1)cm	4.9cm	8.7cm	L E 58IV層上部
" 39	" 110	鉢	8.4cm	7.8cm	4.2cm	--cm	M B48IV層上部
第12図40	" 111	鉢	7.9cm	5.7cm	3.4cm	--cm	L H 53IV層上部
" 41	" 112	鉢	14.6cm	7.6cm	7.8cm	--cm	L E 50IV層
" 42	" 113	鉢	8.7cm	7.2cm	4.7cm	(9.7)cm	M A 52IV層
" 43	" 114	台付鉢	(9.0)cm	11.6cm	6.0cm	--cm	L J 54地山面
" 44	第82図版115	台付鉢	9.4cm	8.5cm	5.2cm	--cm	L B 48IV層下部
" 45	" 116	台付鉢	8.8cm	7.1cm	5.6cm	9.3cm	不明
第12図46	" 117	台付鉢	16.5cm	12.5cm	8.2cm	17.4cm	L H 48III層下部
" 47	" 118	台付鉢	14.6cm	13.9cm	6.4cm	15.8cm	M B48IV層上部
" 48	" 119	台付鉢	19.5cm	15.2cm	7.7cm	20.1cm	L A 45IV層

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	肩部最大径	出土地点
第12図49	第82図版120	台付鉢	18.4cm	13.9cm	8.2cm	18.4cm	K I 50地山面
" 50	" 121	台付鉢	19.2cm	16.2cm	8.3cm	18.6cm	L F 48III層下部
" 51	" 122	台付鉢	-cm	-cm	12.5cm	-cm	M F 58IV層
第12図52	第83図版123	台付鉢	12.2cm	9.7cm	6.7cm	-cm	L E 48III層下部
" 53	" 124	台付鉢	12.7cm	8.6cm	6.3cm	-cm	L H 48IV層下部
" 54	" 125	台付鉢	12.1cm	11.8cm	6.3cm	12.6cm	M D 59IV層
" 55	" 126	台付鉢	12.2cm	10.5cm	6.4cm	-cm	L F 51IV層
" 56	" 127	台付鉢	(12.5)cm	(10.6)cm	(4.0)cm	(13.9)cm	L G 50IV層
" 57	" 128	台付鉢	(9.3)cm	9.5cm	5.5cm	-cm	L J 50II層
第12図58	" 129	台付鉢	7.0cm	6.4cm	3.4cm	7.4cm	L D 49倒木痕
" 59	" 130	台付鉢	-cm	-cm	3.6cm	-cm	L H 55IV層
" 60	第84図版131	浅鉢	11.9cm	4.9cm	3.9cm	-cm	L B 53III層下部
" 61	" 132	浅鉢	(13.8)cm	6.7cm	4.2cm	-cm	M A 55IV層下部
" 62	" 133	浅鉢	11.7cm	4.8cm	-cm	-cm	L E 47III層
第12図63	" 134	浅鉢	16.9cm	7.4cm	4.6cm	-cm	M B 48IV層上部
" 64	" 135	浅鉢	15.7cm	7.1cm	7.0cm	-cm	L I 57IV層
" 65	" 136	浅鉢	16.0cm	6.4cm	6.5cm	-cm	L H 57III層
" 66	" 137	浅鉢	12.6cm	3.9cm	6.0cm	-cm	M A 50II層
" 67	" 138	浅鉢	10.0cm	4.1cm	6.1cm	-cm	K C 60III層 弥生?
第12図68	第85図版139	浅鉢	16.6cm	6.0cm	7.7cm	-cm	L F 48III層下部
" 69	" 140	浅鉢	13.7cm	4.5cm	5.7cm	-cm	L D 50IV層
" 70	" 141	浅鉢	9.3cm	3.8cm	4.0cm	-cm	K F 46IV層
" 71	" 142	台付浅鉢	14.5cm	6.9cm	6.8cm	-cm	M B 58IV層
" 72	" 143	台付浅鉢	15.6cm	7.6cm	7.6cm	-cm	L D 53IV層
" 73	" 144	台付浅鉢	19.5cm	10.4cm	7.5cm	-cm	L C 52IV層
第12図74	" 145	台付浅鉢	18.2cm	(9.7)cm	(8.1)cm	-cm	L I 51IV層
" 75	" 146	壺	3.1cm	8.3cm	2.9cm	6.3cm	M D 57IV層
" 76	第86図版147	壺	6.9cm	7.9cm	2.3cm	8.1cm	M B 50IV層
" 77	" 148	壺	8cm	9.5cm	4.2cm	12.9cm	不明
" 78	" 149	壺	(4.8)cm	(12.1)cm	4.1cm	12.7cm	L A 45IV層
第12図79	" 150	壺	4.5cm	7.8cm	3.6cm	8.5cm	L E 48III層下部
" 80	" 151	壺	5.2cm	8.6cm	3.7cm	9.6cm	L A 45IV層
" 81	" 152	壺	(8.5)cm	-cm	-cm	-cm	M B 47IV層
" 82	" 153	壺	(7.7)cm	10.2cm	4.6cm	12.4cm	L E 49IV層
" 83	" 154	壺	(6.3)cm	(9.3)cm	4.9cm	11.5cm	L F 51IV層
第12図84	第87図版155	壺	8.1cm	13.1cm	4.9cm	13.0cm	L F 49IV層
" 85	" 156	壺	5.6cm	10.0cm	4.4cm	10.9cm	M B 47IV層上部
" 86	" 157	壺	5.4cm	8.3cm	4.1cm	9.3cm	M B 57IV層下部
" 87	" 158	壺	5.3cm	10.1cm	4.4cm	(10.3)cm	M A 47IV層
" 88	" 159	壺	6.6cm	9.4cm	5.0cm	12.2cm	L D 53III層
" 89	" 160	壺	6.7cm	13.0cm	5.1cm	12.9cm	L G 56IV層
第12図90	" 161	壺	6.8cm	10.5cm	3.3cm	12.0cm	K I 47IV層上部
" 91	" 162	壺	(7.7)cm	(12.0)cm	5.2cm	13.9cm	L E 49IV層上部
" 92	第88図版163	壺	(6.2)cm	(11.0)cm	4.6cm	7.8cm	L B 48IV層下部
" 93	" 164	壺	(7.5)cm	(10.0)cm	5.1cm	13.2cm	K J 48IV層上部
" 94	" 165	壺	(6.7)cm	8.7cm	5.1cm	9.2cm	L A 48IV層上部
" 95	" 166	壺	6.3cm	10.2cm	5.2cm	10.2cm	L G 51IV層上部
第12図96	" 167	壺	8.8cm	14.5cm	6.6cm	15.6cm	L B 47倒木痕
" 97	" 168	壺	(3.7)cm	(8.0)cm	4.4cm	(8.7)cm	M B 58III層

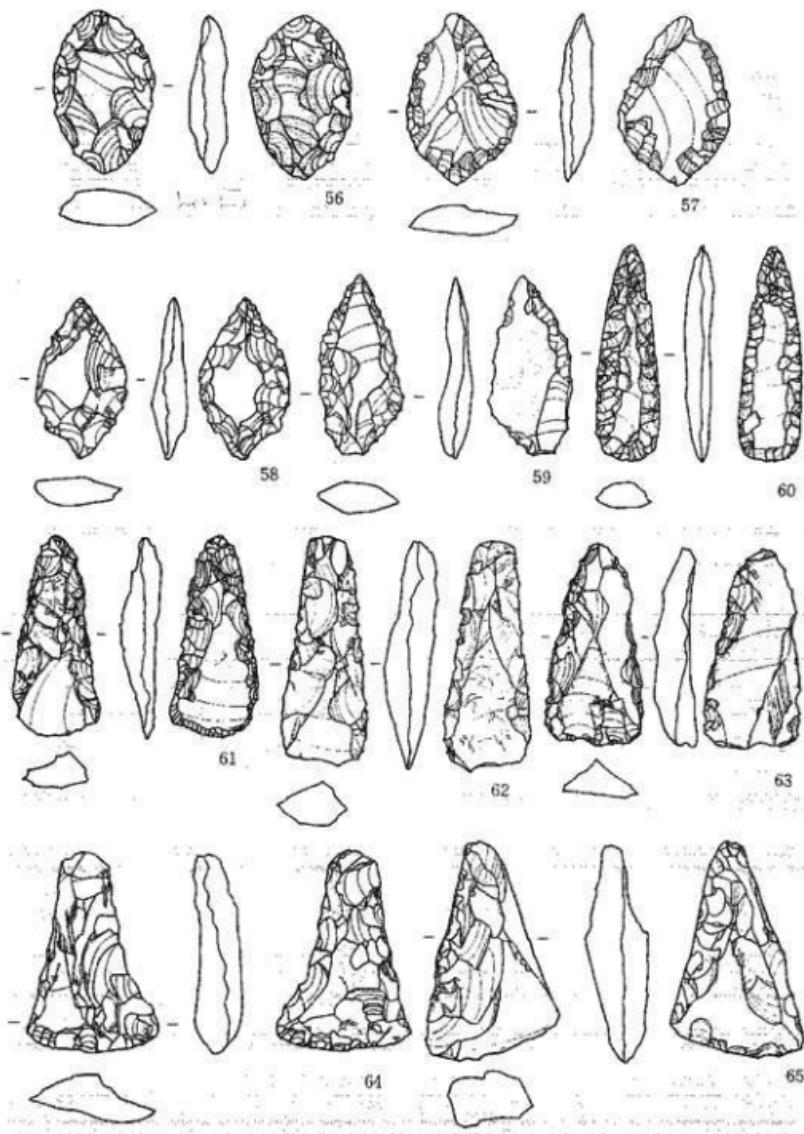
图 号	图版号	器 种	口 径	器 高	底 径	肩部最大径	出 土 地 点
第132图98	第88图版169	壺	6.4cm	14.0cm	8.1cm	12.8cm	L I 53IV層
" 99	" 170	壺	—cm	—cm	4.6cm	12.8cm	M A 48III層
第133图100	第89图版171	壺	4.5cm	4.7cm	3.1cm	5.3cm	L G57IV層上部
" 101	172	壺	4.9cm	7.6cm	4.1cm	6.9cm	L E 47III層
" 102	173	壺	—cm	—cm	4.7cm	(9.1)cm	L C 49IV層
" 103	174	壺	7.5cm	9.9cm	5.3cm	11.2cm	L E 47III層下部
" 104	175	壺	—cm	—cm	(3.2)cm	9.4cm	L D 46IV層
" 105	176	壺	—cm	—cm	5.5cm	14.6cm	K I 45III層
" 106	177	壺	—cm	—cm	3.4cm	10.1cm	L E 48IV層
第134图107	178	壺	—cm	—cm	—cm	9.6cm	L H 49III層下部
" 108	第90图版179	壺	5.7cm	10.3cm	4.1cm	7.8cm	M C 59IV層
" 109	180	壺	2.4cm	5.6cm	1.6cm	5.1cm	K J 49IV層上部
" 110	181	壺	(4.1)cm	(4.7)cm	2.4cm	(5.6)cm	K H 43III層
" 111	182	壺	—cm	—cm	3.4cm	6.4cm	L C 55II層
" 112	183	壺	—cm	—cm	3.0cm	10.6cm	L B 48IV層
" 113	184	壺	—cm	—cm	5.5cm	(10.4)cm	L C 48IV層上部
第135图114	185	壺	(10.0)cm	—cm	—cm	(24.7)cm	L I 57III層
" 115	186	壺	10.3cm	—cm	—cm	(24.9)cm	L F 49IV層
第136图116	第91图版187	注口土器	8.4cm	9.8cm	—cm	17.3cm	M G 65地山面
" 117	188	注口土器	8.7cm	8.4cm	6.4cm	6.2cm	L I 50IV層下部
" 118	189	注口土器	7.4cm	7.4cm	7.7cm	10.3cm	L G 53IV層
第137图119	190	注口土器	(4.9)cm	7.8cm	5.5cm	6.1cm	L C 48IV層上部
" 120	191	注口土器	7.4cm	8.7cm	5.6cm	7.0cm	L B 47倒木痕
" 121	192	皿	25.4cm	5.1cm	15.7cm	—cm	L G 53IV層
" 122	193	皿	(21.6)cm	3.1cm	(16.1)cm	—cm	M A 53IV層下部
第138图123	194	皿	(9.4)cm	(1.9)cm	(8.6)cm	—cm	L F 58IV層
" 124	第92图版195	筒形土器	—cm	—cm	2.9cm	—cm	L D 48IV層
" 125	196	袖珍土器	(7.0)cm	2.4cm	—cm	—cm	L F 46IV層上部
" 126	197	袖珍土器	3.2cm	3.5cm	5.1cm	4.6cm	L D 56IV層上部
" 127	198	袖珍土器	(6.2)cm	(5.6)cm	(2.8)cm	—cm	L E 58IV層下部
" 128	199	袖珍土器	4.9cm	4.8cm	2.8cm	5.0cm	M E 56IV層下部
" 129	200	袖珍土器	(5.3)cm	4.9cm	2.8cm	—cm	M A 53IV層上部
" 130	201	袖珍土器	6.2cm	2.5cm	6.2cm	—cm	L G 48地山面
" 131	202	袖珍土器	(4.0)cm	3.8cm	3.0cm	4.4cm	L J 51IV層下部
" 132	第93图版203	袖珍土器	3.5cm	1.8cm	—cm	—cm	M A 54IV層上部
" 133	204	袖珍土器	(5.0)cm	(3.8)cm	4.8cm	5.6cm	M B 47IV層上部
" 134	205	袖珍土器	(6.9)cm	(2.9)cm	4.8cm	(6.9)cm	M B 48III層



第139図 遺構外出土遺物 (縦文25)



第140図 遺構外出土遺物（縄文26）



第141図 造構外出土遺物（縄文27）





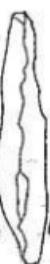
66



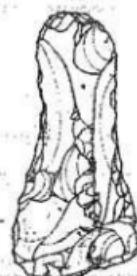
67



68



69



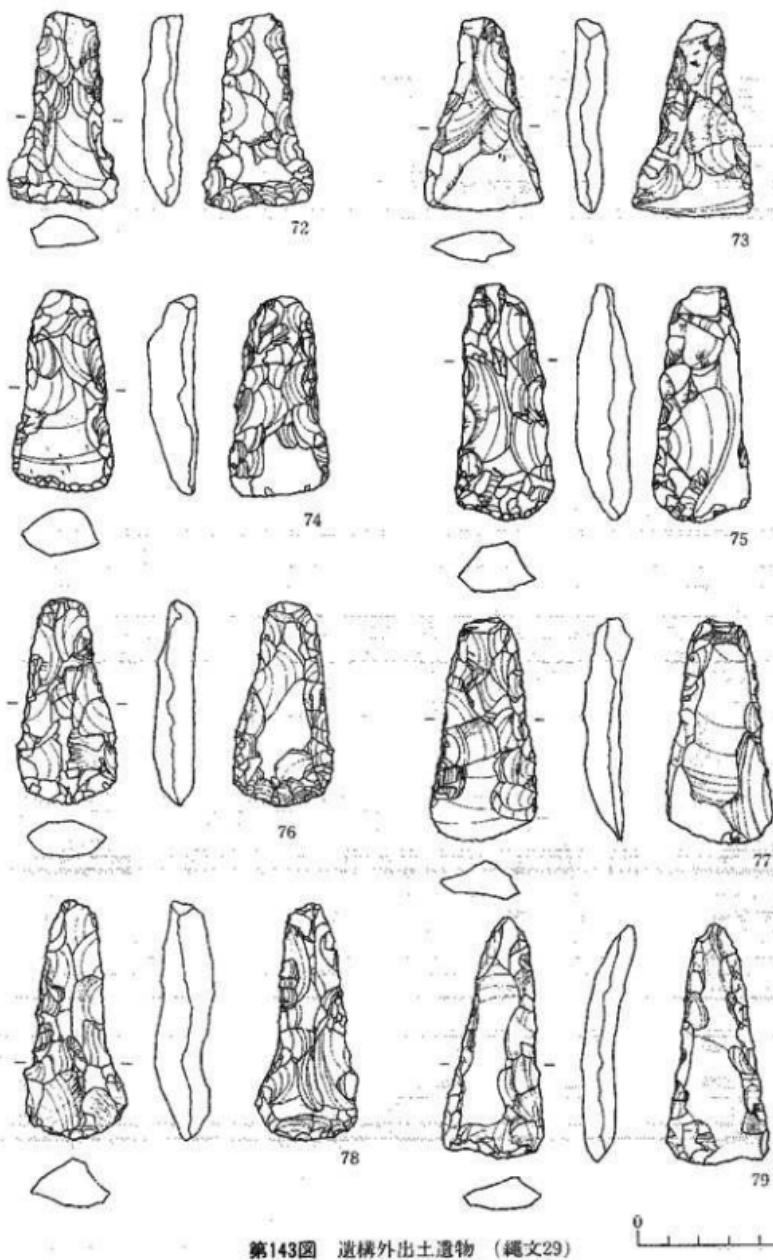
70



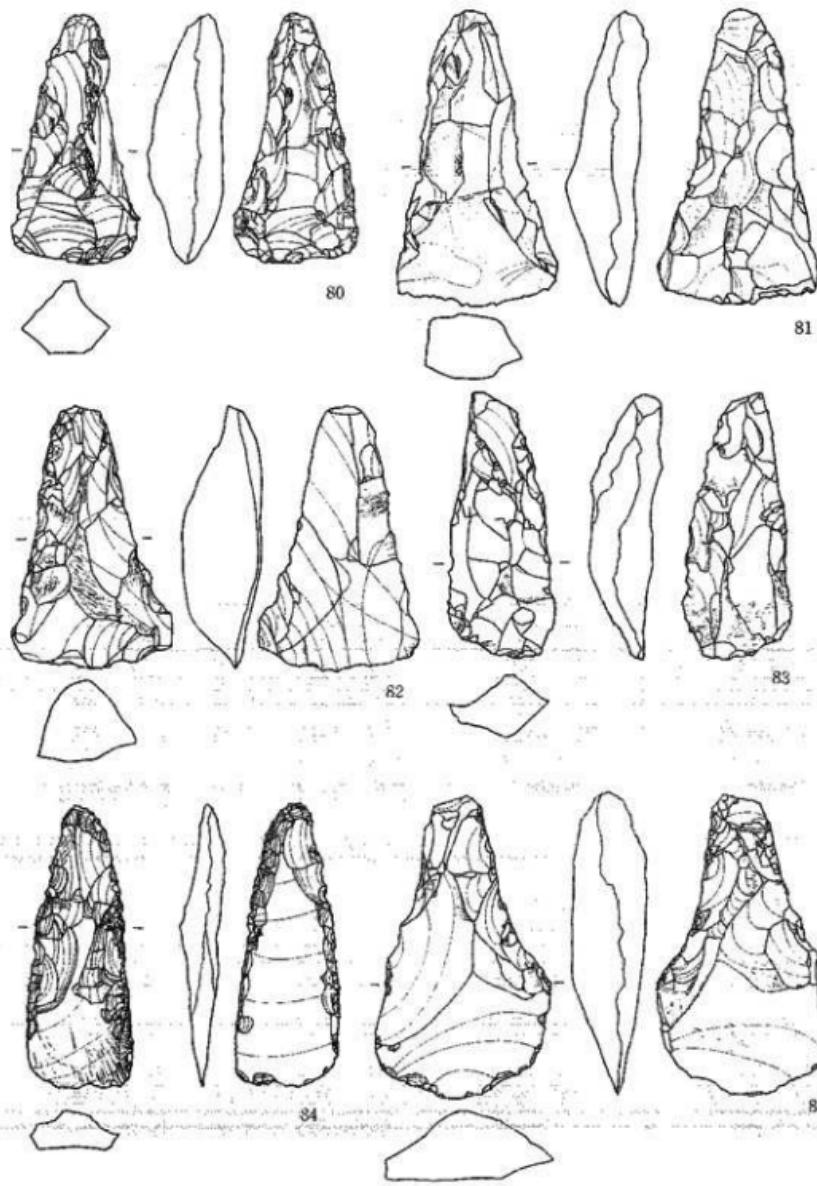
71



第142図 遺構外出土遺物（掲文28）



第143図 遺構外出土遺物（縄文29）

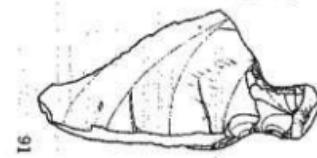
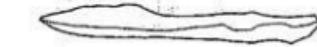
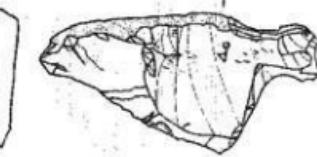
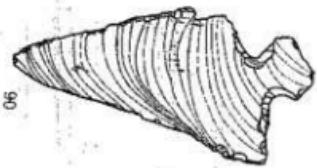
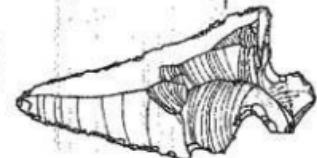


第144図 遺構外出土遺物（縦文30）

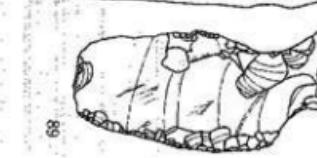
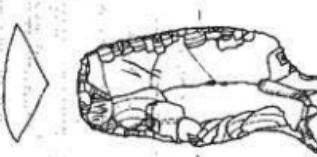
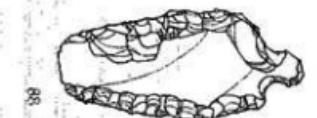
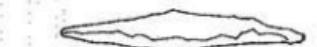
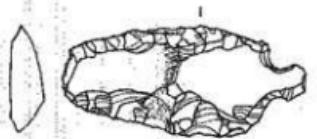
第145図 遺構外出土遺物（縄文31）

0

5 cm



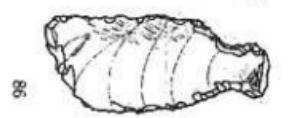
91



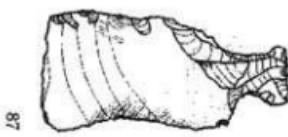
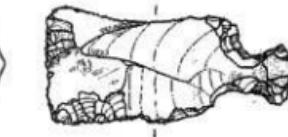
89

90

92



86



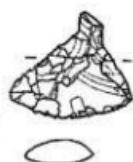
87



92



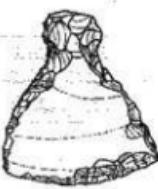
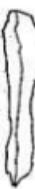
93



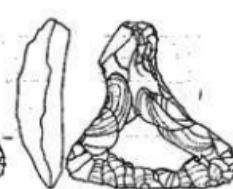
94



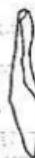
95



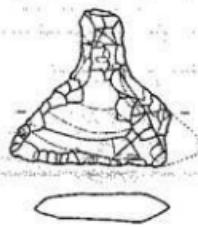
96



97



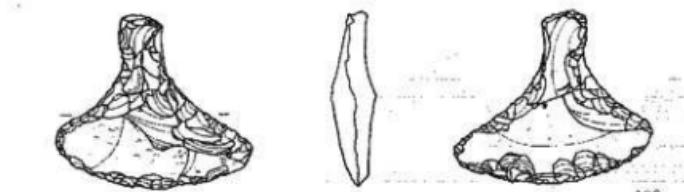
98



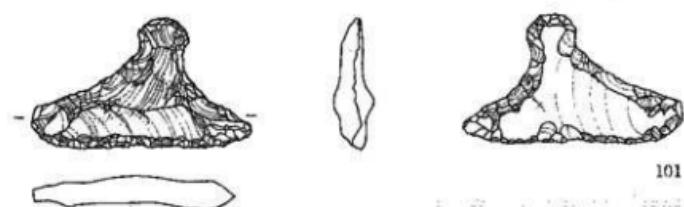
99



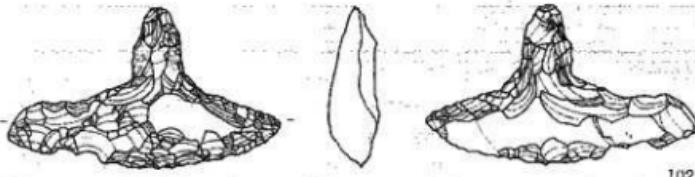
第146図 造構外出土遺物（繩文32）



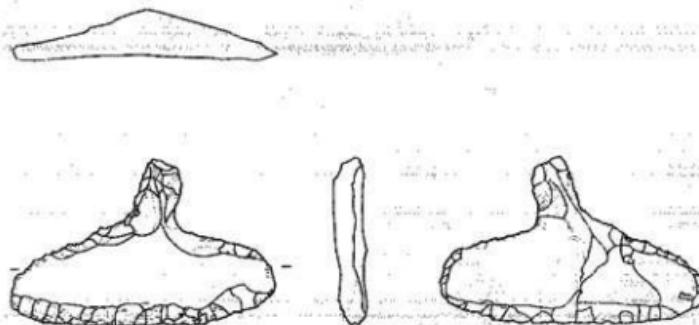
100



101



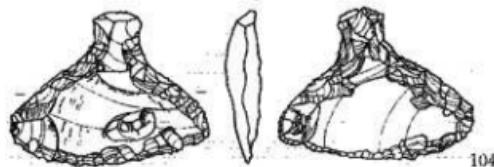
102



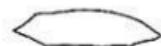
103



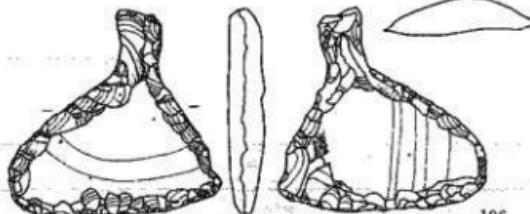
第147図 遺構外出土遺物（縄文33）



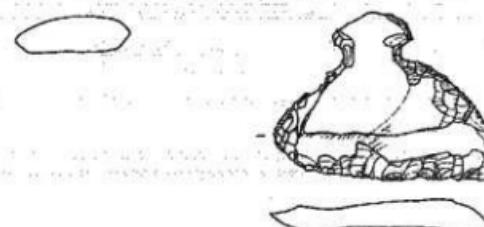
104



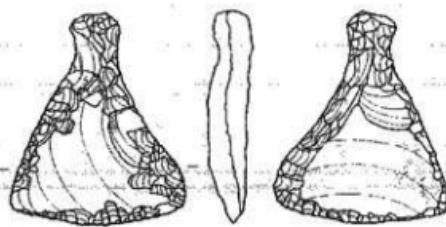
105



106



107



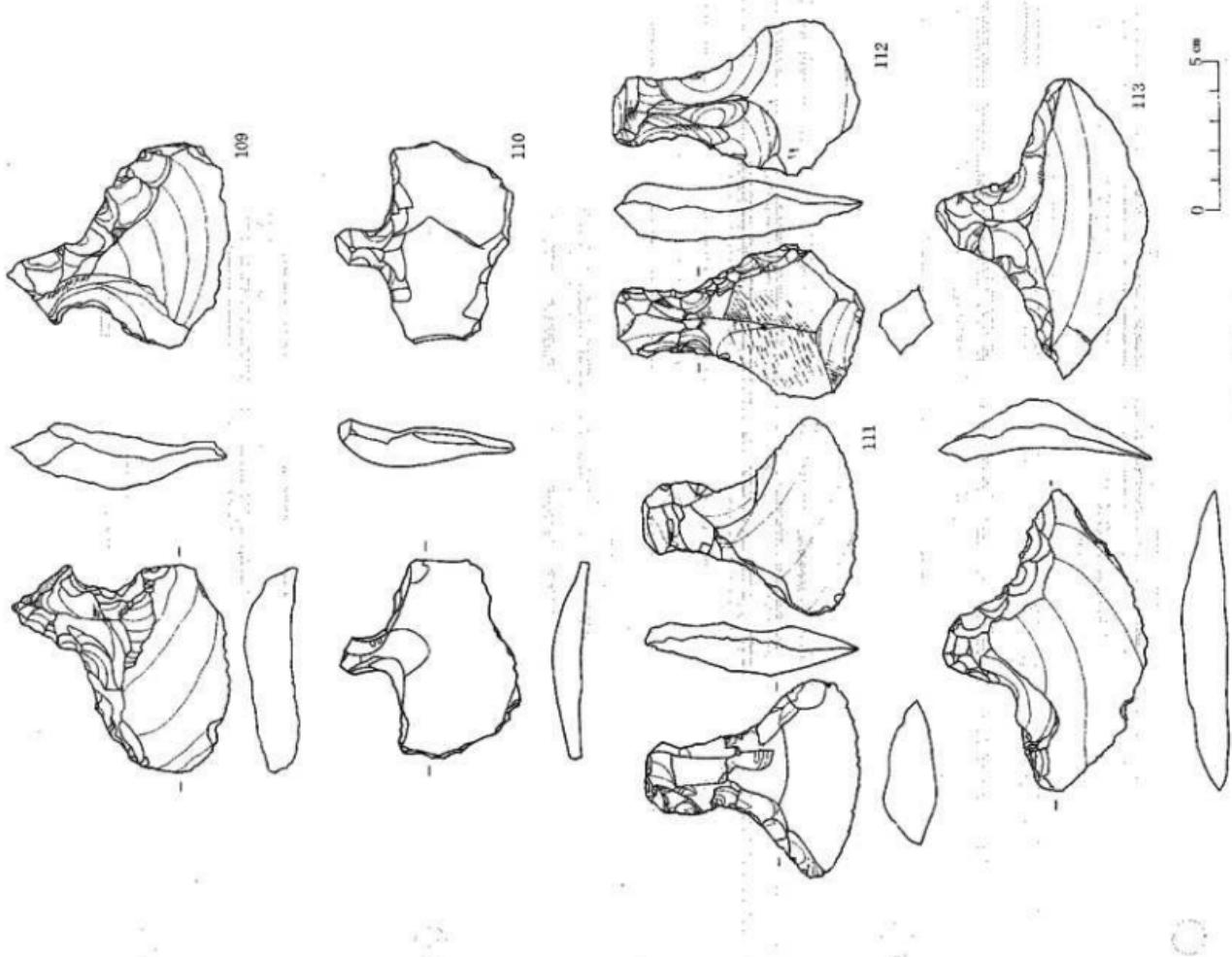
108

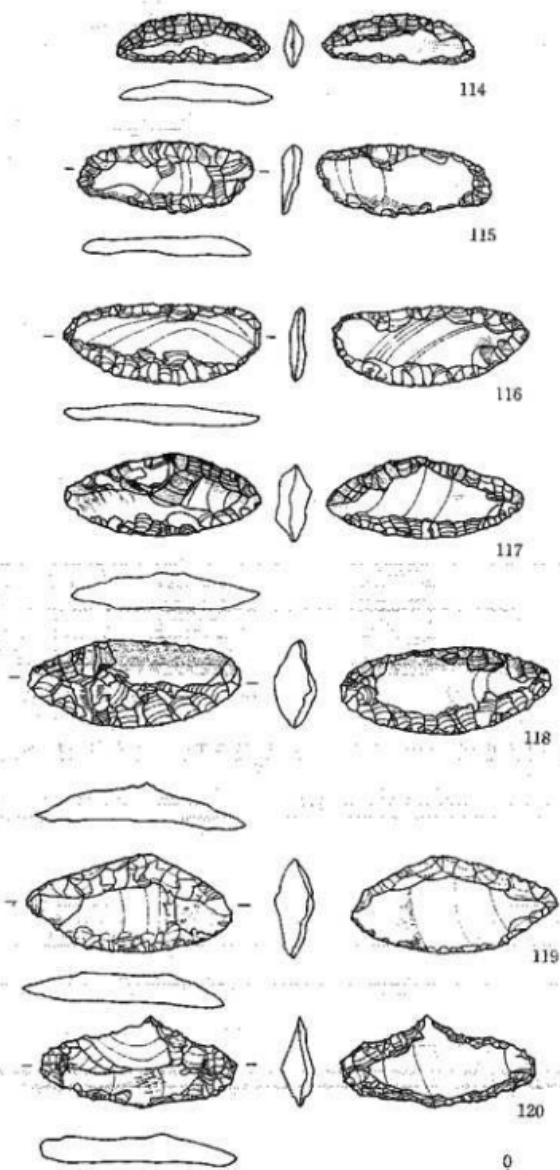


第148図 遺構外出土遺物（縦文34）

第149図 遺跡外出土遺物 (図文35)

— 173 —





第150図 遺構外出土遺物 (縦文36)



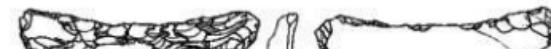
121



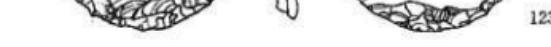
122



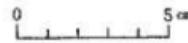
123



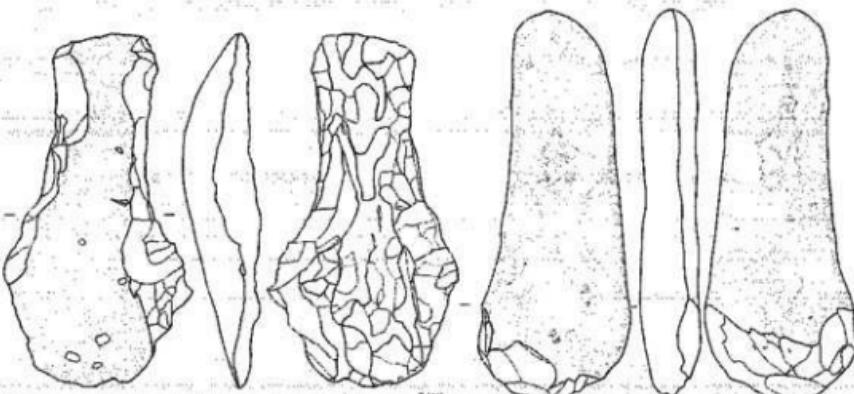
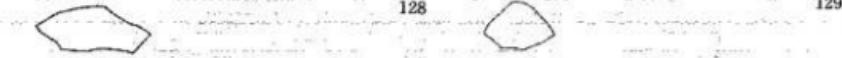
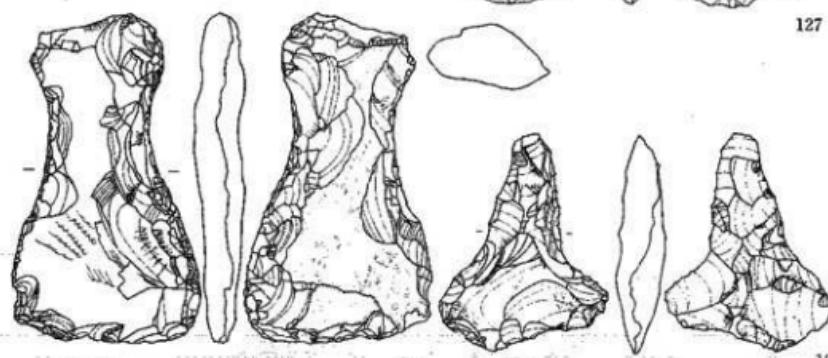
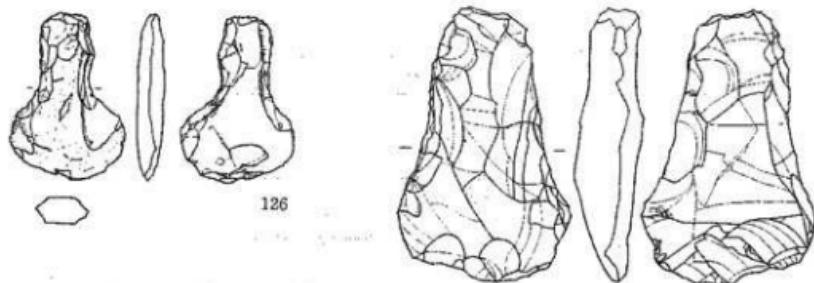
124



125



第151図 遺構外出土遺物（縦文37）

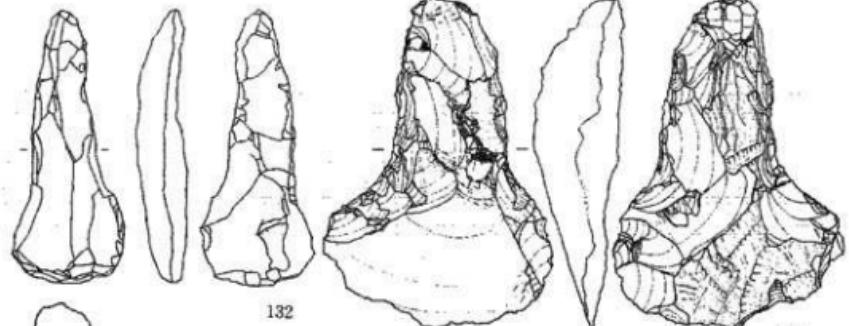


130 131



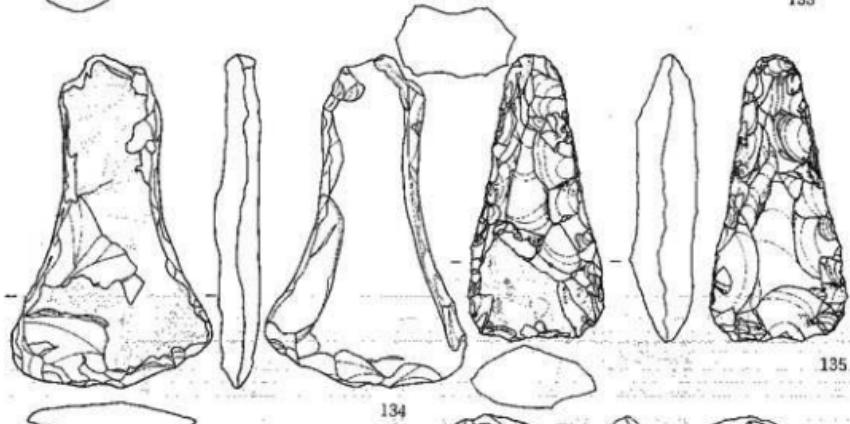
0 10cm

第152図 遺構外出土遺物 (縄文38)



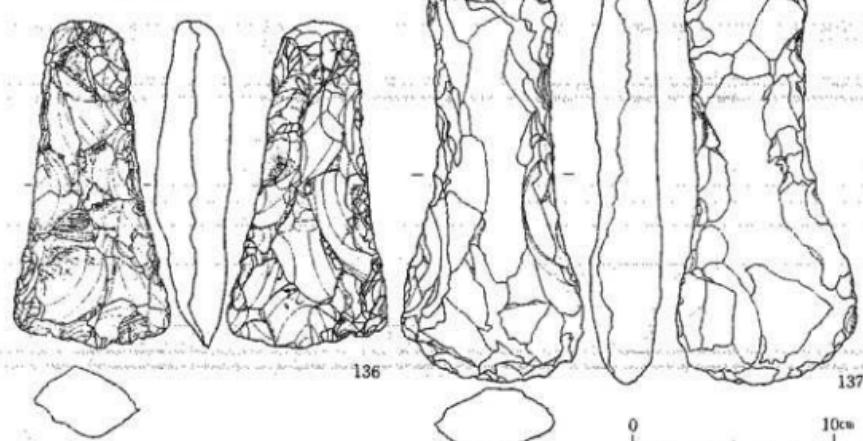
132

133



135

134

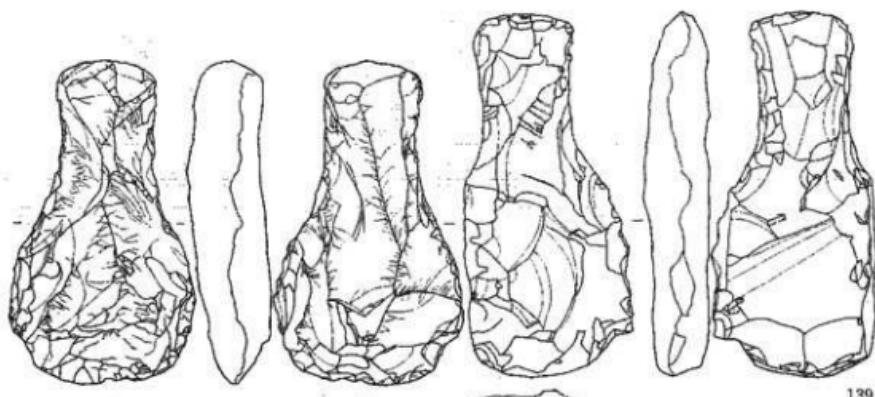


136

137

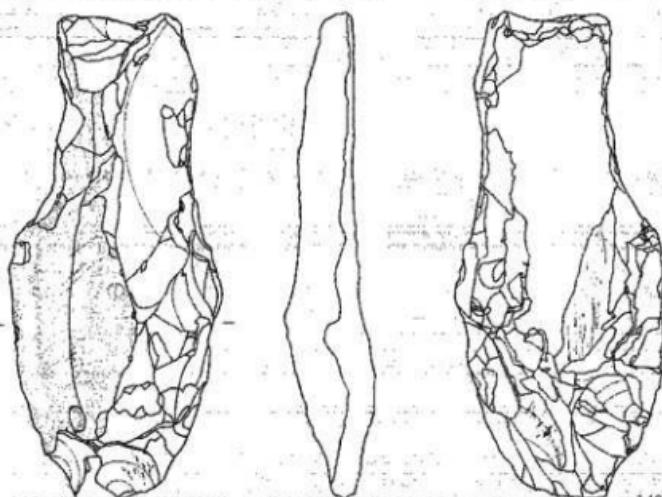


第153図 遺構外出土遺物（縄文39）



138

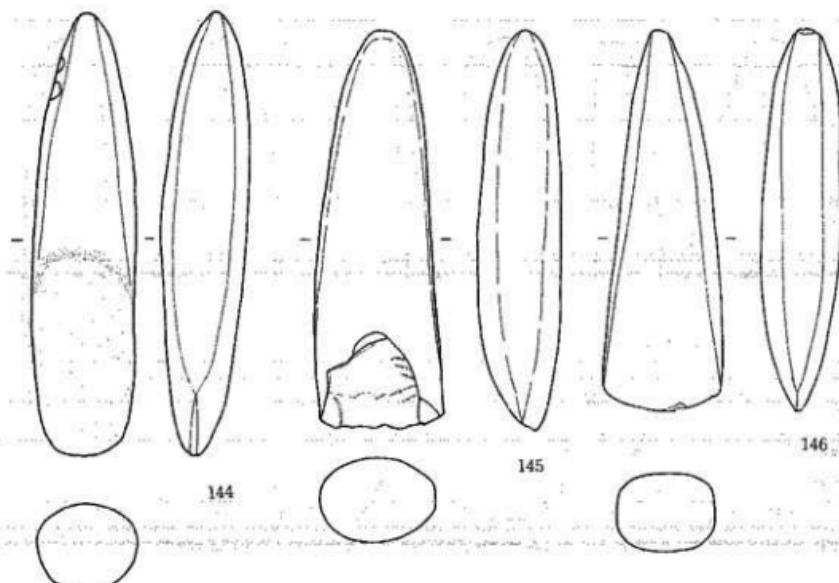
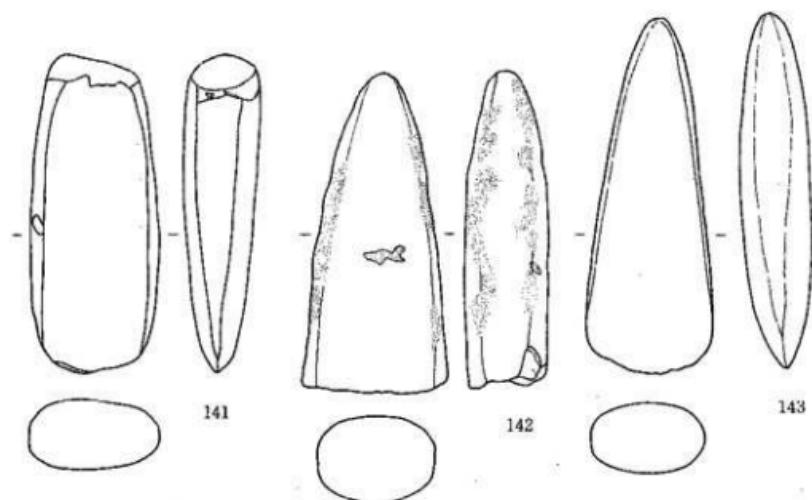
139



140

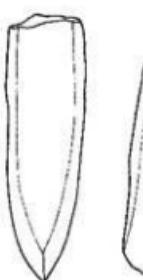
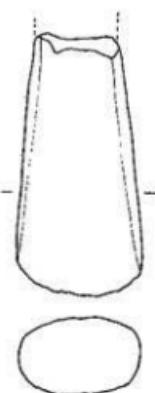


第154図 遺構外出土遺物（縄文40）



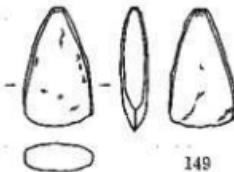
第155図 遺構外出土遺物（縄文41）

0 5 cm

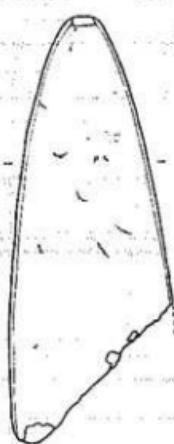


147

148



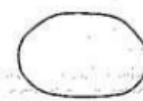
149



150



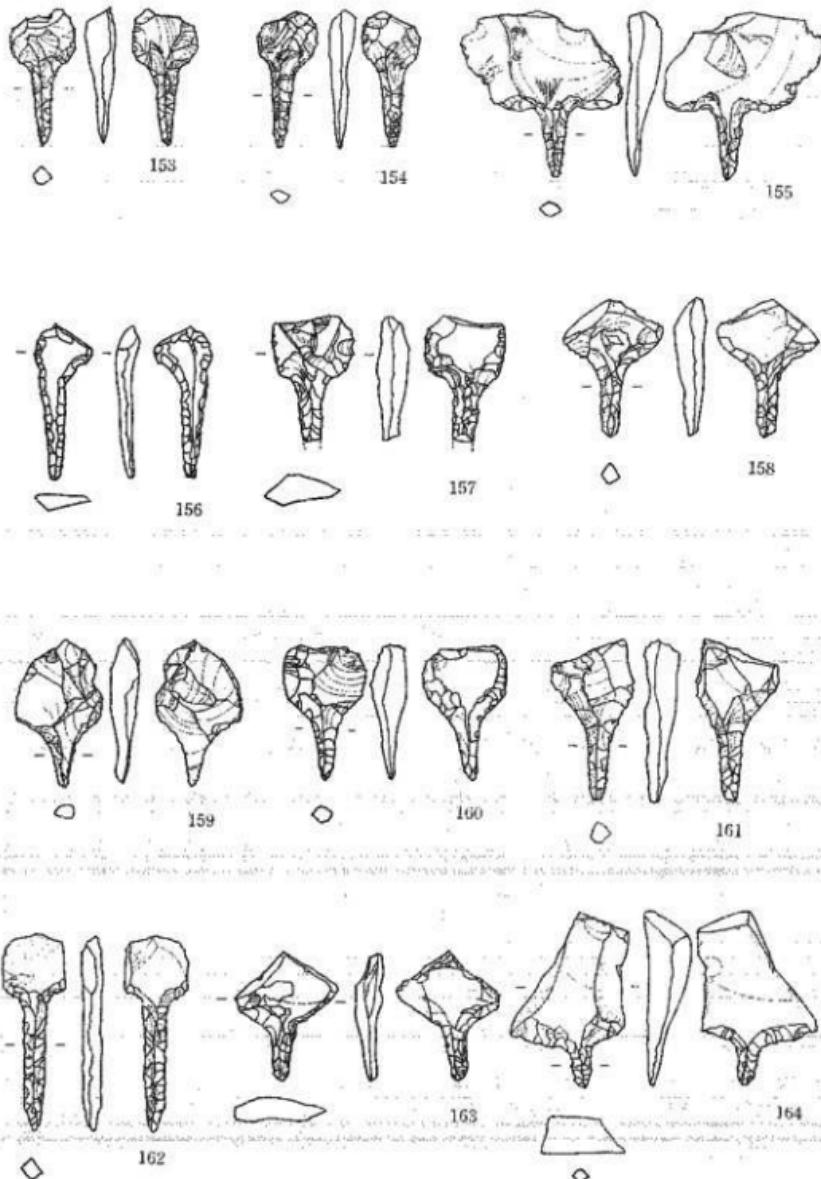
151



152

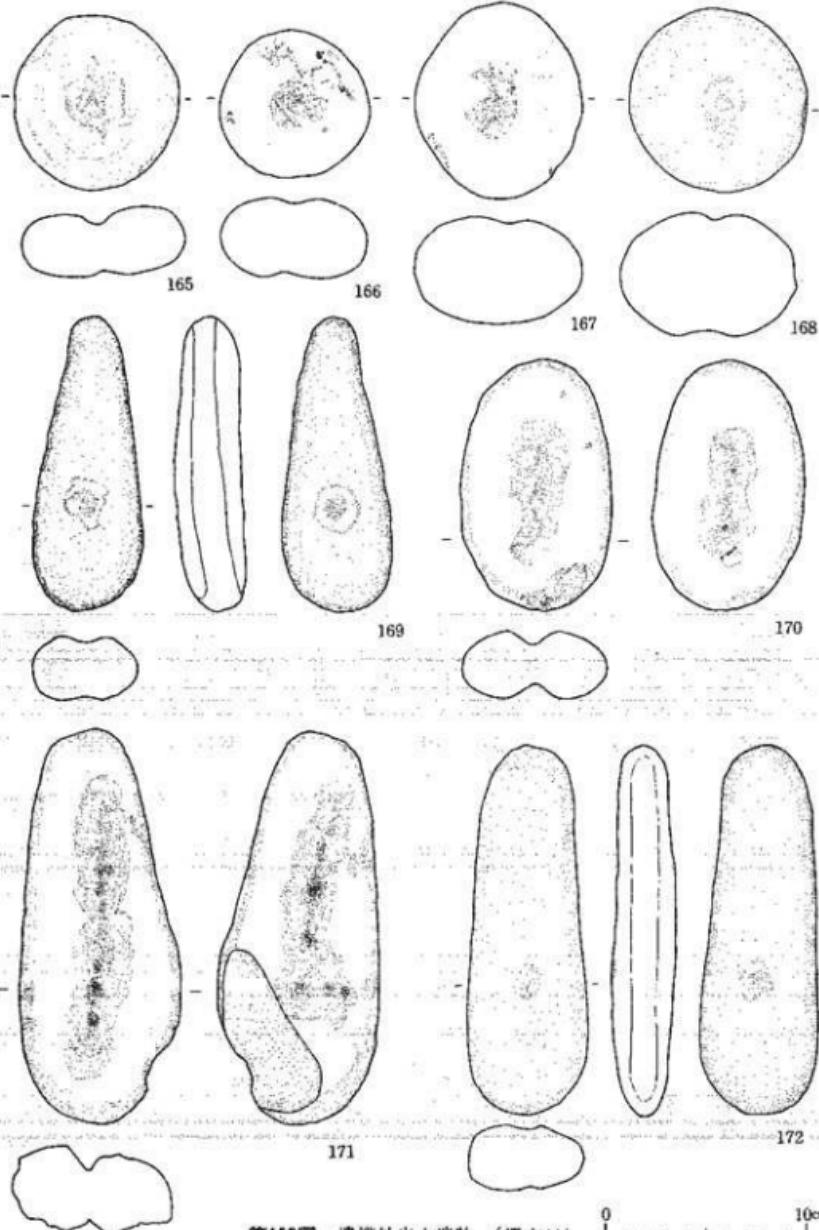


第156図 造構外出土遺物（縦文42）



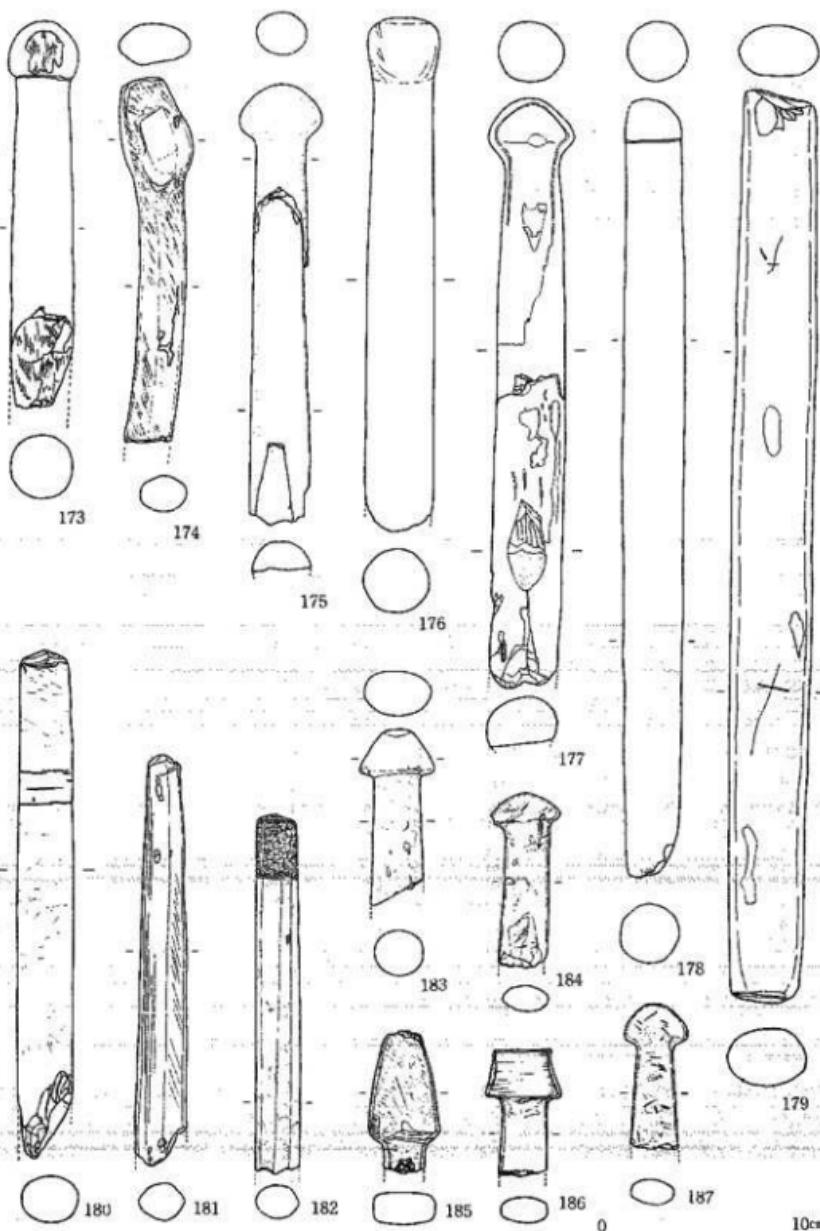
第157図 遺構外出土遺物（縦文43）

0 5cm

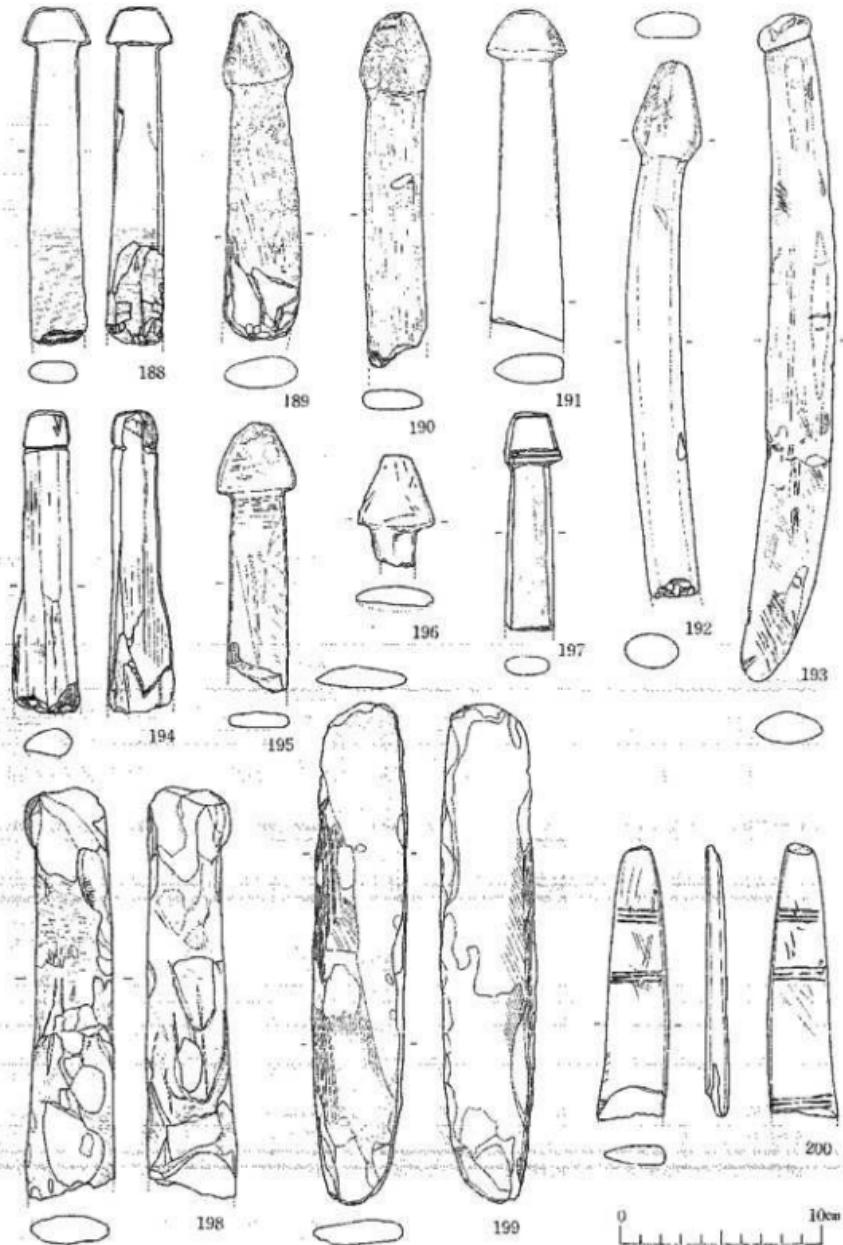


第158図 遺構外出土遺物（縄文44）

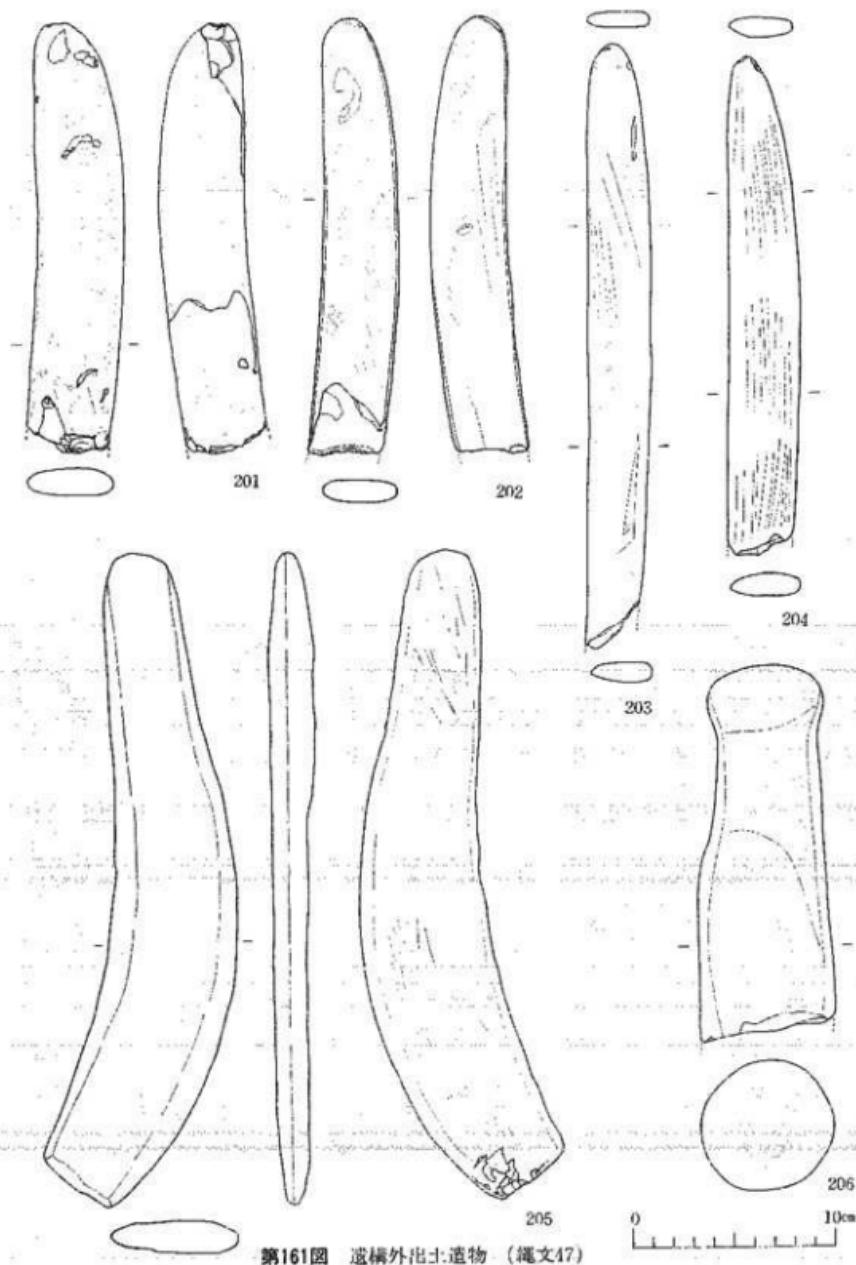
0 10cm



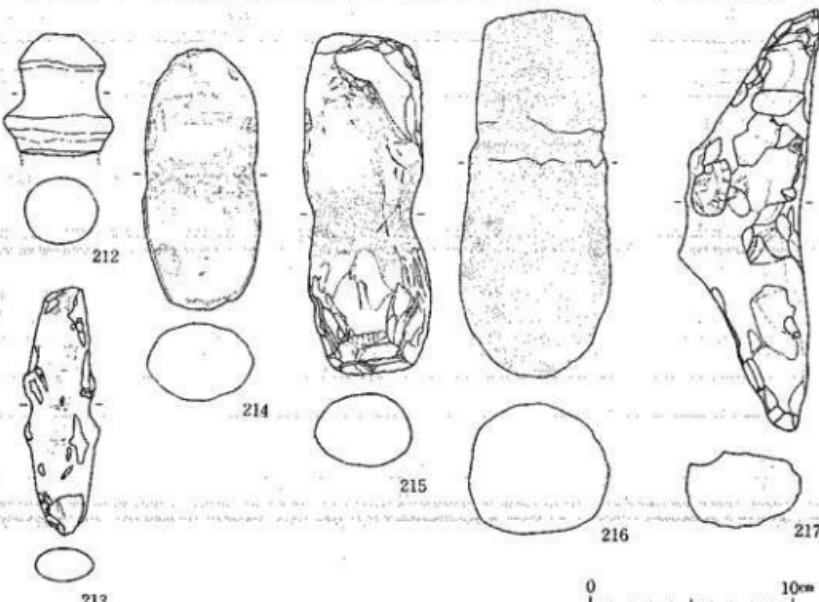
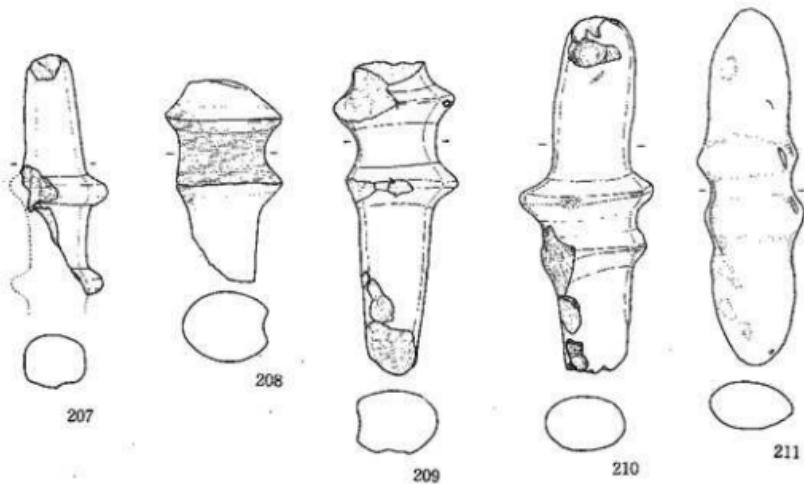
第159圖 遺構外出土遺物 (編文45)



第160図 遺構外出土遺物 (縄文46)

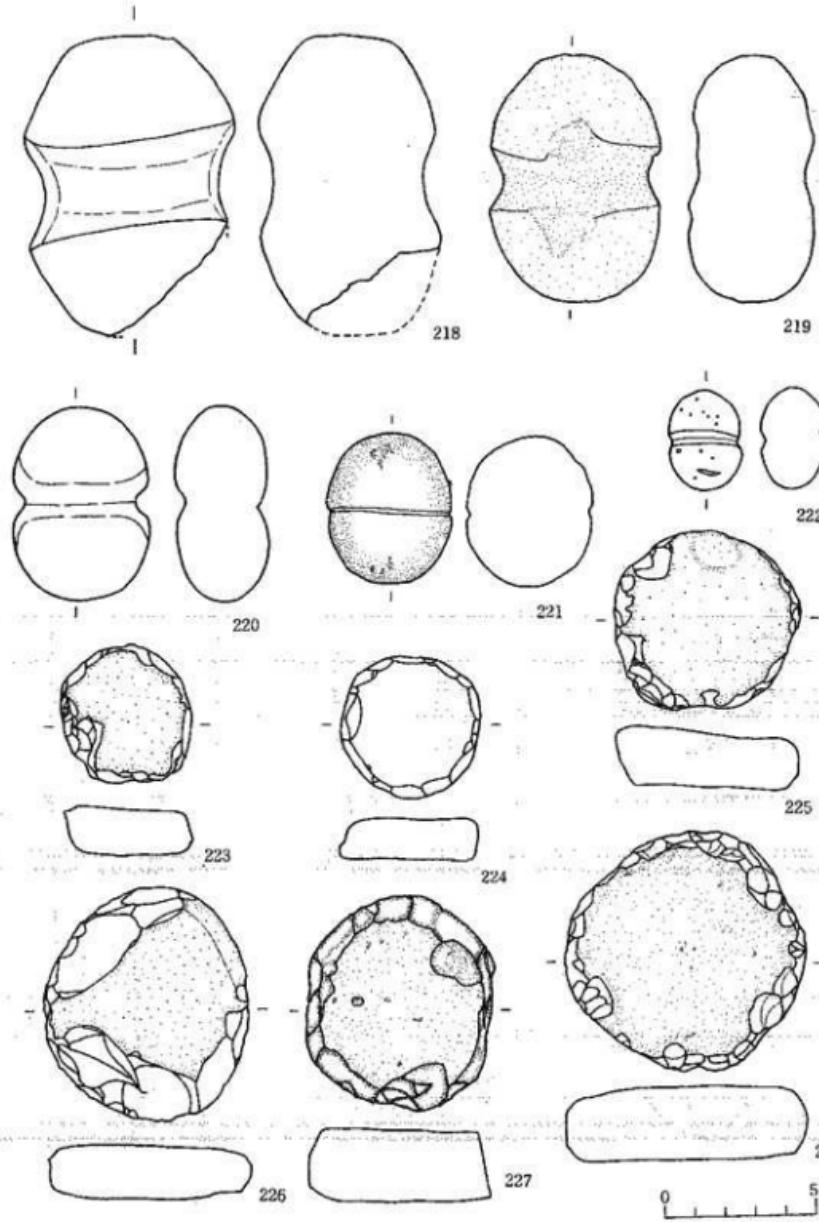


第161図 遺構外出土遺物 (縄文47)

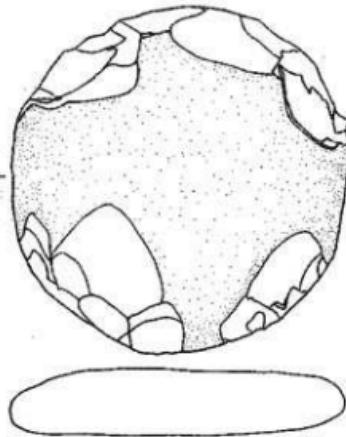


0 10cm

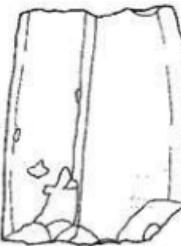
第162図 遺構外出土遺物 (縄文48)



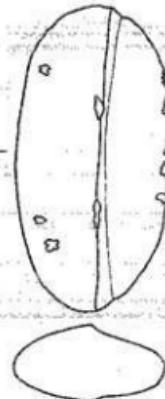
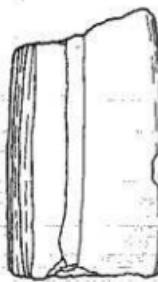
第163図 遺構外出土遺物（縄文49）



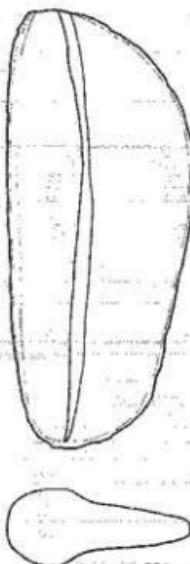
229



230



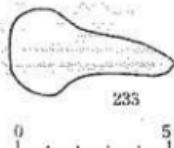
231



232



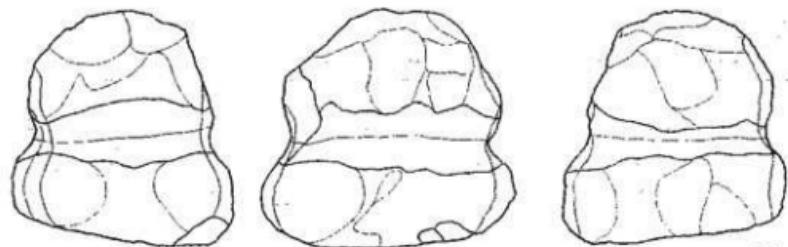
233



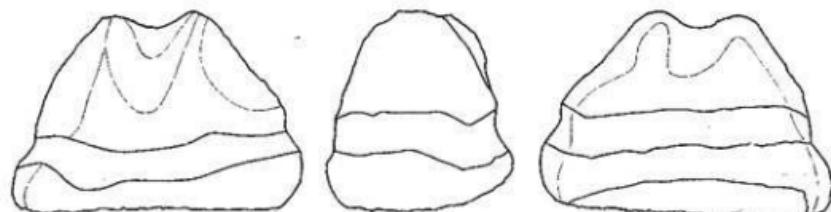
234

5 cm

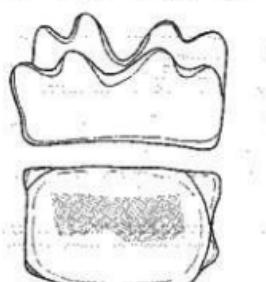
第164図 遺構外出土遺物 (縄文50)



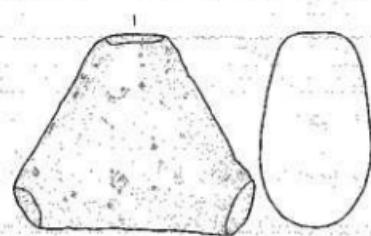
234



235

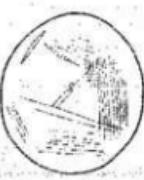
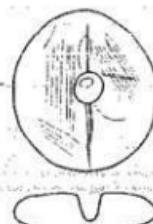
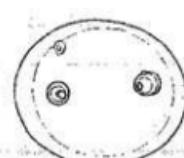
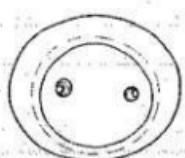


236



237

アスファルト付着



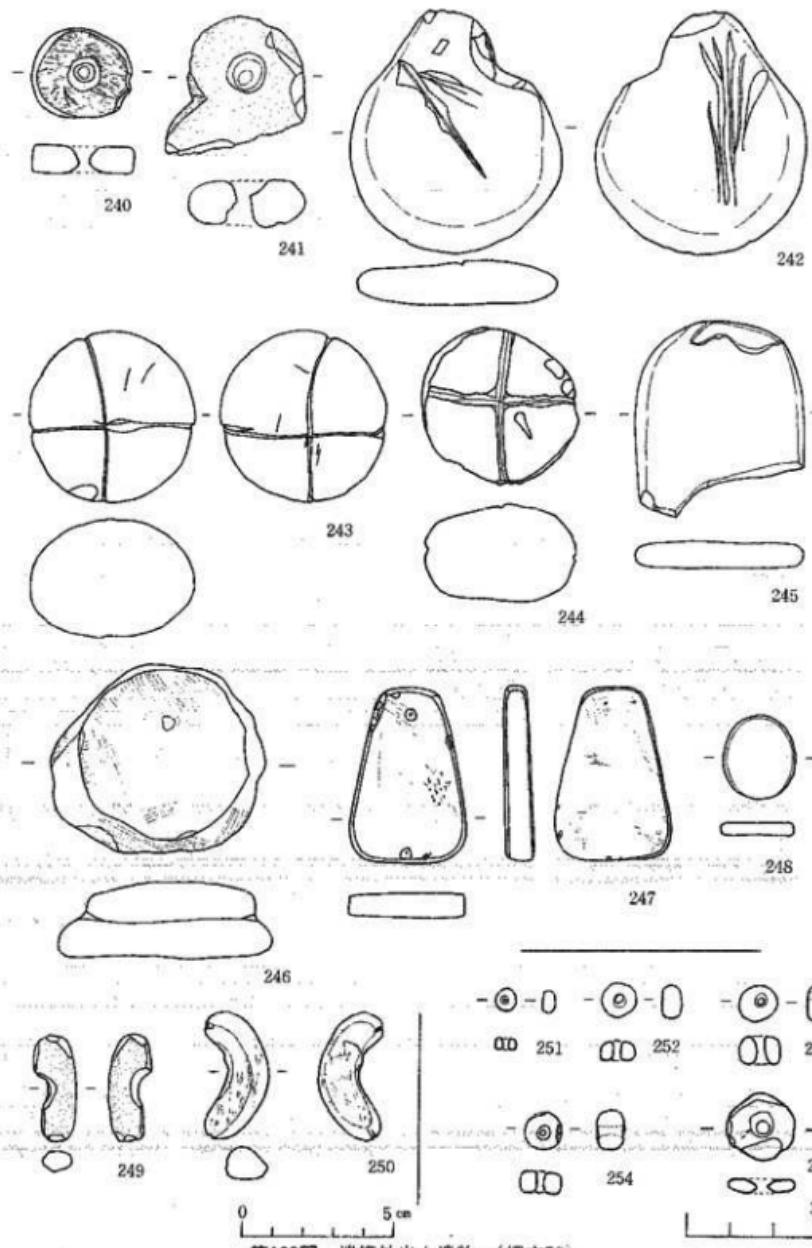
239



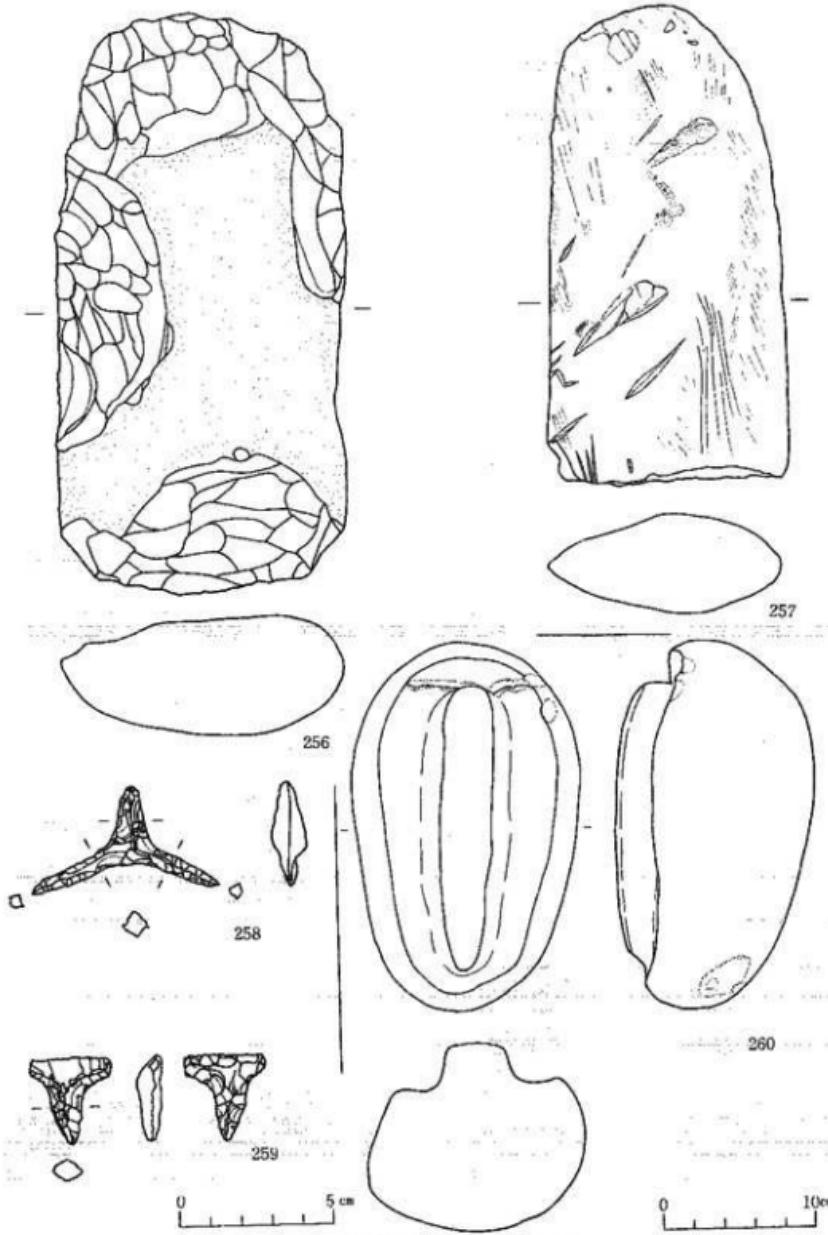
238



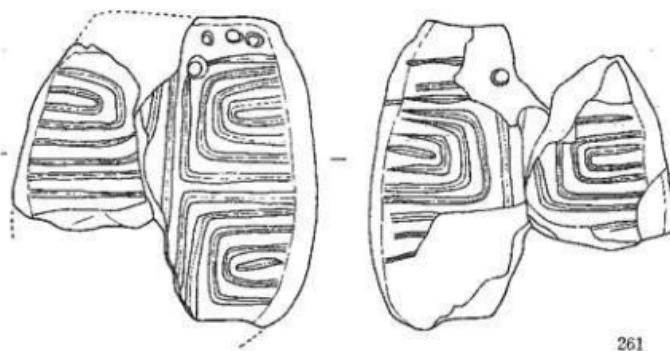
第165図 遺構外出土遺物（縄文51）



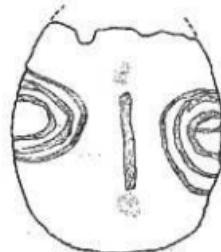
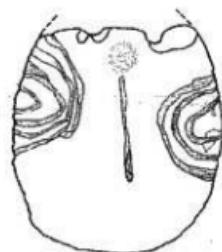
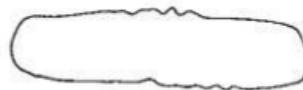
第166図 遺構外出土遺物 (縄文52)



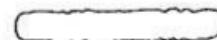
第167図 造構外出土遺物（縄文53）



261



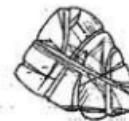
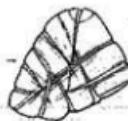
263



262



264



267

265

266

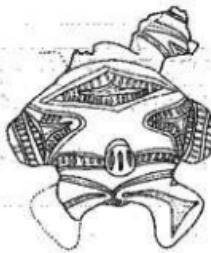


第168圖 遺構外出土遺物（繩文54）

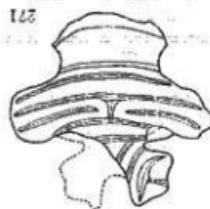
第169圖 漢唐外山土遺物 (圖文55)

5 cm
0

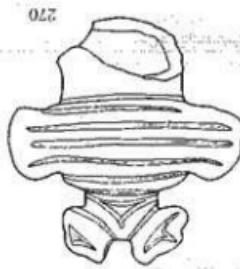
272



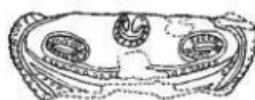
271



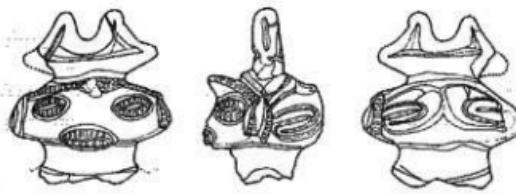
270



269



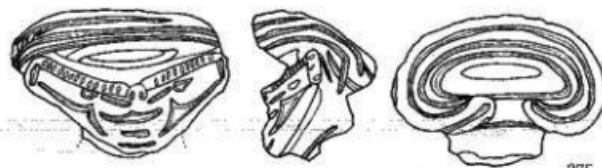
268



273



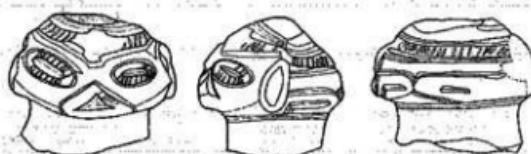
274



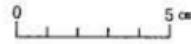
275



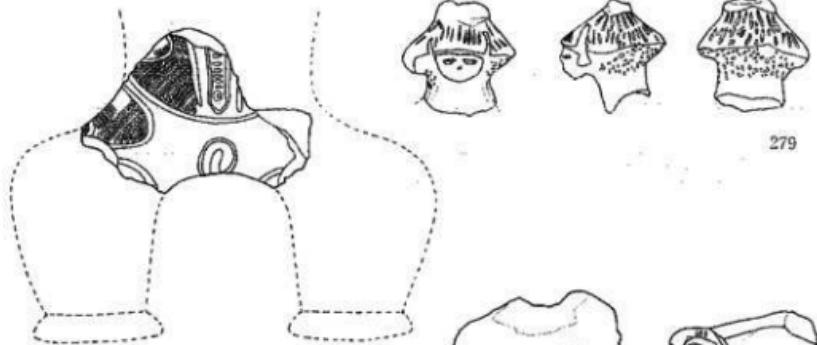
276



277



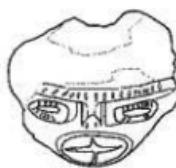
第170図 遺構外出土遺物（縄文56）



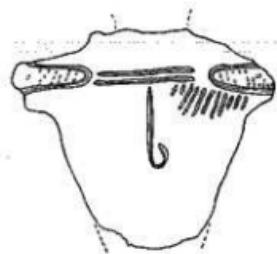
279



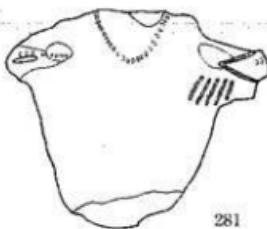
278



280



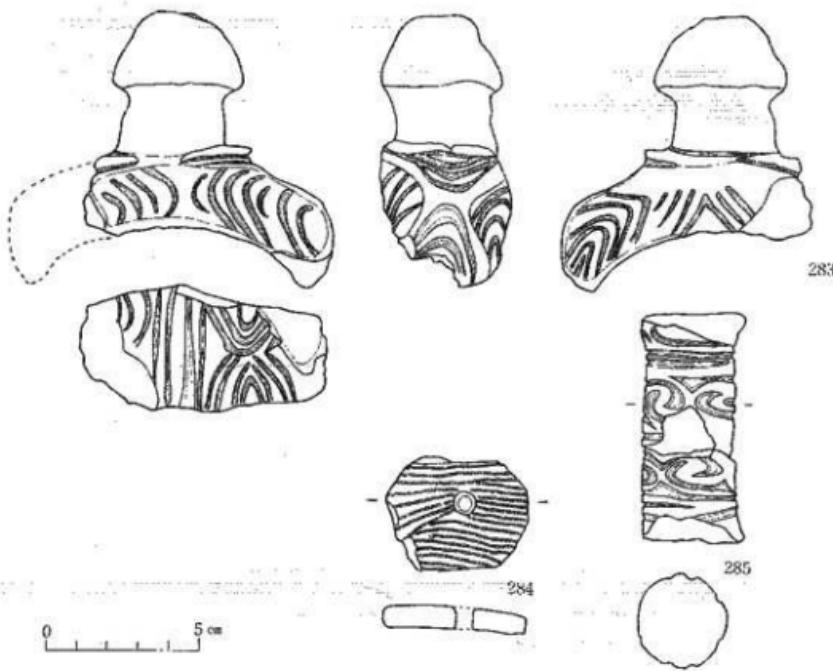
281



282



第171図 造模外出土遺物（縄文57）



第172図 遺構外出土遺物（緯文58）

2 弥生時代

(1) 遺構と遺構内出土遺物

① 土 壤

SK 077 (第173図)

KJ 55グリッド内にあり、第IV層上面で確認された。確認時には平面プランが不明瞭であったが、225cm×185cmの不整円形を呈し、深さ20cmを測るものとなつた。東側に接して倒木痕があり、本遺構も人為的な掘り込みと見るよりは、倒木痕の凹みの一部と考える方が妥当かも知れない。20cm×10cm大の自然石数個と弥生土器が、覆土中に一括して投げ込まれた如き状況で出土した。

土器には浅鉢(第175図17)、壺(175図

18、19)、高环(第175図22、23)、蓋(第

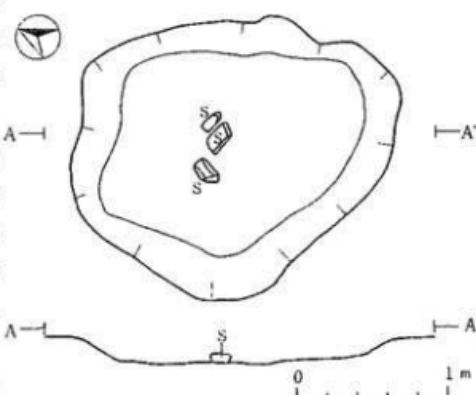
175図24)の器形が認められる。1の浅鉢は図上復原であるが、口径推定23cm、底径推定12cm、器高8.8cm、24の蓋は完形資料で、口径16.5cm、器高8.8cm、つまみ部径8.2cmを測る。浅鉢形土器には、底部から体部がなだらかに立ち上がるものもある(1)が、明らかに体部に一段のくびれ部を有するものが多い(2、4、5、8、10、12~16)。この中には口縁部が直立するもの(4)と、外傾ないしは外反するもの(5、8、10、12~16)がある。文様は太めの沈線による変形工字文と平行沈線文で、三角形の交点や平行沈線間影去による粘土粒貼付が見られる。この他、繩文施文のみの小破片が出土しているが、磨消繩文の施文された土器は皆無である。石器としては石匙(第175図25)が1点出土した。

(2) 遺構外出土遺物

豊富な繩文土器の中から、弥生時代の土器として分離し得たものは24片である。いずれも小破片であるが、器形には浅鉢、深鉢、壺、高环が認められる。文様から5類に分類される。

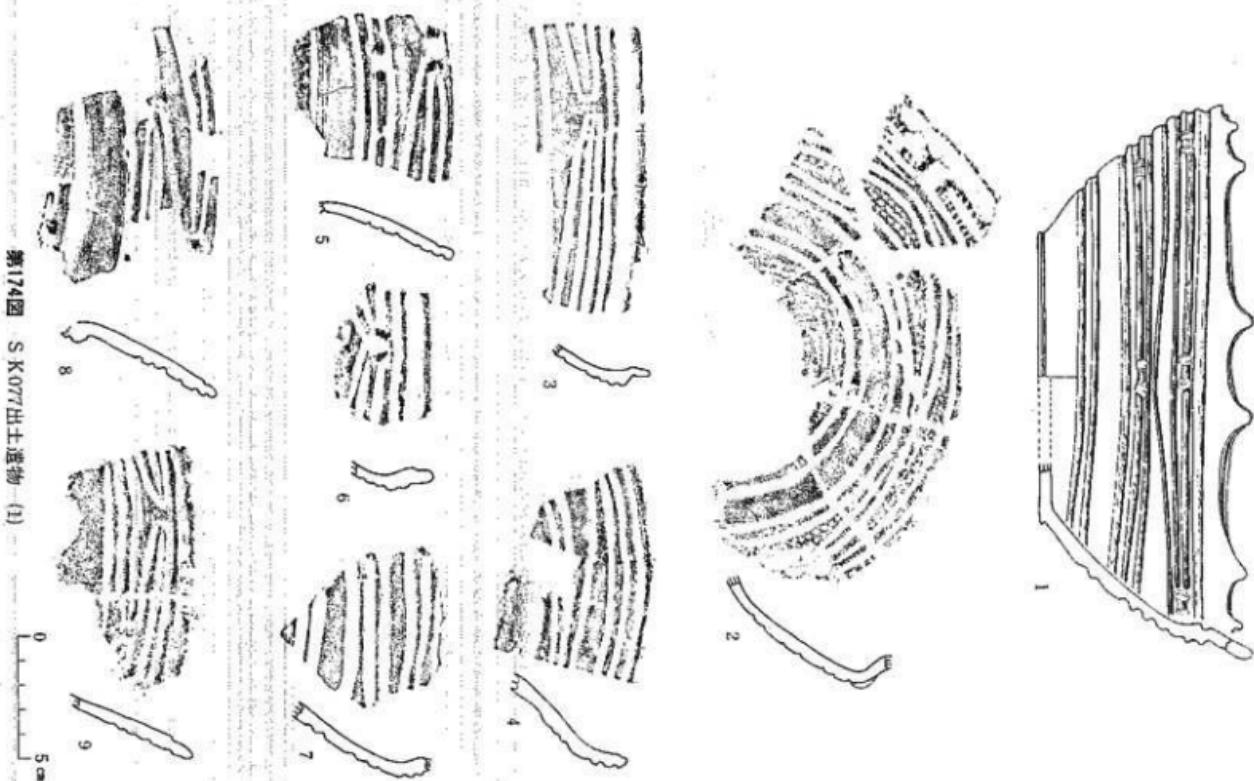
第1類：太めの沈線を用い、変形工字文、平行沈線文、波状文の施されるもの(第176図1~12、第177図13~16)。変形工字文の施文されるものには、三角文の接点に粘土影去による粘土粒の貼付されるもの(1、4、5、7)と、それが見られないもの(6、8、10)がある。

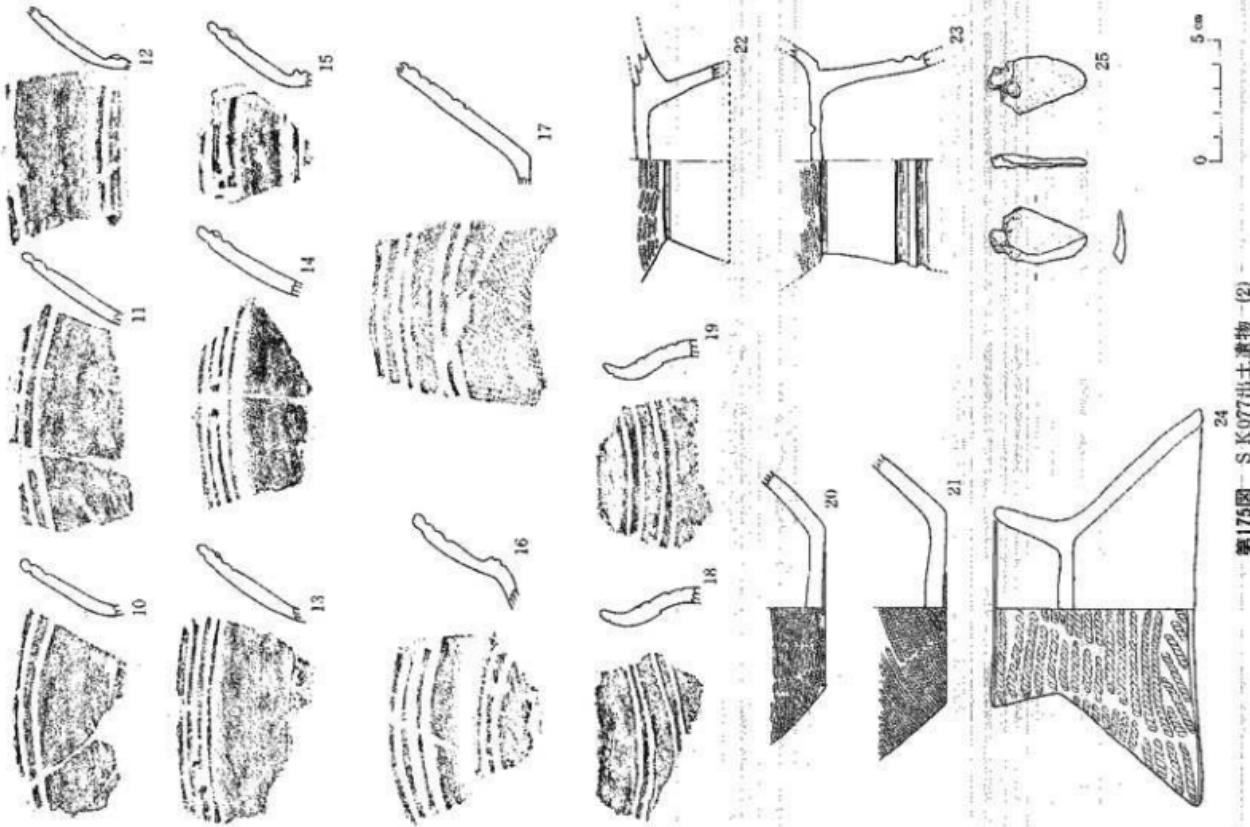
第2類：充填繩文の施されたもの(第177図17~18)。いずれも弧線間に充填繩文技法を用いている。



第173図 SK 077土壤実測図

第174圖 S.K077出土遺物 (1)



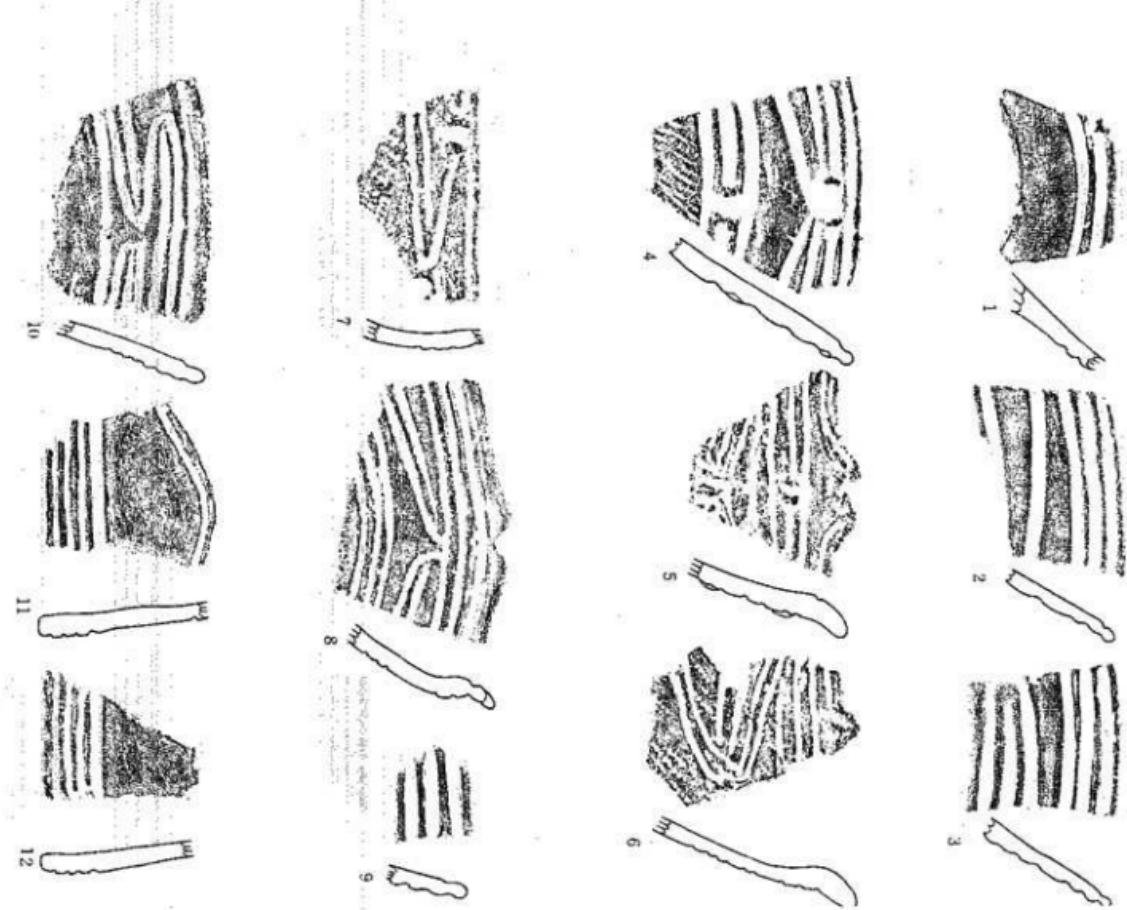


第175圖—SK077出土遺物（2）

—199—

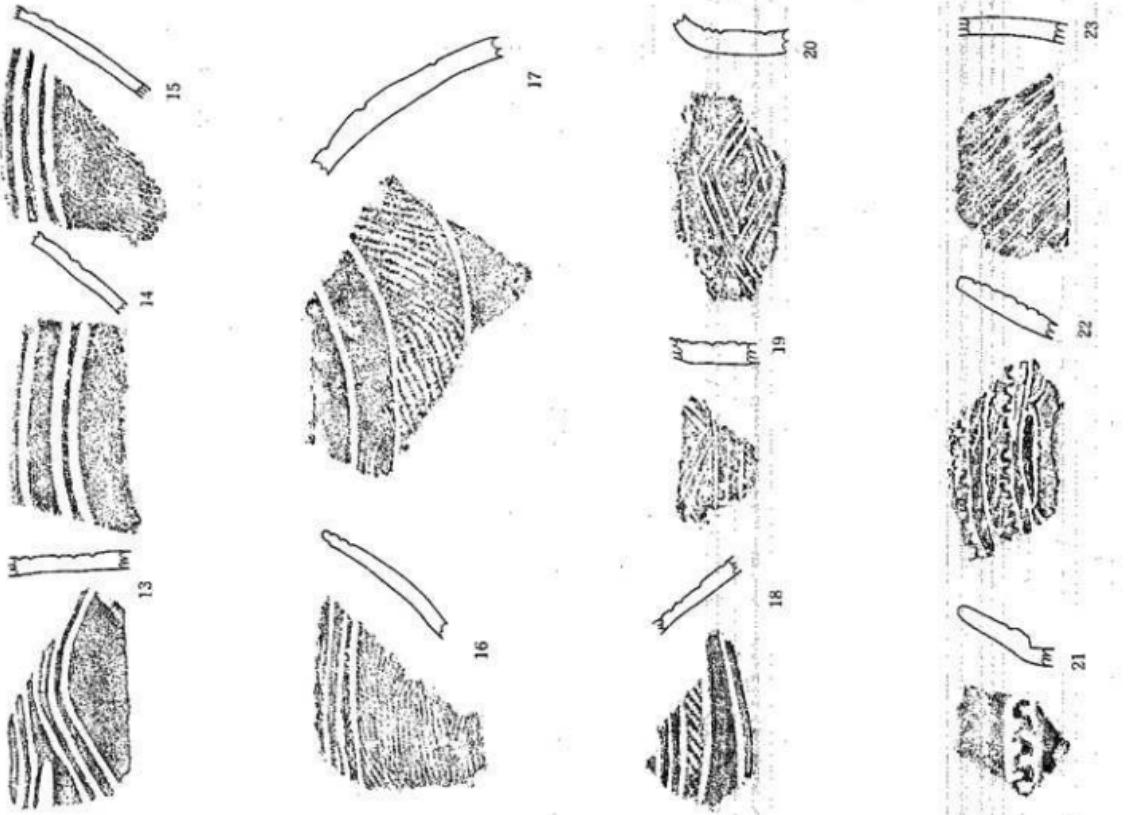
第176図 一通房出土遺物(弥生1)

0 5 cm



第177圖 “電梯外出土遺物（弦生2）”

5 cm



第3類：3本単位の細い沈線により、重複形文の施されたもの（第177図19・20）。

第4類：口縁部に交互刺突文の施されたもの（第177図21・22）。

第5類：捺糸文の施されたもの（第177図23）。

3 平安時代

(1) 遺構と遺構出土の遺物

① 積穴住居跡

S1001 積穴住居跡（第178図・第62図版）

位置：MC59・60、MD60グリッド

確認面：IIIe層あるいはIIIf層を掘り込んで構築されているはずであるが、両層が極めて薄いためか、縄文晩期大洞C₁・C₂式期のIV層上面で確認された。

確認状況：IV層上面に方形の火山灰層の分布と、その上位の黒色土が落ち込みの様に検出され、これを立ち削ったところ確認された。

形態：方形

規模：壁長は、北東壁430cm、北西・南東壁410cm、南西壁440cm、壁高は、北東壁24~28cm、北西壁17cm、南東壁13cm、南西壁17cmを測る。

面積：21.6m²

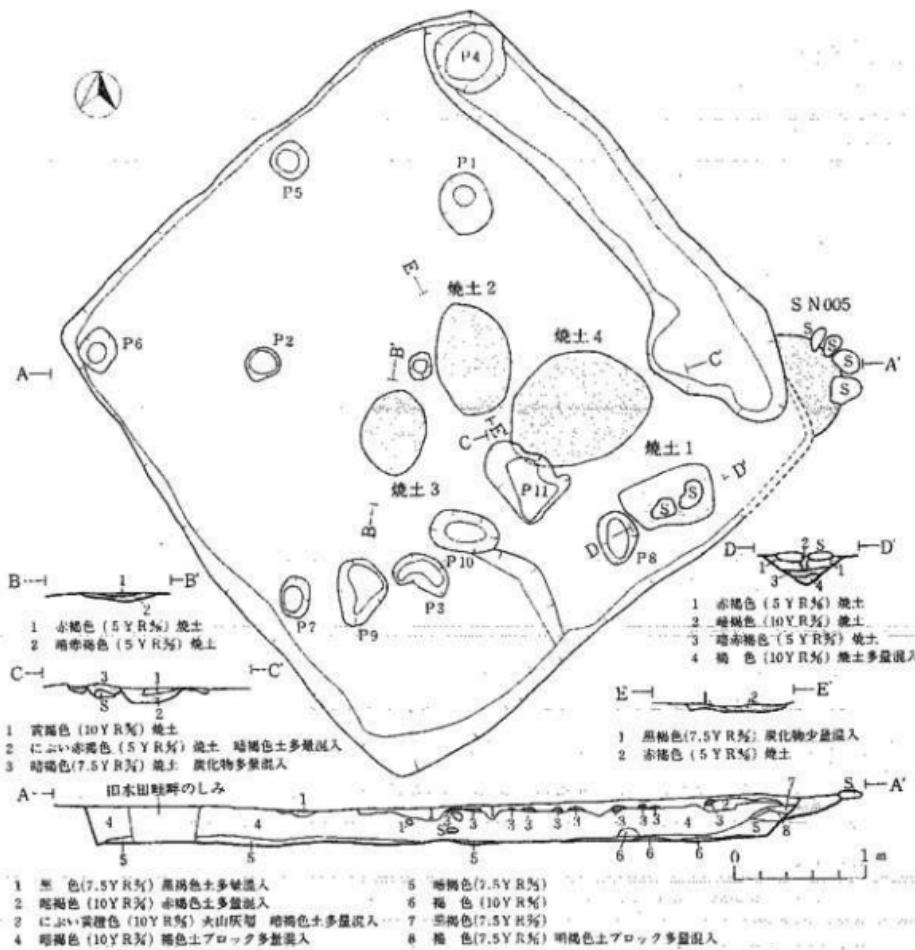
主軸方位：N40°W

床面：堅くしまり、全体的に平坦であるが、南西部に10cm程度落ち込んでいる所がある。北東壁に沿って、長さ350cm、幅60cm、深さ25cmほどの溝状の掘り込みがあるが、性格は不明である。

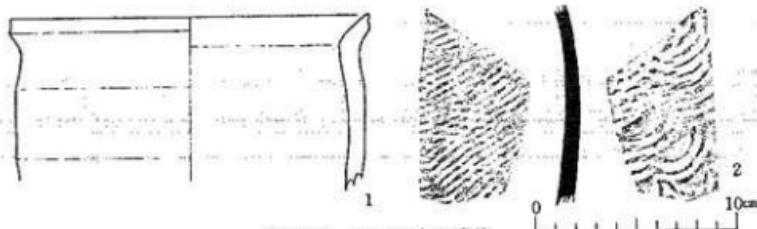
壁：四壁ともにはば垂直な立ち上がりを示す。

柱穴：ピットは床面内部に6個（P1~3・9・10・11）、壁寄りに5個（P4~8）検出された。深さはP1・40cm、P2・45cm、P3・18cm、P4・27cm、P5・43cm、P6・49cm、P7・22cm、P8・16cm、P9・15cm、P10・13cm、P11・18cmを測る。このうち、床面内部にはP1~3の他、これに対応するピットが存在したものと思われるが、焼土4の掘り込みによって消失したらしい。焼土4はこれらの柱穴より新しい時期の構築と判断され、したがってこの住居跡は、当初P1~3と消失したピットを含む4本の柱を使用していたが、その後、壁際のピット4~8を柱穴とする配置に建て替えを行ったものと考えられる。しかし、焼て替えた後の柱穴は北西壁の他は明確でない。

炉：床面4箇所に焼土が分布する。このうち焼土1は床面からの掘り込みが43cmと深いが、焼土2・3は10~12cm、焼土4は23cmと、焼土1よりははるかに浅い。また、焼土1の掘り込



第178図 SI 001堅穴住居跡実測図



第179図 SI 001出土遺物

第4章 発見された遺構と遺物

みは擂鉢状を呈し、床面レベルに径20cmほどの石が2個存在する。住居跡南東隅の壁は崩壊し、その外側にあるSK076上部にも焼土がわずかに抜がっている。こうしたことから、この位置に、柱建て替え前の住居跡に付随するカマドの存在を考えるべきかも知れない。

備考：住居跡北隅に土器棺が検出された。この土器棺(SR018)を切って住居が構築されている。

遺物：覆土下方より、土師器甕、須恵器破片が出土した(第179図)。

S1002 穹穴住居跡(第180図・第63・93図版)

位置：MC 61・62・63、MD 62

確認面：地山面

確認状況：S1001周辺の第IV層を掘り下げ中に、地山面で確認した。S1001同様に第三IIIe層あるいは第三If層からの掘り込みであろうが、地山面に至るまで確認はできなかった。

形態：方形

規模：壁長は、北東壁340cm、北西壁344cm、南西壁340cm、南東壁353cm、壁高は地山面からの測定であるが、北東壁で19cm、北西・南西壁は12~15cm、南東壁は17~22cmを測る。

面積：15.5m²

主軸方位：N45°E

床面：全体にはほぼ平坦であるが、砂質であるため軟らかい。

壁：四壁ともにはほぼ垂直な立ち上がりを示し、遺存状態も良好である。

竈溝：北東壁には認められなかったが、他の壁には幅10cmほど、深さ3~9cmで検出された。

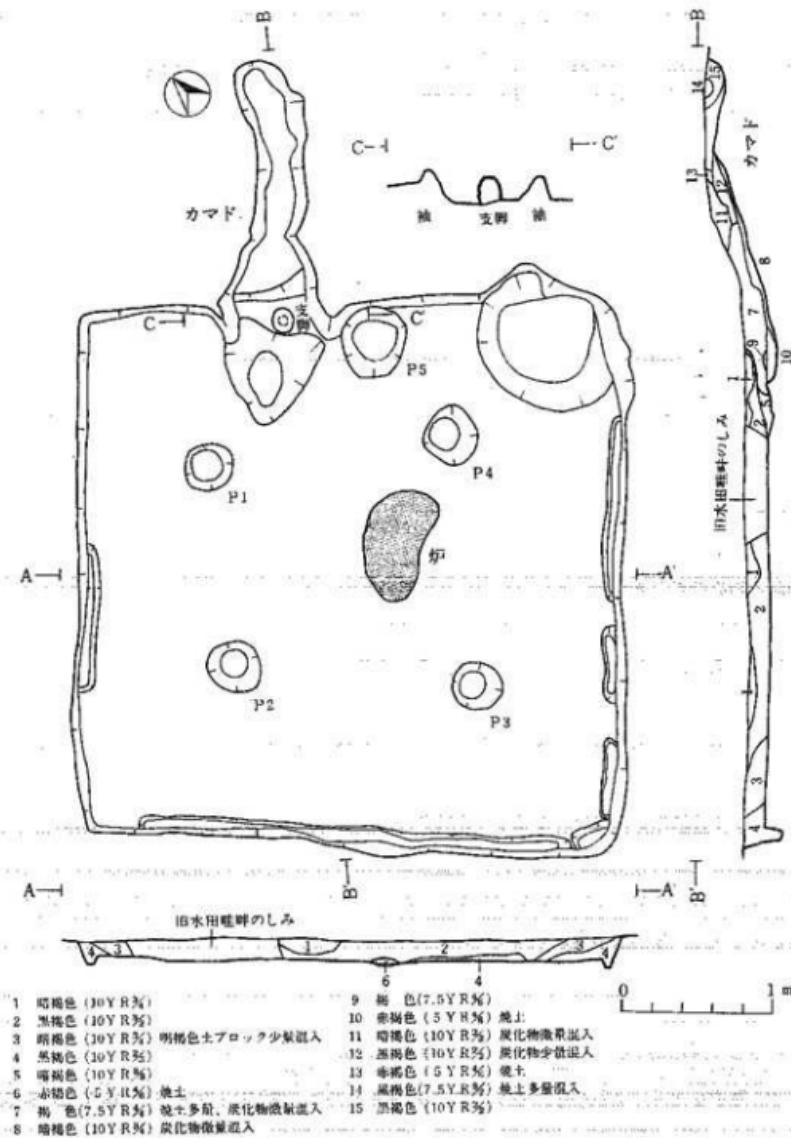
柱穴：床面中央寄りに4個、北東壁中央部に1個のピットが検出された。深さはP1・20cm、P2・50cm、P3・35cm、P4・51cm、P5・13cmで、口径は32~47cmを測る。P1~P4が柱穴である。

カマド：北西壁のやや北寄りに付設されている。燃焼部は幅70cm、奥行80cm、底面奥部に土師器甕を利用した支脚を置く。燃焼部内は底面、壁面ともによく焼けており、燃焼部奥壁は10cmほど立ち上がって煙道部へ移行する。煙道部は最大幅45cm、住居跡壁から煙出までの長さは170cmを測る。

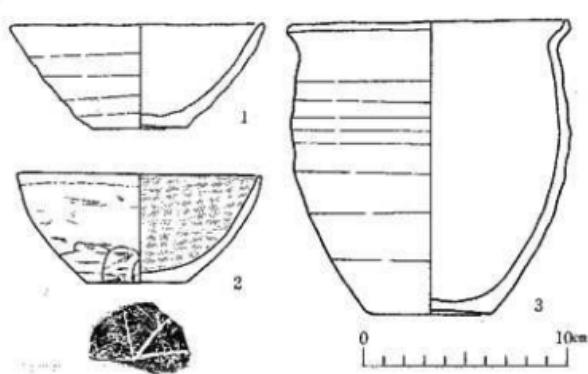
炉：床面中央部に74cm×40cmの大きさの炉が見られる。

遺物：第181図1・2は覆土中から出土した土師器甕で、1は口径12.5cm、底径4.9cm、器高5.2cm、ロクロ成形である。2は口径12.1cm、底径4.9cm、器高5.3cm、内黒で、底部外縁に手持ちハラケズリを施している。3はカマド内の支脚で、口径14.3cm、底径6.2cm、器高14.6cmを測る土師器甕である。ロクロ成形で二次調整は施されない。

S1003 穹穴住居跡(第182図・第63・64・65・66・93・94図版)



第180図 SI 002竪穴住居跡実測図



第181図 SI 002出土遺物

位置: KG59・60、KH59・60

確認面: 第IV層上面

確認状況: 第IV層上面

精査中に、火山灰の括りを検出し、立ち割ったところ確認された。

形態: 方形

規模: 壁長は北東壁が

425cm、北西壁が450cm、

南東壁410cm、南西壁350

cmで、壁高はそれぞれ、12~14cm、10cm、16~22cm、25~29cmを測る。

主軸方位: N29°E

面積: 19.8m²

床面: 中央部が最も低く、壁に向かって全体に緩やかな上昇を示す。中央部と壁際では約15cmほどの高低差がある。

壁: 全体に歪みがあり直線をなさない。やや外方に傾斜して立ち上がっている。

柱穴: 床面に7個のピットが見られる。各々の深さは、P1・18cm、P2・16cm、P3・17cm、P4・17cm、P5・17cm、P6・13cm、P7・13cm、P8・11cmを測る。P2~5は柱の建て替えを示すものと思われる。P7はカマドB構築以前の柱穴であるが、カマド構築後の柱穴は明確でなかった。

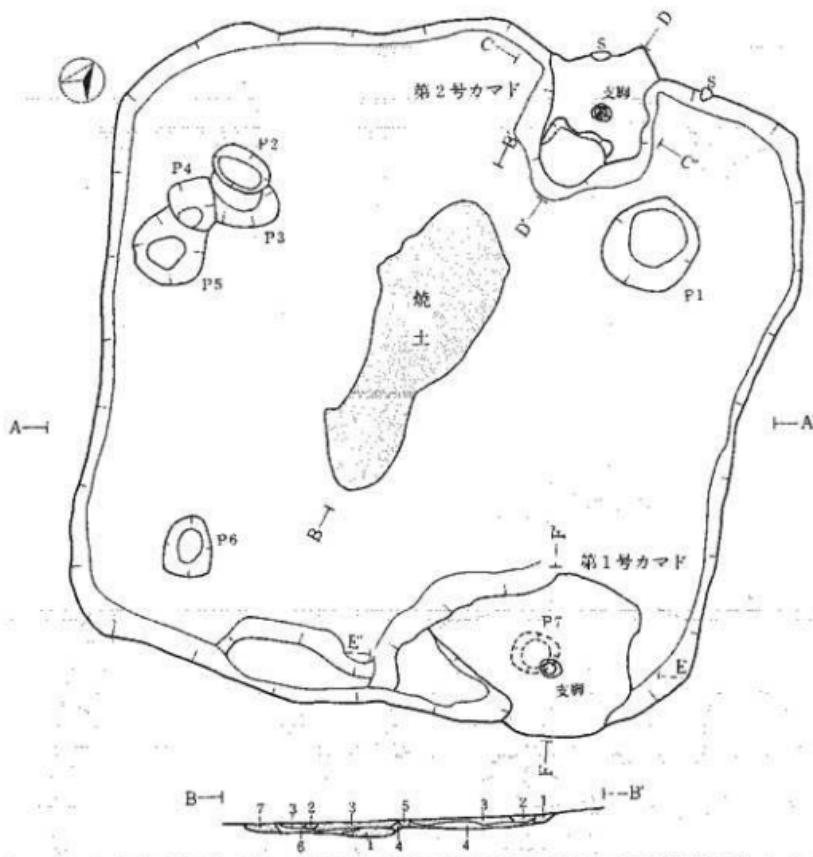
カマド: 北西壁と南東壁に1基ずつ構築されており、各々を第1号、第2号とした。

〈第1号カマド〉 北西壁の東寄りに付設され、袖が残存している。両袖幅は80cm、奥行き75cmを測り、燃焼部中央に土師器運転用の支脚がある。燃焼部底面は焼面となっている。煙道部はほとんどなく、煙出しも定かではない。

〈第2号カマド〉 南東壁の東寄りに付設されたもので、粘土を使用した袖が残存する。両袖幅150cm、奥行き100cmを測り、燃焼部中央に土師器運転用の支脚がある。隣接してさらにもう1個土師器甕が出土した。底面は焼面を形成している。

炉: 床面中央部に2基の炉がある。北側は130cm×85cm、南側は110cm×50cmほどを測る楕円形で、平面では南側の炉が北側のそれを切っていることが明らかであった。

備考: 床面直上にワラ状の炭化物が全体に広がっており、焼失家屋と判断される。覆土上部に火山灰が堆積している。

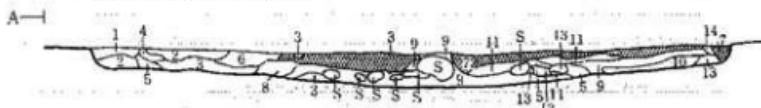


1 暗赤褐色 (5 YR 4/6) 炭化物少す、焼土少量混入 5 仁川黄褐色 (10 YR 5/6) 新土質 炭化物少量混入

2 黒褐色 (5 YR 4/6) 炭化物層 成土少量混入 6 喀褐色 (7.5 YR 4/6)

3 明赤褐色 (5 YR 4/6) 焼土 7 喀黃褐色 (10 YR 4/6) 焼土少す、炭化物少量混入

4 暗 (7.5 YR 4/6) 炭化物微量混入



1 黒褐色 (10 YR 4/6)

2 黃褐色 (10 YR 4/6)

3 黑 (10 YR 4/6) 炭化物層

4 黑褐色 (10 YR 4/6) 炭化物少量混入

5 黄褐色 (10 YR 4/6) 粘土質、少量混入

6 黑 (7.5 YR 4/6) 炭化物少量混入

7 仁川黃褐色 (10 YR 4/6) 大山灰質 黑褐色少量混入

8 黑 (10 YR 4/6) 明黃褐色土多量混入

9 黑褐色 (7.5 YR 4/6) 炭化物少量混入

10 黑褐色 (10 YR 4/6) 炭化物少量混入

11 黑 (7.5 YR 4/6) 炭化物層

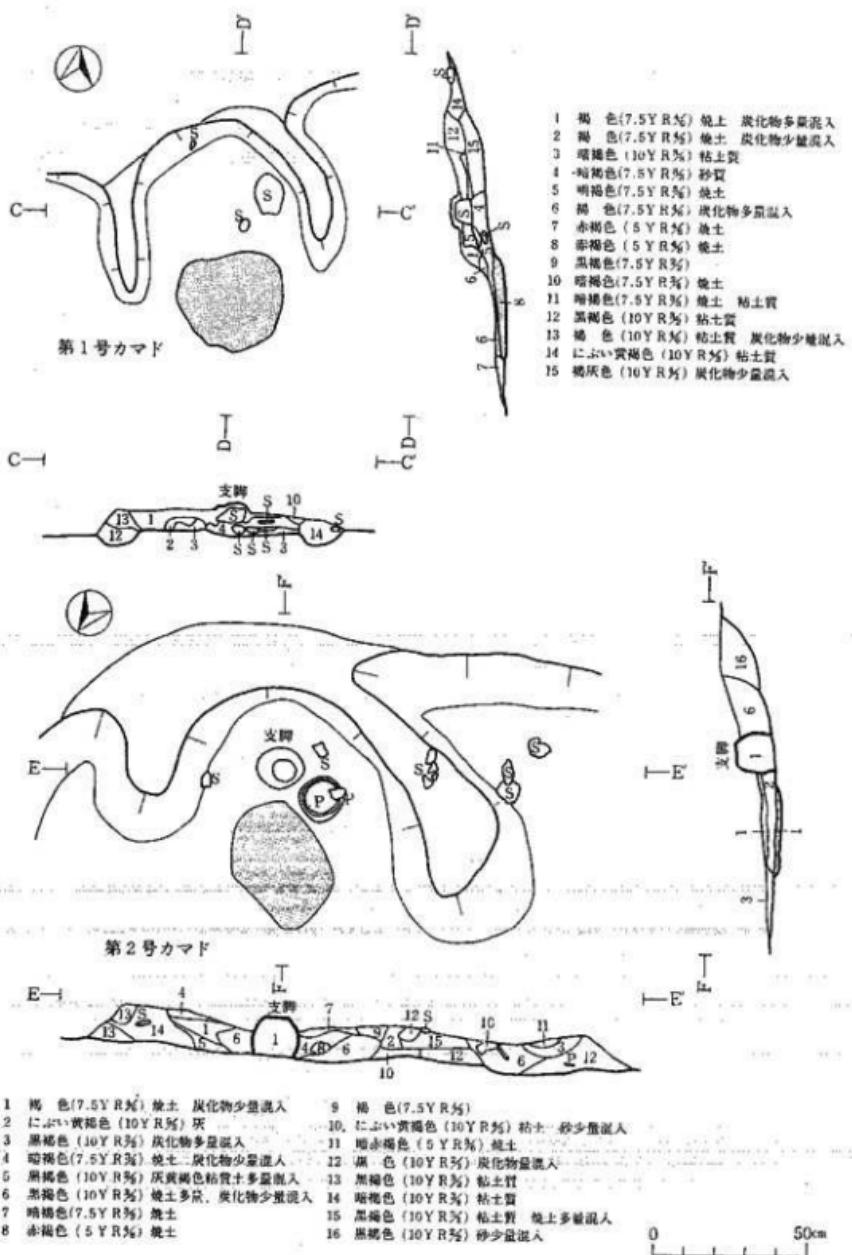
12 黑褐色 (10 YR 4/6) 黄褐色土少量混入

13 黑褐色 (10 YR 4/6) 粘土質、明黃褐色土多量混入

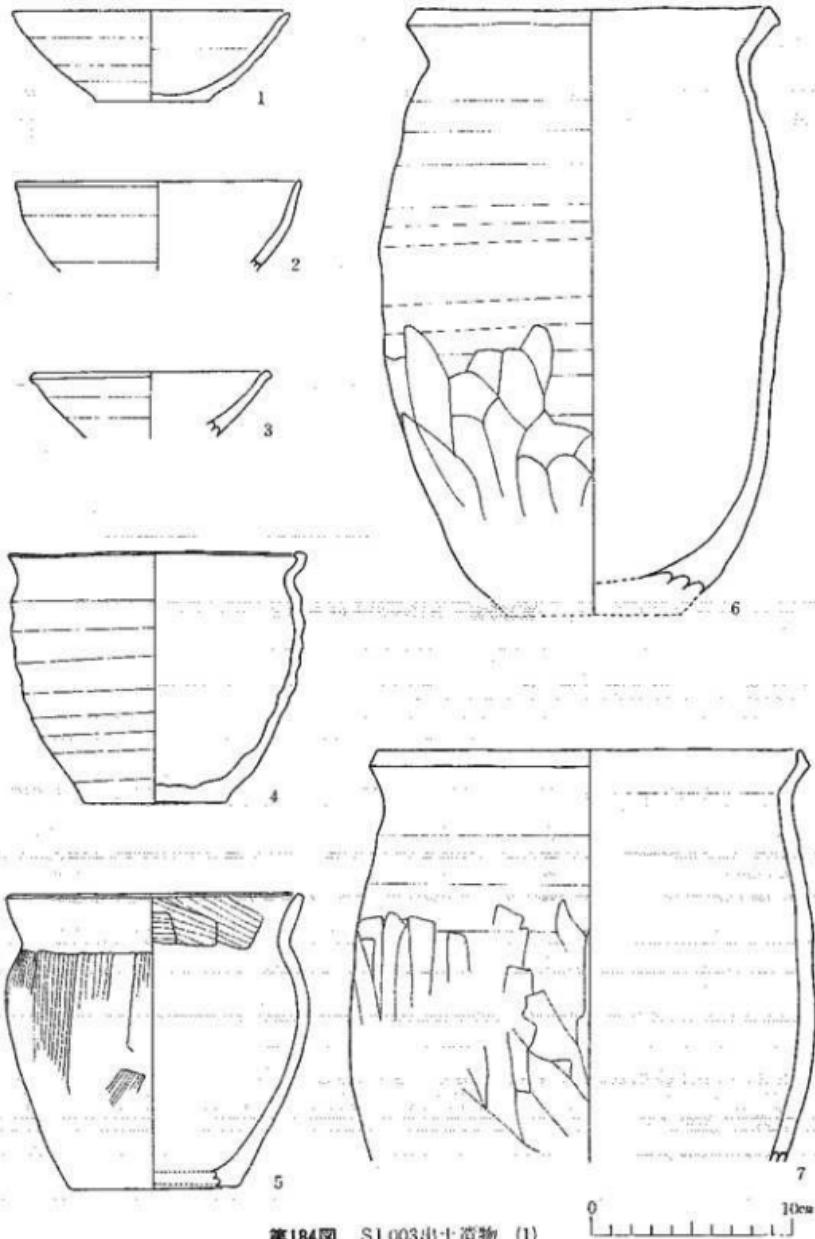
14 黑 (5 YR 4/6) 黄褐色土多量混入



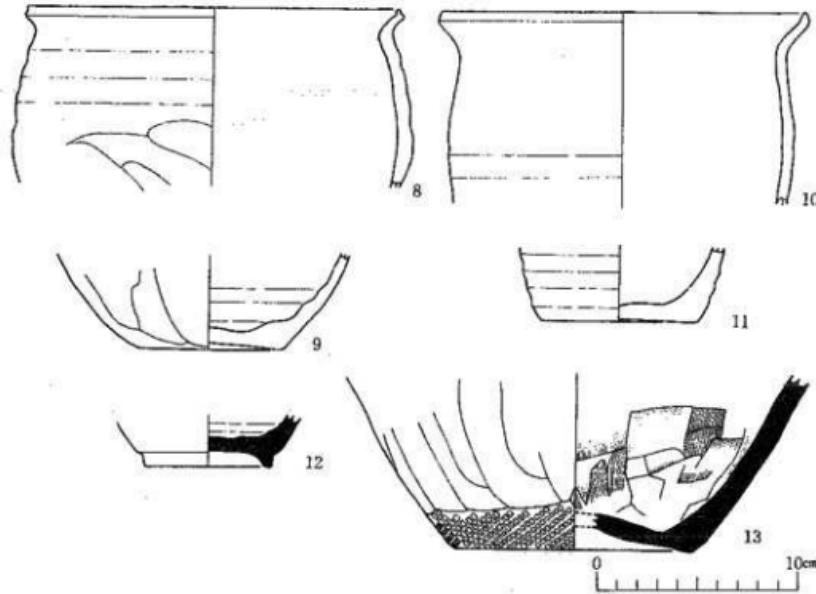
第182図 SI 003堅穴住居跡実測図



第183図 SI 003竪穴住居跡カマド実測図



第184図 S1 003出土遺物 (I)



第185図 SI003出土遺物(2)

第7表 SI003出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第184図 1	—	杯	(13.7)cm	4.6cm	5.5cm	—cm	土師器
〃 2	—	杯	(14.0)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 3	—	杯	(11.6)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 4	第93図版210	甕	15.3cm	12.5cm	7.2cm	14.9cm	カマド内
〃 5	第94図版211	甕	15.1cm	15.2cm	9.9cm	15.0cm	土師器
〃 6	〃 212	甕	18.4cm	29.8cm	(8.5)cm	20.3cm	土師器
〃 7	—	甕	21.1cm	—cm	—cm	(23.0)cm	土師器
第185図 8	—	甕	(18.4)cm	—cm	—cm	(19.9)cm	土師器
〃 9	—	甕	—cm	—cm	6.9cm	—cm	土師器
〃 10	—	甕	(18.0)cm	—cm	—cm	(17.2)cm	土師器
〃 11	—	甕	—cm	—cm	(7.7)cm	—cm	土師器
〃 12	—	高台杯	—cm	—cm	6.3cm	—cm	須恵器
〃 13	—	甕	—cm	—cm	(11.8)cm	—cm	須恵器

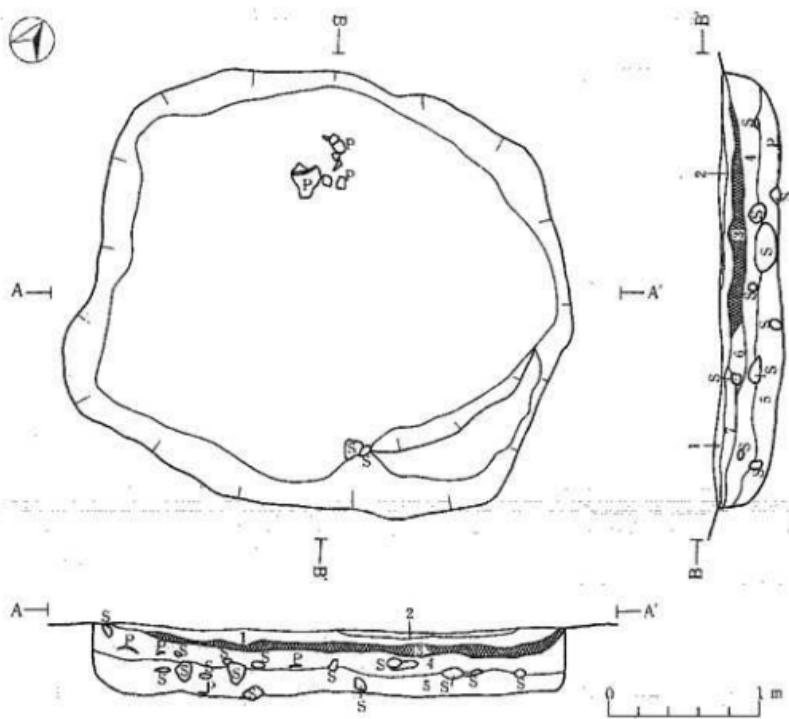
遺物：カマド内、床面、覆土中から土師器、須恵器の杯・甕が出土した（第185・186図）。

S K (I) 001 窒穴状遺構（第186図・第65・66・94図版）

位置：K G 60・61

確認面：IV層上面

確認状況：第IV層を精査中に、火山灰の括がりと、その上位の黒色土を検出し、遺構と判断した。



- 1 黒色(5Y R 1/2)火山灰少量混入
2 褐褐色(2.5Y R 5/6)褐色土多量混入
3 にじみ黄褐色(10Y R 5/6)火山灰層 褐褐色土多量混入
4 黑褐色(10Y R 5/6)火山灰少量、炭化物少量混入
5 黑褐色(10Y R 5/6)炭化物多量、粘土多量混入
6 褐褐色(10Y R 5/6)火山灰少量混入
7 灰褐色(10Y R 5/6)火山灰少量、炭化物少量混入

第186図 SK(I)-001竪穴状遺構実測図

形態：隅丸方形である。

規模：東西310cm、南北290cmを測る。

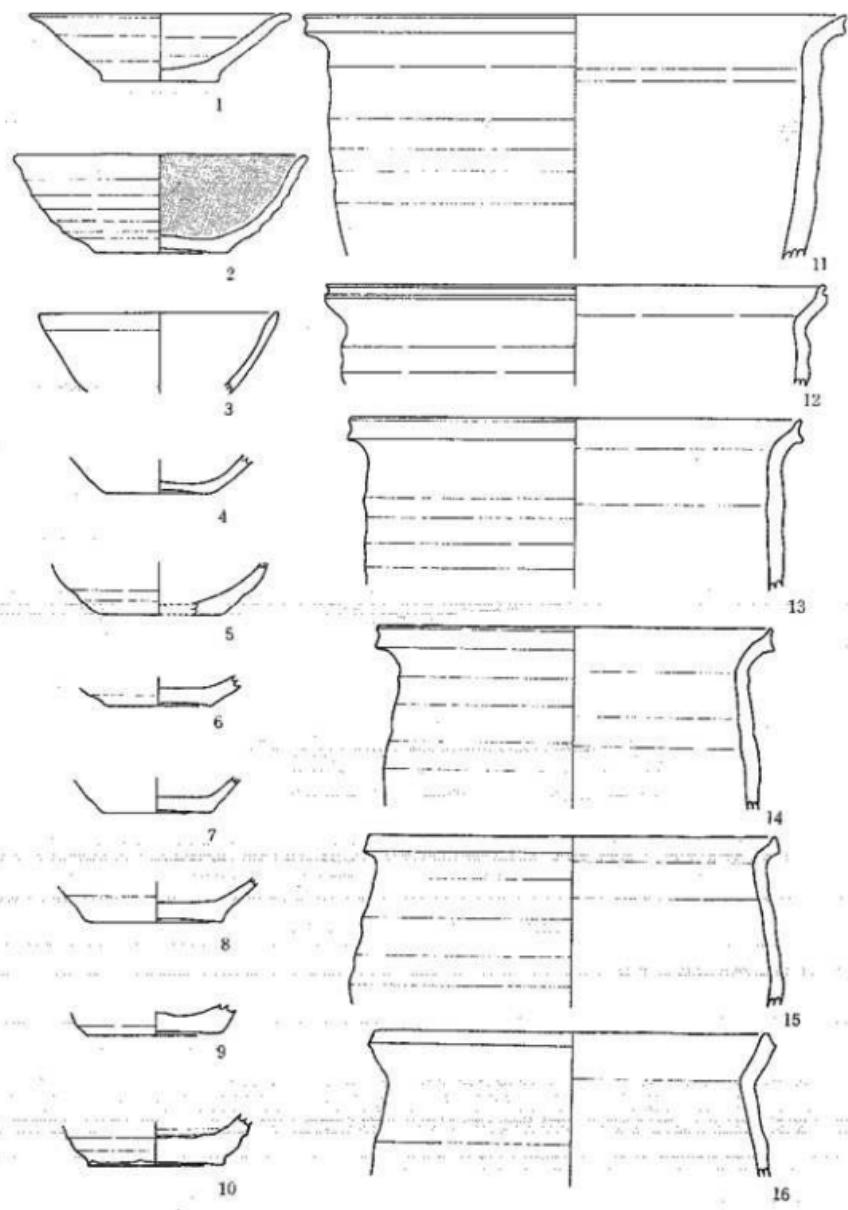
面積：8.0m²

壁：壁高は40~43cmを測り、ほぼ垂直な立ち上がりを示している。

底面：ほぼ平坦であるが、東南隅は10~15cmほど高くなっている。

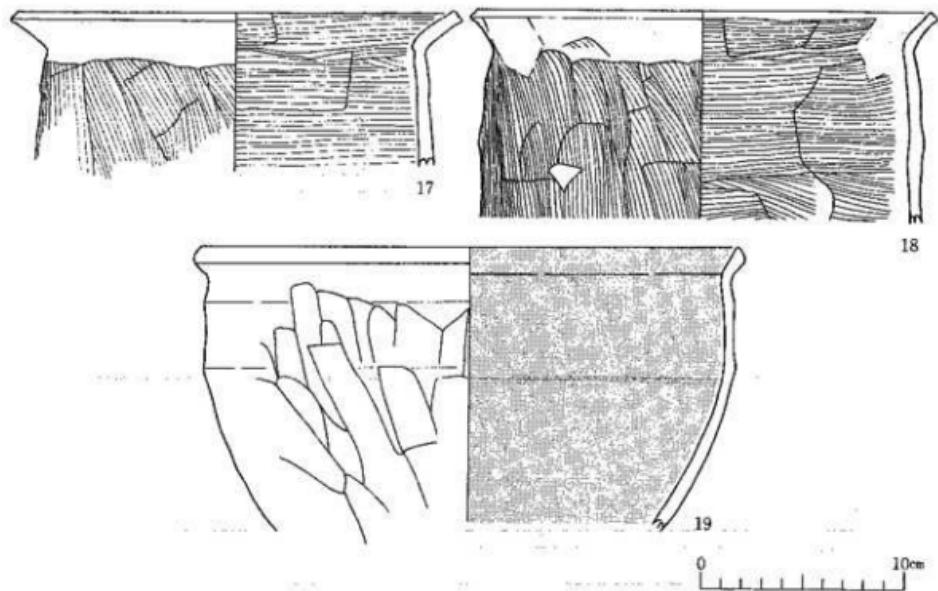
備考：遺構内覆土上方に火山灰が堆積している。

遺物：底面に密着して、土師器杯・甕が多量に出土した（第187・188図）。



第187図 SK(I) 001出土遺物 (1)

0 10cm

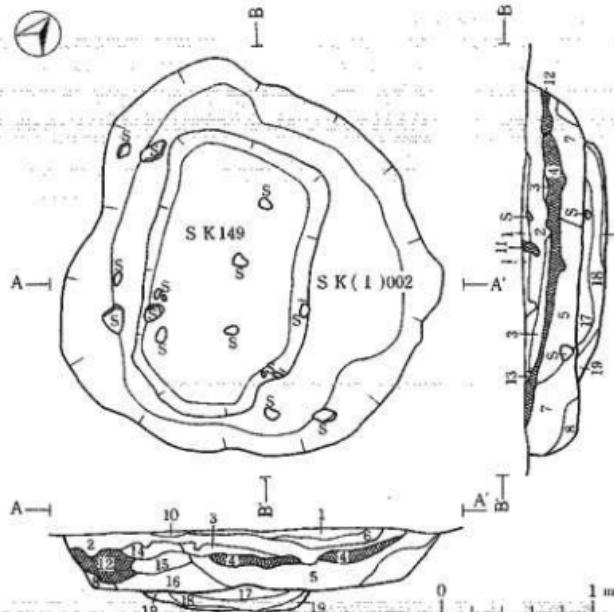


第188図 SK(I)-001出土遺物(2)

第8表 SK(I)-001出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第187図 1	—	杯	13.0cm	3.4cm	5.8cm	—cm	土師器
〃 2	第94図版213	杯	14.6cm	4.9cm	(6.4)cm	—cm	土師器、内黑
〃 3	—	杯	(11.9)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 4	—	杯	—cm	—cm	5.8cm	—cm	土師器
〃 5	—	杯	—cm	—cm	(6.0)cm	—cm	土師器
〃 6	—	杯	—cm	—cm	(5.1)cm	—cm	土師器
〃 7	—	杯	—cm	—cm	(5.4)cm	—cm	土師器
〃 8	—	杯	—cm	—cm	6.9cm	—cm	土師器
〃 9	—	甕	—cm	—cm	(6.6)cm	—cm	土師器
〃 10	—	甕	—cm	—cm	(7.2)cm	—cm	土師器
〃 11	—	甕	(26.9)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 12	—	甕	(24.9)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 13	—	甕	(22.6)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 14	—	甕	(19.8)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 15	—	甕	(20.7)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 16	—	甕	(20.3)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
第188図 17	—	甕	(22.2)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 18	—	甕	(23.2)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 19	—	甕	(27.2)cm	—cm	—cm	(26.3)cm	土師器、内黑

第4章 発見された遺構と遺物



- 1 黒褐色(2.5 YR 5/6)褐色土多量混入
- 2 黒色(5 Y R 3/6)火山灰少量、暗褐色土多量混入
- 3 増褐色(10 Y R 5/6)火山灰少量混入
- 4 にほい黄褐色(10 Y R 5/6)火山灰層、暗褐色土多量混入
- 5 黑褐色(10 Y R 5/6)炭化物少量混入
- 6 黒色(7.5 Y R 2/6)火山灰少量、暗褐色土少量混入
- 7 増褐色(7.5 Y R 2/6)炭化物少量、黒多量混入
- 8 にほい黄褐色(10 Y R 5/6)砂質
- 9 増褐色(10 Y R 5/6)火山灰少量、炭化物少量、灰質褐色土多量混入
- 10 にほい黄褐色(10 Y R 5/6)炭化物少量混入
- 11 黄褐色(10 Y R 5/6)火山灰層、黑褐色土多量混入
- 12 灰黄褐色(10 Y R 5/6)火山灰層、炭化物多量混入
- 13 本黒色(5 Y R 1/6)
- 14 黒色(5 Y R 1/6)炭化物多量、黒褐色土多量混入
- 15 増褐色(10 Y R 5/6)砂質、炭化物少量混入
- 16 黒色(10 Y R 5/6)砂質
- 17 増褐色(10 Y R 5/6)砂質、炭化物微量、礫少量混入
- 18 増褐色(10 Y R 5/6)砂質、礫少量混入
- 19 本黒色(10 Y R 5/6)砂質、理少量混入

第189図 SK(1)竪穴状遺構・SK149土壤実測図

SK(1)002 竪穴状遺構

構(第189図・第65・66図版)

位置: K I 60・61、K J 60・61

確認面: 第IV層上面
確認状況: 第IV層上面
精査中に、火山灰とその
上に堆積した黒色土の拡
がりを確認し、遺構と判
断した。

形態: 不整円形
規模: 260cm×250cm
面積: 4.9m²
壁: 高さ33~40cmで下
方に丸みを有しながら急
角度で立ち上がる。

底面: ほぼ全体に平坦
である。

備考: 繩文時代のSK
149が底面に検出され、こ
の遺構を竪穴状遺構が掘
り込んで構築されている。
覆土上部に火山灰層が堆
積している。

遺物: 土師器破片が少
量出土した。

SK(1)003 竪穴状遺構(第190図・第65・66図版)

位置: KH62・KI62

確認面: 第IV層上面

確認状況: 第IV層上面精査中に、火山灰と黒色土の拡がりを確認し、遺構と判断した。

形態: 不整方形

規模: 280cm × 160cm

面積: 3.7m²

壁: 西側では垂直に
立ち上がっているが、A—

東側はなだらかで、幾
分丸みを帯びている。

西側は高さ63cmを測る。

底面: 全体にはほぼ平 A—

坦であるが、東側が若
干浅くなっている。

備考: 遺構内覆土上

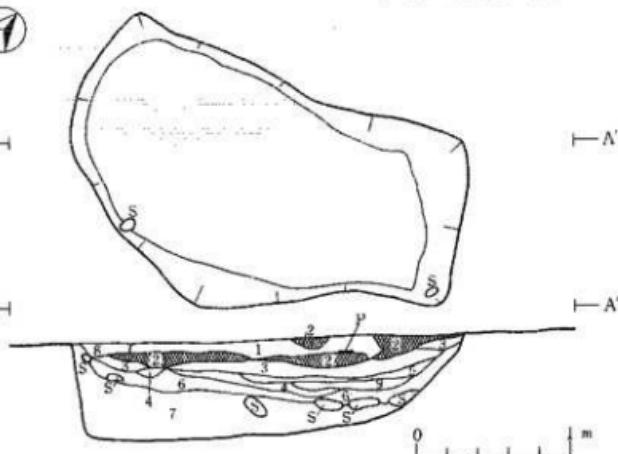
方に火山灰が堆積して
いる。

遺物: 土師器壺が出
土した。口径11.2cm、底
径推定6.8cm、器高4.4

cmを測り、ロクロ成形

である(第191図)。

- 1 黒色(5YR 3/4) 火山灰多量、炭化物少量、にほい黄褐色土少量混入
 2 にほい黄褐色(10YR 2/6) 火山灰弱 喀斯特土少量混入
 3 黒褐色(10YR 4/6) 炭化物少量、喀多量混入
 4 黑褐色(10YR 4/6) 炭化物多量、喀多量混入
 5 黒色(10YR 3/6) 黒褐色土多量混入
 6 黑褐色(10YR 2/6) 混砂質 喀多量混入
 7 黑褐色(10YR 2/6) 炭化物微量、喀多量、黄褐色土少量混入
 8 黑褐色(2.5YR 3) 火山灰少量混入
 9 喀斯特(10YR 2/6) 粘土質



第190図 SK(I)003実測図

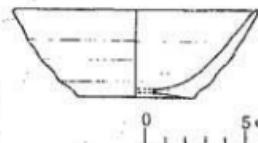
S N 001 焼土遺構 (第15図・第66図版)

MG・MHグリッド内にあり、縄文時代の第IV層と同一面で
検出された。すぐそばにS N 002~004焼土遺構がちょうど十字

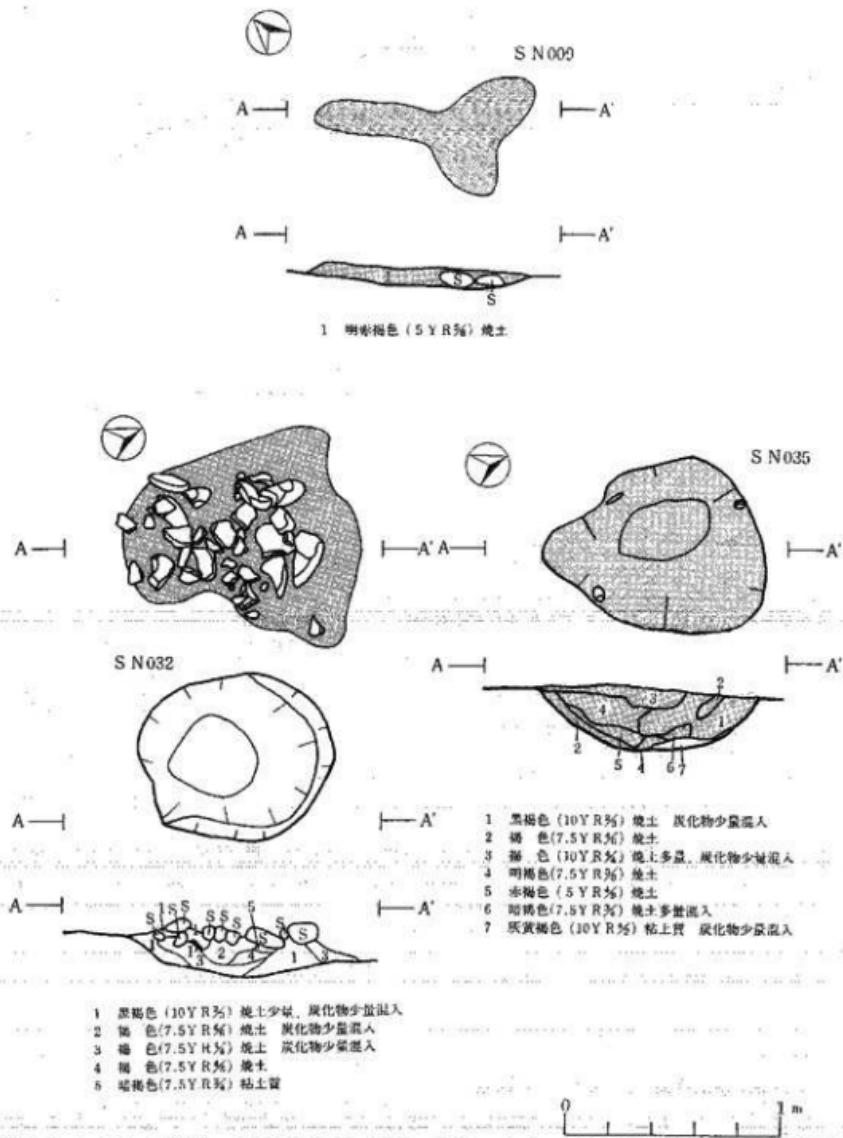
形に背を向ける形で構築されている。S N 001は最も残存状態
が良い。平面では長径は不明であるが、土層断面を見ると130cmあり、短径は平面で80cm、底
面までの深さは20cmを測る。底部は丸みのある舟底状を呈し、先端部は急激に反転して上方に
立ち上がり、煙山部のようになっている。この反対側を焚口部としたものらしい。焼土が10cm
ほどあり、その上には全面に渡って多量の炭化物が堆積している。S N 004を先端部で切っ
て構築している。

S N 002 焼土遺構 (第15図・第66図版)

S N 001のすぐ南側に位置し、平面形は長楕円形である。長軸124cm、短軸72cm、深さ25cm
を測る。底面は鍋底状を呈し、焼土が馬蹄形状の拡がりを見せる。炭化物が焼土上から覆土に
かけて散在する。S N 001の様な先端部の突出はなく、なだらかになっている。



第191図 S K(I)003出土遺物



第192圖 SN 009・032・035燒土遺構實測圖

S N 003 焼土造構（第15図）

M H59内にあるが、南半は水路によって切られており不明であるが、S N 001・002同様の形態を呈するものであろう。現存部の短径は74cmを測り、確認面から底面までの深さは7cmと浅い。底面は鍋底状を呈し、焼面を有する。炭化物が焼土中と埋土に点在している。

S N 004 焼土造構（第15図）

M H60内にあり、S D 003を切って構築されている。長径150cm、短径70cmほどであるが、焼土は底面にわずかに見られるだけで、その上に炭化物を含む褐色土層が底部に存在する。先端部の立ち上がりは急である。

S N 009 焼土造構（第192図）

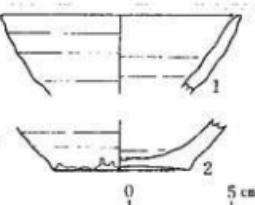
K H61グリッドに位置し、第IV層の縄文時代遺構とはほぼ同一面で検出された。S N 032・035に極めて近い位置にあり、周辺に竪穴住居跡、竪穴遺構も多い。100cm×50cmの範囲で、厚さ10cmほどに焼土が堆積している。焼土中から土師器と骨片が出土した。

S N 032 焼土造構（第192図）

K H60グリッドにあり、第IV層上面で検出した。焼土は115cm×106cmの範囲で抜がり、厚さは20cmほどを測る。焼土上面に大小の角礫が乗っており、いずれも火熱を受けて赤色化している。これらの間から土師器杯が2点出土した。いずれもロクロ成形である。

S N 035 焼土造構（第192図）

K H61グリッド内にあり、S N 009・035の中間に位置する。106cm×83cmの範囲で、深さ30cmほどに焼土が堆積している。焼土底面は丸みを帯び、全体になだらかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。



第192図 S N 032出土遺物

S D 003 溝（第15図）

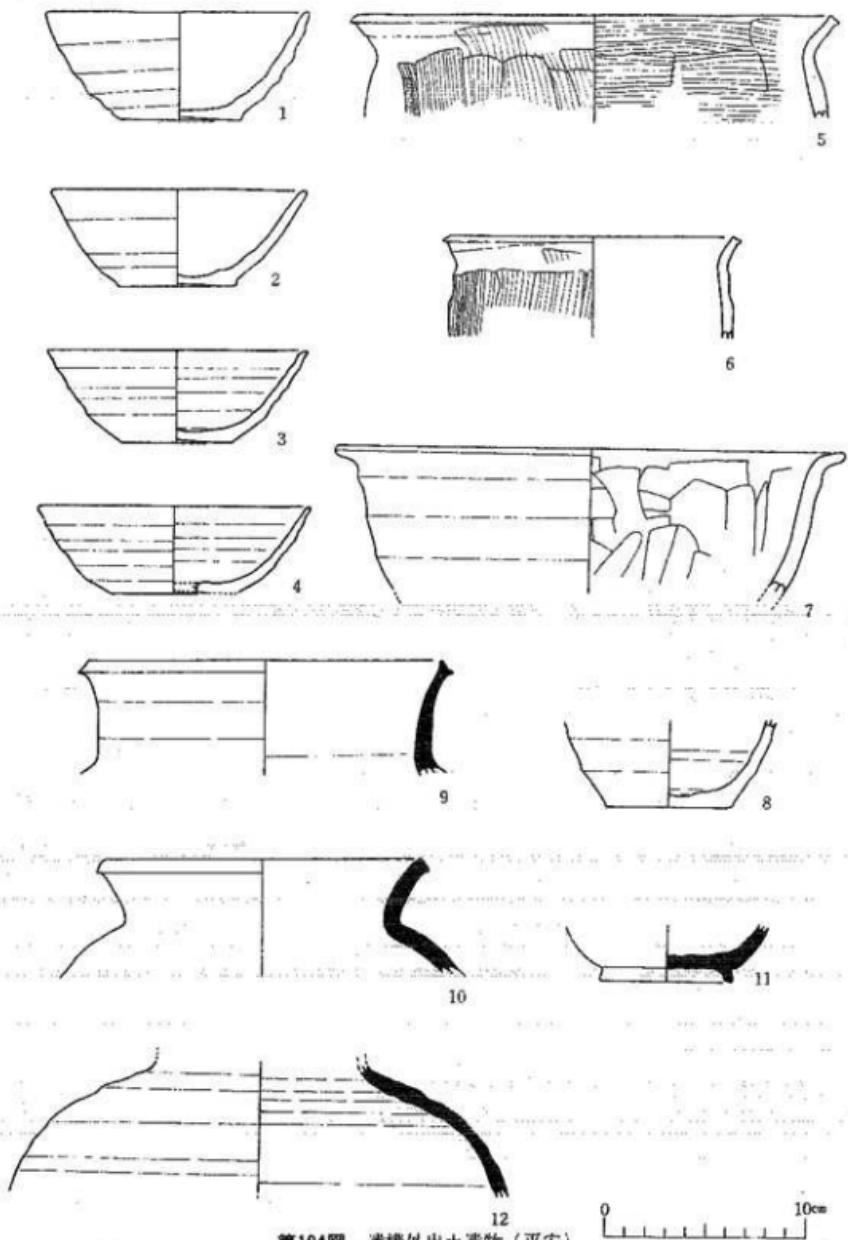
M H60・M G60両グリッド内の北東～南西方向に、全長794cmに渡って検出された。幅13cmと細長く、深さは一部落ち込んでいる箇所もあるが、全体的に3～4cmと浅い。底面はほぼ平坦でS N 004により切られている箇所がある。

(2) 遺構外出土遺物

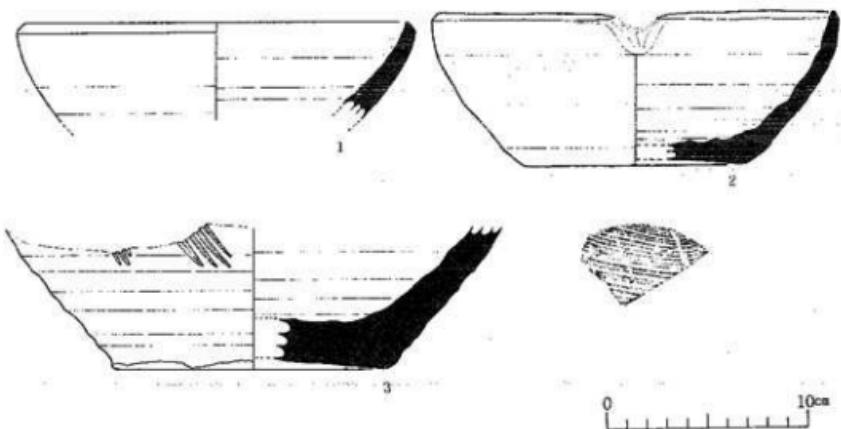
縄文土器とほとんど同一レベルで土師器杯・甕・鍋、須恵器壺・甕の破片が出土した。

4. 中世

中世の遺構と断定し得るものは発見されなかった。しかし、遺物(第195図)は珠洲系陶器の他、青磁の小破片が1点出土しており、調査地点周辺に何らかの遺構の存在を予測させる。



第194図 遺構外出土遺物（平安）



第195図 遺構外出土遺物（中世）

第9表 遺構外出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第194図 1	—	杯	13.1cm	5.6cm	6.1cm	—cm	土師器
〃 2	—	杯	12.6cm	4.9cm	5.7cm	—cm	土師器
〃 3	—	杯	12.9cm	4.7cm	5.5cm	—cm	土師器
〃 4	—	杯	13.5cm	4.4cm	6.3cm	—cm	土師器
〃 5	—	甕	23.6cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 6	—	甕	14.1cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 7	—	鍋	25.4cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 8	—	甕	—cm	—cm	6.4cm	—cm	土師器
〃 9	—	壺	(17.6)cm	—cm	—cm	—cm	須恵器
〃 10	—	壺	(15.7)cm	—cm	—cm	—cm	須恵器
〃 11	—	壺	—cm	—cm	—cm	—cm	須恵器
〃 12	—	高台杯	—cm	—cm	6.6cm	—cm	須恵器

第10表 遺構外出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第195図 1	—	鉢	(19.0)cm	—cm	—cm	—cm	中世陶器
〃 2	—	鉢	(20.2)cm	(7.6)cm	(11.1)cm	—cm	中世陶器
〃 3	—	甕	—cm	—cm	(13.5)cm	—cm	中世陶器

第5章 まとめ

第1節 検出された遺構、遺物の検討

平鹿遺跡は4カ月半に渡り、7,650 m²を発掘調査した。その結果、縄文時代、弥生時代、平安時代及び中世の遺構、遺物が検出された。その主体は縄文時代晚期にある。遺物はコンテナ450箱にものぼり、秋田県での一遺跡の発掘調査による出土量としては最大規模となり、現場での調査と並行して、連日洗浄作業を行ったのであるが、作業完了までは発掘終了後3カ月の期間を要した。この膨大な量の出土遺物の一々に目を通し、復原、実測する作業を限られた時間内に完遂することは不可能と言わざるを得ず、したがって本書にからうして掲載し得た遺物は、その中から抽出した一部分に過ぎない。また、本章も主として平鹿遺跡の主体を占める縄文時代晚期の遺構、遺物を極めて簡便に整理したものに過ぎないが、これをもってまとめに替えたと思う。

1 遺跡の規模

平鹿遺跡の発掘調査範囲は東西156m、南北172mの枠内に収まる。縄文時代の遺構、遺物はほぼ全域から検出されているが、より微視的に述べるならば、ほとんど遺構、遺物が検出されず、また、包含層のあり方から見ても、その限界が明白なのは発掘区域内南端部であって、S X 009捨て場をその遺跡の南限とことができ、これ以南には遺構、遺物の存在する可能性はほとんどない。

西側は土地改良事業に伴い水路・道路の造成地区にあたり、この部分をトレンチ状に調査したのであるが、S R 002・004ないし007土器館は、ほぼ西端にあたるものと考えてよい。

北限を端的に示すものはLCラインの土層断面観察によって検出されたS X 008遺物包含層である。この包含層は基本層位第IV層にあたり、大洞C1式土器を包含するが、東西に設定したトレンチでは東西幅9.5mを測り、北方から傾斜して流入している。LCライン上ではその南端を把握しているが、流入角度と東西幅から見て、包含層は大きく北方に延びて存在すると思われる。恐らく、包含層自体の範囲は小さく、この位置に限られたあり方を示すものであろう。しかし、より北方に遺構の存在する可能性はある。

北西部ではSK 035土壤などの、遺構上面に配石を有する土壤が群となって構築され、また道路予定地では、その北端に至るまで包含層があり、遺物を出土している。したがってこの方面では必ずしも北西限界を把握してはいない。ところが、調査区域内中央部には膨大な量の遺

第1節 検出された遺構、遺物の検討

物を出土するゾーンがある、おおよそ、この地帯を中心として土壙、土器棺、石圓炉などの遺構が配置されており、前述のように S X 009 が南端にある状況を考えるならば、北西端も調査区域より大幅に外方に延びているものとは思われない。

東側では調査区域東端に至るまで石圓炉が検出されている。調査にあたり、この東端より 40m 北の休耕田にプレハブを設営したのであるが、その付近にも明らかに遺物包含層の存在が見られる。加えて、56 ライン以北の L C ライン 東側は、調査期間の制約から第 IV 層上面まで掘り下げを中止しており、第 IV 層が薄く、地山面が露出する箇所もあるが、完全に地山面までは掘り下げておらず、第 IV 層上面で検出した石圓炉の下に遺構が隠されていた可能性はある。こうしたことから、遺跡はかなり東方に拡がるものと推察される。

東南側は調査対象外の樹園地となっているが、S X 009 は北東に延びてこの中に入り込んでいる。中央部の捨て場ゾーンもこの中に入っているが、それは一部に過ぎない。

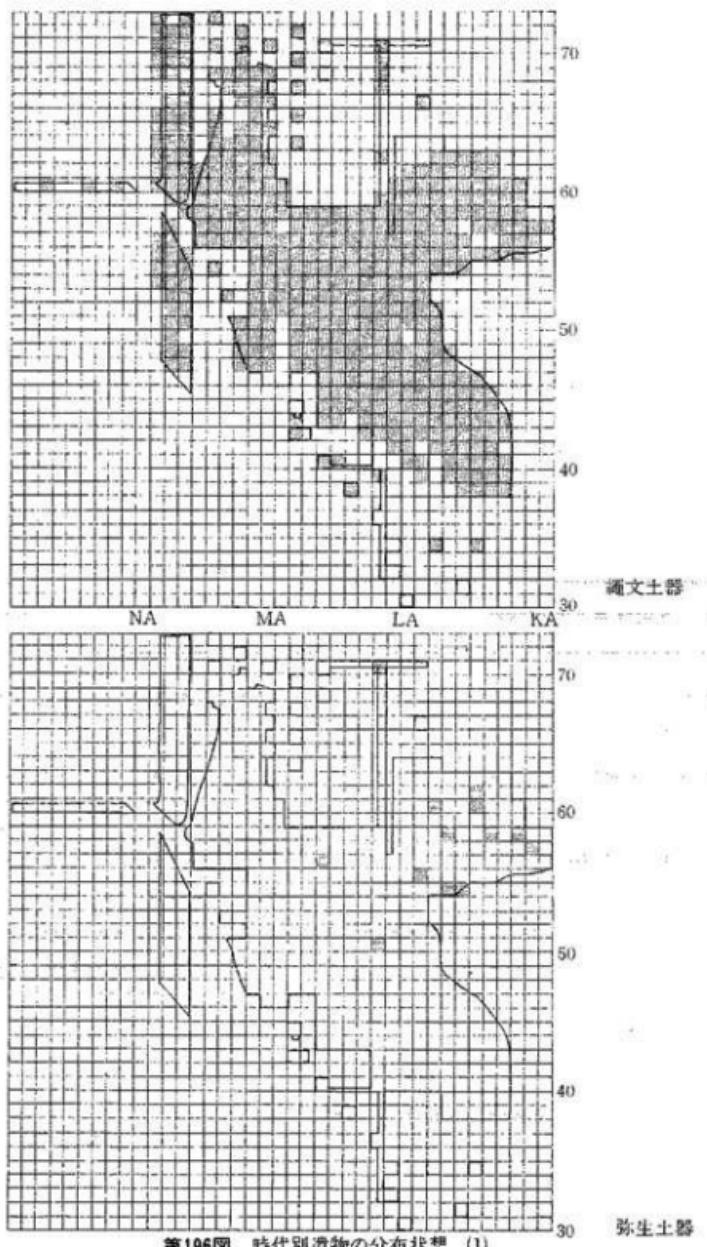
以上の遺構、遺物の分布状態から、平鹿遺跡の規模は東側の未調査区域を除外すれば、おおまかではあるが調査範囲内に表出していると考えてよい。その大きさは中央部捨て場を中心として、北東—南西方向 100m、北西—南東方向 160m の拡がりを有し、北から 35° 西方向に偏位した長軸線をもつ楕円形を呈している。

2 各種遺構とその分析

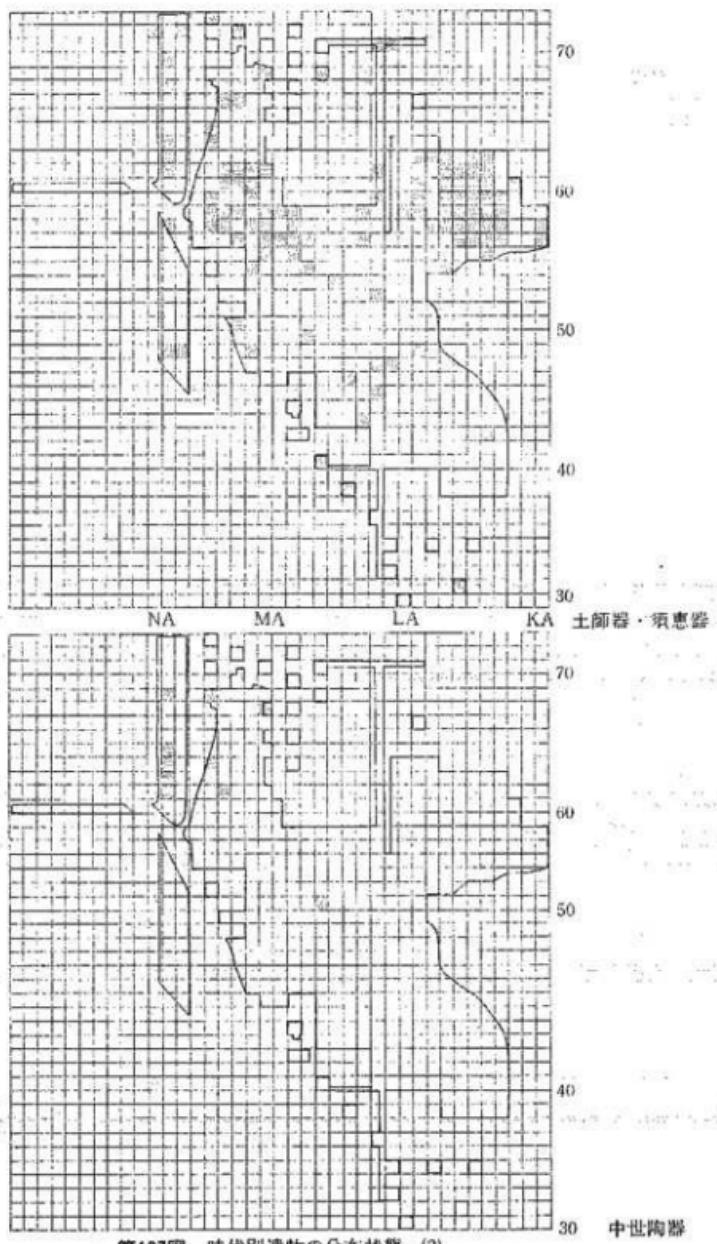
縄文時代晩期の遺跡としての平鹿遺跡は、山内清男の土器編年大綱に基づけば、大洞 B C 式を最古として、C₁・C₂・A 式の時間的範囲内で存続しており、その主体は大洞 C₁～A 式期にある。

調査により検出された遺構は以下のとおりである。時代ごとの遺物分布の変遷は第 196 図、197 図の如くである。このうち、縄文時代晩期の各種遺構について検討する。

縄文時代晩期 土壙	127	弥生時代 土壙	1
土器棺	30	平安時代 積穴住居跡	3
石圓炉・焼土遺構	36	竪穴状遺構	3
配石遺構	11	焼土遺構	7
捨て場(中央部を含む)	2	溝	1
その他の遺構	6	中世 遺物のみ	



第196図 時代別遺物の分布状態 (1)



第197図 時代別遺物の分布状態 (2)

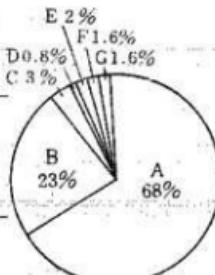
(1) 土 種

平鹿遺跡における土壌総数は 127 基を数え、広範囲な分布を示している。これらは地面を削削して構築された何らかの遺構と判断されるもののうち、明らかに竪穴住居跡、竪穴状遺構、溝などと区別されるものを指しており、慣習的に横の字を当ててはいるが、字義の示す墓穴を指して用いているわけではない。

確かに、遺構内からは人骨の検出は皆無であり、遺体に塗付されたと考えられる赤色顔料の存在もSK038のみである。しかし、平鹿遺跡の土壤のあり方は、同じく縄文晩期の墓跡として報告された諸例に従って見るに、少なからずの類似性を看取することができ、その大部分を土

第11表 土壌の型式分類

模式図	型式	土 売 番 号	土壤数	頻度率%
	A	2, 3, 4, 11, 12, 20, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 46, 47, 48, 51, 53, 57, 61, 63, 67, 68, 69, 70, 72, 73, 76, 79, 80, 83, 88, 90, 91, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 104, 105, 106, 107, 109, 111, 112, 113, 115, 118, 119, 122, 135, 125, 127, 128, 129, 133, 135, 136, 137, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 146, 147, 148, 149	86	68.0
	B	1, 29, 30, 45, 50, 58, 59, 62, 65, 71, 74, 75, 81, 84, 85, 87, 102, 110, 111, 120, 121, 123, 124, 131, 132, 140, 150	29	23.0
	C	⑩, 76, ⑫, 111	4	3.0
	D	86	1	0.8
	E	10, 130, 149	3	2.0
不整形	F	13, 19	2	1.6
不明	G	5, 55	2	1.6



第12表 配石の型式分類

模式図	形式	上 墓 番 号	土壌数	頻度(%)
○	a	72, 78, 92, 131	4	13
◎	b	31, 32, 33, 35, 37, 38, 41, 43, 44, 48, 67, 116, 150	13	40
●	c	34, 85	2	6
■	d	2, 26, 27, 29, 74	5	16
▲	e	28, 30, 36, 39, 40 42, 151, 152	8	25

Type	Frequency (%)
a	13%
b	13%
c	6%
d	16%
e	40%

墳墓として認識することは、何ら根拠のない妄想ではないと考える。

土壌の型式分類 土壌は平面形態及び断面形態の組み合せから、便宜的に6類に分類され、これに形態把握の不可能なものが加わる（第11表）。

A型式：平面が格円形で、垂直ないし緩やかに外傾する掘り込みを有するもの。

B型式：平面が円形ないしそれに近い略円形を呈し、A類同様の掘り込みを有するもの。

C型式：平面は円形であるが、平面直径と同等か、それ以上に深い掘り込みを有するもの。

D型式：開口部は円形に近いか、下方が末広がりとなるラスコ形を呈するもの。

E型式：平面が隅丸方形を呈し、A・B類と同様の掘り込みを有するもの。

F型式：A～E類とは異なり、平面が不整形で、底面に凹凸の多いもの。

G型式：形態不明のもの。

以上のうち、A類が最も多く、これにB類が次ぐ。両者合わせた頻度は9割を占める。C類のうち、SK040・076の2基は、口径に比して深さがかなり深い井戸状の形態となっている。これに類似する造構はSQ002配石造構下の2個の空穴で、上面に配石を伴う。A・B類に比べ、土壌墓の可能性は低い。

配石の型式分類 土壌には上面に配石を伴うものがあり、中には底面にまで及ぶものもある。

上面の配石のあり方に限ってその分布形態を見ると、おおよそ5類に分類される。

a型式：土壇上面中央部付近に1、2個配石のあるもの。

b型式：配石がどちらか一方、あるいは両端に片寄るもの。全面に配石のあるものでも特に大きな石を片側に置くもの。

c型式：土壇の輪郭からほど外れた位置にあるもの。

d型式：全面にまばらに配石されるもの。

e型式：全面に多くの石を用いているもの。

このうち、最も多いのはb・e類であり、両者で配石を伴う土壇の半数以上を越えている。

土壇型式と配石型式の相関関係は以下のとおりである。(第13表)。

第13表 土壇と配石の関連

土壇型式	配石型式	土 壇 番 号	土壇数	頻度率(%)
A	a	72、78	2	6
	b	31、32、33、35、37、38、41、43、44、48、50、67	12	34
	d	2、27、29	3	9
	e	28、30、36、39、42	5	15
B	a	134	1	3
	b	81、116	2	6
	c	34、85	2	6
	d	26、74	2	6
	e	151、152	2	6
C	a	92	1	3
	e	40	1	3

長軸・短軸の相間 A型式の橿円形土壇の長軸全長はSK029の60cmを最短とし、SK020の301cmを最長とするが、75~160cmの間に集中する傾向が窺える。短軸はSK073の26cmを最短とし、SK125の176cmを最長とするが、45~120cmの間への集中が見られる(第198図)。

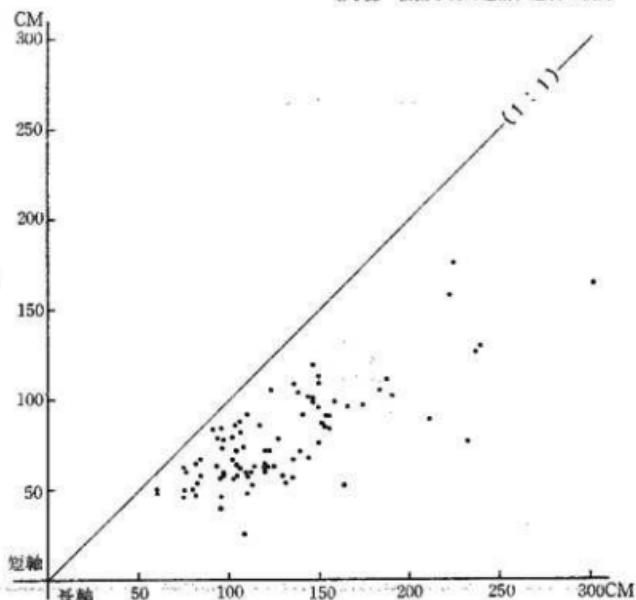
B型式の円形土壇は完全な円形ではなく、やはり長径・短径があるから敢て相関図に示した(第199図)。最小径はSK074の36cmであり、SK087のみ孤立的の存在となっているが、他はほぼ60~160cmの間に渡っており、特に集中は看取されない。強いて言うならば60~100cmの間にわずかに集中度が高いと言えようか。

長軸方位：土壇のうち長軸方位が測定可能なものの、すなわち平面形が橿円形を呈するA型式、及び隅九方形を呈するE型式の長軸方位を測定した(第200図)が、何ら片寄りは見られない。

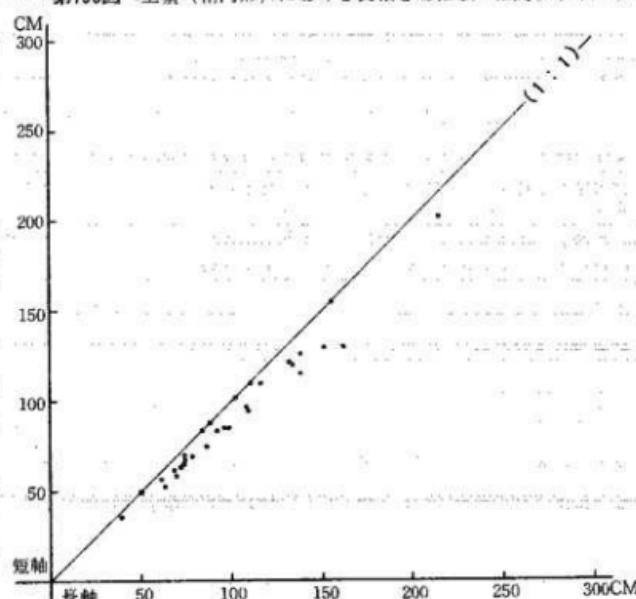
遺体の埋葬頭位地
形決定説に従うなら
ば、傾斜面の全くな
い平坦地にある平底
遺跡の場合、長軸方
位にまとまりがない
のは当然と言えよう。

土壤の長軸方位に
まとまりが見られた
としても、それだけ
では遺体の埋葬頭位
は決定できない。人
骨の遺存しない土壤
の場合、埋葬頭位の
決め手とすべきもの
はペニガラや装飾品
などの位置であろう。
が、これらも検出さ
れない本遺跡におい
て、埋葬頭位を明確
に打ち出すことには
困難が伴う。一つの
可能性としては遺構
上面の配石の片寄り
が考えられるが、そ
の位置の下に人骨頭
部が検出されない限
りは根拠を欠く。

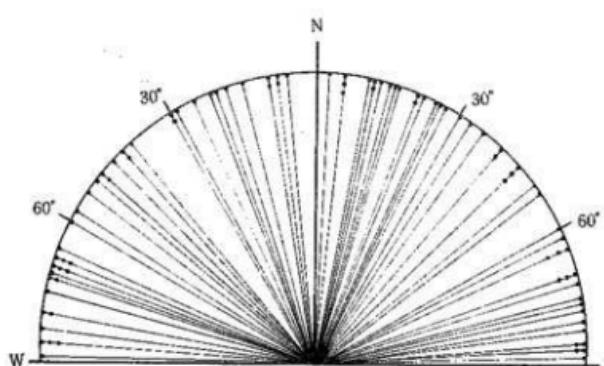
長軸方位図は平底
遺跡の土壤全体を通
して集成した図であ
って、林謙作の言うよ



第198図 土壌(三角形)における長軸と短軸との相関グラフ



第199図 土壌(円形)における長軸と短軸との相関グラフ



第200図 土壙長軸方位

うに墓域中に「埋葬区」^(付)が存在するならば、その「埋葬区」ことの土壙長軸方位の検討が必要であろう。

赤色顔料 土壙墓には埋葬人骨の頭部にペニカラ^(付)が塗布された例や、底面の片寄った位置にペニカラ^(付)が散布する例があるが、平鹿遺跡では土器棺内からは検出されたが、

土壙内からは検出されなかつた。

副葬品 土壙内からは完形土器、土器片、石鎌、打製石斧、磨製石斧、装飾品などが出土した。しかし、土壙を埋め戻す際に付近にあったものが混入する可能性は大きく、全てを副葬品とするわけにはいかない。副葬品の可能性のある遺物を出土した造構はSK051・071・076・087・110・117・149の7基である。SK076は完形の半精製深鉢が造構上部に置かれていたが、この土壙は前述の様に形態的特徴と配石との関連から、土壙墓と考えるよりはむしろ祭祀遺構と考えた方が妥当ではなかろうか。直立する石刀を出土したSK051もその可能性がある。すると、大形精製鉢と磨製石斧を出土したSK051、サメ歯垂飾品を出土したSK087、完形無文壺を出土したSK116、土製小玉14個と石棒状石製品を出土したSK117の5基が、副葬品を有する土壙ということになる。就中、確実なものは、SK117のあり方であろう。

時期 土壙相互に重複はあるが、確実に時期の知られる遺構との重複は少ない。また、土壙に付随することが確実な副葬品を有する土壙は僅少であるし、土壙埋土中出土の土器片も、確実な時期決定材料にはならない。したがって個々の土壙の所属時期を決するには困難が多いと言わざるを得ない。

(2) 土器棺墓

土器棺墓とした造構は30基である。しかし土器の中からは土壙と同様に人骨遺体はその片鱗すら検出されてはいない。したがって、これだけで土器が遺体を埋納した棺であるとの断定は甚だ根拠を欠くと言わざるを得ないし、被葬者層も限定され得ない。

縄文時代の遺跡で埋甕、土器埋設造構などと呼称される造構のうち、住居内の入口下から発見される埋甕を、出産に関する呪術用容器とする見解があるが、平鹿遺跡例は全て屋外から単独に発見される造構であることから、この説は考えなくともよいし、配石下からの出土でもない

祭祀施設と考えることはできない。

実際に土器の中に入骨が収納された例は、後述の集成によれば44例あげられるが、長谷部言人報文では岩手・宮城両県の縄文晩期貝塚検出例のうち、十中八、九は死産児であるといふ。加えて、晩期中葉の宮城県前浜貝塚では、成人骨埋葬の土壤墓に極めて近接する位置から胎児骨を収納した土器棺が検出された例がある。^(註1) 幼児や死産児を土器に収納するという埋葬方法は、小金井良精の言うように単に成人埋納用の大形土器を作ることができなかったからではなく、^(註2) 土器を母胎と見たて、靈魂不滅の思想の下に、再生への願望をこめて行われたとする想定は注意を惹く。^(註3) 遺体頭部にベニカラを塗布する行為は柏子所に好例を見るし、人骨の遺存しない土壤墓内にもベニカラ散布の認められる場合があり、^(註4) 平鹿遺跡の土器内の赤色顔料の存在に共通する事象であると言える。

以上のことから考えて、平鹿遺跡の単独埋設の深鉢形土器は、幼児、死産児用の棺である可能性は十分に高いと考える。縄文後期十腰内1式期の「改葬櫛棺墓」や、弥生時代の「再葬墓」の様に、成人骨を二次埋葬したものとの想定は残るが、前者は地域的、時間的に極めて限定されること、後者の葬法が展開するのは関東地方、東北地方南部の弥生初頭に限られること、加えて、縄文時代土器棺に成人骨埋納例は極めて少ないことなどを考え合わせると、平鹿遺跡の場合も、幼児・死産児用の土器棺とする考えを積極的に否定する根拠は極めて乏しくなる。

分布 土器棺はS R 012を北限とし、S R 010をその南限とする。西端は水路造成予定地のN D 60グリッド内に検出されたS R 002であり、大局的には土壤と似通った分布を示す。ところが、発掘区域内中央部のS Q 001・007付近には存在せず、中央部ほど分布が希薄となる傾向が窺える。土器棺相互の重複、土壤との重複ではなく、北端や南端の土壤密集地では土壤群の内部ではなく、その外側に検出されている。MB 64内のS R 012、南端のS R 030-033のあたりが、それを端的に示している。分布密度は土壤の分布が希薄となるS I 001・002竪穴住居跡付近が最も濃い。以上から、土器棺は主として各種遺構分布域の中でもその外方の西側及び南側にあり、大筋としては土壤と近似する分布形態をなすが、土器棺墓構築の場所選定にあたって、土壤とは意識的に区別されていたことが窺える。

型式分類 土器棺は原則として大型粗製深鉢を使用しており、精製土器は用いられず、台付浅鉢を用いたS R 020は例外的存在である。また、器面上に煤状物質の付着が見られ、日常使用した土器の転用である。蓋の有無から2大別されるが、これに棺身土器形態を組み合わせて、5型式に分類される。

A型式：深鉢形土器を棺身とし、蓋を有しないもので、25例あり全体の80%以上を占める。これは土器下半部を用いたものに細分可能である。

B型式：台付浅鉢形土器を棺身とし、蓋を有しないもので、この器形を棺身としたものは本

第14表 土器棺の型式分類とその頻度率

型式	A	B	C	D	E
土 器 棺	1・2・5・6・7 8・9・10・12・15 18・19・21・22・23 24・25・26・27・28 29・30・32・33・34	20	17 31	16	4
蓋 数	無 25	1	2	1	1
有					

○印は赤色顔料の検出されたもの

頻度

A 84%	B 3%	C 7%	D 3%	E 3%
-------	------	------	------	------

例のみである。

C型式：深鉢形土器を棺身とし、これに上方から倒立位の土器を棺身内部に入れて蓋としたもの。

D型式：深鉢形土器を棺身とし、

その内部に別個体の深

鉢形土器底部を納入し

て蓋としたもの。

E型式：深鉢形土器を棺身とし、

上部を扁平な自然石を

使用した蓋で覆うもの。

土器棺の法量

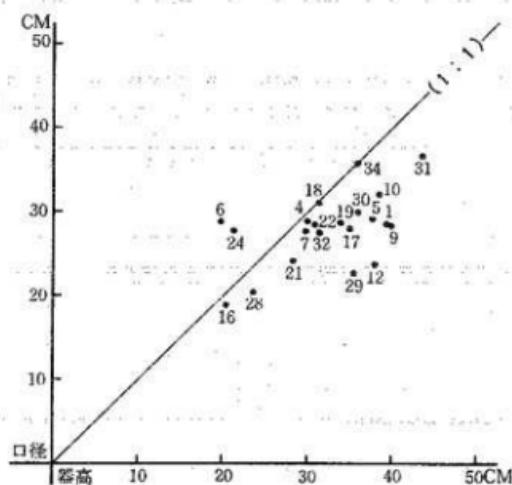
土器棺30基のうち、復原し、法量を知り得るものは21基である。口

径はSR 016の19.0cmを最小とし

てSR 031の36.5cmを最大値とす

る。器高も同じくSR 016の20.5cmが最小値、SR 031の43.7cmが

最大値であり、土器の口径、器高



第201図 土器棺における口径と器高との相関グラフ

は正比例する傾向が窺える。S R 006と024は胴部下半部のみを用いているので器高に比して口径が小さいが、他はいずれも口径、器高が同一か、口径よりも器高が上回る土器を使用している。口径は27~33cm、器高は30~38cmの間に集中度が高い（第201図）。

赤色顔料・副葬品 5型式に分類された土器棺のうち、A型式に2例、B型式に1例、棺内底部付近に赤色顔料の認められるものがあった。棺内から確実に副葬品と考えられる遺物の出土は見られなかった。しかし、S R 007土器棺内には完形の小形精製台付深鉢が出土しており、これを副葬品と見るべきかも知れない。

時期 土器は全て型式表微の少ない粗製土器を使用しており、土器型式の時期決定には少なからず困難を伴う。だが、口縁部装飾帯を有するものは精製土器との対比が不可能ではなく、S R 018は大洞B C~C₁式、S R 019は大洞C₂式、S R 007は大洞C₁式に対比できよう。

(3) 石圓炉・焼土遺構

分布 石圓炉は31基、焼土遺構は5基検出された。遺構配置図を見ると一見してその分布のあり方が、土壤、土器棺の分布とは異なることに気づく。すなわち、土壤は平鹿遺跡の南東~北西両端に至るまで広く分布しながらも大きく4群に分かれ、土器棺は土壤群からは少し外方に離れ、主として遺跡の西~南側の外縁を形作っているのに対し、石圓炉・焼土遺構は外縁部に少なく、むしろ中央部に点々とではあるが広く分布するというあり方を示している。しかもそれは東側にあるS N 026~030の5基と、北西端で孤立的存続にあるS N 048とを除外すれば、中央部にある龐大な量の遺物や自然石を出土するゾーンとほぼ一致する現象に気付くのであり、そこに捨て場の形成と石圓炉・焼土遺構の構築、使円行為との間に有機的関連を推考させるのである。

型式分類 石圓炉・焼土遺構は、形態的には竪穴住居跡中に付設される炉と何ら変わりがない。石圓炉は一般に火の使用による焼土堆積、焼面の形成、石の赤色化が少なく、火を用いたとしても短時間の使用であったと思う。平面形及び遺物のあり方から5型式に分類される。

A型式：平面形が円形ないし梢円形を呈し、石圓のみからなるもので、石圓は二重になるものを含む。25基を数える。

B型式：平面形は円形ないし梢円形であるが、中央部に土器を埋設するもの。

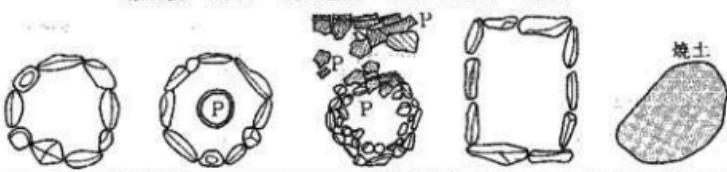
C型式：石圓炉に供獻土器を伴なうもの。

D型式：石圓が方形を呈するもの。

E型式：石圓を用いず、焼土のみからなるもの。

平鹿遺跡における31基の石圓炉は、円形ないし梢円形となるものが大部分で、方形は一例だけである。大きさを見ると、最小径はS N 048の45cmで、S N 023の長径160cmが最大径である。⁽¹¹⁹⁾ 銀文時代晩期の屋外石圓炉が検出された秋田県鶴巣町藤株、北海道七飯町聖ので、祭祀用具、

第15表 石圓炉・焼土遺構の型式分類とその頻度率



型式	A	B	C	D	E
石圓炉	5・14・16・17・18	8	25	24	7
19・20・21・22・23		12			3
燒土遺構	26・27・28・29・30	34			31
33・36・37・39・40		48			38
41・42・44・46・47					43
数	25	4	1	1	5



CM
150

- 平底遺跡
- 藤株遺跡
- △ 岐下聖山遺跡
- × 有工門次郎窯遺跡
- 九年橋遺跡

100

50

焼軸

長軸

50

100

150CM

第202図 5 遺跡における石圓炉の規模

山、青森県南郷村右エ門次郎塙、岩手県北上市九年橋の4遺跡の例では、個体数が少ないせいもありうが、4遺跡ともに石門炉の大きさにまとまりが見られる。だが、平鹿例ではほとんどまとまりがなく、個体相互の大きさのばらつきが大きいと言わねばならない。

石門炉のうち特異なあり方を示すものは、SN 024と025である。SN 024は既述の様に、共通する中軸線を有するSQ 006配石と近距離、同一面に構築されており、配石と有機的関連性を持って構築、使用されたと考えることができる。また、SQ 025は丁寧に作られた二重の石囲と同一面、あるいはその上方に、3個体の完形またはそれに近い土器を共伴しており、SN 024と共に火を使用した祭祀行為の営みを想定させる。焼土遺構もまた、他から運搬された焼土ではなく、その位置で火を使用した結果であるから、石囲炉同様の機能を有する遺構と考えてよきようである。前述の聖山、右エ門次郎塙、九年橋の諸例では、石囲炉が住居内に付随する炉ではなく屋外の炉であるとの立場から、祭祀遺構とする性格づけを行っている。平鹿遺跡では石囲炉・焼土遺構の周囲に確実な柱穴、跡が検出されず、前記3遺跡同様に屋外での使用を考えた。

石囲炉の石は遺存状態が悪く、かなり散逸した状況にあるものが多い。これは遺存状態の良好なSN 024・025の存在などを考慮すると、意図的に破壊したと考えるよりは、そのままに近い状態で屋外に放置されたものが多いことによるものではなかろうか。

(4) 配石

配石は11基検出された。分布を見ると、調査区域内中央部に集中する傾向が顕著としておりSQ 014・015を例外とするならば、その分布は中央部の捨て場ゾーン内に完全に収納されることになる。殊にSQ 001は平鹿遺跡の北東一南北100m、北西一南北160mの範囲のはば中心に位置している。

形態、規模に多様性があり、簡単に分類すべきではないが、石の配置のあり方には、

A：ある範囲内に密接して石が敷き詰められるもの……SQ 006・014・015・016

B：石がまばらに分散するもの……………SQ 002・003

C：規模が小さく、石囲炉に類似するもの……………SQ 008・009・010

D：B・Cの集合した形で、規模の大きなもの……………SQ 001～007

以上A～Dの4形態のあることが看取される。

配石にはSQ 006の様に方形石門炉と結びついて機能したと考えられるものや、配石下に深い円筒状土壙があり、これが土壙の中でも特異なあり方を示すSK 076の土壙形態と類似するものなど、他の遺構と不可分の関係にあるものがある。また、SQ 014・015はいずれも同一の形態で、しかも遺跡の北西端と南端の土壙群にそれぞれが付隨する如くに対峙しており、その性格には共通のものがあろう。

(5) 捨て場

捨て場と考えた遺構はS X 009であるが、この他に調査区域内中央部には極めて膨大な量の遺物を出土するゾーンがあり、これをも捨て場と考えることができる。

中央部捨て場はおおよそ北東—南西50m、北西—南東80mの楕円形を呈し、基本層位第III層、第IV層から成り、復原し得た完形土器の大部分はこの内部からの出土である。第IV層下部からは、わずかではあるが大洞B C式に含まれると思われる土器や該時期の追光器土偶などがあり、上部からIII層にかけては大洞C₁・C₂・A各型式の土器が出土し、本遺跡形成の当初から一貫して捨て場として利用され続けたことが分かる。より微細に土器型式と出土層位及び出土地点の関連を追求するならば、その形成過程の復原も難しくはないであろう。

土器の出土状態を見ると、復原のできない小破片が圧倒的に多く、これらに混じってほとんど無傷の完形土器やそれに近い状態の土器が1個ずつ点々と発見され、複数まとまっての出土は至って少ない。遺物は土器ばかりではなく、完形で使用に堪え得ると思われる石器もまた多い。

他の遺構との関連を見ると、土壙、土器棺墓、石団がこの範囲の中に含まれ、これら遺構の周囲やその上方に、多くの遺物が重層的に堆積しており、各種遺構群の構築と同時に捨て場の形成が進行したことを物語っている。

こうした中にS X 006の大洞A式土器8個の出土があり、捨て場のゾーンからは若干南に位置するが、大洞C₂式水器13個の同様の出土状態、さらにMB47・48グリッドの3個の土器出土状態（第56回版）などの存在は、ある時点にこうした複数の完形土器が一括廃棄された状態を如実に示すものである。

遺構としては敷南端に検出されたS X 009は、地山上に自然に形成された浅い落ち込みの中に、これも多量の遺物を充満したものであるが、中央部捨て場とは幾つかの相違点が指摘される。まず形成時期についてであるが、大洞A式期だけに限られ、より古い時期の土器を含んでおらず、むしろ大洞A式の中でもC₂式の面影の少ない、よりA'式に近い土器が多く、本遺構の形成はかなり限られた時間的範囲内に行われたことが言える。次に位置であるが、遺跡内最南端にあり、中央部捨て場との間にはより古い時期の遺物包含層が得く存在すだけで連続性を持たず、明らかに中央部捨て場とは区別されて隔絶性を帯びた位置にあると言えよう。

さらに根本的相違点は、勾玉・小玉・耳輪など664個の装飾品類の存在である。これは完形品のみの点数であり、破損品も含めるならば、これをはるかに凌駕する数値となり、こうした極めて多数の装飾品類がSK 117の様な個人墓への副葬品としてではなく、土器、石器類などと同様にこの場所に廃棄されているのである。

この様に、中央部捨て場とS X 009捨て場との間には、その形成に際し別種の要因の介在を

強く推測せしめるものがある。

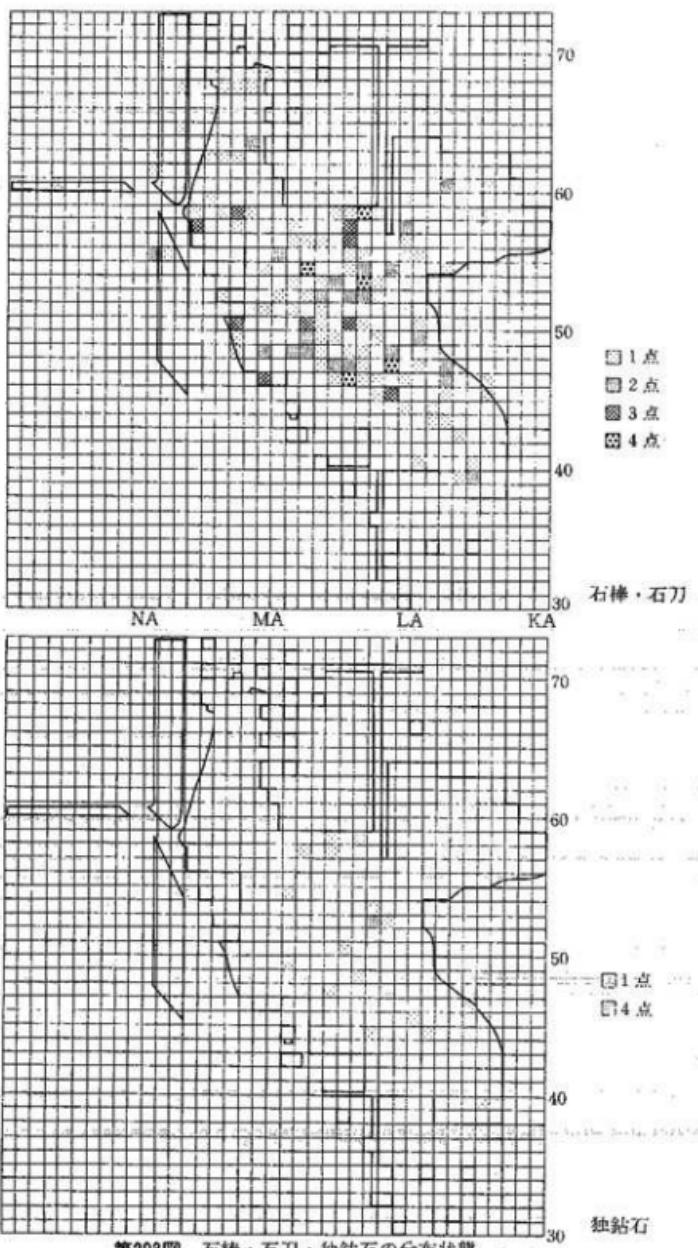
さて、鬼ヶ岡文化にせよ、またその時空的範囲以外の遺跡にせよ、完形土器を含む多量の遺物の出土状況に対し、その形成要因の解明には幾つかの異なる見解が生まれている。例えば、住居内の出土状況と、遺跡内他地点でのあり方を分類した小林達雄は、これを土器作りのシーザリティの問題として把え、縄文人の行動パターンの一つに位置付け、季節性の上に展開させることによって縄文社会を叙述しようとしている。^{〔註25〕}また、鬼ヶ岡遺跡その他の縄文晚期の遺跡を調査した清水潤三は、祭祀行為の結果と考えている。^{〔註26〕}聖山遺跡を調査した岸沢長介らは、こうした状況に対して生活の根拠地（集落）から無用になったものを搬入し、集中的に廃棄したゴミ捨て場と結論し、その廃棄行為に伴なう祭祀行為の存在を想定する。^{〔註27〕}九年橋遺跡の調査を担当した藤村東男は、焼土の堆積と遺物廃棄が同時進行したとの観察から、火の使用と結びついた廃棄行為を考えている。^{〔註28〕}

こうして、廃棄行為そのものの動機の解釈は、土器製作という生産的側面から解釈を加えるものと、祭祀という思想的、精神的側面から解釈を加える立場と二様に分かれている。また、廃棄行為の結果としての廃棄場所（捨て場）の形成や遺物出土状態の認識を、社会規範一文化の問題として把え、廃棄行為とその形態や内容から縄文時代の歴史像にせまろうとする主張もある。

これら捨て場の形成要因に関する諸説を踏まえて平鹿遺跡における捨て場のあり方を見ると、平鹿遺跡の場合は土塙墓、土器棺墓群という人間の墓地と同一の場所に遺物の捨て場が形成されているという点に着目しなければなるまい。すなわち、平鹿遺跡は、個々の人間にせよ、あるいは人が日常生活において製作、使用したところの様々な道具類にせよ、すでに生命を失ったものや不要にならうものの墓地であると見るべきで、その中に構築された石畳炉と配石が、それらに対する祭祀行為の所産であるならば、人間の埋葬儀礼も諸遺物の廃棄行為も同一の観念の下に行われ、一脈通じるものがあったと考える鎌本克彦の論は正論を得たものであると言えよう。

3 石器その他の分布

石器はごく一部を取り上げて実測図を示したに過ぎないが、このうち非生産用具である石棒・石刀、独鉛石、石錐状石冠に加え、装飾品類、土偶、土版、岩版を取り上げ、各クリッドごとの出土数を図示した（第203図～第205図）。装飾品類は完形品を1点とし、他は破片であっても1点と数えた。石棒・石刀、独鉛石、土偶には特定地點への集中は見られず、中央部捨て場を中心として広く拡散する状況を呈しているが、装飾品類はやはりS X 009捨て場に集中する。石錐状石冠と、土状・岩版はほぼ共通した分布状態にあり、遺構との関連を見るならば、やや乱暴ではあるが配石の分布と一致する傾向が読み取れる。



第203図 石棒・石刀・独钻石の分布状態

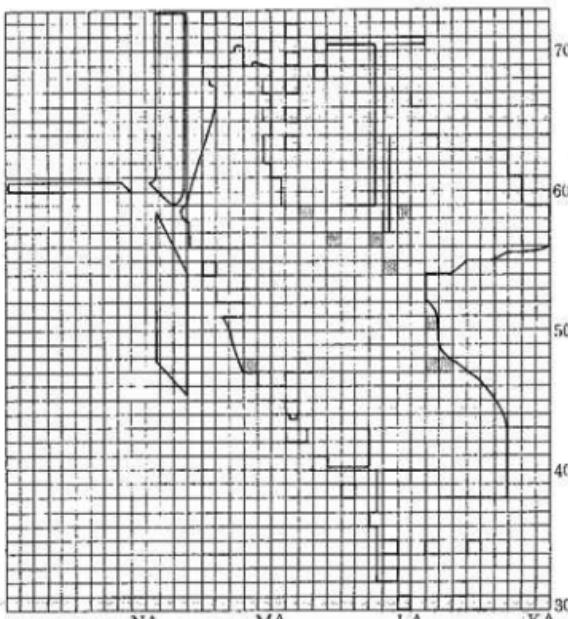
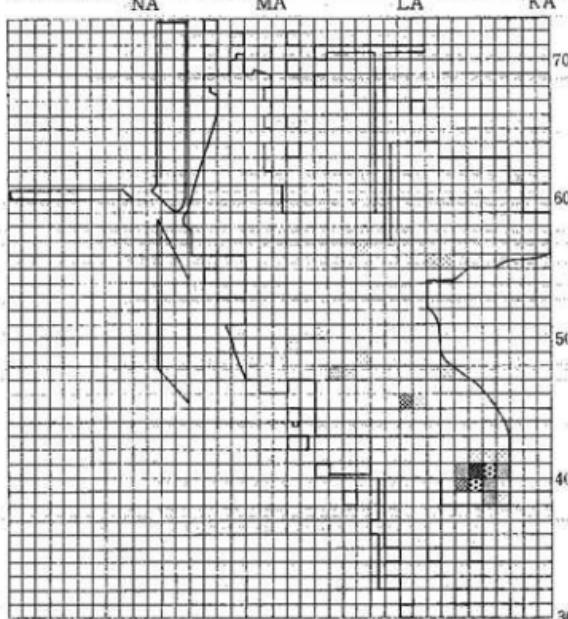


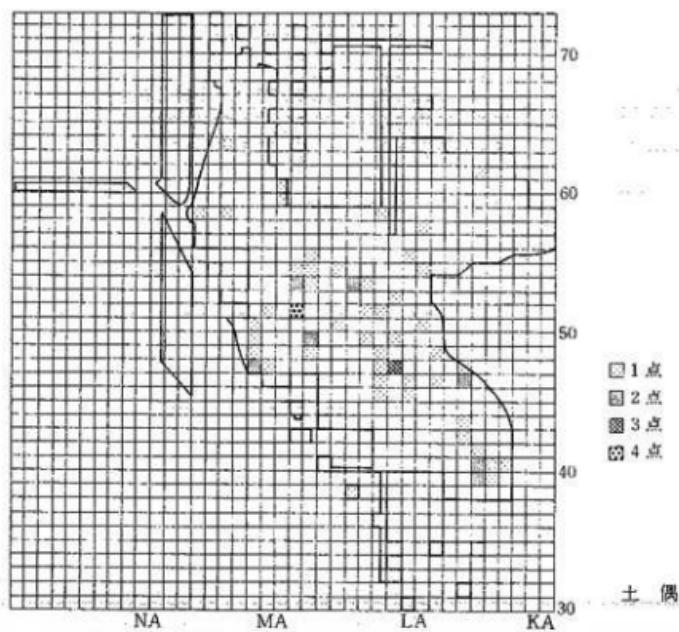
図1点

石錐状石冠

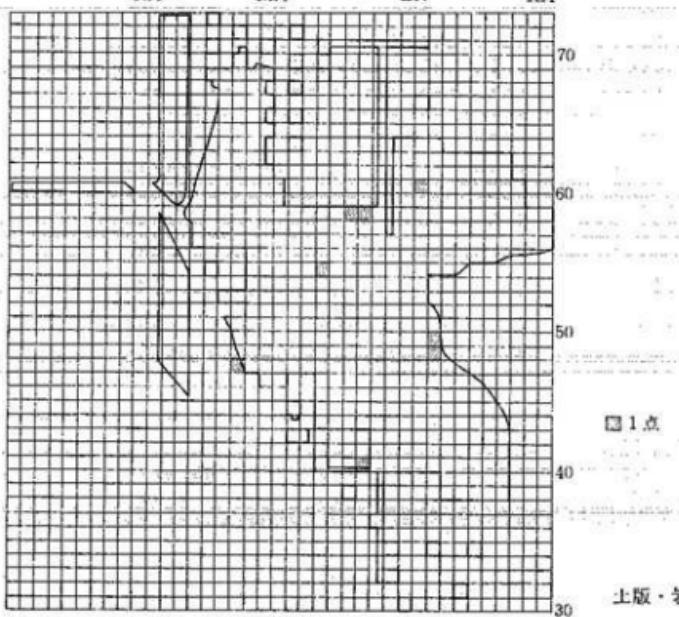


- 1~9点
- 10~49点
- 50~99点
- 100~199点
- 200点以上

第204図 石錐状石冠・装飾品の分布状態



土偶



土偶・岩版

第205図 土偶・土版・岩版の分布状態

特徴ある石器の一つに鉢状の打製石斧がある。量的には磨製石斧よりも圧倒的に多く、その形態は上彫り具としての機能を想起させる。これをもって直ちに農耕用具とすることはできないが、亀ヶ岡遺跡その他の晩期遺跡における栽培植物花粉の検出は、この石器の機能を考える上で、大いに参考とすべきと考える。

4 弥生土器について

弥生土器のうち、SK 077 出土土器は一括出土である点で好資料と言える。第 174 図 1 の浅鉢は砂沢式、第 175 図 24 の蓋は宮城県青木畠出土土器に類似があり、その他の変形工字文のある土器も青木畠出土土器に近い様相を示すという。青木畠(式)土器は北上川流域の大洞 A'式土器直後に位置付けられ、山王田畠式の前段階、大泉式の初期として報告されている。山王 III 層式には磨消縦文のある変形工字文の施された土器が伴うが、青木畠出土土器の中には極めて少ない。平鹿遺跡 SK 077 出土土器は小破片が多く、量的にも少ないが、磨消縦文の施された土器は 1 点も含まれない。秋田県内出土例と比較すると、形態的にも文様からも、新間遺跡 A 類土器に最も近い土器と考えられ、この後に手取消水遺跡 4~6 類と上の台遺跡 I 群 A 類が編年されよう。

5 平安時代遺構、遺物の年代

平鹿遺跡において検出された平安時代遺構中の覆土には、上方に火山灰層の堆積が見られる。分析結果によれば、宮城県一帯に広く分布する灰白色火山灰と同一であるという。この灰白色火山灰の降下年代は 10 世紀前半ごろの年代が与えられており、平鹿遺跡の平安時代遺構、遺物はこれよりも遅及する年代が考えられる。

第2節 結語

以上で、平鹿遺跡で検出された各種の遺構と膨大な量の出土遺物に対し、極めて限定された時間内でなされた皮相的観察結果の集約を終えることとする。

すでに秋田県内においては、矢石館、柏子所、玉内、湯出野、梨ノ木塚、上新城中学校、藤林という縄文時代晩期の墓跡が調査されており、それらの成果を踏まえた上で、縄文社会の解明を今後の課題としたい。

土壙墓・土器棺墓が共存する墓制は弥生時代にも連続として継続している。土器棺墓は樹形式期以前の再葬墓研究の際に隠れ、等間に付されてきた傾向があるが、福島県天神原遺跡の研究報告にはその研究成果が余すなく披瀝されている。天神原遺跡は桜井式と伊勢林前式期との間に挿入される遺跡で、成人用土坑墓・幼児用土器棺墓の共存する様態は、湯出野・梨ノ木塚・平鹿の諸例と極めて良く近似する姿相を呈している。

第5章　まとめ

関東・東北南部の弥生初頭の再葬墓は縄文時代からの伝統の下に盛行した成人墓であるか、同時期の幼児墓は不明である。だが天神原式期の墓制が縄文時代の伝統的墓制であることが確実ならば、再葬墓盛行期にも単独の土器棺墓が存在した可能性はないとは言えない。

平鹿遺跡が縄文時代晩期に盛行していた頃、近畿付近までは既に弥生文化が展開していたとする見解^(註8)が多い。九州の一帯では、大陸の照葉樹林帯の中に源流を発する稻作農耕が照葉樹林文化の道を通じて伝来し、かなりの規模に組織化された形で営まれていることが知られている。^(註9) 平鹿遺跡の縄文人も、そうした時代の動きを鋭敏に感じとり、新たなる編成へ向けて解体したのかも知れない。

註1 山内清男「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』 第1巻第3号 1930年

註2 渡辺 誠「亀ヶ岡文化における埋葬形態をめぐる二三の問題」『北奥古代文化』 第2号 1969年

註3 林 謙作「縄文期の葬制 第II部 遺体の配列、とくに頭位方向」『考古学雑誌』 第63巻第3号 1977年

註4 大和久美平「柏子所貝塚第2次・第3次発掘調査報告書」秋田県教育委員会・能代市教育委員会 1966年

註5 岩山憲司「岩出野遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 1978年

註6 a 木下 忠「所口に船塚を埋める呪術」『考古学ジャーナル』 No.42 1970年

b 木下 忠「埋糞——古代の出産習俗」『考古学速報』 18 1981年

註7 山本暉久「縄文時代中期末、後期初頭期の屋外埋糞について(一)」『信濃』 第29巻第11号 1977年

註8 渡辺 誠「縄文時代の葬棺」『考古学ジャーナル』 No.208 1982年

註9 長谷部吉人「石器時代の死産児塚」『人類学雑誌』 第42巻第8号 1927年

註10 小井川和夫「前浜貝塚」本吉町教育委員会 1979年

註11 小金井良精「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』 第38巻第1号 1921年

註12 平野仁吉「日本の神々」講談社現代新書 664 1982年

註13 註4に同じ。

註14 註5に同じ。

註15 江坂輝弥「縄文土器文化後期における改葬櫛棺墓の研究」『北奥古代文化』 第6号 1968年

註16 杉原莊介・大槻初重「千葉縣天神前における弥生時代中期の墓址群」明治大学文学部考古学研究報告 第4冊 1974年

註17 須藤 隆「東日本における弥生時代初頭の墓制について」『文化』 第43巻第1・2号 1979年

- 註18 註8と同じ。
- 註19 高橋忠彦「森林遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 1981年
- 註20 芹沢長介「聖山」東北大学考古学研究会考古学資料 別冊2 1979年
- 註21 春口信典「右エ門次郎塗遺跡・三合山道路・石ノ森遺跡発掘調査報告書」青森県教育委員会 1982年
- 註22 藤村東男「九年橋遺跡第3次発掘調査報告書」北上市教育委員会 1977年
- 註23 a 小林達雄「縄文社会復原へのアプローチ」「季刊どるめん」第8号 1976年
b 小林達雄編「日本原始美術大系 1 縄文土器」1977年
c 小林達雄編「日本の美術」No145 1978年
- 註24 a 清水潤三「亀ヶ岡遺跡——青森県亀ヶ岡低湿地遺跡の研究——」『考古学・民族学叢刊第三』三田史学会 1959年
b 清水潤三「是川遺跡」中央公論美術出版 美術文化シリーズ 1966年
- 註25 註20と同じ。
- 註26 藤村東男「九年橋遺跡第5次発掘調査報告書」北上市教育委員会 1979年
- 註27 鈴木克彦「魔棄論の再構成と課題——亀ヶ岡パターンの認識から——」『考古学ジャーナル』No142 1977年
- 註28 註27と同じ。
- 註29 a 市原秀文他「縄文後期・晩期の低地性遺跡と環境復元」「考古学・美術史の自然科学的研究」古文化財編集委員会編 1980年
b 部須孝悌「縄文人は栽培ツバを食べた?」「科学朝日」第41巻6号 1981年
- 註30 箔藤 隆氏の御教示による。
- 註31 佐藤信行「東北南部における縄文晩期終末とその直後の土器文化(下)」「考古風土記」第6号 1981年
- 註32 加藤道男「青木畠遺跡」宮城県教育委員会 1982年
- 註33 箔藤 隆「土器組成論」「考古学研究」第19巻第4号 1973年
- 註34 小武海松四郎「縄痕土器をともなう秋田県南秋田郡井川町新聞遺跡遺物について」1977年
- 註35 大和久茂平「手取清水遺跡発掘調査報告書」1974年
- 註36 岛山憲司・小正 準「由利町上の台遺跡採集の弥生式土器」「本荘市史研究」第1号 本荘市史編さん室 1981年
- 註37 白鳥良一「多賀城出土土器の変遷」「研究紀要題」宮城県多賀城跡調査研究所 1980年
- 註38 奥山 調「縄文晩期の粗石棺」「考古学雑誌」第40巻2号 1954年
- 註39 註4に同じ
- 註40 阿部義平「配石墓の成立」「考古学雑誌」第54巻1号 1968年
- 註41 註5に同じ
- 註42 岛山憲司「梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 1979年
- 註43 香原俊行「上新城中学校遺跡」秋田市産業部・秋田市教育委員会 1980年
- 註44 註19に同じ
- 註45 馬目順一「橋葉天神原弥生遺跡の研究 I・II」「橋葉町教育委員会 1982年

第5章　まとめ

註46 a 坪井清足「縄文文化論」「岩波講座日本歴史 原始および古代1」、1962年

b 坪井清足「縄文時代晚期の北陸と近畿」「日本海地域の歴史と文化」、日本海史編纂事務局
1979年

c 坪井清足「縄文文化雑感」「森貞二郎博士古稀記念古文化論集」、上巻、1982年

d 林 謙作「縄文晚期という時代」「縄文土器大成 4 晚期」、1981年

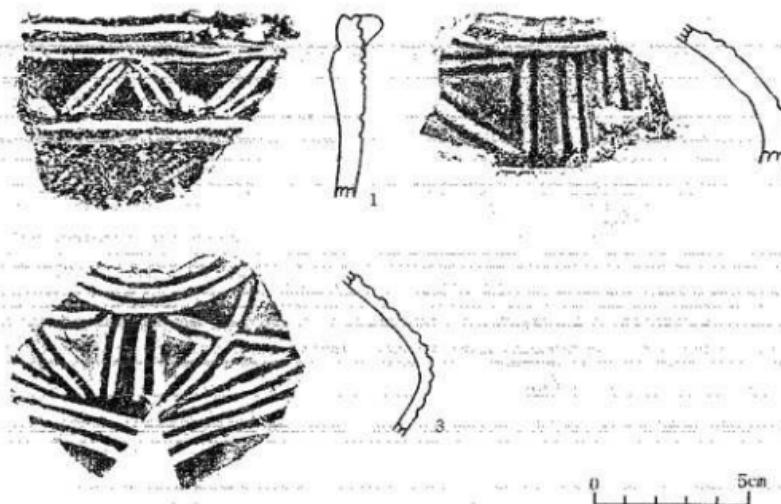
註47 佐々木高明「照葉樹林文化の道」、1982年

註48 a 中島直幸「唐津市菜畑遺跡の水田跡・農工具」「歴史公論」、第8巻第1号、1982年

b 中島直幸「初期稲作期の凸帯文土器——唐津市菜畑遺跡の土器編年を中心として」、「森貞二郎博士古稀記念論集」、上巻、1982年

c 中島直幸「縄文晚期後半の水田跡」「季刊考古学」、創刊号、1982年

本報告書脱稿後、以下の土器3片が横原式及びそれに類する土器である旨、北海道大学林謙作氏、東北歴史資料館藤沼邦彦氏より御教示を受けた。出土地点は1、LG52、2、LD51、3、LE54で1・2が大洞C₂・A式と、3が大洞A式とそれぞれ併出した。



別編 I 秋田県はりま館、大岱 II、案内 V、払田棚 および平鹿の各古代遺跡中の火山灰の鉱物 化学的分析

東北大学農学部

庄子貞雄
山田一郎

1 分析方法

一次鉱物組成分析用の試料は、火山灰全体の場合はそのまま幅で0.1~0.2mm部分を採取し、次いでテトラブロムエタン（比重2.96）で重鉱物部分と軽鉱物部分に区分した。軽石部分の分析用試料ははじめに分離した軽石を軽く粉碎した後、火山灰の場合と同じように重鉱物と軽鉱物の二つの部分に分けた。各部分の鉱物組成は、それぞれ200~300粒検査し、その結果を粒数%でしめした。

火山ガラスの形態はスponジ状、纖維状、扁平状、顆粒状の4種に区分した。スponジ状は無色で鋭角な多数の突起をもつガラスであり、内部に小気泡の多いものから少ないものまで含めた。纖維状ガラスは無色であったかも纖維が束状になったように見えるものである。扁平状ガラスは無色で扁平であり、スponジ状や纖維状ガラスより厚みがある。顆粒状ガラスは茶褐色から黒褐色であり、多数の微品を有する角塊状のガラスである。

火山灰中の磁鐵鉱の特定の化学成分を定量することにより、火山灰の岩質判定や噴出源の同定が有効であることが、庄子らにより明らかにされているので、これを供試火山灰にも適用した。磁鐵鉱の化学分析用の試料は、火山灰全体の場合はそのまま、分離された軽石は乳鉢で十分粉碎した後、磁石で磁鐵鉱を分離した。さらに不純物を除くため、メノウ乳鉢で磨碎した磁鐵鉱を水の入ったビーカーに入れ、マグネットスターラーで回転しながら浮遊物を除去した。この操作を浮遊物がなくなるまでくり返した。次にこの磁鐵鉱を分解し、Fe、Ti、Zn、Vを定量した。

2 分析結果

1) 一次鉱物組成（表1）

はりま館遺跡のNo 2 (MB75-MD75、第1層) は本質物である軽石が大部分である。一方同遺跡のNo 7 (MB75-MD75、第6層) は類質物である多量の岩片を含んでいる。このため、No 7 は試料全体の分析と、試料より分離した軽石部分とに分けて分析した。大岱 II のNo 9 (T

W45、O P II Na—11、第2層) 案内 V (1 A N V、S X 08、第4層) および払田柵のNa21 (D H T H、第49次 K D 37) の各試料も、同様に火山灰全体と、軽石部分に分けて分析した。平鹿遺跡のNo22 (8 H K、D O 2) は細粒な火山灰であったので、全体部分のみを分析した。

はりま館遺跡のNo 2 の重鉱物部分は全体の4%と少なく、その組成はシソ輝石と磁鐵鉱と少量の普通輝石から成る。軽鉱物組成は無色火山ガラスが圧倒的に多く、その形態は大部分がスボンジ状である。軽鉱物中には少量の斜長石が含まれている。同遺跡のNo 7 の軽石部分は、重鉱物含量ともNo 2 とまったく同様の鉱物組成をしめす。これに対し、同遺跡のNo 7 の全体部分は、重鉱物中に少量の角閃石が含まれている。また軽鉱物組成は斜長石が26%と軽石部分より多く、火山ガラスも顆粒状のものが大部分である。

大岱II、案内 V、払田柵の各遺跡の各試料の全体部分の一次鉱物組成は、はりま館遺跡のNo 7 の全体部分と同様の結果である。そして、これらの遺跡の各試料より分離した軽石部の一次鉱物組成も、はりま館遺跡のNo 2 およびNo 7 の軽石部と同様の結果である。ただし、案内 V 遺跡の全体部分の重鉱物含量が34%と高い値になっているが、これは案内 V 遺跡の概要にも記してあるように、火山灰が降下後、移動堆積したためと考えられる。

平鹿遺跡の火山灰は全体部分を分析したにもかかわらず、その一次鉱物組成は、軽石部分とほぼ同様の結果となっている。このことは、同遺跡の火山灰は、大部分本質物から成ることをしめている。

2) 磁鐵鉱の化学組成 (表2)

各遺跡の分析試料は、はりま館遺跡の部分にはNo 2 とNo 7 の全体と軽石部分、大岱II 遺跡ではNo 9 の試料全体と軽石部分、および案内 V 遺跡ではNo 17 の全体、払田柵跡遺跡ではNo 21 の全体、平鹿遺跡ではNo 22 の全体である。

Shoji らは日本各地より採取した新鮮な軽石やスコリア中に含まれる磁鐵鉱の化学分析を行い、磁鐵鉱中のZn/Fe+Ti 値が高い程、火山灰は珪長質であり、逆にV/Fe+Ti 値が高い程火山灰は苦鉄質であることをしめした。

各試料のZn/Fe+Ti およびV/Fe+Ti 値をShoji らのV-Zn ベルト上にプロットすると、払田柵のNa21以外は全て、火山灰は流紋岩質となる。ただし、これらの試料で平鹿遺跡のものはZn/Fe+Ti 値がやや低く、V/Fe+Ti 値がやや高くなっている。磁鐵鉱は湿性条件下では変質しやすい。払田柵遺跡は水田状態の湿性状態にあったため、この遺跡の火山灰中の磁鐵鉱は変質を受けているものとおもわれる。

磁鐵鉱の化学組成からみると、火山灰ははりま館、大岱II、案内 V の各遺跡のものと平鹿遺跡のものの二つに区分できる。払田柵遺跡の火山灰は、磁鐵鉱が変質を受けているため区分不可能である。

3 考察とまとめ

東北地方とくに青森県、岩手県および宮城県の多くの古代遺跡中に珪長質な灰白色の火山灰が見出されている。井上らはそれらを十和田-a (To-a、大池による名称—青森県の東半部に広く分布する)、秋田焼石絆石 (AYP、岩手県中央部に分布)、胆沢火山灰 (岩手県南部に分布)、灰白色火山灰 (宮城県一帯に分布)に区分した。しかしこれらの中で胆沢火山灰と灰白色火山灰は同じ火山灰の可能性が高い。

さて秋田県の遺跡火山灰と井上らの四火山灰との関係は以下の通りである。

はりま館の火山灰

No.2は、磁鉄鉱の化学組成は To-a ($\text{Fe\%}=55\sim60\%$ 、 $\text{Ti\%}=10\%$ 、 Zn および $\text{V} \approx 1000 \mu\text{m}$) ときわめて似ている。しかし、一次鉱物組成は To-a 火山灰 (重鉱物含量は 5%以下、重鉱物組成はシソ輝石 $\approx 50\%$ 、普通輝石 $\approx 20\%$ 、磁鉄鉱 $\approx 30\%$ であり、軽鉱物組成は無色火山ガラスが圧倒的でそのうちの半分以上が扁平状ガラスである) とは次の点で異っている。火山ガラスの形態は To-a は扁平が大部分であるが、No.2 はスponジ状が大部分である。No.2 の普通輝石含量は To-a より少なく、磁鉄鉱含量は To-a よりも多い。従って、No.2 の火山灰は To-a とは異なるものとおもわれる。

同遺跡の No.6 の火山灰は、岩片が多量に含まれること、および火山ガラスは顆粒状のものが多いため、さらに軽石の火山ガラスはスponジ状が多いことなどから To-a とは区別される。

従って、はりま館遺跡の No.2 と No.6 の火山灰は To-a の噴出直前に十和田カルデラより噴出した大湯軽石とおもわれる。

大岱II遺跡と案内V遺跡の火山灰

大岱II遺跡、案内V遺跡の火山灰も、岩片が多量に含まれること、火山ガラスは顆粒状のものが大部分であること、そして軽石中の火山ガラスもスponジ状が多いことなどから To-a とは区別され、大湯軽石とおもわれる。

払田柵遺跡の火山灰

払田柵遺跡の火山灰は、腐植がかなり含まれており純粹でないことが、また湿性条件にあったため磁鉄鉱が変質していることなどから、井上らの四火山灰との対比は難しい。従って今後払田柵遺跡の近辺の丘陵地の遺跡または土壤中の新鮮な火山灰を用い分析する必要がある。

平鹿遺跡の火山灰

平鹿遺跡の火山灰は宮城県一帯に認められる灰白色火山灰 (重鉱物含量は 5%以下、重鉱物組成はシソ輝石 $\approx 60\%$ 、普通輝石 $\approx 20\%$ 、磁鉄鉱 $\approx 20\%$ 、軽鉱物組成は火山ガラスが圧倒的で、その形態は大部分がスponジ状である。磁鉄鉱の化学組成は、 $\text{Fe}=55\sim60\%$ 、 $\text{Ti}=10\%$ 、 $\text{Zn}=$

1000ppm、V ≈ 2000ppm) と一次鉱物組成、磁鉄鉱の化学組成ともきわめて類似しており、灰白色火山灰と同一の火山灰と思われる。なお灰白色火山灰の年代は、10世紀前半と推定されている。³⁾

引用文献

- 庄子貞雄、小林温介、増井淳一 (1974) 「火山灰中の強磁性鉱物の化学組成と噴出源との関係について」『岩鉱誌』 69 PP.110~120
- Shoji S., Kobayashi S., Yamada I., and Masui J. (1975). Relationships between the Geochemistry and Ferromagnetic Component and the Chemical Properties of Air-born Pyroclastic Materials, J. Japan. Assoc. Min. Petr. Eco. Geol., 70 PP.12~24
- 井上克弘、山田一郎 (1982) 「東北地方における奈良~平安時代遺跡埋土中の粉状バミスについて」『岩手県文化財調査報告書』 第72集 PP.442~450
- 大池昭二 (1972) 「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』 11 PP.228~235
- 白鳥良一 (1980) 「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所紀要』 7 PP.1~38

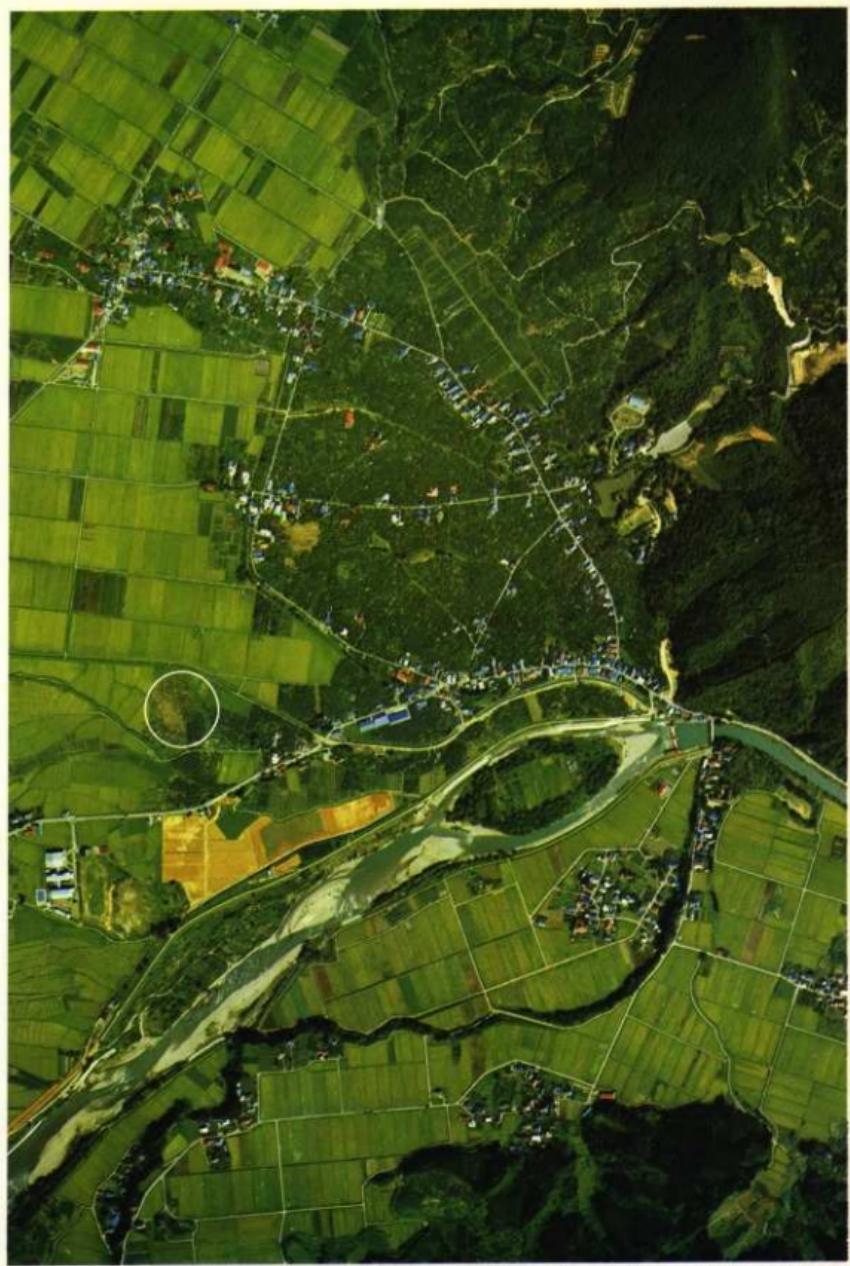
表1 一次鉱物組成(粒数%)

遺跡名および試料名	重鉱物組成				軽鉱物組成				斜長石	石英	重鉱物含量 (重量%)
	シソ 輝石	普通 輝石	普通 角閃石	磁鐵鉱	火山ガラス (形態別)	スボンジ	鐵錐	扁平 顆粒			
はりま館											
No.2 MB75~ MD75第1層	46	4		50	82	10	1	2	4		4
No.7 MB75~ MD75第6層	37	9	3	52	3	17	6	66	26		9
No.7 同上 輕石	43	2		55	78	11	1	1	9		6
大岱Ⅱ											
No.9 TW45, O.D. II No.11第2層	36	9	17	55		3	3	70	24	1	10
No.9 同上 輕石	46	7	17	46	76	8	17	17	16		6
案内V											
No.17 I AN V SX08第4層	30	7	17	63	13	1	6	61	15	1	34
No.17 同上 輕石	43	3		55	91	4	1		4		3
払田柵											
No.21 DHTH 第49次KD37	57	15	17	27	2	1	7	60	28	1	10
No.21 同上 輕石	52	11	1	36	77	3		16	2	1	1
平鹿											
No.22 SK SK(1)002	48	18	17	33	54	6	7	18	14	17	4

表2 磁鐵鉱の化学組成

遺跡名および試料名	Fe %	Ti %	Zn ppm	V ppm	($\times 10^{-4}$) Zn/Fe+Ti	($\times 10^{-3}$) V/Fe+Ti
はりま館						
No.2 MB75~MD75 第1層	56.58	9.90	1094	1050	16.5	1.6
No.7 MB75~MD75 第6層	65.70	7.41	1408	1294	19.36	1.87
No.7 同上 輕石	59.62	10.00	1272	1215	18.3	1.8
大岱Ⅱ						
No.9 TW45 O.D.II No.11 第2層	59.72	6.96	1274	1281	19.1	1.92
No.9 同上 輕石	59.03	10.10	1320	1203	19.1	1.7
案内V						
No.17 I AN V SX08 第4層	59.73	7.86	1196	1102	17.7	1.6
払田柵						
No.21 DHTH 第49次KD37	52.15	14.41	782	1248	11.8	1.9
平鹿						
No.22 SK SK(1)002	57.23	10.67	1015	2009	15.0	3.0

図 版



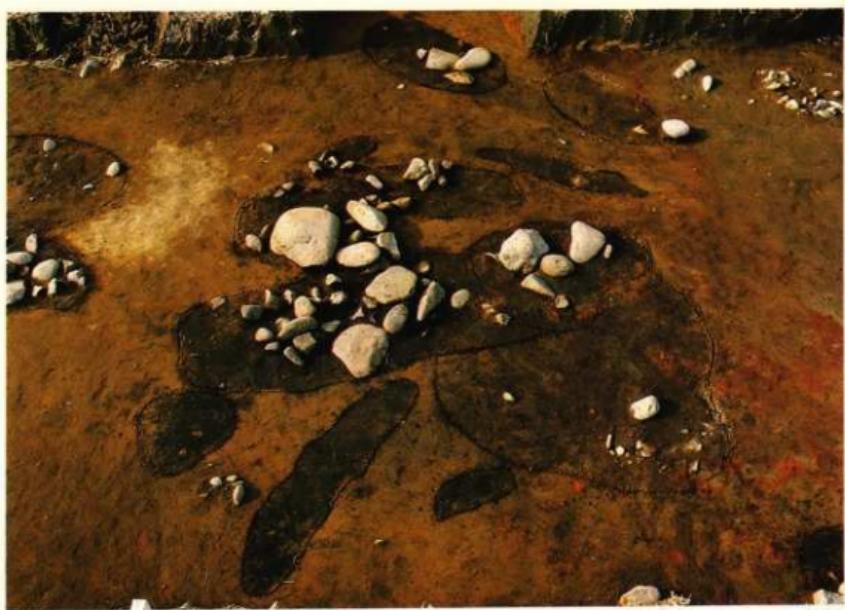
空から見た平鹿遺跡 高度2,130mより 1982年9月16日撮影



1 南東方向から見た平鹿遺跡



2 西方真人山頂より見た平鹿遺跡



1 SK030~037・073・075土壤



2 SK030~037・073・075土壤



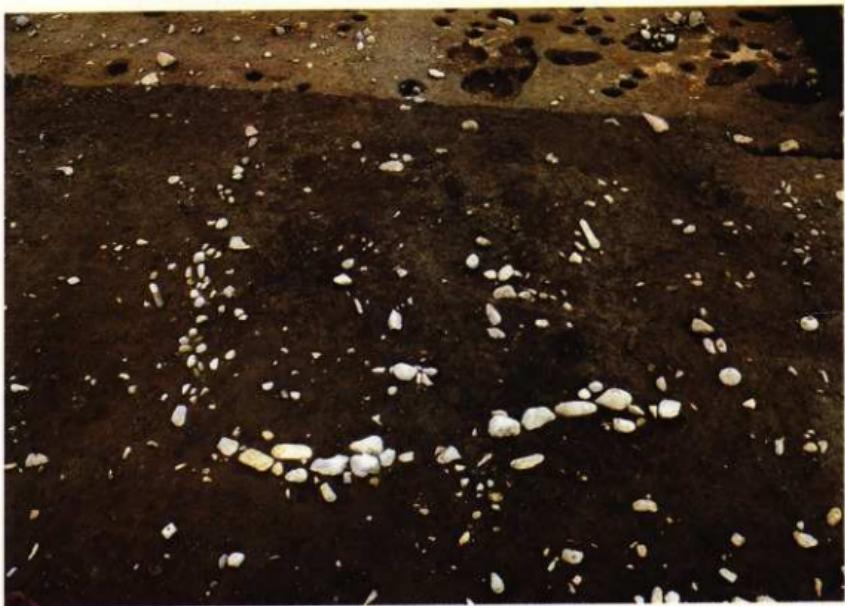
1 SR001土器棺



2 SR019土器棺



1 S N 025石圈炉



2 S Q001配石



1 S N024石圓炉 S Q006配石



2 S Q014配石



1 SX006大洞A式土器一括出土状態



2 第IV層の遺物出土状態



1 石製小玉出土狀態



2 裝身具類



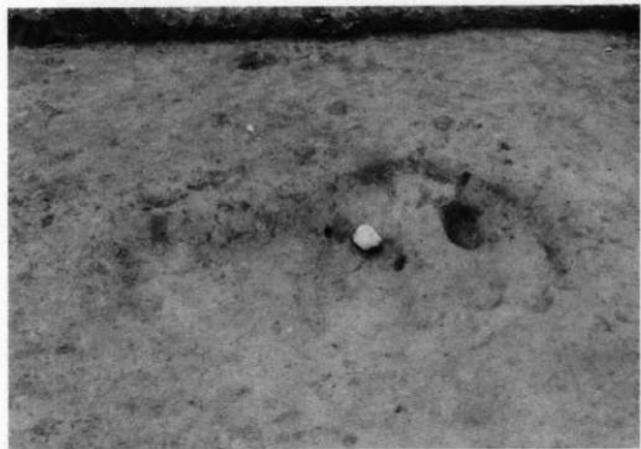
1 土壙群



2 配石を伴なう土壙群



1 SK013・019土壤



2 SK024 土壌



3 SK026 土壌
SN048 石圓炉

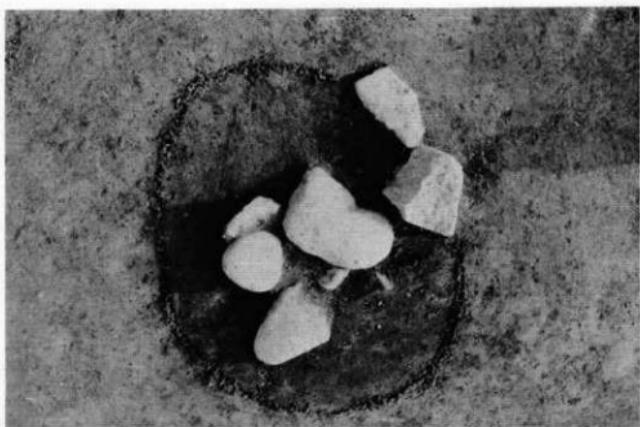
1 SK027・028土壤

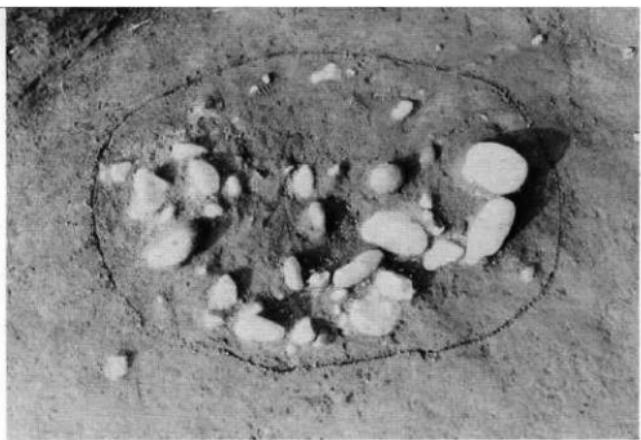


2 SK027土壤



3 SK029土壤

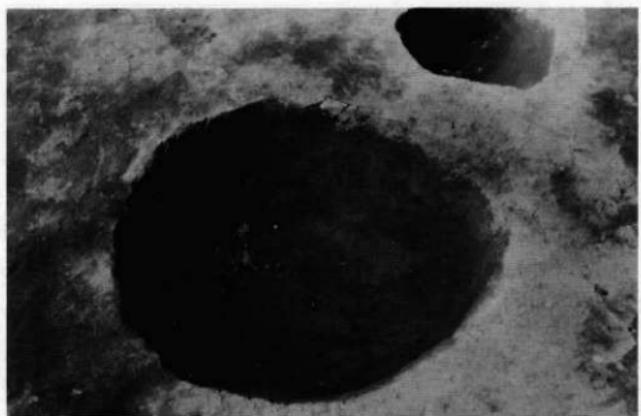




1 SK030土壤

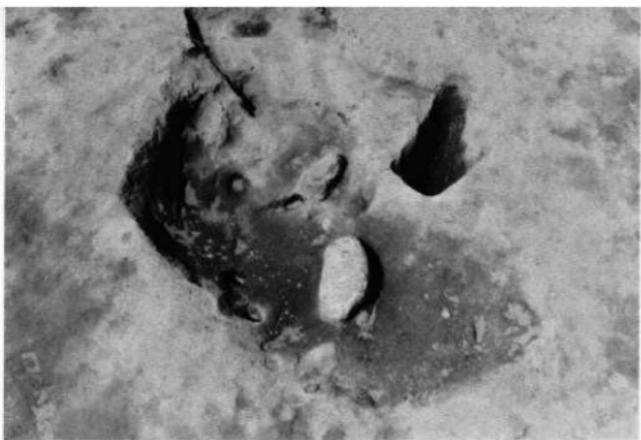


2 SK038~041土壤



3 SK050土壤

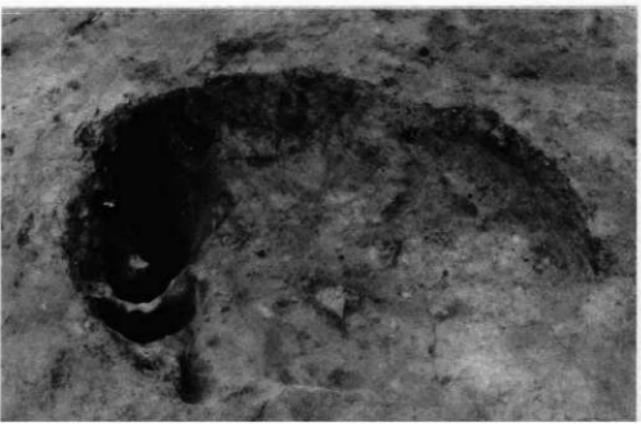
1 SK051土壤

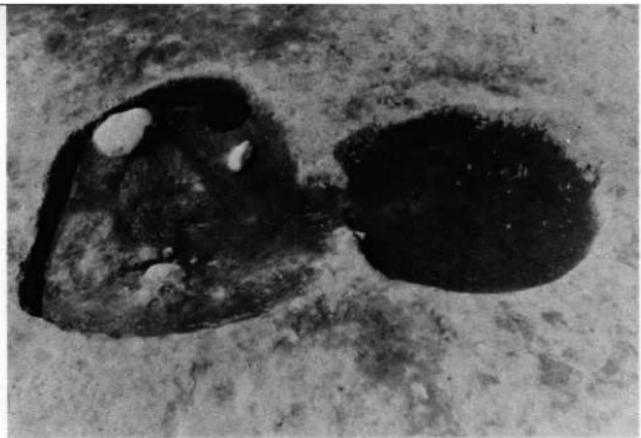


2 SK053土壤



3 SK057土壤

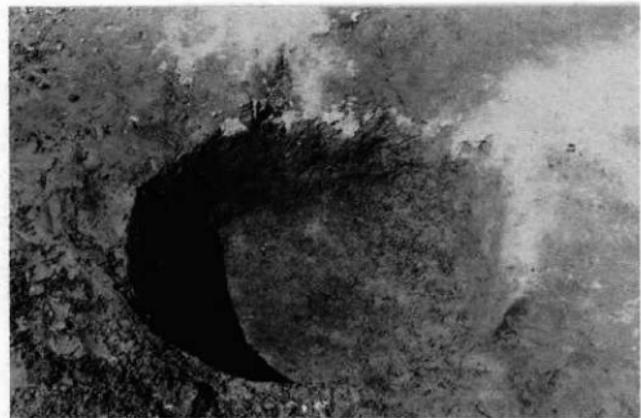




1 SK058・059土壤



2 SK062土壤



3 SK063土壤

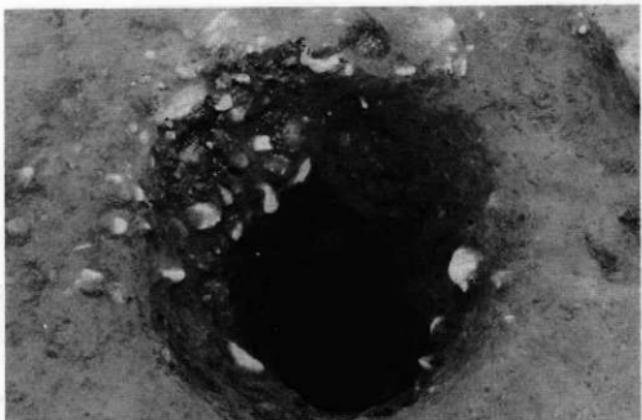
1 S K071土壤

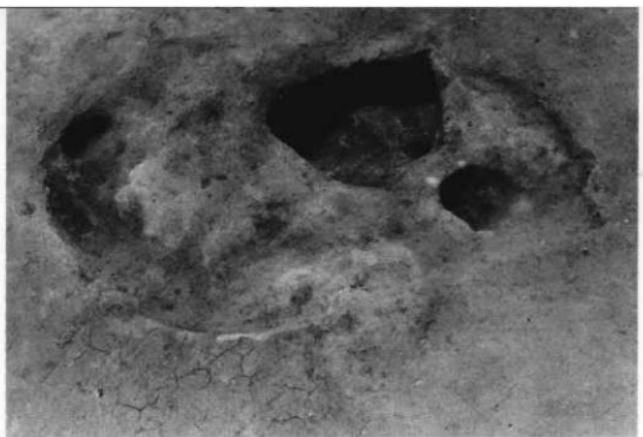


2 S K076土壤

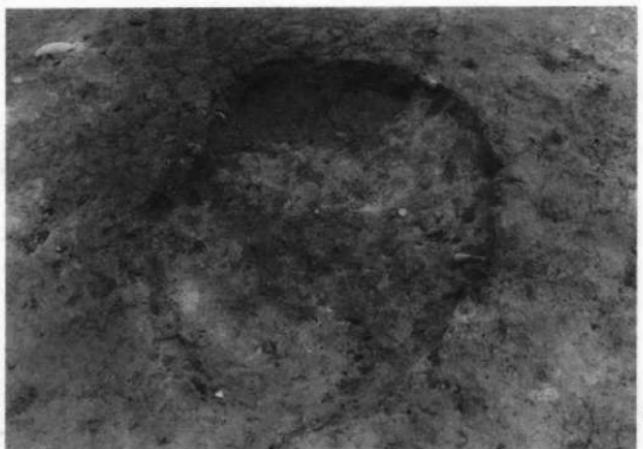


3 S K076土壤





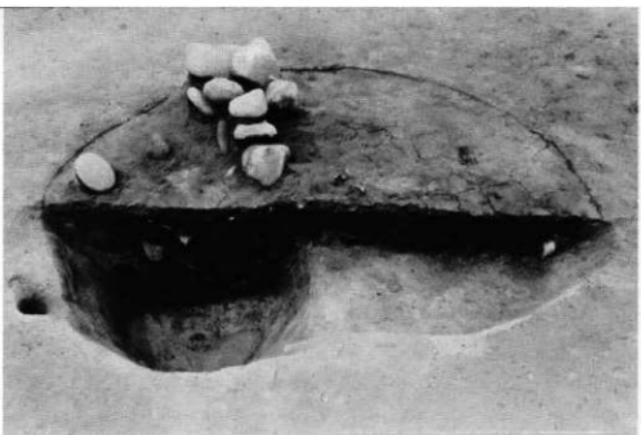
1 SK079土壤



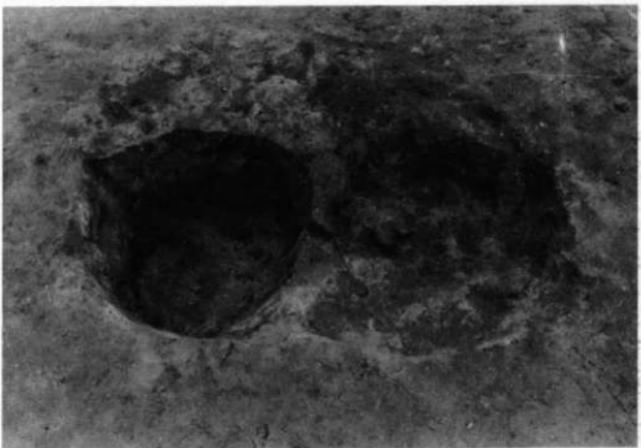
2 SK080土壤



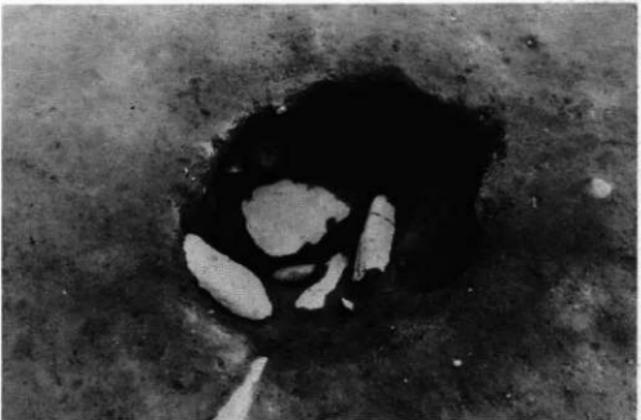
3 SK081土壤



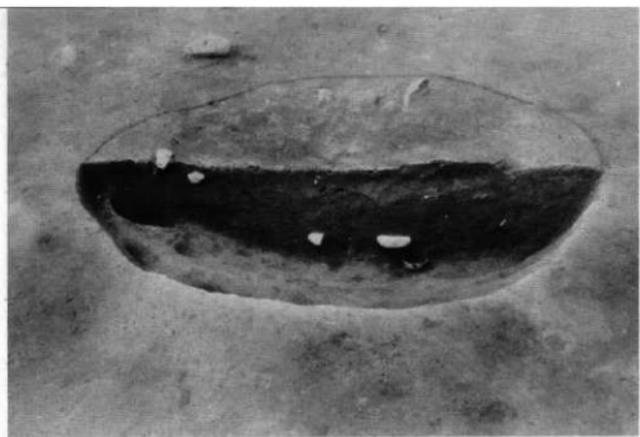
1 SK084・085土壤



2 SK084・085土壤



3 SK086土壤



1 SK087土壤



2 SK087土壤



3 SK083~088~090土壤

1 S K092土壤

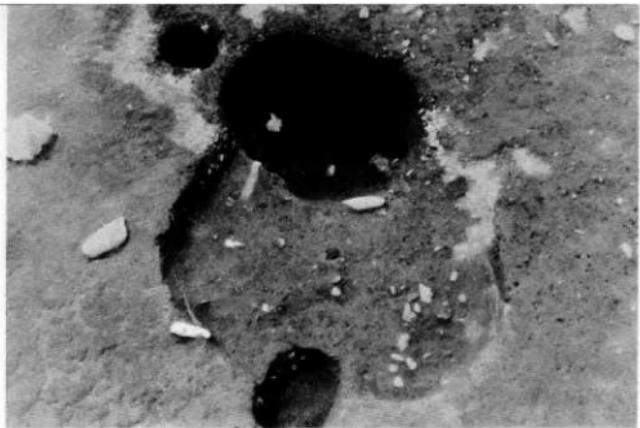


2 S K097・100・101
土壤



3 S K098土壤





1 SK102・115土壤

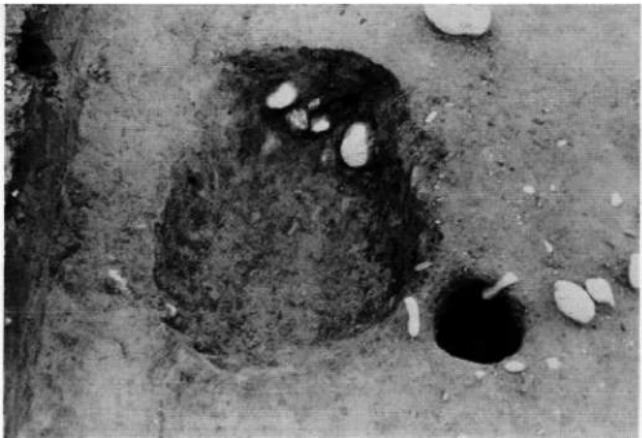


2 SK105土壤



3 SK110土壤

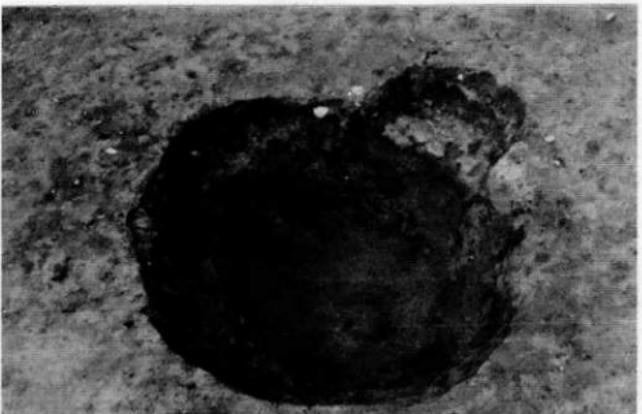
1 SK112土壤

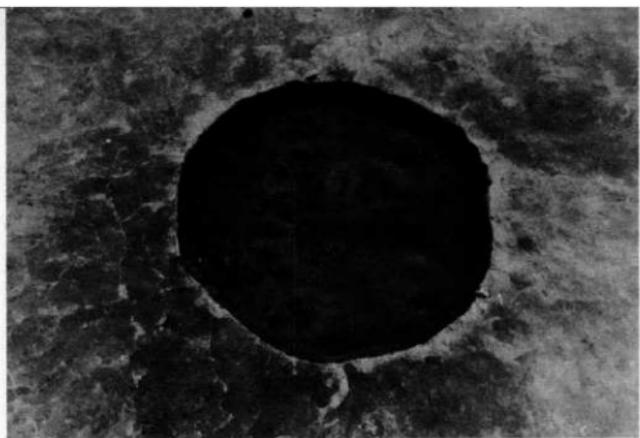


2 SK116土壤

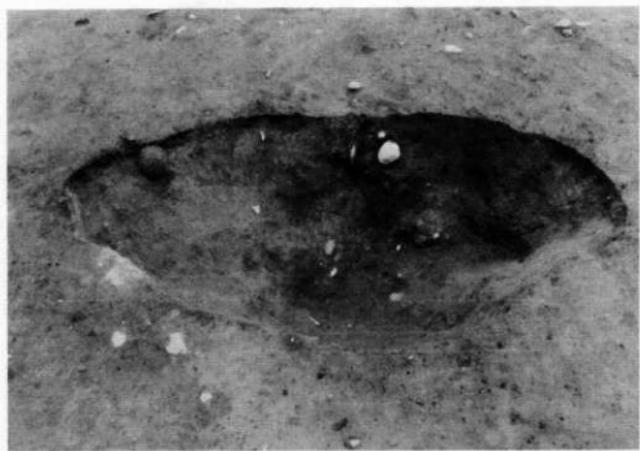


3 SK116土壤

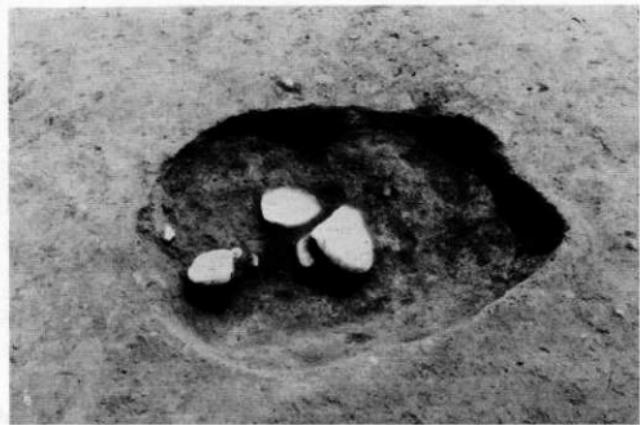




1 SK117土壤



2 SK122土壤



3 SK126土壤

1 SK 127~129土壤

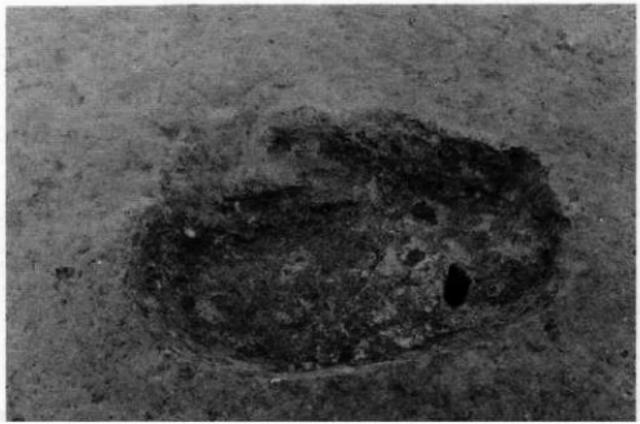


2 SK 130土壤

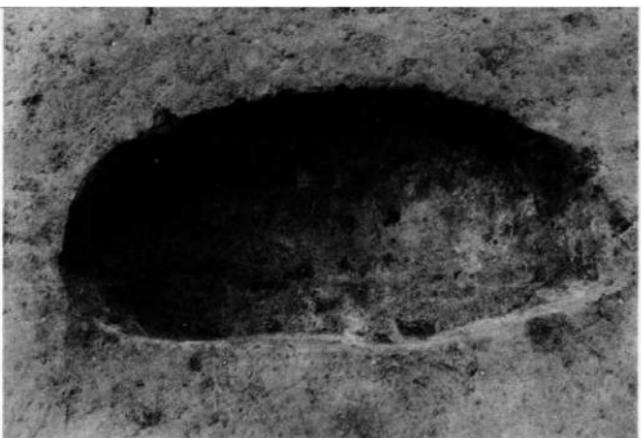


3 SK 131·134·135
土壤





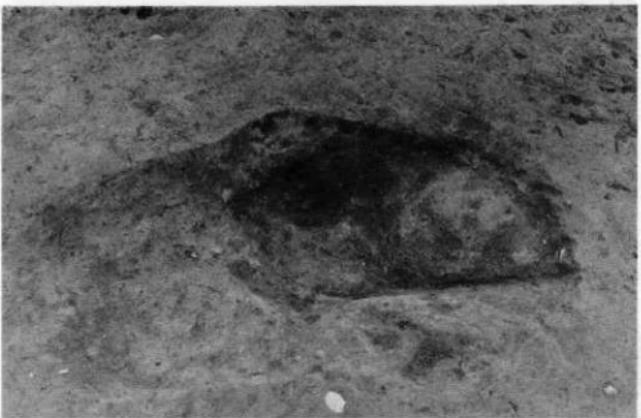
1 SK137土壤

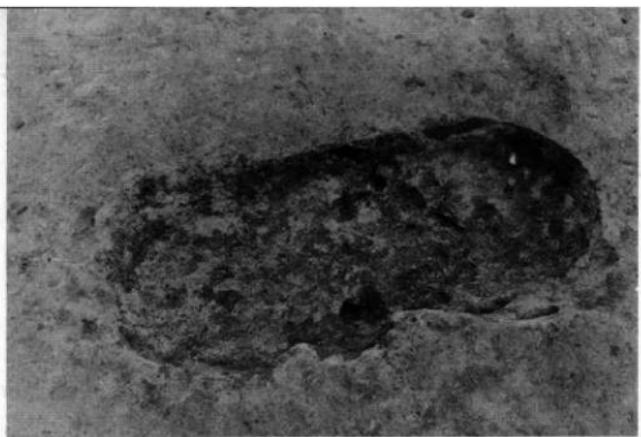


2 SK138~141土壤

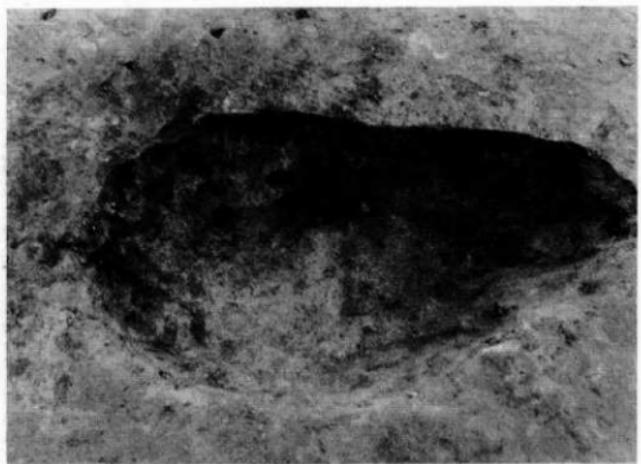


3 SK142土壤





1 SK143土壤



2 SK146土壤



3 SK147土壤

1 SK148土壤

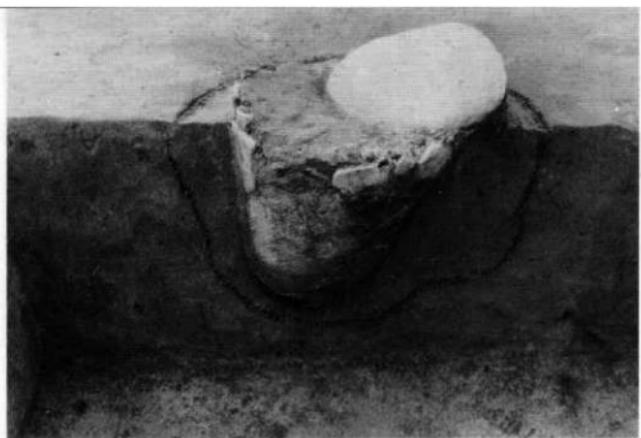


2 SK150~152土壤



3 SR001土器棺と土層

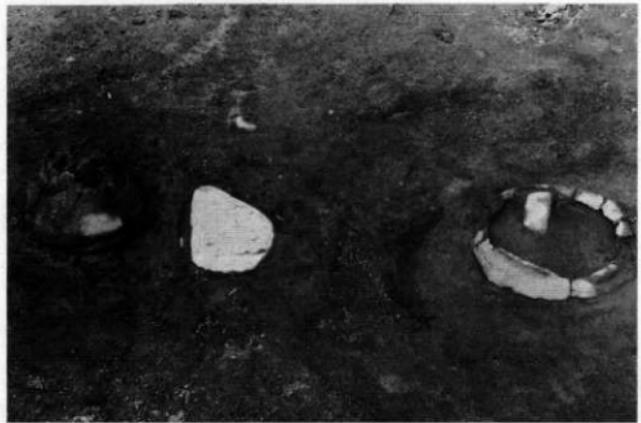




1 SR004土器棺



2 SR005土器棺



3 SR009土器棺

1 S R009土器棺



2 S R010土器棺



3 S R012土器棺





1 SR015土器棺



2 SR016土器棺



3 SR016土器棺

1 S R017土器棺



2 S R017土器棺



3 S R018土器棺





1 S R 020土器棺



2 S R 021土器棺



3 S R 022土器棺

1 S R028土器棺



2 S R030土器棺



3 S R031土器棺





1 S R 034土器館



2 S N 005石圈炉

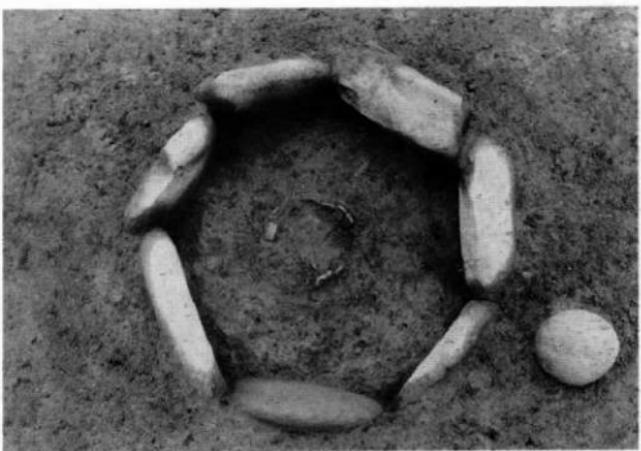


3 S N 007石圈炉

1 S N007石圓爐



2 S N012石圓爐

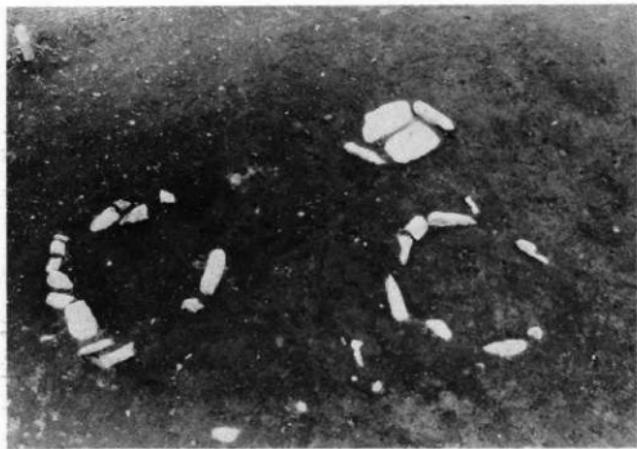


3 S N014・016石圓爐





1 S N 014・016石圓爐
S Q 002配石



2 S N 014石圓爐
S Q 002配石



3 S N 017石圓爐

1 S N 018・019石圍爐



2 S N 018・019石圍爐



3 S N 020石圍爐

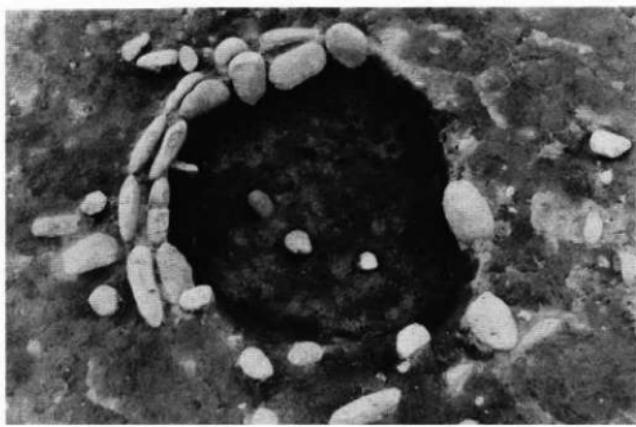




1 S N021石圈炉



2 S N022石圈炉



3 S N023石圈炉

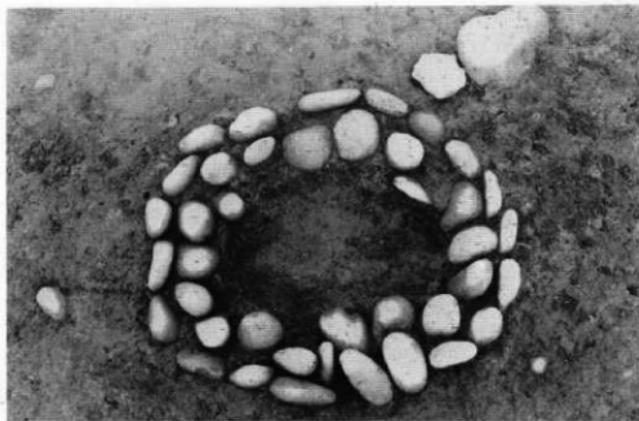
1 S N 024石圍爐



2 S N 025石圍爐



3 S N 025石圍爐

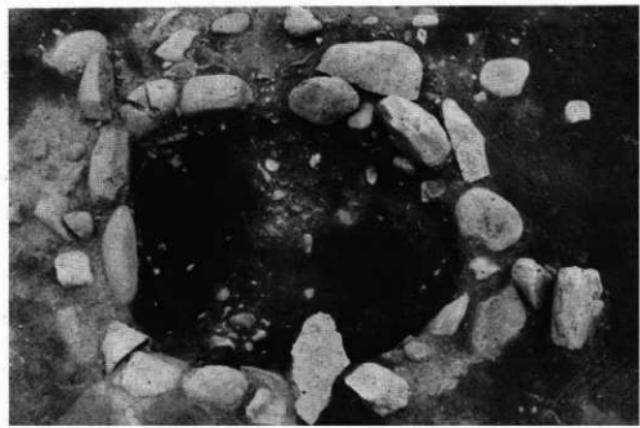




1 SN 026石圓爐

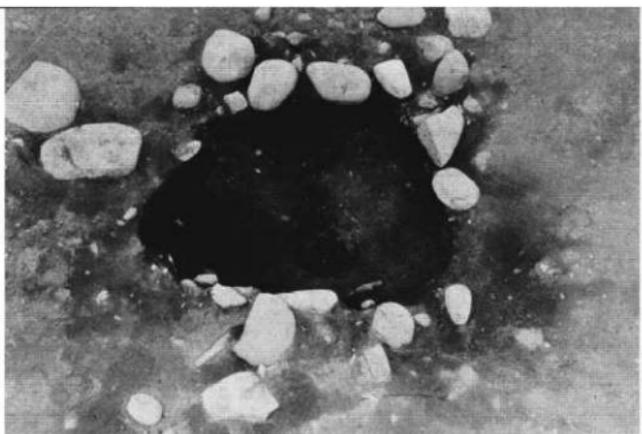


2 SN 027石圓爐



3 SN 028石圓爐

1 S N 029石圍炉



2 S N 030石围炉



3 S N 031・032石围炉





1 S N 033石圈炉
S Q 003配石



2 S N 033石圈炉



3 S N 034石圈炉



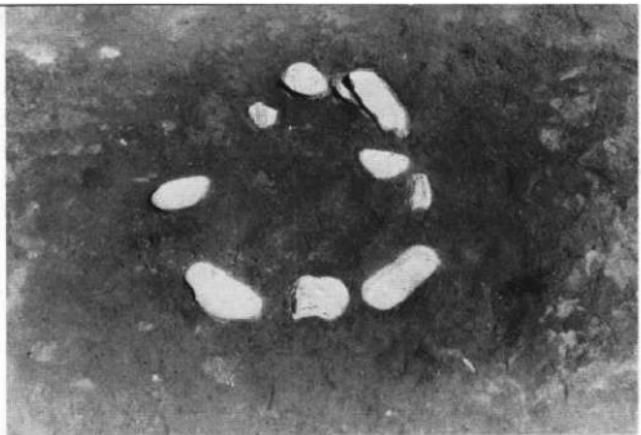
1 SN037石圓爐



2 SN037石圓爐



3 SN039石圓爐



1 S N 040石圍爐



2 S N 042石圍爐



3 S N 044石圍爐

1 S N 047石圓爐



2 S N 048石圓爐



3 S Q002配石

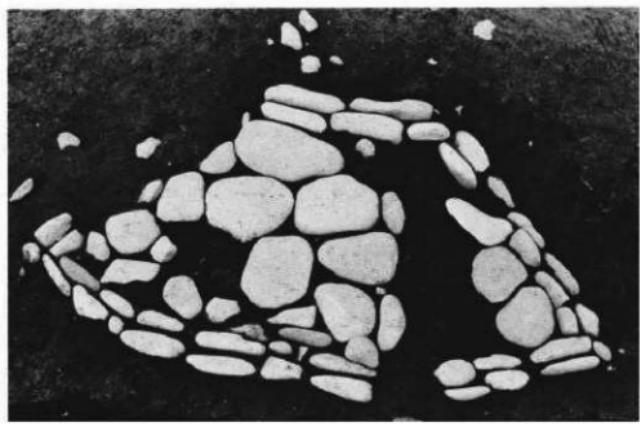




1 S Q002配石



2 S Q002配石



3 S Q006配石

1 S Q006配石
S N024石圓壠



2 S Q007配石



3 S Q007配石





1 S Q007配石

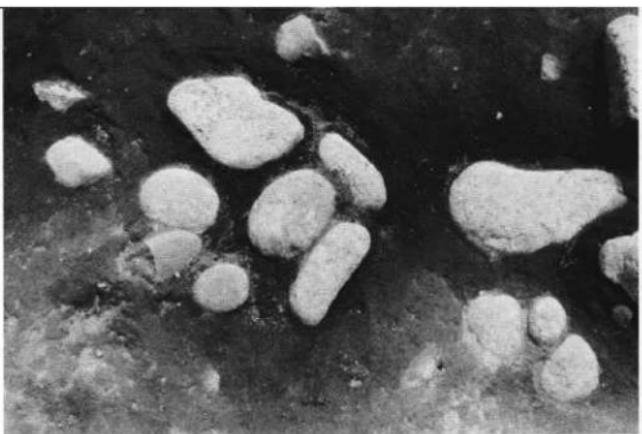


2 S Q007配石



3 S Q007配石

1 S Q007配石



2 S Q009配石

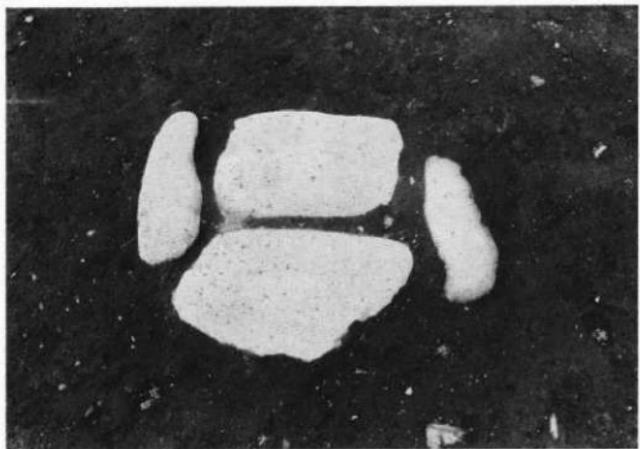


3 S Q015配石





1 S Q015配石



2 S Q016配石



3 M D59IV層上面の配石

1 MB59地山面の配石



2 SX001 その他の遺構



3 SX002 その他の遺構





1 S X005大洞C₂式土器
一括出土狀態



2 S X005大洞C₂式土器
一括出土狀態



3 S X006大洞A式土器
一括出土狀態

1 SX006大洞A式土器
一括出土状態



2 SX008包含層

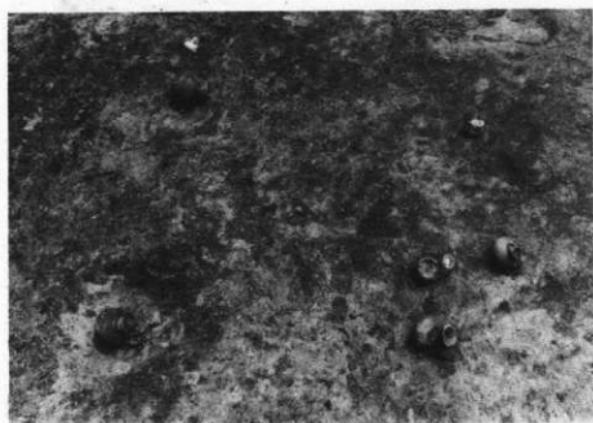


3 SX009捨て場遺物
出土状態





1 SX009捨て場遺物出土状態



2 SX009捨て場遺物出
土状



3 SX009捨て場遺物出
土状態

1 第IV層上面の状態



2 第IV層上面の状態



3 土器出土状態





1 土器出土狀態



2 土器出土狀態



3 土器出土狀態

1 土器出土狀態



2 土器出土狀態

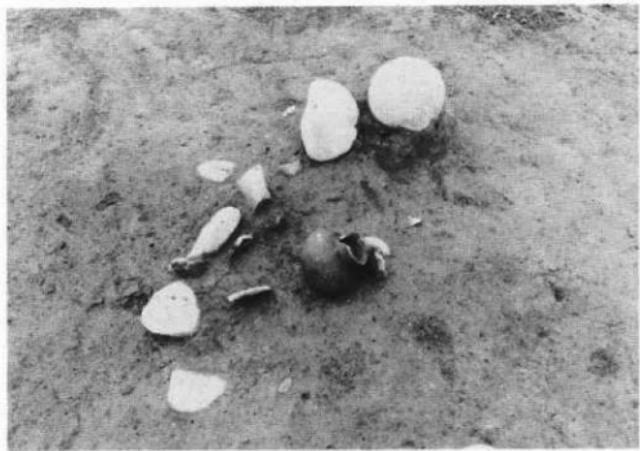


3 土器出土狀態





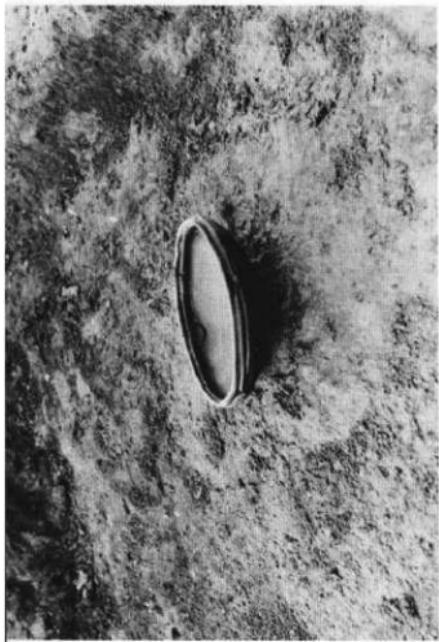
1 土器出土狀態



2 土器出土狀態



3 土器出土狀態



1 土器出土狀態



2 土器出土狀態



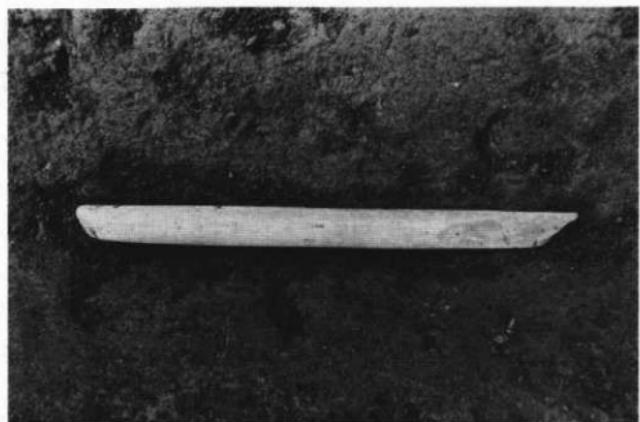
3 石器出土狀態



1 石器出土狀態



2 石器出土狀態



3 石器出土狀態

1 石器出土狀態



2 石器出土狀態



3 石器出土狀態

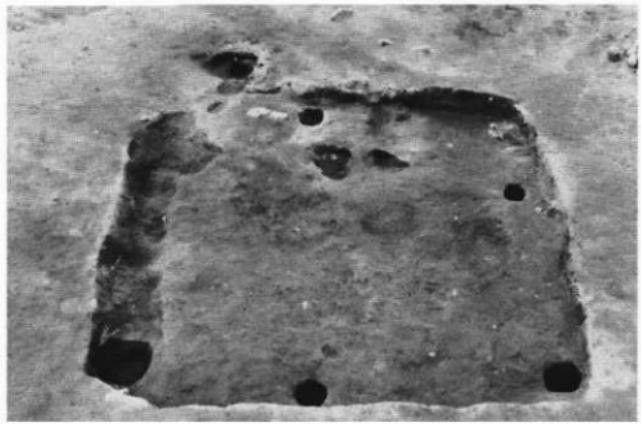




1 石器出土狀態



2 石器出土狀態



3 S I 001豎穴住居跡

1 S I 002 竪穴住居跡



2 S I 002 竪穴住居跡
カマド



3 S I 003 竪穴住居跡





1 S I 003整穴住居跡



2 S I 003整穴住居跡



3 S I 003整穴住居跡

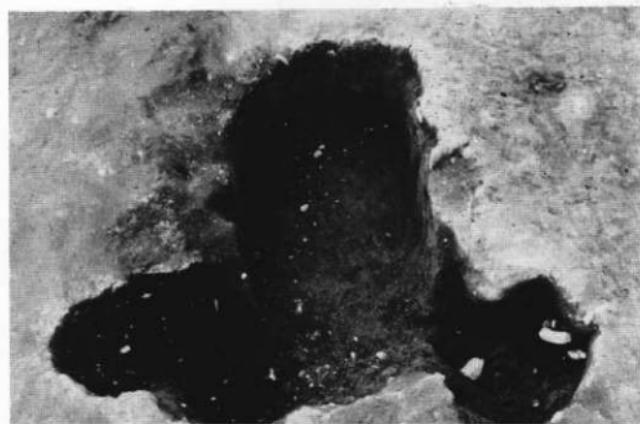
1 SK(I)001 竖穴状
遺構



2 SK(I)002 竖穴状
遺構



3 SK(I)003 竖穴状
遺構





1 S I 003 竖穴住居跡
S K (I) 001~003
竖穴状遺構



2 SN001 烧土遺構



3 SN002 烧土遺構

1 調査風景

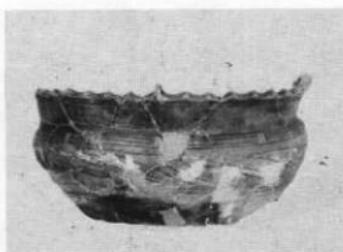


2 調査風景



3 調査風景

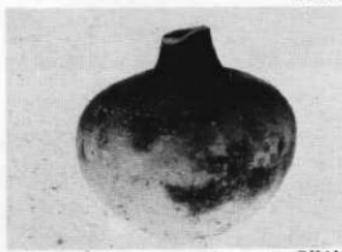




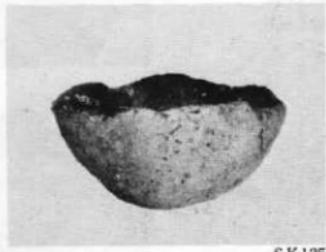
SK051



SK076



SK110



SK125



SK149



SR007內部



SR001



SR004



SR005



SR007外部



SR009



SR010内部



SR015



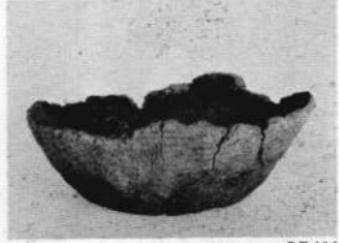
SR017



SR018



SR016



SR016



SR019



SR021



SR022



SR028



SR029



SR030



SR031棺身



SR031上部



SR032



SR 034



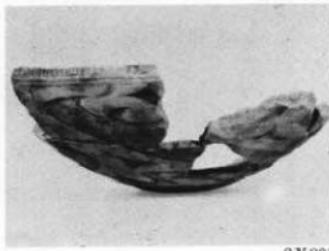
SN 025



SN 025



SN 025



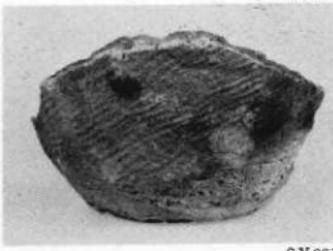
SX 001



SX 001



SX 001



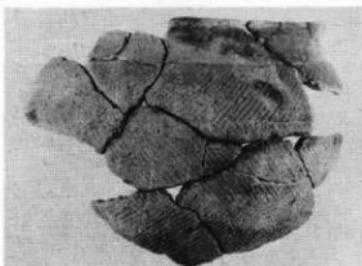
SX 001



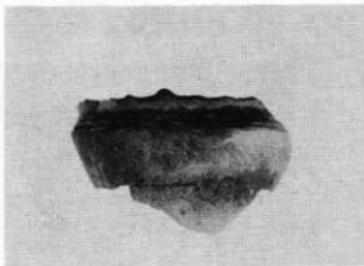
SX005



SX005



SX005



SX005



SX005



SX005



SX005



SX005



SX005



SX005



SX005



SX006



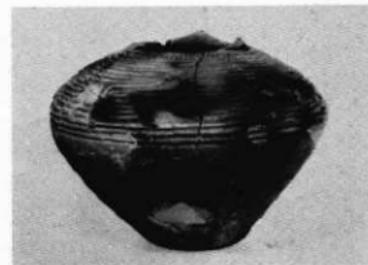
SX006



SX006



SX006



SX006

第七四圖版
遺物



SX006



SX006



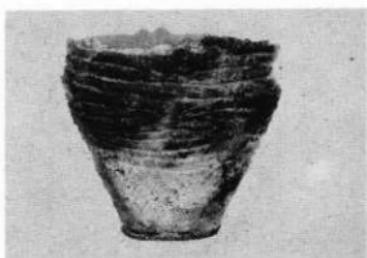
SX006



SX009



SX009



SX009



SX009



SX009



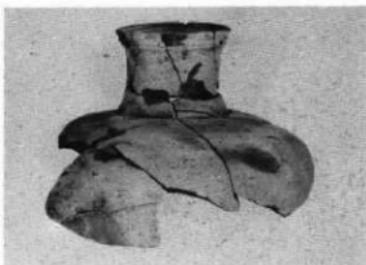
SX009



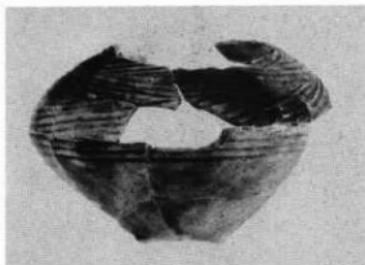
SX009



SX009



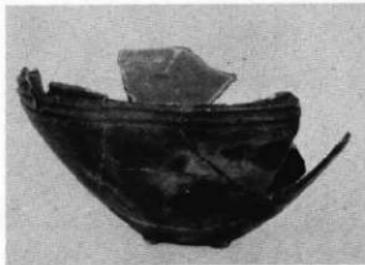
SX009



SX009



SX009



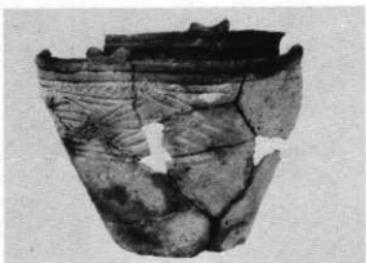
SX009



SX009



SX009



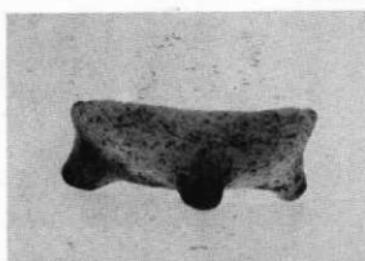
SX009



SX009



SX009



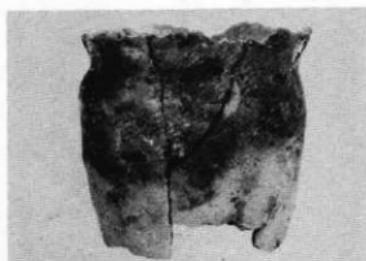
SX009



SX009



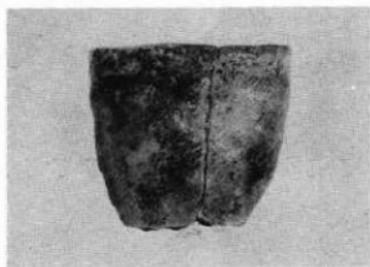
M A 60Ⅲ層



不明



LI51IV層



LJ48IV層下部



MB50III層下部



KJ46IV層



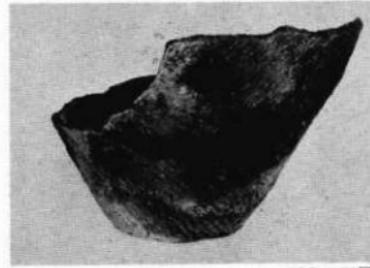
LF51IV層



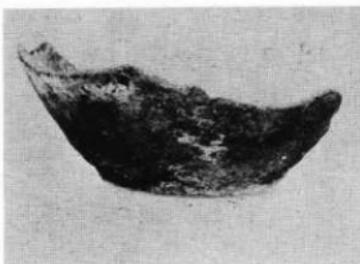
不明



LG50IV層



MB49IV層



LB 58 III 層



LI 53 IV 層下部



LD 53 III 層



LA 48 IV 層上部



L156 IV 層上部



LI 57 IV 層上部



K 145 IV 層



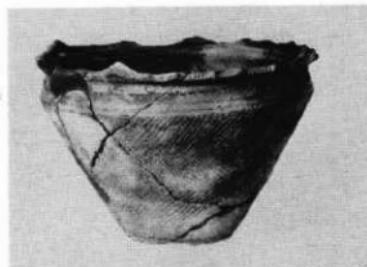
KI 45 IV 層



KH 45 IV 層



MC 48 III 層



MB 48 IV 層上部



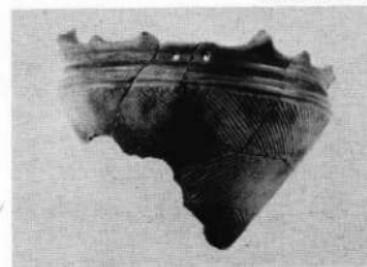
LE 48 内落込



LH 48 III 層下部



LC 48 IV 層上部



MB 47 IV 層上部



LA 47 IV 層



LA45IV 層下部



LF47IV 層



LE53IV 層



LG52III 層上部



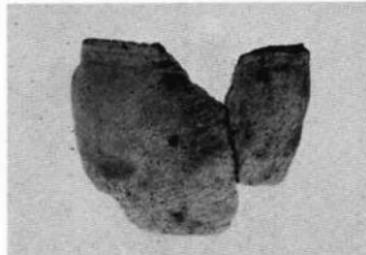
LG51IV 層



MB49IV 層上部



LC58地山面



LJ60IV 層上部



KG 46IV 層上部



LE 55IV 層上部



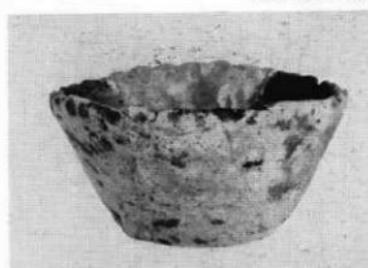
LE 58IV 層上部



MB 48IV 層上部



LH 53IV 層上部



LE 50IV 層



MA 52IV 層上部



LJ 54地山面



LB48IV層下部



不明



LH48III層下部



MB48IV層上部



LA45IV層



KI50地山面



LF48III層下部



MF58IV層



LE 48 III 層下部



LH 48 III 層下部



MD 59 IV 層



LF 51 IV 層



LG 50 IV 層



LJ 50 II 層



LD 49 倒木模



LH 55 IV 層



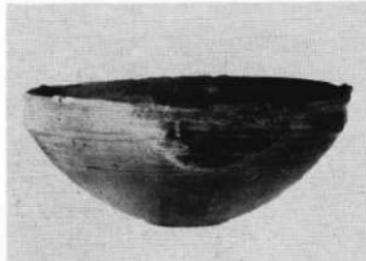
LB53 III 層下部



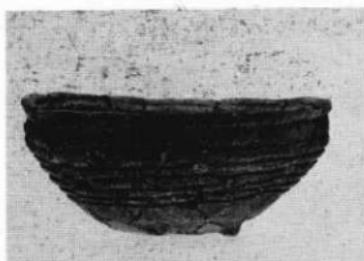
MA 55 IV 層下部



LE 47 III 層



MB 48 IV 層上部



LI 57 IV 層



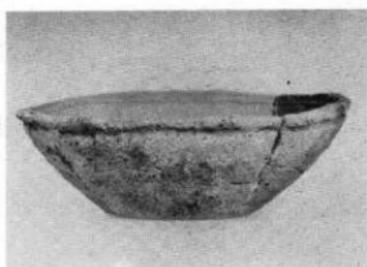
LH 57 III 層



MA 50 III 層



KC 60 IV 層



LF48Ⅲ層下部



LD50Ⅳ層



KF46Ⅳ層



MB58Ⅳ層



LD53Ⅳ層



LC52Ⅳ層



LI51Ⅳ層



MD57Ⅳ層



MB50IV層



不明



LA45IV層



LE48III層下部



LA45IV層



MB47IV層



LE49IV層



LF51IV層



LF 49 IV 層



MB 47 IV 層上部



MB 57 IV 層下部



MA 47 IV 層



LD 53 III 層



LG 56 IV 層



KI 47 IV 層上部



LE 49 IV 層上部



LB 48 IV層下部



KJ 48層上部



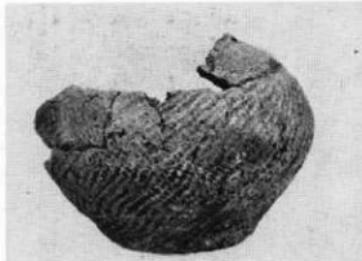
LA 48 IV層上部



LG 51 IV層上部



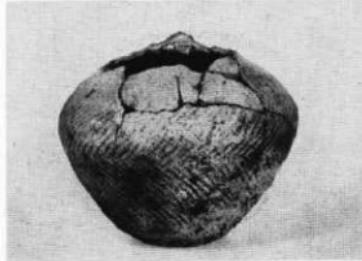
LB 47倒木痕



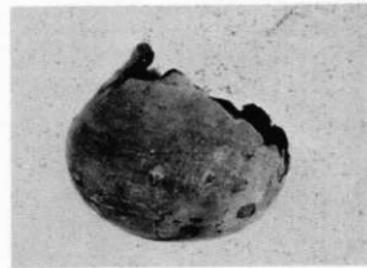
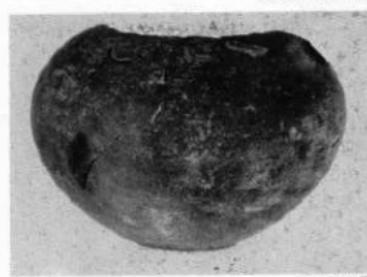
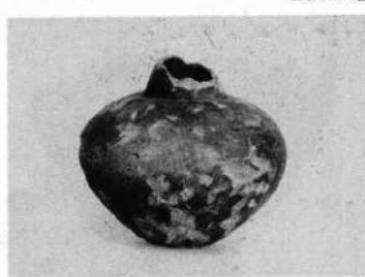
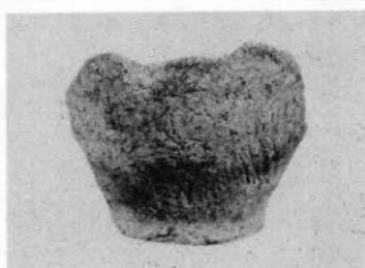
MB 58 III層



LJ 53 IV層



MA 48 III層

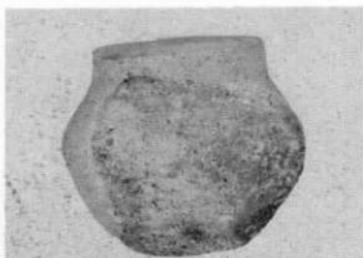




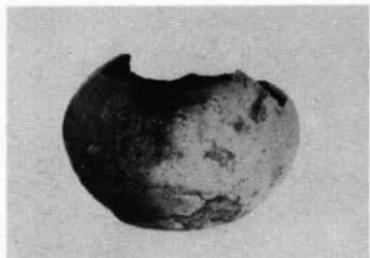
M C 59 IV 層



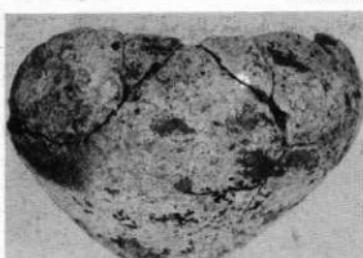
KJ 49 IV 層上部



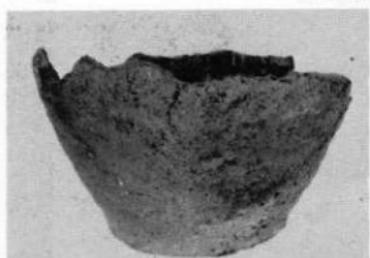
KH 43 III 層



LC 55 II 層



LB 48 IV 層



LC 48 IV 層上部



LI 57 III 層



LF 49 IV 層



MG 65 地山面



LI 50IV 層下部



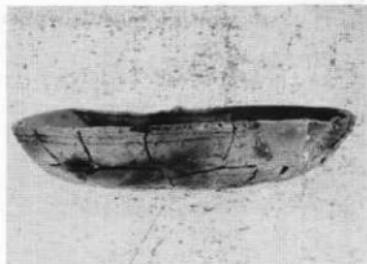
LG 53IV 層



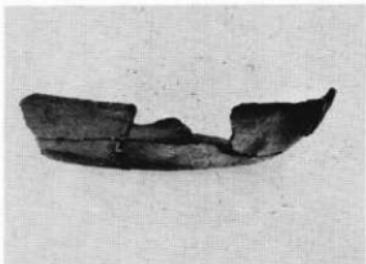
LC 48IV 層上部



LB 47 木痕



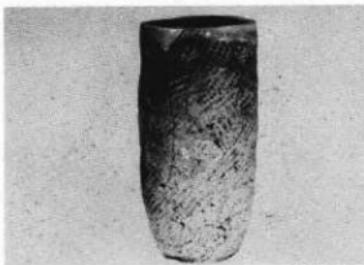
LG 53IV 層



MA 53III 層下部



LF 58IV 層



LD 48 IV 層



LF 46 IV 層



LD 56 IV 層上部



LE 58 IV 層下部



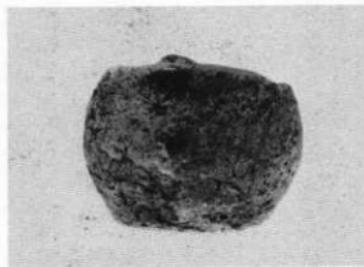
ME 56 IV 層下部



MA 53 IV 層上部



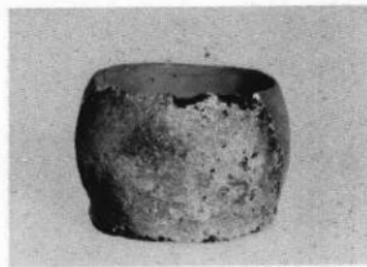
LG 48 地面



LJ 51 IV 層下部



MA 54IV層上部



MB 47N層上部



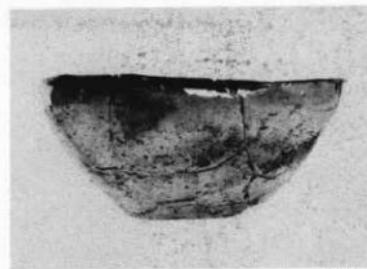
MB 48III層



SK077



SI002



SI002



SI002カマド



SI003カマド

